

第76回日米学生会議

The 76th Japan-America Student Conference



"Visions: perspectives reflected from the past

- together understanding, contributing for the future."

回視～共に理解し、明日へと還元する～

2024.08.03 - 2024.08.24

第76回日米学生会議 日本側報告書



第76回日米学生会議
日本側実行委員会

実行委員長挨拶

長い一年ではあったが、終わってみると非常に呆気なかったように思う。振り返ってみるにこの実行委員メンバーで一年を過ごし、準備活動に励み、実際に会を無事終了させた事はこの上ない誇りであり、またそれは素晴らしく楽しい時間であった。このような時間を過ごさせてくれた支援者の方々、実行委員・参加者の面々には幸甚の意を示したい。我々実行委員は必ずしも完全に理解し合えていたわけではない。それぞれ異なる環境で育ち、異なる価値観を育んできたのだらうという事を、初月の数回のミーティングで既にはっきりと認識させられる程であった。各人の優先事項、意思決定の仕方、意向の表現といった様々な面で相違があり、こうしたチームメンバーを一方向に統率しなくてはならない事は非常に骨の折れる作業だったと想起する。しかし、足並みを揃える為にめいめいと話し合い、なぜそのような価値観に至ったのか、なぜそれを成し遂げたいのかを掘り下げの中で彼らを深く理解する事ができたように感じた。非常にユニークな個性を持つ彼らについて少しでも触れられた事は間違いなく私の考えや内面を深化させるにあたり大きな影響をもたらしてくれたし、これからもする事だろう。

さて、そうした折衝を経て、我々は五つの運営目標を掲げた。

1. 日米の学生同士の相互交流を通じた日米間の関係促進
2. 高度な現状分析による徹底した思考及び議論の促進、そして緻密な仮説設定とその詳細な検討を行う力の涵養
3. 日米学生会議の世代を超えた強靱なコミュニティを活用による日本社会の発展に貢献する人材の輩出
4. 新たな価値や視点を創造する力の涵養
5. プログラムを通じた学びの社会発信及び還元

である。一見、どのような国際交流団体でも掲げうる陳腐な目標に見えるかもしれない。だが、これらの目標は私達実行委員が JASC が団体として持つアセットと担うべき役割について一所懸命に頭を悩ませ血の滲むような議論を経て辿り着いた一つの解であった。第 75 回 JASC に参加し、参加者として感じたやりたい事、団体をより良くする改善策はビジョンとして山積されており、その事は私達の “Visions: perspectives reflected from the past - together understanding, contributing for the future” というテーマにもよく表れている。しかし、私達が有する時間、財力、実力は有限であり、歴史が長い団体であるからこそアラムナイの求める要素、応募者が求めるであろう要素、この団体だからこそできる事を盛り込むとミッションは一定の枠の中に絞られてくる。設立当初とは日米関係も違った様相を呈している中で、熟考と妥協、説得の末に導き出したゴールを目標に、私達はプログラムの準備と徹底したクオリティ管理に臨んだのだった。

第 76 回の日米学生会議では上記の目標を満たすにあたり、大きく四つの挑戦があった。韓国での自主研修、例年の数倍のフィールドトリップ、定例会に JASC Comeback である。後者二つについては今年から始まった新しい取り組みだ。定例会は 1 ヶ月に一回程、分科会混合メンバー

で各分科会の様子や個人の最近のことについてなどを共有する時間であり、JASC Comeback は普段 JASC とはあまり関わりのないアラムナイの皆様へ再度 JASC について思い出していただき、学生と議論、feedback をいただくという取り組みだ。学生に新しい視点をもたらす為、そして JASC コミュニティの横と縦のつながりをさらに強化する為に行われたこの二つの取り組みは結果として本会議前に参加者同士の親交を深め、腹を割った話し合いが出来るようにすることに大きく貢献した上、アラムナイの方々にも久しぶりに関わることができてよかったというお声をいただく事ができた。

Life changing experience という標語のある我が団体であるが、私も昨年 JASC に参加し、たくさんの出会いと示唆を得た。本年度も参加者に私が参加した時の、おいてはそれ以上の経験と満足を提供できていて、この経験を糧に輝かしい未来を飛ばたく材料としてくれる事を切に願う。そして、この報告書を見返しては大学生の一夏をこの団体で過ごしたことを胸に力強く前に進んで欲しい。

最後に改めて、第 76 回日米学生会議の開催に際し、多大なるご支援を賜りました後援団体の皆さま、ご賛助賜りました財団・企業の皆様、事前活動ならびに本会議にてご協力いただきました開催地の皆様、平素より全面的なご指導をいただきました国際教育振興会、ISC Inc. の皆様、様々な場面であたたかいご支援をいただいた OB・OG の皆様、そしてその他当会議にご協力下さいました全ての皆様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。今後とも、日米学生会議をどうぞよろしく願いいたします。

第 76 回日米学生会議実行委員長 小金山智弘

Contents

| | |
|-----------------------------------|-----------|
| 本文中の用語対照表 | 5 |
| 第一章 日米学生会議概要 | 7 |
| 日米学生会議とは | 7 |
| 日米学生会議の歴史 | 7 |
| 第二章 第76回日米学生会議概要 | 9 |
| 概要 | 9 |
| 参加者名簿 | 11 |
| 広報 | 15 |
| 選考 | 19 |
| JASC76 グッズ | 19 |
| 第三章 事前研修 | 21 |
| 春合宿 | 21 |
| 安全保障研修 | 29 |
| 韓国自主研修 | 35 |
| 直前合宿 | 46 |
| 第四章 勉強会/FT | 47 |
| Parareas 成澤朗人さん | 47 |
| HLAB 理事・COO 高田修太さん | 48 |
| 財務省 多田哲朗さん | 49 |
| 東京電力 HD 安全啓発施設 上川直大さん | 50 |
| 参議院議員 太田房江 元経済産業副大臣/元大阪府知事 | 51 |
| 経済産業省資源エネルギー庁 疋田室長補佐との勉強会 | 52 |
| 株式会社レノバ 今岡朋史さん・福田智広さん | 53 |
| 外務省 川口耕一朗さん | 54 |
| 長島・大野・常松事務所 | 55 |
| 経済産業省 田村英康さん | 56 |
| 東京都産業労働局創業支援課 | 57 |
| MTG Ventures 代表 藤田豪様 | 58 |
| 豊岡市コウノトリ共生部 農林水産課 | 59 |
| 映画『関心領域』鑑賞 | 60 |
| Team Lab 訪問 | 61 |
| 参議院議員 宮沢洋一 自民党税制調査会長/元経済産業大臣 | 62 |
| 福岡市創業支援課 中村様 | 63 |
| 坂田奈津希様 | 64 |
| Woven Capital 加藤道子様 | 65 |
| 東京大学 木宮正史教授 | 66 |
| ソウル大学 Byung-Yeon Kim 教授 | 67 |
| 在日韓国留学生連合会との交流 | 68 |
| 日本医療政策機構 乗竹様 | 69 |
| 米国海軍の Commander Andrew Orchard さん | 70 |
| 衆議院議員 武田良太 元総務大臣/日韓議員連盟幹事長 | 71 |
| 長島昭久 衆議院議員 | 72 |
| 朝日新聞社 | 73 |
| 兵庫県芦屋市 高島峻輔市長 | 74 |
| 日本財団 | 75 |

| | |
|---------------------------------------|------------|
| 山谷えり子 参議院議員 | 76 |
| 第五章 本会議 | 77 |
| 第1サイト：Los Angeles | 77 |
| 第2サイト：New Orleans | 88 |
| 第3サイト：Washington D.C. | 99 |
| 第六章 分科会 | 117 |
| 東アジアにおける日米関係分科会 | 117 |
| 環境経済とエネルギー安全保障分科会 | 125 |
| 技術革新による文化・芸術の変容分科会 | 137 |
| 社会起業家分科会 | 145 |
| 福祉と倫理分科会 | 153 |
| 社会運動と人間心理分科会 | 160 |
| 表現と規制分科会 | 168 |
| 第七章 第76回からの新規企画 | 177 |
| 定例会 | 177 |
| JASC SOCIAL | 178 |
| JASC COMEBACK | 178 |
| 第八章 後援・協賛・賛助・共催・協力 | 183 |
| 主催及び後援団体協力者 | 183 |
| 選考活動 | 184 |
| 広報活動 | 184 |
| 事前研修 | 185 |
| 勉強会/FT（実施日時順） | 186 |
| 本会議 | 186 |
| 第九章 実行委員あしがき | 189 |
| 小金山 智弘（第76回日米学生会議 日本側実行委員長） | 189 |
| 荒木 太一（第76回日米学生会議 日本側副実行委員長） | 191 |
| 富澤 新太郎 | 193 |
| 宮本 希 | 195 |
| バック キャスリーン 光 | 197 |
| 福井 達於都 | 199 |
| 志田 夏音 | 201 |
| 佐野 百美 | 203 |
| 第十章 第77回日米学生会議のお知らせ | 211 |
| 開催概要 | 211 |
| 第77回日米学生会議実行委員会紹介 | 215 |
| 第77回日米学生会議 日本側実行委員長からのご挨拶 | 217 |
| 編集後記 | 218 |

本文中の用語対照表

| 略語 | 説明 |
|------------|--|
| JASC | 日米学生会議 (Japan-America Student Conference) |
| JASCer | 日米学生会議現役参加者及び過去参加者 |
| デリ | 参加者 (Delegate) ジャパデリ：日本側参加者、アメデリ：アメリカ側参加者 |
| EC | 実行委員 (Executive Committee) JEC：日本側実行委員、AEC：アメリカ側実行委員 |
| IEC | 日本側主催団体：国際教育振興会 (International Education Center) |
| ISC | アメリカ側主催団体：International Student Conferences Inc. |
| アラムナイ | 日米学生会議過去参加者 (Alumni) |
| サイト | 本会議中に訪れる地域 |
| FT | 分科会の研究テーマについての理解を深めるために、政治家・政府機関・国際機関・企業・大学・NGO・NPO 及び研究所などへの訪問研修 (Field Trip) |
| RT | 分科会 (Round Table) |
| 東アジア/JK | 東アジアにおける日米関係分科会 Japan-US Relationship in East Asia RT |
| 環境経済/3EP | 環境経済とエネルギー安全保障分科会 Environmental Economics and Energy Policy RT |
| 社会起業/SOY | 社会起業家分科会 Social Entrepreneur RT |
| 福祉/WE | 福祉と倫理分科会 Welfare and Ethics RT |
| 社会運動/SOHU | 社会運動と人間心理分科会 Social Movement and human behaviour RT |
| 技術/CAT | 技術革新に伴う文化・芸術の変容分科会 Culture, Arts and Technology RT |
| 表現/XL | 表現と規制分科会 Expression and Limitation RT |
| JC/JASCOME | JASC COMEBACK |

第一章 日米学生会議概要

日米学生会議とは

日米学生会議は「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。学生もその一翼を担うべきである。」という理念のもと、満州事変を契機に悪化していた日米関係を憂慮した4人の日本人学生により1934年に創設された、80有余年の歴史を持つ国際学生交流プログラムである。

会議の本懐は、会議終了後も続く、生涯にわたる友情、信頼関係を構築し、莫逆の友をつくることにあり、歴史を通してその会議の形態は変化をしつつも、日米両国の学生の相互理解に寄与してきた。この草の根の交流を通し、日米両国のみならず世界の平和実現のために各分野で活躍している。

日米学生会議の歴史

1934年～1940年 初期の日米学生会議

日米学生会議は1934年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と能力の限界を感じた学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協会(国際学生協会の前身)を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも4名の学生使節団が渡米し全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名の米国代表を伴って帰国した。こうして第1回日米学生会議は青山学院で開催され、会議終了後には満州国(当時)への視察研修旅行も実施されるに至った。日本側の努力と熱意に感銘したアメリカ側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以後1940年の第7回会議まで日米両国で毎年交互に開催された。しかし、太平洋戦争勃発に伴い、日米学生会議の活動も中断を余儀なくされた。

1947年～1954年 戦後の日米学生会議

戦争の終結によって会議は再開を見たものの、戦前とは異なり、1953年までは日本のみでの開催となった。翌1954年、戦後初の米国開催として第15回日米学生会議がコーネル大学で開催されたが、その後、資金問題、日本人学生の参加者の不足、米国における財政援助の中断などに悩まされ、会議は1955年から1963年まで再び中断された。

1964年～ 今日の日米学生会議

1964年、OB/OGからの会議再開を望む声に応え、会議創始者の一人である故板橋並治が理事長を務める一般財団法人国際教育振興会の全面的支援の下に、会議が再開された。第16回会議はリードカレッジで開催され、77名の日本人学生と62名の米国人学生が参加した。1973年の第25回会議では、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎回テーマを設定し、期間を一ヵ月とするなど現在の会議の基本形態が整備された。また、各界に著名人を輩出したことにより、その名声が馳名した。

90年の歴史を持つこの会議において、最も意義のあることは、創設以来、その企画、運営を両国の学生が主体的に行っていることである。しかし創設時と今日で日米両国を取り巻く環境は大きく異なっており、会議の形態自体も変化を重ねている。特に新型コロナウイルスの流行により社会が根本から変わる機会となった2020年は会議創始以来、初となるオンライン開催となった。画面越しに白熱した議論が行われ、会議の灯を次の世代へ繋いだ。これらを踏まえ日

米両国が新たな関係の構築を迫られている現代において、日米学生会議は、創設当時の理念を受け継ぎつつ、時代の変化に対応してゆく柔軟性を求められているといえよう。



第二章 第76回日米学生会議概要

概要

【総合テーマ】

Visions: perspectives reflected from the past
—together understanding, contributing for the future
回視 ～共に理解し、明日へと還元する～

日米学生会議は1934年に創設された日本初の国際学生交流プログラムとして、日米両国の学生の相互理解と友情を育み、両国と世界に向けて確かな貢献と発信を続けている。今年で90年目を迎える第76回日米学生会議に向け、実行委員はその長い歴史の中で過去の参加者が獲得した視野や、経験を振り返り、新たに私たちの視野や、経験をその上に積み重ねるべく、「回視」を会議の核として設定した。このテーマには、過去の日米学生会議を第76回会議へつなげることで参加者が共に理解し合い、過去という強固な基盤の上に議論を繰り広げてほしいという願いが込められている。また、その議論の成果を明日に待ち受ける社会へと、ひいては未来へと還元して欲しいと期待する。参加者には、本気の議論を共にする仲間との議論を通して、自らの価値観を大きく揺らがせ、時に苦悩しながらも「回視」のもとで、議論し続ける姿勢を期待する。

【主催】

一般財団法人国際教育振興会・International Student Conferences, Inc.

【企画/運営】

第76回日米学生会議実行委員会

【後援】

外務省、文部科学省、在日米国大使館、一般社団法人日米協会

【開催期間】

事業実施期間：2024年4月1日～2025年3月31日
本会議開催期間：2024年8月3日～8月24日

【参加者】

日本側：36名（実行委員8名を含む）
米国側：27名（実行委員5名、インターン1名を含む）
計63名

【開催地】 詳細は第五章

第一開催地 Los Angeles 8月3日～8月9日

1700年代にスペイン人宣教師によって創設された「天使の街」・ロサンゼルスは、その後何世紀にもわたって成長を続け、映画産業で有名なハリウッドをはじめとする「創造都市」として知られている。アメリカ合衆国の中でも随一の多様性に富んだ都市である一方で、ロサンゼルスは複雑な歴史を背景とする負の側面に苦しんできた。参加者はこの地で、日本からアメリカへの移民の思い出の地であるリトル東京を含む、様々な場所を探検する。世界各地から集まった人々が共生を目指してきた歴史、資本家階級と労働者階級のせめぎ合いの歴史、そしてその中で紡がれてきた芸術や表現が参加者を待ち受ける。

第二開催地 New Orleans 8月9日～8月14日

ニューオーリンズは、フランスとクレオールの影響を受けながら、ハリケーン・カト

リーナによる悲劇に苦しみながらも、豊かに独自の文化を発展させてきた。その結果として、現在、音楽、食べ物、建築、方言などあらゆる側面で世界に名を馳せている。

参加者は、この文化都市で一つ一つの文化がどのように作用しあい、独自の文化を創り上げるに至ったのかを学ぶ。さらに、不慣れな環境に身を置き、都市の政策決定が人々とその文化にどのように影響を与え、災害などの課題に対応してきたのかについて体験から考える。

第三開催地 Washington D.C. 8月14日～8月25日

日米学生会議は、2024年で90周年を迎える。日米学生会議の創設当時から、ワシントンD.C.はアメリカ政治の中心として、国際社会の平和と安定に貢献してきた。私たちは、ワシントンD.C.の歴史ある政府機関・国際機関を訪問し、それらが果たしてきた役割に思いを馳せる。

80年前、私たちは太平洋戦争を防ぐことに貢献できなかった。その反省を活かし、不安定化するインド太平洋地域の平和と安定のために、大統領選間近のアメリカで、政治の最先端を学ぶ。また、一ヶ月間の学びや議論の集大成としてファイナルフォーラムを開催する。

【分科会】 ☞ 詳細は第六章

日米学生会議では、参加者が日本側5名（うち実行委員1名）＋アメリカ側5名（うち実行委員1名）を基本形とする7つの分科会に分かれて、勉強会・議論を中心とした様々な活動を行う。3月より、分科会を基本的な構成単位として議論と交流を重ね、本会議に臨む。第76回は、以下の7つの分科会によって構成された。

1. 東アジアにおける日米関係分科会（荒木）
2. 環境経済とエネルギー安全保障分科会（富澤・宮本）
3. 技術革新に伴う文化・芸術の変容分科会（小金山）
4. 社会起業家分科会（福井）
5. 福祉と倫理分科会（佐野）
6. 社会運動と人間心理分科会（バック）
7. 表現と規制分科会（志田）

参加者名簿

【日本側実行委員】

(氏名、所属、担当役職、分科会)



小金山 智弘

慶應義塾大学環境情報学部 3年
実行委員長/財務/LA/韓国研修/関西業務
技術革新による文化・芸術の変容



荒木 太一

慶應義塾大学経済学部 4年
副実行委員長/財務/DC/JC/報告書
東アジアにおける日米関係



富澤 新太郎

東京大学教養学部理科三類 2年
選考/DC/韓国研修/報告書/業務効率化
環境経済とエネルギー安全保障



宮本 希

国際教養大学国際教養学部 3年
選考/NO/韓国研修/JC/保健
環境経済とエネルギー安全保障



バック キャスリーン 光

国際基督教大学教養学部 3年
選考/DC/春合宿/安保研修/韓国研修
社会運動と人間心理



福井 達於都

慶應義塾大学法学部 3年
広報/LA/春合宿/安全保障研修
社会起業家



志田 夏音

岡山大学工学部環境・社会基盤系 2年
広報/NO/春合宿/定例会/保健
表現と規制



佐野 百美

早稲田大学国際教養学部 4年
広報/LA/安全保障研修/報告書
福祉と倫理



【アメリカ側実行委員】

(Name, Affiliation, Position in charge, RT)

| | | | |
|---|--|---|--|
|  | <p>Yuki Tanizaki UC Irvine Business Administration Chair/NO/Logistics Social Entrepreneurship</p> |  | <p>Ka Yan Tam University of Southern California Vice Chair/LA/Graphics Culture, Arts, and Technology</p> |
|  | <p>William Sim-Oliver University of Southern California Treasurer/NO Expression and Limitation</p> |  | <p>Mana Sakamoto Wellesley College DC/Social Media/Photographer Social Movement and Human Behaviour</p> |
|  | <p>Jinglei (Stella) Zhang Wesleyan University LA/Recruitment Welfare and Ethics</p> |  | <p>Krislyn Massay ISC Intern Chaperon/DC Japan-US Relationship in East Asia</p> |



【日本側参加者一覧】

| 氏名 | 所属 | 参加分科会 |
|-----------|---|-------|
| 早川 さくら | 慶應義塾大学 経済学部 経済学科 3年 | 東アジア |
| 赤瀬 朋基 | 学習院大学 法学部 政治学科 3年 | 東アジア |
| 渡邊 蒼生 | 東京大学 法学部 第3類政治コース 4年 | 東アジア |
| 篠原 花繪 | ソウル大学 政治外交学部 政治外交学科 1年 | 東アジア |
| 川西 晴太郎 | 京都大学 法学部 4年 | 環境経済 |
| 多田野 真仁 | 北海道大学 経済学部 経営学科 3年 | 環境経済 |
| 佐藤 未羽 | 東京大学 教養学部 文科二類 2年 | 環境経済 |
| 石賀 悠 | 早稲田大学 先進理工学部 生命医科学科 2年 | 環境経済 |
| 高橋 美咲 | 東京学芸大学教職大学院 教育プロジェクトプログラム 国際理解・外国人児童生徒教育サブプログラム 2年 | 技術 |
| 甲斐 聖人 | 国際教養大学 国際教養学部 国際教養学科 3年 | 技術 |
| 関根 奈央 | 慶應義塾大学 総合政策学部 3年 | 技術 |
| 下小野田 崇仁 | 東京大学 教養学部 理科一類 2年 | 技術 |
| 藤木 果蓮 | 慶應義塾大学 法学部 法律学科 4年 | 社会起業 |
| 北原 真悠 | 芸術文化観光専門職大学 芸術文化・観光学部 4年 | 社会起業 |
| 大矢 玲菜 | 国際教養大学 国際教養学部 2年 | 社会起業 |
| 眞継 竜太郎 | 九州大学 農学部 生物資源環境学科 2年 | 社会起業 |
| トラウト 凜 | 群馬大学 医学部 医学科 3年 | 福祉 |
| 谷川 陽音 | 京都大学 医学部 人間健康科学科 3年 | 福祉 |
| 野添 葉音 | 上智大学 総合人間科学部 社会福祉学科 1年 | 福祉 |
| イビネディオソ 嶺 | 明治大学 法学部 法律学科 3年 | 福祉 |
| 翠川 溪 | 東京大学大学院 公共政策学教育部 公共政策学専攻 修士 2年 | 社会運動 |
| 小林 りこ | 慶應義塾大学 総合政策学部 総合政策学科 4年 | 社会運動 |
| 坂東 璃加 | 早稲田大学 政治経済学部 国際政治経済学科 4年 | 社会運動 |
| 赤堀 結 | 慶應義塾大学 法学部 政治学科 2年 | 社会運動 |
| 佐藤 知穂 | 早稲田大学 政治経済学部 政治学科 4年 | 表現 |
| 石上 諒 | 創価大学 理工学部 情報システム工学科 4年 | 表現 |
| 舩尾 花菜 | 信州大学 医学部 医学科 2年 | 表現 |
| 小川 志穂 | 東京外国語大学 言語文化学部 言語文化学科 英語/北西ヨーロッパ・北アメリカ地域専攻 2年 | 表現 |

【アメリカ側参加者一覧】

| Name | College | Round Table |
|----------------------------|------------------------------------|-------------|
| Ryne Hisada | Yale University | JK |
| Ria Eda | Vanderbilt University | JK |
| Hudson Pitchford | Washington and Lee University | JK |
| Mao Kobayashi | Duke University | 3EP |
| Alexandra Scott | Pomona College | 3EP |
| Carlos David Rueda Segovia | University of California San Diego | 3EP |
| Yasmin Cunha | Vermont Law and Graduate School | CAT |
| Simon Socolow | Williams College | CAT |
| Sadie Peltz | Arizona State University | CAT |
| Andrew Lei | Osaka University | SOY |
| Emile Shah | University of California Berkeley | SOY |
| Motohiro Tsuchiya | Nebraska University in Omaha | SOY |
| Brandon Rivera De Leon | University of Wisconsin-Madison | WE |
| Ashton Evans | Washington and Lee University | WE |
| Rachel Collins | Washington and Lee University | WE |
| Leyra Espino-Nardi | Johns Hopkins University | SoHu |
| Sam Helman | Wake Forest University | SoHu |
| Taylor Vild | Washington and Lee University | SoHu |
| Amy Wu | Smith College | XL |
| Salma Battisha | Baylor University | XL |
| Bailey Meyer | Saint Joseph's University | XL |



広報

本年度は、昨年度リーチしていた大学に加え、抜けもれていた大学、高等専門学校、高等学校にも広報協力を依頼した。連絡がつかない学校は過去実行委員の意見を参考に、可能な限り車を出して直接広報に向かった。さらに、第75回の参加者や実行委員の人脈を駆使して、学生団体や各種プログラムへの広報にも力を入れ、広報自体の規模の拡大に努めた。

SNSを用いて、大学の壁を超えてより多くの学生への周知を行う一方で、説明会については、①予備校などで用いられている大学偏差値の序列や、進学支援雑誌の大学人気ランキングを参考にした大学別説明会、②地方学生の応募促進を目指した地方別説明会、③誰でも参加可能な全体説明会の三つをバランス良く展開した。

【SNS 戦略】

1. Instagram

大学生の使用率が最も高い Instagram の①投稿頻度、②デザイン、③投稿内容に関して広告代理店でインターンをしている実行委員のノウハウを存分に活用して大きな改革を図った。①に関しては、昨対比 1.8 倍の投稿数に増加させた。②に関しては、日米学生会議のブランドイメージと親和性の高い、高級感を感じるロイヤルブルーを基軸にわかりやすく、見やすいデザインを心がけた。③に関しては、結局誰が、どんな活動をやっているのかわからないという課題に対し、団体内部の人の「顔」を基軸にその内容や、感想を掲載する方針に切り替えたことが挙げられる。このような改革は、参加者募集の Instagram リール動画の累計再生数が昨年の 39K から、87.5K へと変化したことでその効果を一定認められると考える。

2. X (旧 Twitter)

11月からは2〜3日に1回、2週間前からは毎日のペースで投稿を行った。また、12月2日の報告会広報・最終応募者募集の際は各学生団体へ以下のメールを送り、協力を依頼した。また、Xの投稿後すぐのいいね数が多いと、投稿が様々な場所に表示されやすくなる性質を利用し、各実行委員が3〜4のアカウントをもち、公式アカウントの投稿に保持する全てのアカウントにすぐにいいねを行った。結果として、計6団体がXでの広報にご協力くださり、特に東京大学の応募者については応募理由としてXを挙げる応募者が多々見受けられた。

3. Facebook

10月から基本的に週3回、締切10日前から毎日投稿を行った。目的として主にアラムナイの方々への広報協力依頼があった。内容としては、報告会開催・実行委員及びサイト紹介・エントリー開始・各説明会・締切8日前からは実行委員のコメントがついたカウントダウンの投稿を行った。また、日米学生会議アラムナイグループでは、各種 SNS の周知等を行った。投稿を行うにあたり、ユーザーが閲覧するであろう夕方〜夜の時間帯に投稿することを心掛けた。フェイスブックのユーザー層に学生が少ないことから、新規ユーザーの獲得は困難であったが、フォロワー数では昨年からは43%の増加が見られたため、投稿頻度や投稿する時間帯の工夫によってプラスな効果が見られたと考える。

【印刷物発行】

1. パンフレット作成

学生への広報・財務業務上の必要性を鑑みて、パンフレットの作成を行った。72回会議以降オンラインにて開催されるものが多い中で、対面・オンライン併用にて開催された「第75回日米学生会議報告会兼第76回日米学生会議説明会」では対面参加者には直接配布したいとの思いから、9月下旬から作業を始めた。構成については概ね第75回会議の

広報担当が作成したものに準拠したが、デザインに関してはより第76回会議委員会として押し出したいイメージに沿ったものに変更した。具体的な変更点の一部は以下の通りである。

- 在籍大学・専攻の面で多様な経歴を持つ第75回日米学生会議参加者の声を掲載。
- 文字数が多くなくなってしまいがちなページ（サイト紹介・分科会紹介）には、特に配色・配置に気をつけた。
- 募集要項のページでは、文章による情報に加え、簡易的なフローチャートを追加。
- パンフレットだけで認知を完結させず、説明会参加やSNSのフォローに繋げるため、QRコードを追加。
- より日米学生会議の様々な側面を知ってもらうために、複数のページに渡って第75回日米学生会議期間中に撮影された写真を追加。

2. ビラ作成

12月中旬より作業を開始し、可能な限り簡潔でありながらも必要な情報を盛り込んだものを作成することが可能となった。

第76回 日米学生会議
The 76th Japan-America Student Conference Final Forum

最高の夏が君を待つ

主催：国際教育振興会
後援：文部科学省・一般社団法人日本協会・米国大使館

会議概要
1934年に創設の日本初の国際的学学生交流プログラム。日米の学生が夏に共同生活を送りながら、様々な議論や活動を行う。賞状書一元首相をはじめ各界に著名なOBOGを多数輩出している。

【本会議】
日程：2024年8月3日(土)～8月24日(土)
開催地：ロサンゼルス・ルイジアナ・ワシントンD.C.

選考概要
募集人数：28名
申込期間：2023年12月2日(土)～2024年1月19日(金)23:59
選考方法：公募HPよりエントリー（第一次選考試験）
以下全て日本語での実施
書類選考（参加申込書、小論文課題、分科会調査、提出課題（任意）
選考料：5,000円

【第二次選考試験】
集団討論(日本語)、リフレクションエッセイ(日本語)、リスニング問題(音源:英語、回答:日本語あるいは英語)、教養試験(日本語・選択問題)、個人面接(日本語・英語)
選考料：無料
※2024年2月19日(月)～2月23日(金)において、2時間程度、オンラインにて実施。

一般社団法人国際教育振興会日米学生会議事務局
〒160-0004東京都新宿区西村1-6-2
コモビルタワービル5階/スタジオエクス3階/TEL. 090-1140-4857
Email: jaxc76.select@gmail.com

第76回 日米学生会議
回顧と共に理解し、責任へと繋ぎ次ぐ
Reflections - perspectives reflected from the past-together understanding, contributing for the future

主催：国際教育振興会
後援：文部科学省・日本協会・米国大使館

会議概要
1934年に創設の日本初の国際的学学生交流プログラム。日米の学生が夏に共同生活を送りながら、様々な議論や活動を行う。賞状書一元首相をはじめ各界に著名なOBOGを多数輩出している。

活動日程
【本会議】
日程：2024年8月3日(土)～8月24日(土)
開催地：ロサンゼルス・ルイジアナ・ワシントンD.C.

選考概要
募集人数：28名
申込期間：2023年12月2日(土)～2024年1月19日(金)23:59
選考方法：公募HPよりエントリー（第一次選考試験）
以下全て日本語での実施
書類選考（参加申込書、小論文課題、分科会調査、提出課題（任意）
選考料：5,000円

第二次選考試験
集団討論(日本語)、リフレクションエッセイ(日本語)、リスニング問題(音源:英語、回答:日本語あるいは英語)、教養試験(日本語・選択問題)、個人面接(日本語・英語)
選考料：無料
※2024年2月19日(月)～2月23日(金)において、2時間程度、オンラインにて実施。

お問い合わせ
事務局：〒160-0004東京都新宿区西村1-6-2
コモビルタワービル5階/スタジオエクス3階/TEL. 090-1140-4857
Email: jaxc76.select@gmail.com

【説明会】

2023年12月6日から2024年1月18日にかけて計24回の説明会を行った。当初予定していた第5回全体説明会(2024年1月7日)は、ワシントンDCでの実行委員のトライラテラルフォーラム移動期間により開催を取りやめ、1月13日24:00～25:00に夜型説明会を急遽実施した。実施説明会については以下の通りである。

また、特に全体説明会についてはアラムナイの方々のご協力で説明会参加者は、日米学生会議により興味を持ったと考えている。ご多忙の中、ご協力いただいたことに、この場を借りて感謝の意を表したい。



【説明会の目的】

質疑応答の際は、選考についての質問は選考担当に、分科会については該当分科会担当者が解答した。

1. 全体説明会

全9回の説明会のうち、7回でアラムナイの方々をお招きした。日米学生会議の威厳を感じていただく会であり、日米学生会議がその後のキャリアに与えた影響を知って帰ってもらうことが目的であった。

2. 学校群別説明会

日米学生会議説明会開催を大学という狭いコミュニティで括った際も、多くの参加者(仲間)がいることを感じていただくことが目的であった。日米学生会議としての威厳は見せつつも、その大学出身の過去参加者が多くいることで、小論文提出のモチベーションアップを図った。

3. 地域別説明会

日米学生会議を知っていただく、日米学生会議を通じた人間関係の広がりを予感してもらう会。実行委員自身が過去参加者であることの意識も持って接した。

【実施説明会一覧】

1. 全体説明会 (全10回開催)

- 第一回全体説明会 (12月10日(日)10:00-11:00)
- 第二回全体説明会 (12月17日(日)21:00-22:00)
- 第三回全体説明会 (12月23日(土)21:00-22:00)
- 第四回全体説明会 (12月27日(水)22:00-23:00)
- 第五回全体説明会 (1月7日(木)22:00-23:00) →開催せず
- 高専/高校生向け説明会 (1月10日(日)22:00-23:00) →参加者なし
- 第六回全体説明会 (1月12日(金)21:00-22:00)
- 夜型説明会 (1月13日 24:00-25:00)
- 第七回全体説明会 (1月14日(日)21:00-22:00)
- 第八回全体説明会 (1月17日(水)22:00-23:00)
- 最終激励会 (1月18日(木)22:00-23:00)
※上記に加え、岡山大学では岡山大学対象説明会を開催した。

2. 学校群別説明会 (全9回開催)

- 関関同立説明会 (12月6日(水)22:00-23:00)
- 防衛大学校対象説明会 (12月8日(金)21:00-22:00)
- 芸術系、音楽系大説明会 (12月9日(土)22:00-23:00)
- 東京一工説明会 (12月12日(火)22:00-23:00)
- GMARCH説明会 (12月14日(木)22:00-23:00)
- 早慶上理説明会 (12月16日(土)22:00-23:00)
- 全国医学部生対象説明会 (12月18日(月)22:00-23:00)
- AIU/ICU/APU説明会 (12月20日(水)22:00-23:00) →芸術系と合体。

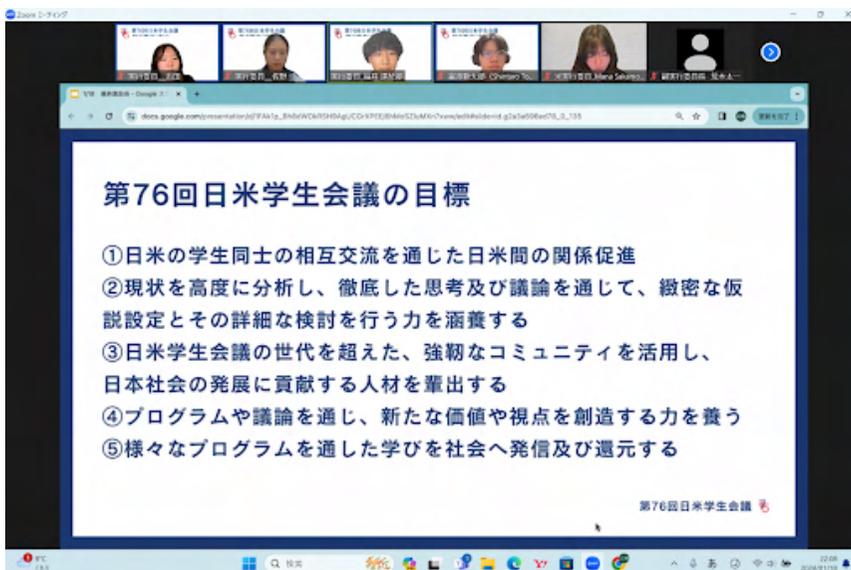
- 外大説明会 (12月26日(火)22:00-23:00)

3. 地域別説明会 (全5回開催)

- 北海道・東北地方大学対象説明会 (1月5日(金)21:00-22:00)
- 中部・近畿地方大学対象説明会 (1月6日(土)21:00-22:00)
- 中国・四国地方大学対象説明会 (1月9日(火)21:00-22:00)
- 九州・沖縄地方大学対象説明会 (1月11日(木)21:00-22:00)
- 関東・甲信越地方大学対象説明会 (1月13日(土)21:00-22:00)

【ご協力いただいた大学・大学院・専門学校】

桐朋学園大学、明治学院大学、獨協医科大学、千葉大学医学部、東海大学医学部、旭川医科大学、明治大学、津田塾大学、早稲田大学国際教養学部、鹿児島大学、九州大学、岡山大学、立命館大学びわこ・くさつキャンパス、島根県立大学、岡山理科大学、関西外国語大学、島根大学、関西大学、小樽商科大学、大阪大学大学院工学研究科、神戸大学、福岡教育大学、高知工科大学、琉球大学、群馬大学、中央大学、東京理科大学、東京外国語大学、東京学芸大学、東京工業高等専門学校、京都大学、上智大学、日本大学、お茶の水女子大学、学習院大学、富山大学、香川大学、長崎大学、東洋大学、駒沢大学、専修大学、京都産業大学、近畿大学、甲南大学、龍谷大学、北海道大学、山形大学、福島大学、茨城大学、青森大学、岩手大学、金沢大学、滋賀大学、京都工芸繊維大学、鳥取大学、高知大学、宮崎大学、山口大学、広島大学、東京工科大学、横浜国立大学、国際基督教大学、国際教養大学、東京大学、法政大学、埼玉大学



選考

例年、日米学生会議は、広報戦略の奏功もあり、全国津々浦々から多数の応募をいただく。キャパシティの都合上、選考を行わなければならないことは断腸の思いである。第76回日米学生会議の選考は、以下の日程で行った。

締切 2024年1月19日

一次結果発表 2024年1月24日

二次選考 2024年2月20日～24日

合格者発表 2024年3月3日

なお、選考の方針・内容等については、秘密保持のため割愛させていただくが、第76回日米学生会議の方針に合致した、意欲ある学生の参加という形で結実したものと認識している。

末筆ながら、選考にあたって会場設定のご協力をいただいた法政大学、選考の補助をいただいたアラムナイの方々、並びにご応募いただいた全ての学生の皆様に感謝申し上げる。

JASC76グッズ

日米学生会議では、期間中の円滑な活動や帰属意識啓発等を目的とし、いくつかのJASCグッズを参加者に提供している。そのデザインや内容を紹介する。

1. **横断幕** (参加者個人への提供はなし)
集合写真撮影の際に用いる、第76回日米学生会議のテーマも記載された横断幕である。



2. **JASC ピン**
ビジネススタイルの格好をする際、胸に装着する金属製のピンである。
3. **JASC トートバッグ** (実行委員のみ)
JASCのマークが記載されたトートバッグであり、業務用の備品等を運ぶのに用いた。
4. **JASC ステッカー**
各参加者に配布されたノートの表紙に貼付してあるステッカー。これとは別に、各参加者に未貼付のステッカーも配布された。



5. JASC T シャツ

実行委員とデリゲートで、基本の構成は統一しつつ、色合いを少し変化させている（実行委員は紺色、デリゲートは臙脂色）。本会議中を中心に活用した。ロゴデザインはアメリカ側実行委員の Ka Yan Tam により作成され、色合いは日本側実行委員で決定した。



6. 名刺

勉強会やイベント等で交流する大人の方々との円滑な自己紹介を企図して作成されている。



日米 花子
日米大学 学生学部

技術革新に伴う文化、芸術の美容分科会
Email jascco.oooo@gmail.com Mobile 000-0000-0000
日米学生会議事務局 Tel:090-1140-4857



Hanako Nichibei
Nichibe University
Faculty of Gakusei

Culture, Arts and Technology Roundtable
Email jascco.oooo@gmail.com Mobile 000-0000-0000

第三章 事前研修

春合宿

3月初に合格が決まった参加者は一か月半のオンライン期間を経て、4月末の2泊3日の合宿にて初めての顔合わせを行う。当合宿では、日米学生会議の歴史を学び、夏の本会議に向けての議論を行う。日米学生会議の基礎を抑えるとともに交流を深めることを目的とする。

日程 2024年4月27日～29日

滞在场所 国立オリンピック記念青少年総合センター¹

行程 計3日間²

4月27日：写真撮影・アイスブレイク

4月28日：RT 議論・RT 混合外食・ようこそ先輩

4月29日：RT 議論・春合宿最終発表

1日目（4月27日） 写真撮影・アイスブレイク

春合宿初日、デリが初めて対面で顔合わせを行った日であった。デリ間には未だ緊張があり、会話も少しぎこちなさがあった。開会式に始まり、写真撮影を済ませた後、アイスブレイクとして自己紹介企画を実施した。その後、RT 議論を経て、自由時間となった。

夜の自由時間のみならず、食事の時間など、暇を見つけてはデリ同士が交流し、アイスブレイクをしている姿を、ECとして微笑ましく覗いていた。

第76回日米学生会議 春合宿開会式 式次第

| | | | |
|---|-------------------|---|---------------------|
| 1 | 日本側主催挨拶 | 国際教育振興会代表 日米学生会議事務局長 | 金野 洋 様 |
| 2 | 実行委員長挨拶 | 第76回日米学生会議 日本側実行委員長 | 小金山 智弘 |
| 3 | アメリカ側主催 挨拶動画上映 | International Student Conferences, Inc. Executive Director | Bahia Simons-Lane 様 |



¹住所：東京都渋谷区代々木神園町 3-1

²環境経済とエネルギー安全保障分科会のみ、4月30日にFT ツアーを行った。

＜参加者感想＞

2024年4月27日、第76回日米学生会議の春合宿が開かれた。これまでも同じ分科会の面々とは顔を合わせ何回か議論を重ねてはいたが、実際に日米学生会議が始まったという感覚がこの時初めて得られた。スーツを着て集合したのも一つの要因だったのだろうか、部屋の中にはやや重苦しい雰囲気か漂っていたように思える。だが、自己紹介や写真撮影、昼食などを通じてすぐにその気は晴れた。分科会内での議論時間も非常に素晴らしい時間であった。いつからか社会問題や真面目なことについて実直に議論しようとする、周りの心無い人に馬鹿にされることも多かったが、この場ではそのようなことはなく、全員が純粋に議論に興じていたように思える。JASCに応募した過去の自分に感謝したい。これからの活動が非常に楽しみである。

東京大学教養学部理科一類2年 下小野田 崇仁



2日目（4月28日） RT 議論・RT 混合外食・ようこそ先輩

春合宿3日目のRT発表に向け、各分科会での議論を進めた。一方、交流がRT内に限定されてしまうことを避けるため、RT混合の4~5人のグループを作り、自由に外食に行ってもらった。意外にもRT内よりも会話に花が咲いたグループもあったという。

夕方は、アラムナイの方々を招いて「ようこそ先輩」を実施した。コロナ禍が明け、久々にケータリングありで実施することができた。



＜参加者感想＞

天気恵まれ、暖かい春の陽気に包まれた春合宿2日目。1日目の少し張りつめた緊張感が和らぎ、穏やかな雰囲気で始まった。はじめにESTAや海外保険などの話を聞き、これから我々は本当にアメリカに行くのだという実感が湧いてきた。自分の身を自分で守るためにも責任をもってひとつずつ手続きを進めていきたい。お昼には、分科会ごちゃまぜ外食というイベントが行われた。分科会メンバーと交流を深めた1日目に対して、2日目は出来る限り沢山のメンバーと交流し、仲を深めることを目標とする。私の班はランチボックスを購入し、代々木公園でピクニックをした。暖かい日差しを感じながら新緑の木陰で腰を下ろし、ゆったりと親睦を深める昼下がり最高であった。ようこそ先輩では、同窓会の先輩方から日米学生会議で得た経験や反省、さらに私個人が悩む進路選択や自己実現について、様々な視点からご意見を頂き、

今まで考えていた視点がいかに限定的であったのかと己の未熟さを痛感した。日米学生会議の歴史とつながりの強さを感じるとともに、この団体の一員として責任ある行動をとるよう心掛けた。

国際教養大学国際教養学部2年 大矢 玲菜

春合宿2日目では、主に、分科会混合外食、ようこそ先輩が行われた。

分科会混合外食では、分科会外メンバーと昼食を共にした。昼食中は、昨年の様子を実行委員の方から伺った。「3週間の共同生活を送り、白熱した議論を行うと、お互いのことを良く知れるが、時には衝突してしまうこともある。だが、それも貴重な経験であり、それこそが日米学生会議の醍醐味である。」と。私を含め参加者は皆この話を聞いて、少しこぼれた顔をしたが、同時に、この日米学生会議が life-changing experience となることを予感したのか、顔に少し笑みがこぼれたような感じがした。ようこそ先輩は春合宿の中でも大きなプログラムであった。日米学生会議の長い歴史を感じるとともに、アラムナイの方々から貴重なお話を伺うことができた。私は、英語ができない場合の対処法や日米学生会議での思い出などについてお話しいただき、大変有意義な時間を過ごすことができた。

今年の日米学生会議のテーマは回視～共に理解し、明日へと還元する～であるが、「回視」を達成するためには、アラムナイの方々と参加者の間の相互理解も必要だと考えている。ようこそ先輩は、そのような相互理解を促進してくれたと思う。

京都大学法学部4年 川西 晴太郎



3日目(4月29日) RT議論・春合宿最終発表

最終日である本日は、午前中日米学生会議同窓会の入会手続きを行なった後、最終発表に向けてRTごとに議論を重ね、午後にRTごとの発表・質疑応答を行なった。各RTが思い思いに議論内容を再構成して発表しており、活気のある会となった。



<参加者感想>

2日間のプログラムを終え、参加者同士の親睦も深まり、あっという間に最終日を迎えた。

午前中は、分科会ごとに3時間程度の議論に臨んだ。会場は和気藹々としながらも少し緊張感のある雰囲気にも包まれていた。というのも、春合宿のメインイベントの1つ、議論成果発表が刻々と近づいていたからである。当初私は、3日間で発表に値する議論成果を挙げられるのか不安に感じていた。しかし、所属している「技術革新に伴う文化芸術の変容分科会」では、合宿前のMTGにて合宿中の議題や議論の流れを考えたため、想定よりスムーズに議論を進められた。また、対面での議論とあって、ホワイトボードを使い、お互いの認識を擦り合わせながら話せたため、Zoomよりもスピード感をもって議論できた。

午後には、全ての分科会が集合し、春合宿の議論成果を発表し合った。発表は録画され、アラムナイの方に共有されるとのことで、発表者は少し緊張した面持ちでプレゼンをしていた。どの分科会も苦労しながら考えまとめた成果がよく伝わってきた。私は大学で、アートマネジメントや統計学を学んでいるが、どの分科会の内容も大学の学びとは異なり、とても勉強になった。

また、活動開始以来、他の分科会の議論の内容についてじっくり聞く機会はあまりなかったため、議論の進め方を不安に感じることもあった。しかし、発表会を通じて他の分科会の状況を詳細に知ることができ、参考にしたいポイントを学びとれた。特に印象的だったのは、議論の難しさを抱えつつも、ゴールを目指して議論する重要性だ。私の分科会は少しユニークで、技術や文化芸術のテーマの議論に留まらず、作品制作まで行うことをゴールとして据えている。それゆえ、議論と作品制作を関連させたり、時間をバランスよく配分したりするのに苦戦していた。また、技術と文化芸術、という一見離れてみえる分野の融合も難しく、メンバーの知識を活かしきれていないのではないかと、という懸念を感じていた。たしかに、簡単に解決できる問題ではないが、試行錯誤しながら最適な議論方法を模索することそのものに意義があると感じられた。

発表会后、他の分科会のメンバーとリフレクションを行った。客観的に自分の分科会の状況についてコメントをもらったのは初めてだったため、「ユニークで面白い」「聞き手に問いかけるプレゼンが良い」等ポジティブなフィードバックを多く貰うことができ安心できた。

慶應義塾大学総合政策学部3年 関根 奈央



春合宿全体を振り返って

<参加者感想>

The spring Camp was our first time to meet face-to-face. Meeting the delegates of the RT with whom I've only discussed via Zoom so far feels incredibly fresh. Moreover, gathering with all 36 Japanese participants underscores once again my awareness of being a delegate in the Japan-America Student Conference. The self introduction time became a great opportunity to know about the companions with whom I'll be spending this summer. Their backgrounds and areas of interest were very intriguing. Additionally, on the first day, specific activity times were allocated for each RT, enabling delegates to cultivate friendship and begin preparations for the final day's presentations. By spending a lot of time together during the camp and getting to know each other, a foundation of trust necessary for engaging in the conference was built.

On the second day, the most memorable event was probably the alumni event(Yokoso-Sempai), which was the opportunity to speak with JASC alumni who have been involved for the past several decades. The alumni have been actively engaged in diverse fields such as government, consulting, trade, healthcare, media, and education, both domestically and internationally. Listening to their experiences at JASC and their subsequent careers sparked our imagination about our own involvement in JASC programs. Delegates were asking questions to pioneers in their fields of interest, while alumni were reuniting with each other to enjoy and foster connections. The gathering of delegates spanning generations, engaging in dialogue, evoked a sense of JASC's 90-year history.

The main event on the final day was the presentation by each RT. Social Entrepreneurship RT presented on what social entrepreneurs are and discussed the role they play and the challenges they face in today's society. Welfare and Ethics RT introduced the concept of "punishment" and conducted an examination of various cases related to welfare in contemporary society. Culture, Arts and Technology RT presented on how to approach the goal of creating a work as the culmination of the plenary session. Environmental Economics and Energy Policy RT analysed the share of BEVs in new vehicle sales in 2035. Social movements and human behaviours RT raised the issue of the U.S. military base in Okinawa as a case study of social movements. Japan-US relations in east Asia RT presents the current status and limitations of Japan's economic security, as well as recommendations for the future. Lastly, Expression and Limitation RT presented a discussion of what is expression and the borders between expression and the rest. Taking questions from delegates from other RTs provided an opportunity to consider our considerations from multiple perspectives, and also served as the starting point for planning joint study sessions with other RTs. Towards the summer main conference, further accumulation of discussion based on the spring camp experiences is desired.

慶應義塾大学法学部 2年 赤堀 結

<実行委員感想>

3月末に参加者を迎えてから、瞬く間に春合宿が訪れた。一からプログラムを組み、凡ゆるリスクを考え、万全の準備の上で春合宿を迎えたものの、第76回日米学生会議の幕開けである当合宿で失敗があった場合、その後の事前活動や本会議にも悪影響を及ぼすのではないかとという不安が、様々な期待と興奮を上回っていた。結果として実行委員、参加者共に満足度の高い春合宿になったことに非常に安堵している。

私が今年度の春合宿で印象深かった出来事を2点挙げる。1点目は、飲食を伴う「ようこそ先輩」を開催した点である。飲食を伴う「ようこそ先輩」は4年間行っておらず、引継ぎの情報が殆どない中で開催した。参加者、アラムナイの方々の交流を見ながら当企画の成功を感じ、達成感を覚えた。2点目は、実行委員で春合宿期間中に毎日反省会を行った点である。その日

の反省を次の日に生かすべく、また本会議や来年に向けた改善策を講ずるべく、実行委員間で情報共有を行い、一日を振り返った。過去の実行委員の先輩方も行われていたことと拝察するが、実際に自分が組み立てたプログラムを実行委員全員で振り返ると、机上の企画と実践の違いに難しさを実感した。

春合宿での議論や発表は、どの分科会も大変興味深いものであり、今後の各分科会活動の弾みになった。また、実行委員として、記念すべき90周年を迎える当会議の最初のプログラムを担当できたことを大変光栄に思う。

春合宿開催にあたってご協力いただいたアラムナイの方々、金野さん、伊部さんをはじめとする全ての方々にこの場を借りて心より感謝申し上げる。

岡山大学工学部環境・社会基盤系2年 志田 夏音







安全保障研修

自衛隊は、日本の将来の平和と安全を担うのみならず、PKO 活動等を通して平時から国際平和・国際的な日本の立ち位置向上に貢献している。今回、防衛省統合幕僚学校国際平和センター並びに自衛官の幹部候補生養成を目的とする防衛大学校を訪問し、日米関係を考える際、極めて重要となる「安全保障」についてより詳しく学ぶため、防衛省統合幕僚学校国際平和センターの自衛官及び防衛大学校教授による特別講義を受ける他、同学校の学生と対話の機会を設けた。参加者の多くとはおよそ全く異なる学生生活を送る防衛大学校の学生に薫陶を受け、忌避されがちな「安全保障」をより身近に、解像度高く理解するためのプログラムとして設計された。

日程 2024年6月6日・7日

行程 計2日間

6月6日：防衛省統合幕僚学校国際平和センター

6月7日：防衛大学校

1日目（6月6日）：防衛省統合幕僚学校国際平和センター

安全保障研修の一環として防衛省統合幕僚学校国際平和センターにてFTを行った。概要は以下の通りである。

- 国際平和センターの講師3名によるご講和
- 各講師の方とテーマごとの懇談・質疑応答
- 日米学生会議参加者同士でのリフレクション



<参加者感想>

防衛省統合幕僚学校国際平和センターは、将来国際平和協力を担う要員の養成や国際平和協力等に関する調査研究・教育支援などを行う機関である。本研修では、国際平和センターに勤める渡辺様・南條様・田中様に講話と懇談という形でお話しをいただいた。講話では、実際に自衛隊としてご活躍された経験から安全保障分野についてご説明いただき、講話後の懇談では安全保障や国際協力に関するテーマごとにグループを分けて、各講師の方々と時間の許す限り質疑応答を行った。また最後には、日米学生会館にてメンバー同士で意見や感想を共有し、学びを深めた。特に印象に残ったのが、みなさんが自衛隊という組織と個人、それぞれとしての使命感のジレンマに葛藤されていたことである。現場で目の当たりにする惨状に対し「本当は

こうしたい」と思っていたとしても、自衛隊の任務命令の中でしか活動できない、という使命感の葛藤を窺い知った。国際平和協力には様々な形があるが、それぞれ長所や短所があり、自衛隊にも責任の伴う指揮決定内の活動だからこそその限界があるということ、そして、その限界に対して、「情けない」「悔しい」という声をもらしておられて、国防の前線で働く自衛官の正義感を目の当たりにした。現場での雰囲気や気概を伝えていただき、ある種「メディアの中の世界」であった安全保障や国防、そしてそれらを担う自衛隊の活動に対して、机上の空論ではないのだという実感を得るとともに、当事者意識や問題意識が芽生えるきっかけとなる大変貴重な機会であった。

東京大学教養学部文科二類2年 佐藤 未羽



2日目（6月7日）：防衛大学校

安全保障研修の2日目は、防衛大学校を訪問した。残念ながら宿泊を行うことはできなかったが、去年以上に手厚いご対応をいただき、大いに満足できるプログラムとなった。概要は以下の通りであった。

- 久保文明 防衛大学校学長によるご講和
- 防衛大学校資料館見学
- 防衛大学校食堂において防大生とともに昼食
- 訓練体験（「気をつけ」「右向け右」「回れ右」等、行進）
- 防衛学講義「自衛隊のリーダーシップについて」
- 防大生との交流議論
- 儀仗隊演舞見学
- 防大生との夕食・交流会



<参加者感想>

防衛大学校に入ると、15名ほどの防大生が歓迎してくれた。その中には、中高の同級生もあり、真っ白な制服に身を包んだ姿に感銘を受けた。最初のプログラムは、久保学校長挨拶。防大の概要や、一般の大学との違いについて伺った。全寮制という仕組みや年中行事が多く各隊が競い合うことで切磋琢磨するという制度は、自分の卒業した高校そっくりで、懐かしさとともに親近感を覚えた。その後、訪れた資料館では、防大の歴史や生活についての展示を見学した。昼食は防大生とともに、全校生徒が収容できるという食堂でとった。防大生との対話も印象的だったが、彼らの気遣いには特に感銘を受けた。売店で防大グッズを購入した後、訓練体験として基本教練を実施した。「右向け右」や「回れ右」など基本的な動作ではあったが、集団の統一感を出すことの難しさを実感できた。個人的には、「敬礼」の種類や使い分けについて知る機会を得てよかった。防衛学の講義では、「自衛隊のリーダーシップ」について伺った。危機の際にリーダーの言動が作戦の結果を左右するという、絶対に正しい決断というのは存在せず様々な要素を総合してより良い選択肢を選ぶことの難しさを知った。すべてのプログラムの中で最も印象的だったのは、学生間討議や夕食懇親会など防大生との交流の機会だった。総じて言えるのは、彼らの人間力の高さだと思う。人間力の定義は難しいが、自分なりの正義感を持ちそれに基づいて行動できることや、アンテナが高く自分ができることに率先して取り組めることだと思う。その点、これほど人間として完成している同級生は見たことがなかった。事に臨んでは危険を顧みず、責務を完遂するという覚悟や近い将来数千人を統率する立場に身を置くという責任感がひしひしと伝わってきた。また、そうした意識は、規律ある規則正しい集団生活や厳しい上下関係の中で育まれたものなんだろうとも思った。自らの命をかけて国家・国民を守るという高い志に敬意と感謝を持つ。ただ、海外での軍隊に対するリスペクトや待遇を知ると、防大生が最高のパフォーマンスを発揮するのに十分な設備や環境とはまだまだ言えないと思う。日本国民の安全と安心を担う彼らの名誉や待遇を向上させることに尽力したい。

学習院大学法学部政治学科3年 赤瀬 朋基



安全保障研修全体を振り返って

<参加者感想>

Throughout my life, I had never crossed paths with the National Defense Academy (NDA) nor the Self-Defence Force (SDF), making the experience of participating in discussions with the SDF and the cadets especially meaningful. On the first day, we visited the Office of Japan Peacekeeping Training & Research Center. To be honest, I always assumed that officers working for the SDF would be muscle-macho, but contrary to my expectations, the officers were actually lean and fit. With warm smiles they welcomed students and started the lectures. Hearing the officers' experiences, from gruelling operations to the bonds of fellowship, and

learning about their negotiations on the world stage with countries having hidden objectives and strategies, was truly intriguing. Both the officers and students discussed variety of topics including how the Japan Peacekeeping Centre contributes to the peace around the world and significance of Japan being part of Peace Keeping Operation (PKO). While acknowledging that less officers are being sent to PKO from Japan, officers shared with us their passion for what they have done in the past. During the discussion, some students and officers strongly agreed that PKO is crucial for a country's reputation in the United Nations, as it helps build diplomatic relations with other countries and demonstrates a nation's moral and ethical stance. On the other hand, standing from the government's perspective, deciding whether to send officers for PKO is becoming increasingly difficult due to the risks involved, including potential loss of life and the profound responsibility for the value of each individual's life. Despite these conflicts, I would like to praise and thank them for their contributions to the world. On the first day, my biggest lesson was to make an effort to understand the cultural backgrounds of others and avoid expecting simple, quick solutions. Instead, adopt a long-term perspective and begin with small, self-initiated efforts that I can start right now.

The second day of national security training had a full schedule at NDA in Yokosuka, which has strict entrance restrictions for outsiders. For most of us, except a few students, it was our first time on academy grounds, and our interactions with the NDA students were unforgettable. If I had to choose a memorable activity, it would be the discussions we had while enjoying a delicious seafood rice bowl together. As we asked the cadets for their opinions on Japan's national security, we shared different perspectives on the roles of the SDF and the significance of Article 9 of the constitution, alongside Japanese citizens' low interest in political topics. Despite varying opinions among the students, I admired their humility, mutual respect and dedication. Contrary to my expectations, I was surprised to learn that NDA students write graduation theses and undergo leadership training as part of their daily routine. Inspired by their commitment to becoming future officers, I aspire to find my own path where I can contribute to a better world. With this in mind, I strongly advocate for a peaceful world grounded in humanitarian principles. We must never forget that, despite the frameworks of nation-states, we are all human beings sharing the same planet, and governments must reassess their roles in serving the citizens and for the growth of the country.

芸術文化観光専門職大学芸術文化・観光学部4年 北原 真悠

<実行委員感想>

安全保障研修の実施にあたり、コロナ禍により中断されていた防衛大学校での研修を再開することを目標に、前年冬より慎重かつ綿密な協議を重ねてきた。対面での訪問や日々のやり取りを通じ、関係者の方々の多大なるご支援を賜り、春には宿泊研修の実施がほぼ確定するに至った。

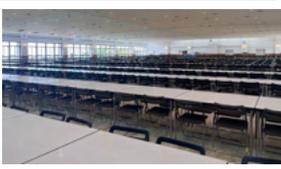
しかしながら、開催を目前に控えた5月において、やむを得ない事情により宿泊研修の実施が困難となった。これにより、実行委員や参加者に広がった落胆は大きかったが、直ちにリカバリーを図るべく再調整を行い、結果として昨年同様の防衛大学校日帰り研修の実施が可能となったのみならず、プログラム内容に昨年実施できなかった基本教練や防衛大学校学生との夕食懇親会を新たに組み入れることができた。参加者から、これらの価値を認めてもらったことには大きなやりがいを感じた。

さらに、自衛隊東京地方協力本部のご協力を得て、短い調整期間にもかかわらず、防衛省統合幕僚学校国際平和センターへの訪問を含む新たなプログラムの実施が可能となった。5月中旬からのわずか2週間という限られた時間の中で、これらの調整が実現したことは、多くの関係者の尽力によるものである。

今回の研修を通じ、関係機関との連携の重要性、そして困難を乗り越えるための協調の大切さを改めて認識することができた。この成功は、関係者一同の献身的な努力と温かい支援の賜物であり、深く感謝申し上げる次第である。

慶應義塾大学法学部3年 福井 達於都





韓国自主研修

第76回では、インド太平洋における日米関係を語る上で外せない韓国についての理解を深めるべく、韓国への自主研修を執り行った。

韓国は、地理的に近接し、長い歴史を共有する繋がりの深い国である。嘗て日本が併合した非対称的な関係性は、戦後の安保経協関係から朝鮮戦争、1965年の国交正常化、日本の高度経済成長、韓国の開発独裁による急速な発展等、幾多の出来事を経て、今では自由・民主主義という普遍的価値観を共有し、強固な防衛力・技術力・経済力を有するとともに、文化が相似し、世界で勝負できるIPがある、まさによきライバルであり、よき友である。将来を担う我々学生は、相互に理解を深めることが極めて重要である。

一方、日韓の間には歴史問題・領土問題等、困難な問題も存在する。そして、この問題はイデオロギーの違いに多分に立脚しており、日韓関係を累卵の如く不安定化させていることも事実である。歴史が消滅することはないが、いかに折り合いをつけ、建設的な競争・協力関係を作ることを目指さねばならない。

このような意識の下、第76回日米学生会議では、できる限り多様な立場の方々にお話を伺い、イデオロギーに囚われない未来志向の理解を深めることを企図した。多くの方々のご協力を得て、両国のアカデミアに加え、在日韓国人留学生、日本の議員、日本と必ずしも深い繋がりのあるわけではない韓国人等、様々なステークホルダーと交流すること企図した。多角的な視点のから日韓関係を捉え直し、偏頗なき理解を涵養する上で最善のプログラムとなったことと思う。

日程 2024年 7月9日～12日

滞在場所 相鉄ホテルズ ザ・スプラジール ソウル明洞³

行程 計4日間

7月9日：KASCとの交流会①

7月10日：KASCとの交流会②（ソウル大学講義等）

7月11日：War Memorial of Korea、RT 別 FT

7月12日：KEPCO 博物館、仁寺洞観光

【事前活動内容】

詳細は「第四章 勉強会」の項目に譲るが、韓国研修を行うにあたって、様々な階層から韓国についての理解を深めるための事前勉強会を行った。実施した勉強会は以下の通りである（実施日順に記載）。この場を借りて、ご協力いただいた各位に御礼申し上げたい。

1. 東京大学 木宮正史教授による質疑応答
2. ソウル大学 Byung-Yeon Kim 教授によるご講演・質疑応答
3. 衆議院議員 武田良太 日韓議連幹事長/元総務大臣によるご講演・質疑応答
4. 在日韓国留学生連合会との交流会（オンライン・対面計2回）

1 日目（7月9日） KASC との交流会①

韓国研修初日は、KASC（；The Korea-America Student Conference）との交流から始まった。

- KASC による Final Forum の傍聴
- ホテルチェックイン・諸注意

³住所：15, Namdaemun-ro 5-gil, Jung-gu, Seoul, 04526, Korea

- JASC・KASC による交流晩餐会

＜参加者感想＞

飛行機の窓を通して見える景色は、その国の経済体制や社会構造を示しているのだと思う。農村、畑、大量に建設された同型のアパート。韓国の経済発展には格差が伴っているのだろうか。高層ビル、新型EV車、LED広告。対照的なソウル市内の状況は、日本と同程度以上に経済規模が拡大していることを窺わせており、人口を集中させることもその一環なのだろうと感じた。福祉政策によって所得格差は解消できても、人口の一極集中がなくては労働生産性の向上をもって市場競争で優位には立てない。日本に対する、剥き出しの対抗心を垣間見たような気持ちだ。

本研修の嚆矢である、KASC による Final Forum では、各 RT の有する問題意識や各人の有する専門知識の掛け合わせ、さらに協力を期待する企業名および戦略を掲げる具体的な提言等、数々の最終報告に圧倒されるばかりであった。それだけでなく、学生やアラムナイによる鋭い意見を通して、その場で熱い議論が交わされており、我々自身の Final Forum に向けて参考となった。

夕食ではトッポギを思う存分鍋に入れ、柔らかくなるまで議論のタイマーをセットした。最終報告の先輩としてアドバイスや、バックグラウンドの異なる学生同士の議論に関する苦楽を共有することで、本会議に向けて期待が高まった。トッポギを食す際には、韓国の食文化に集中する姿も感じ取れた。

近い将来、様々な場面で国を背負って活躍を望む人々が、隣国同士で仲を深めるというのは、人的交流のあるべき姿といえよう。それが実現されたよき初日のプログラムであった。

明治大学法学部法律学科3年 イビネディオン 嶺



2日目（7月10日） KASC との交流会②（ソウル大学講義等）

2日目は、KASC と合同で、ソウル大学において各教授の講義を受けたり、ソウル大学の学食を経験したりした。また、その後 JASC と KASC の交流として、自由な観光と合同夕食会が企画された。

ご協力いただいた教授陣：

- 李 政桓教授：日韓関係の現状と展望
- 李 根教授：市場経済史
- 金 義英教授：韓国の民主化史



＜参加者感想＞

ソウルの街並みはどことなく東京都心に似ているように感じていたが、二日目の研修を通して日韓の社会の相違点について理解を深めることができた。

研修ではまずKASC (Korea-America Student Conference) とともにソウル大学で講義を受け、さらにグループディスカッションを行った。まず李政桓 (Junghwan Lee) 教授より、“History and Prospects of the ROK-Japan Relations” と題した講義をしていただいた。戦後の日韓関係の変遷について安全保障、経済、歴史の三側面から捉えることができた。次に李根 (Geun Lee) 教授から “Liberal International Order and its future” という講義をいただいた。ペロポネソス戦争と現代の戦争の比較から資本主義市場が社会に与えた多大な影響について検討し、双方向的に意見の飛び交う講義となった。金義英 (Euiyoung Kim) 教授の “Democracy in South Korea” という講義では、1987年に民主化した韓国の近現代史について学んだ。

KASCの参加者であるアメリカ、そして韓国出身の学生とのディスカッションは、米軍基地に対する住民の意見やジェンダー平等に関する現状と課題、製造業のサプライチェーンを国内に置くべきか否かなどについて話し合った。ただ街を歩いているだけでは似ていると感じた日本と韓国だが、具体的なトピックに基づいて学生間でディスカッションを行ったことで、それぞれの歴史に基づいた異なる側面にあらためて気がつくことができた。今後もそれぞれの社会の歴史や状況を踏まえて考察を行う姿勢を持って学んでいきたい。

慶應義塾大学総合政策学部4年 小林りこ



3日目 (7月11日) War Memorial of Korea、RT別FT

3日目は、War Memorial of Korea を訪問し、韓国の戦争史、特に朝鮮戦争に関する理解を深めたのちに、いくつかの班に分かれ、FTを実施した。各FTの行き先は以下の通り。また、各FT終了後、班ごとに広蔵市場や弘大等で観光を行った。



1. 東アジアにおける日米関係、社会運動と人間心理、表現と規制
：植民地博物館
2. 環境経済とエネルギー安全保障
：ソウル大学 核物理研究室
3. 技術革新による文化・芸術の変容
：各所美術館・博物館
4. 社会起業家、福祉と倫理：
：Beautiful Store 本部及び支店

【FTの詳細】

1. 東アジアにおける日米関係、社会運動と人間心理、表現と規制

研修三日目のフィールドトリップでは、植民地歴史博物館を訪れた。植民地歴史博物館は日本による韓国の植民地支配の歴史を記録し、その上でどのような未来を切り拓いていくかを考え行動するための施設である。1991年に韓国の市民団体である民族問題研究所によってつくられ、運営資金は全てカンパによって集められるなど、博物館は市民の力によって運営されていた。当日は平和のための市民運動に尽力されてきた金英丸（キム・ヨンファン）さんより、展示の説明をいただいた。

最も印象的だったのは、国際社会の平和について机上の空論ではなく「顔の見える政治」によって考えていかなければならないという金さんのお話である。日本が韓国を植民地支配していた時期の強制労働や「慰安婦」問題について、適切な対応がなされていないと声をあげ続けている方々がいる。しかし当事者の声を置き去りにしたまま、日韓の歴史認識問題は精算がなされずに日韓関係を構築してきてしまったと金さんは指摘する。それを戦時だったから、あるいは独裁政権だったからという理由で片付けてしまうのではなく、個々人の尊厳の問題として向き合う必要がある。ナショナリズムや歴史認識といった理論的枠組みに議論を終始させるのではなく、「顔の見える政治」として個人の人権の問題であると認識する重要性を認識することができた。

歴史学者のテッサ・モーリス＝スズキは、直接に迫害を行っていなかったとしても過去の迫害によって受益した社会に生きていること、直接に虐殺を行わなかったかもしれないが虐殺の記憶を抹殺するプロセスに関与していることを「連累」と呼んだ（Tessa Morris - Suzuki 2002）。歴史の積み重ねの上に生きるわたしたちは「連累」のもと、人権侵害の歴史を知り、被害者の声に耳を傾ける必要がある。そして、私たちが今後いかにして平和な社会をつくっていくのかが問われている。

慶應義塾大学総合政策学部4年 小林 りこ

2. 環境経済とエネルギー安全保障

当分科会は、ソウル大学の核物理研究室（Prof. Yong-su Na）においてFTを行った。ポスドクの学生に当研究室での研究内容に関する紹介を行ってもらい、その後研究室の学生複数人と日韓の核融合研究・ビジネス環境について情報共有をしあった。実際に最前線で核融合研究を行なっている方々から講義を受けたことで、普段のミーティングでは得られない生の知識を得ることができたと思う。

議論では、核融合研究における民間の役割、ITERなど国際的協力枠組に参画する意義、日本の核融合スタートアップ企業の状況などについて意見交換を行った。ソウル大学の学生の方々が日本のスタートアップ企業の研究状況、見通しについて強い関心を有しており、その点について分科会での議論を活かしたことは非常に有意義であったし、ソウル大学の最先端研究を行っている学生たちと交流することで大いに薫陶を受けることもできた。加えて、実際に研究で活用している世界最先端の実験炉も見学させていただき、実験施設の複雑さを肌で感じられた。

京都大学法学部4年 川西 晴太郎

3. 技術革新による文化・芸術の変容

我々の分科会は韓国の kpop の世界的流行に伴うソフトパワー、文化戦略に興味を示し、ソウルに散らばる各美術館や観光地として謳われる街、そして某芸能事務所を訪れた。

ソウルの街は至る所に観光客が訪れる事のできる観光地が分散して作られており、そのため日本をはじめとする観光名所各地が抱えているようなオーバーツーリズムの問題が少ない事に気付かされ、その観光戦略に脱帽した。また、独自のプリクラ機器に見受けられるような少ない単価でヒューマンリソースを必要としないエンタメが多く、外貨の稼ぎ方のお手本のような様々サービスにも驚かされた。

美術館については伝統的なモネ展やルノワール展のような芸術家にフィーチャーしたのではなく、現代アートの展示が多かった。パンやレコードにテーマを絞った展示は興味深く、新しい文化への感性を磨くにあたって素晴らしい環境であるように感じた。

一方で、芸能事務所に関しては急速な肥大によりガバナンスの問題を抱えているようで、元々公式にオフィス内にお邪魔できる可能性があった事務所も所内のトラブルによって訪問ができないこととなってしまった。代わりに別事務所にお邪魔する事になったが、大手事務所の HYBE で某 N グループのマネージャーが経営陣とトラブルに陥ったことも耳に新しい。技術や芸術、芸能といった当たれば急拡大する領域というのは管理も難しいのだなと再確認させられた。

慶應義塾大学環境情報学部 3年 小金山 智弘

4. 社会起業家、福祉と倫理

私たちは、韓国に 160 余の販売店舗を持つ「Beautiful Store」の本部を訪れた。FT 先では、Lee Beom Taek 局長が担当してくださった。当事業は 2002 年に創立されて以来、誰かにとって要らないものが誰かにとって欲しいものである、という考えのもと、寄付の形で商品を引き取り販売し、売上を社会貢献活動に充ててきた。ボランティアの管理や販売店舗の経営管理、起業家の支援事業など幅広く取り組まれる中で、当事業がここまで大きくなった経緯を歴史的に振り返ると共に、質疑応答・議論が活発に行われた。その中で、得た沢山ある学びの中で 3 つを下記に書き出す。

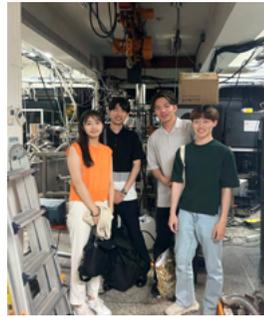
まず、社会的企業として貢献するためには、誰に対して貢献したいのかを明確にする必要があった。当事業では、設立当初の支援対象者は孤児院を 18 歳で出る人々の生活補助及び安定した雇用の確保への支援であったが、当事業の代わりとなり支援する団体が増え、専門家の判断を経て次なる支援対象を探っている段階と教えてくれた。国の支援策が行き届いていないところを分析する専門家と共に効果的に活動しているようだ。

次に、当事業の販売店舗の運営と管理をしている 670 万人のボランティア数を誇る理由とその構成員の特性について聞いた。最も多い層が子育てを終えた主婦だそうだ。若い世代では夫婦ともに働くことも多くなる中、ボランティアを今後どのように確保していくのかという課題感もあった。日本でもボランティア活動の乏しさが嘆かれる中、韓国でも同様に欧米諸国と比較した際、地域の結束力や他者への自発的貢献の少なさをどのように克服できるのか、考えさせられた。

そして、最後に「仲間づくり」の大切さを学ぶことができた。当事業に共感して応援するファンがいるように、共に歩む仲間を得るためにも自分たちの成果を報告書としてまとめ、数値として発信することの大切さ、更には全ての企業・個人を巻き込みながら活動することに価値があることを当事業を通じて実感することができた。

社会に潜む様々な社会課題を分析しデータ化すると共に、解決できたことを数値化し社会への貢献を発信していくこと、誰もが社会の構成員として活躍できる場を設けることでより社会が豊かになることを当事業は証明してくれているように感じた。議論の後には実際に店舗での見学も行き、良い勉強の機会となった。

芸術文化観光専門職大学芸術文化・観光学部 4年 北原 真悠

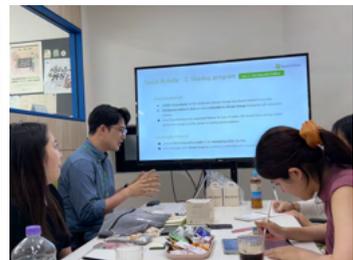


<参加者感想>

この時期らしい蒸し暑さの中、戦争記念館を訪れた。韓国戦争記念館は、韓国がこれまでに経験してきた戦争に関する史料や遺物を展示する巨大な施設である。広大な敷地の入り口には朝鮮戦争を戦った兵士たちの像があり、その先には数多くの国旗に囲まれた美しい広場がある。これらの国旗は朝鮮戦争に出兵支援を行った国々のもので、国旗の下の記念碑には出兵した兵士や犠牲者の数が刻まれていた。もちろん、内部の展示も含めて日本の国旗はない。

本記念館は韓国における戦争の歴史を扱っているが、日本やアメリカの歴史もまた重要な一部分である。日韓関係という言葉聞いたとき、多くの人々は戦後の歴史問題を想像することが多いかもしれない。他方、記念館内部にある亀甲船に代表されるように日韓の間では古くから交戦があった。先に述べた亀甲船や李舜臣の展示にはかなり力が入っており、「祖国の英雄・敵国としての日本」という構図を少なからず感じた。両国の関係の長さに鑑みれば、過去の出来事を完全に精算するのは不可能である。しかし、いま日本と韓国の協力がこれまで以上に不可欠であることは言を俟たない。このタイミングで韓国が経験した戦争の歴史や日本の関わりについて改めて学べたことは、この先の日韓関係を形作る当事者として非常に有意義なものだったと思う。

北海道大学経済学部経営学科3年 多田野 真仁



4日目（7月12日） KEPCO 博物館、仁寺洞観光

正規日程最終日、午前中は韓国最大の電力公社・KEPCOの博物館を訪れ、韓国における電力史への理解を深めた。その後、RT混合の4～5人の班に分かれ、韓国屈指の観光地である仁寺洞を訪れた。観光客で賑わう商店街であったが、歴史を感じる飲食店から流行の最先端を行うポップアップショップなど、飽きを全く覚えなかった。



<参加者感想>

研修4日目の朝、私たちはホテルで集合し、韓国のエネルギーと電力の中核である KEPCO の博物館へ向かった。KEPCO は韓国の主要な電力供給者であり、センタースタッフの説明では、韓国の電力供給の歴史、現在のエネルギー戦略、未来に向けた取り組みについて詳しく学んだ。特に、KEPCO の技術革新と持続可能なエネルギー政策に対する取り組みは、日本と韓国のエネルギー協力の可能性を考える上で非常に有益であった。この訪問にはジャパデリの2人⁴がスタッフの説明を同時通訳してくれたため、言語の壁を感じることなく学びを深めることができた。

午後には、都会の中で昔ながらの韓国の町並みを感じられる人気のエリア、仁寺洞を訪れた。仁寺洞は朝鮮時代に多くの画家が集まり、朝鮮芸術の中心地として発展した場所である。歩行者通りには画廊や伝統工芸店、古民家を改装したカフェやアンティークショップが並び、その歴史的な街並みや文化を肌で感じる事ができた。仁寺洞での観光を通じて、韓国の豊かな文化遺産とその保存努力に感銘を受けるとともに、実際に街に出て街ゆく人の雰囲気や様子を伺うことは、ニュースや本では得られない生の情報であり、非常に新鮮かつ刺激的であった。観光後に立ち寄ったカフェ「OUVERT COFFEE BAR」では、JASCer になるまでの各々の経緯、中核的な価値基準などを共有し合い、親睦が一層深まったことが印象深い。

4日間の韓国研修を通じて、日韓関係や市民運動についての知識が豊富とは言えなかったスタート地点から、これからのアメリカでの本会議で得られるものの量と質の両方を潜在的に伸ばすことができたと確信する。また、日本だけでなく他国の政治文化、経済、社会制度についてもよりリアルに、身近に捉えられるようになる視座を韓国研修で得られた。同じアジアといえど、異なるバックグラウンドを持つ私たちが共に学び、草の根レベルでの相互理解を深めることが、将来の外交関係の構築において如何に大切かを強く実感した。

創価大学理工学部情報システム工学科4年 石上 諒



⁴註：北原真悠・翠川溪

韓国自主研修全体を振り返って

<参加者感想>

The study trip to Seoul provided opportunities for us to make bonds with Korean and American delegates from KASC (Korea-America Student Conference) and to deepen our understanding of our closest neighbour, South Korea.

Regarding the first point, KASC members welcomed us very warmly to their final forum and we had dinner together twice. The final forum was so exciting that I raised a question about one of the presentations despite my being a guest. That presentation focused on the effectiveness of economic sanctions by so-called Western countries on Russia, which surprised me with the difficult issue they were tackling. Seeing the fruits of their huge effort at the conference motivated us so much for our conference.

Not only the final forum but also dinner time enabled us, the Japanese delegation, to connect ties with our Korean and American counterparts. I guess it was the first time for many of us to have direct conversations with Korean people. I believe that talking frankly with some alcohol made our short-term relations closer and that some of us will keep in touch longer.

For the second point, we had lots of valuable events to deepen our understanding of South Korea such as lectures at Seoul National University and visiting museums. The three lectures respectively covered Japan-Korea relations, the importance of the capitalist market in the Liberal International Order, and the history of democratisation in South Korea. As a person who asked Professor Lee Geun to give us a lecture, I was very happy to hear some members say his presentation was very insightful.

The museums we visited also told us a lot about Koreans' view on their own history. War memorial museum, the main focus of which was the Korean War, showed how devastating the war was for Koreans. Japanese people tend to grasp it as a trigger for Japan to develop its economy again, but the museum reminded us that it destroyed the lives of people next to us. This raises a question against the common division of modern history as “before” and “after” World War 2.

Also, our group visited the Museum of Japanese Colonial History in Korea, which I have been to once. Mr. Kim Yeong-Hwan, who has supported victims and joined claims for compensation against Japanese companies, kindly introduced their movements in detail and guided the exhibition of the museum which shows how Korean people reacted to Japanese colonial rule. My intention of taking our group there was to give my colleagues a chance to touch upon various views in Korean society. I believe this goal was well achieved. We had an active discussion with Mr. Kim, not only in the museum but also at dinner. It was my honour for one of the participants to refer to this museum as the best one among the museums we visited on this trip. Through these activities, we strengthened our relationships between KASC and deepened our understanding of our closest neighbour.

Lastly, as a person who studied in South Korea for one year and organised some events on the trip, I saw this trip from the perspective of the host, rather than the guest. Therefore, I felt so happy when some friends told me they got interested in South Korea and the Korean language and were highly motivated to study abroad. It would be my pleasure if all participants feel South Korea closer through this trip.

東京大学大学院公共政策学教育部修士2年 翠川 溪

<実行委員感想>

後泊も含めると6日間ソウルにいた。明洞、江南、弘大、仁寺洞、広蔵市場、漢江、東大門、梨泰院など、名だたる名所をウロチョロ出来た（本研修で初めて知ったが、韓国語の「右へ左へ」に由来するらしい）。私は食が美味しくもないか、水周りが汚い国には行けないのだが⁵²、ソウルは私の口によくあう名物が遍在し、ウォッシュレット・温便座付きの清潔なトイレが（清潔な場所には）多く、住まずとも都という感じであった。

さて、ソウルに来て至る所に日本に近いものを感じた。ローカルな人にはあまり英語が通じないところ、地下鉄駅構内に階段とエスカレーターが連鎖的に混在していてガラガラを運ぶには不便なところ、ご飯文化、点在するセブンイレブン、繁華街にゴミが散乱しているところなどである。まさに兄弟国家という感があり、このような文化的・経済的な近接性に居心地の良さを覚えた。

一方、だだっ広い幹線道路と高度に発達したバス交通、やや濁った大気、山手線のような環状線の電車到着時に流れる、軍隊を思わせるラップ曲、食はやや安く飲はやや高い物価水準など、日本との微妙な差異も見て取れた。特に、何度も利用したバス交通は印象的である。まだ乗客が移動中なのにドアが開いたまま発車したり、加減速が激しく上下左右に大きく車体が揺れたり、そういった乗客のことを考えているとは思えない荒い運転は、日韓の乗客の年齢層の違いが明々瞭々に現れているように思う。そして、アルファベットでも漢字でもない文字に囲まれる経験は、まさに文化的衝撃であった。是非とも帰国後韓国語の学習を始めたものである。

ところで、「外交とは酒で開襟して交流することである」とは、韓国研修にあたってお話を伺った武田良太代議士の言葉のひとつである。私は昔から教を忠実に守る質であるので、今般も忠実に、現地学生並びに未だ辿々しさの残るJASCメンバーたちと、酒を通した忌憚なき交流を行った。韓国版濁酒であるマッコリや、ソジュとビールを1:1で混ぜたソメク等、彼らと言うには安酒ばかりの呑みの場であったが、我々にとっては異国の地で同世代と仲を深めた貴重な経験である。ソジュとビールを混ぜると、ソジュのアルコールのきつさとビールの苦味が互いに打ち消しあい、味がまろやかになるらしい。異酒の混合が不思議なほどに味の変化を齎し、ただ混ぜただけでかくも甘くなるのかと驚嘆した。しかし、交流とはまさにこのようなもので、文化的背景の異なるものが交わることで変貌を遂げるということは、普遍の原理なのかもしれない。この学びを思い出にと、4日目の仁寺洞観光で、手土産に Limited Edition Premium Soju を買って帰った。日本で言うところの限定生産高級ストゼロといった類のものなのだろう。帰国後も、さぞ美味しいソメクを作れるのであろうと胸を躍らせている。

東京大学教養学部理科三類2年 富澤 新太郎

⁵² 週間後に迫った本会議に耐えられるであろうか。





直前合宿

【プログラム概要】

直前合宿は本会議前日に行われるプログラムであり、いよいよ始まる本会議に向けて注意事項の確認や事前学習、各々の会議参加の目的を再確認する場である。事前活動最後のプログラムとして、参加者の意識や意欲を固める目的がある。

【開催日】 2024年8月2日



＜参加者感想＞

2024年8月2日金曜日、国立オリンピック記念青少年総合センターにて第76日米学生会議の直前合宿が開催された。2024年の3月に全ての参加者が確定して以来、毎週のミーティングを繰り返しながら春合宿、安全保障研修、韓国研修といった重要な行事を経てきた。慌ただしいスケジュールをこなす中での時の流れは目まぐるしく、私自身を含めこれからついに本会議を迎えるという実感を持つことができずにいた参加者も少なくなかったのではないだろうか。しかし、翌日に米国への渡航を控えた実行委員をはじめとする各々の面持ちは期待と緊張の混じる引き締まったもので、これから米国側の参加者と膝を交え共に成果物を創りあげていくのだと、全体の士気は次第に高まりを見せた。

参加者の集まりが完了し、各説明や夕食を済ませた後は、若手アルムナイ交流会が催された。比較的年齢の近い日米学生会議の先輩方をお招きし、本会議に関して各々が抱える疑問や不安について気兼ねなく伺うことができる貴重な機会であった。具体的には、ファイナルフォーラムやEC選挙などの流れなどが話題に上がった。将来自分も未来のJASCerに有意義な話を提供しバトンを繋ぐことができるよう、誠心誠意この本会議に臨む所存でいる。

国際教養大学国際教養学部国際教養学科3年 甲斐 聖人



第四章 勉強会/FT

Parareas 成澤朗人さん

開催日 2024年4月9日

開催場所 オンライン

分科会 社会起業家、表現と規制

自治体と企業の連携コンサルタントを行っている Parareas の成澤様より、事業の内容や社会企業のあり方について、講義・質疑応答を行っていただいた。

<実行委員感想>

社会起業家分科会のフィールドトリップ第一弾として、Parareas の成澤朗人さんに社会起業家人材育成に向けた現状と課題についてお話を伺った。前半は、成澤さんがこれまで取り組まれてきた社会起業、特に自治体と企業をコンサルタントとしてつなげ、社会における「負」を解消する取り組みについて紹介頂いた。後半は、日本において社会起業家人材を養成していくために必要な考え方を3つ教えて頂いた。まず第一に、適切なメンターを獲得することである。成澤さんの整理によれば、社会起業にはコンサル型と、事業型の二つが存在している。この二つの組み合わせにおいて、メンターとメンティーの不一致が存在すると、社会企業の発展が阻害されてしまうという。そして第二に、上場マーケットの参入である。昨今日本においては、主にベンチャーキャピタルなどの活躍により、下からの改革は進みつつある。他方で、いわゆる上場企業などからの動きはまだまだ見込めない。こうした状況において、上からの改革が必要となるとのことだった。社会起業家分科会の幕開けにふさわしい素敵なゲストに手厚いインプットをいただき、参加者もこれからの議論に高い意欲を見せていた。

慶應義塾大学法学部法律学科3年 福井 達於都



HLAB 理事・COO 高田修太さん

開催日 2024年4月16日

開催場所 オンライン

分科会 社会起業家

HLAB の高田さんより社会起業家についてお話を伺った。

<参加者感想>

私たちは、社会起業家分科会として、「社会起業家とは何か」について議論を深めていた。しかしながら、世の中の膨大な課題の解決に向けて活動する起業家をどのように定義づけて良いのか、議論に筋を通すことが出来なかった。そこで、社会起業家の一線で活躍されておられる高田さんよりお話を伺った。実際にお話を伺っていく中で「事業性」と「社会性」の二つの要素が社会起業家の必要な要素であることを理解した。また、最前線でご活躍されておられるからこそわかる社会起業家を取り巻く環境や課題についてもご教示くださった。そのような課題を知らなかった私たちにとって、その後の議論の方針にも大きな影響を与えて下さった。

九州大学農学部生物資源環境学科2年 眞継 竜太郎



財務省 多田哲朗さん

開催日 2024年4月19日

開催場所 日米会話学院

分科会 東アジアにおける日米関係、環境経済とエネルギー安全保障、その他

本勉強会では、はじめに多田様から経済安全保障がもたらす世界経済・国内政策への影響と題したお話をいただき、お話を踏まえた質疑応答、更に来る米国大統領選を見越した、米国の大統領選が経済安全保障にもたらしうる影響についての討論を行った。

<参加者感想>

質疑を通じて、我々が文章を読んでも触れることができない、実務を行なっている人ならではの知見に触れることができ、非常に有意義であった。例えば、政府が半導体一分野に対して巨額の投資を行うことはリスクではないか、という質問に対して、政府の投資の目的の一つとしてリスク分散により安定した収益を得ることではなく、日本経済への波及効果が高いと見込まれるが、民間による投資ではリスクが高すぎると思われる分野に集中投資することである、と回答されていたことにはなるほどと思わされた。質疑応答後のデリ間での討論は私自身にとってアメリカ行きに備えた知識のインプットとなり、実りの多い時間であった。

早稲田大学先進理工学部2年 石賀 悠



東京電力HD 安全啓発施設 上川直大さん

開催日 2024年4月30日

開催場所 東京電力HD 安全啓発施設（神奈川県川崎市）

分科会 環境経済とエネルギー安全保障

春合宿の延長として、環境経済とエネルギー安全保障分科会は、政・官・民からエネルギー政策を吟味するFTツアーを実施した。最初の箇所は、川崎にある東京電力HDさまの3.11安全啓発施設と近隣の関連施設を訪問し、エネルギー事業の発展の歴史を網羅的に学ぶとともに、東日本大震災時の福島第二原発事故の経緯とその後の対策についての知見を深めた。

<参加者感想>

本施設は東日本大震災による福島第一原発事故の教訓を踏まえてつくられた安全啓発研修施設である。館内には事故の原因や影響から復興に至るまでの詳細な情報がパネル掲示や映像により展示されている。本見学では所長の上川様より館内資料の説明をしていただき、事故の原因や教訓のほか、当時対応にあたった社員の方のインタビュー動画などを見学した。説明の中で印象に残ったのは「事故を起こした当事者としての後悔・責任」が強調されていたことである。当時の福島第一原発の津波への見通しの甘さへの反省および再発防止への真摯な姿勢を強く感じた。分科会の議論で原子力を扱った際には、国のエネルギー安全保障の観点から原発推進を前提として議論したが、本見学を通して事故の影響や安全対策といった決して目を背けてはならないテーマと両立することの難しさを再認識した。

北海道大学経済学部経営学科3年 多田野 真仁



参議院議員 太田房江 元経済産業副大臣/元大阪府知事

開催日 2024年4月30日

開催場所 参議院会館

分科会 環境経済とエネルギー安全保障

環境経済 FT ツアーの2箇所目では、岡山県副知事、大阪府知事、経済産業副大臣を歴任した太田房江参議院議員にお話を伺った。本勉強会では、実際に斎藤経済産業大臣に対して決算委員会で行う質問をベースにした講義をいただき、副大臣としてのご活動・ご経験をご共有いただいた。

<参加者感想>

太田議員との対談では、エネルギーを含めた経済安全保障について現在の議論状況をご説明いただいたあと、質疑応答を行った。太田議員からは、経済安全保障分野への投資や日本の原子力の要素技術における日本の優位性といったテーマのほか、ガソリンスタンドの「最後の砦」としての役割といったタイムリーな議論について決算委員会で用いる実際の質問原稿をもとに説明していただいた。学生の議論では得ることが難しい視点や最前線で議論されているテーマについて知る大変貴重な機会であった。各メンバーからの質問に対しても真摯かつ熱意を持ってお答えいただき、エネルギー・経済安全保障分野における議論の最前線に触れることができたという点で今後の分科会活動に向けて非常に参考になる訪問であった。

北海道大学経済学部経営学科3年 多田野 真仁



経済産業省資源エネルギー庁 疋田室長補佐との勉強会

開催日 2024年4月30日

開催場所 経済産業省別館

分科会 環境経済とエネルギー安全保障

本勉強会においては、次期エネルギー基本計画も見据え、全てのエネルギー政策分野における国際的動向・課題感を網羅的にご共有いただきました。

<参加者感想>

資源エネルギー庁では、総務課の疋田様より日本のエネルギー政策の現状について詳細なご講義をいただいた。講義のなかでは、各国の再生可能エネルギーの導入目標と現実には乖離があることやそれを踏まえた国外への情報の見せ方の工夫といった現場で働いている方にしか聞くことのできない内容を知ることができた。質疑応答では分科会議論で出た論点について政策立案者の観点から詳しくお答えいただいた。個人的には、洋上風力発電施設の撤去に関する質問に対して他の分野の事例を踏まえて答えていただき、非常に参考になった。全体として、これまでの分科会活動で議論できなかった部分を補完すると同時にエネルギー政策の現状・方向性の全体観を改めて学ぶことができる大変良い機会であった。

北海道大学経済学部経営学科3年 多田野 真仁

株式会社レノバ 今岡朋史さん・福田智広さん

開催日 2024年4月30日

開催場所 株式会社レノバ

分科会 環境経済とエネルギー安全保障

FT ツアーの最後に、再エネの大手上場企業であるレノバの今岡様・福田様に、市場原理に基づく再エネ普及の取り組み等についてお話を伺った。

<参加者感想>

レノバでは今岡様・福田様より自社の再生可能エネルギー分野の事業についてご説明いただいたあと、質疑応答を行った。「事業を通じた社会課題の解決」という企業理念やこれまでのプロジェクト内容をはじめとした説明をいただき、「ビジネスの視点から同分野をどのように捉えることができるか」について新たな視点を得ることができた。質疑応答の際に再生可能エネルギー普及の達成に向けた手段にビジネスを選んだ理由として「スケールすることができる」とおっしゃっていたのが非常に印象に残った。一方、分科会における再生可能エネルギー分野の議論では政府方針を軸に進めていたこともあり、今回の訪問を通して実際に再生可能エネルギー事業を担うのは民間企業であるということを改めて認識した。政府の目標を達成するための最前線を担う方々のお話から学ぶことは非常に多かった。

北海道大学経済学部経営学科3年 多田野 真仁



外務省 川口耕一朗さん

開催日 2024年5月6日

開催場所 日米会話学院

分科会 東アジアにおける日米関係、環境経済とエネルギー安全保障、その他

今回のフィールドトリップでは、外務省で日米関係を中心に外交に貢献してきた川口さんにお話をお伺いした。

＜実行委員感想＞

「自由で開かれたインド太平洋」構想を取り上げ、米中对立が深刻化するなか、日本が「第三勢力」といかに協力するかを学んだ。

安倍元首相が掲げた世界平和を志す構想だったが、理想にとどまり、実質的な条約体制や国際関係には組み込めていないことを学んだ。それだけ昨今の国際情勢が複雑になっていることを普段とは異なる視点で考えることができた。勉強会後のディスカッションでは、現在の国際情勢と日本の立ち位置を再確認し、FOIP 構想の下で今後の日本のあるべき姿を模索した。

慶應義塾大学経済学部経済学科4年 荒木 太一



長島・大野・常松事務所

開催日 2024年5月23日

開催場所 長島大野事務所

分科会 環境経済とエネルギー安全保障

環境経済とエネルギー安全保障分科会は、長島・大野・常松法律事務所の弁護士である藤本祐太郎先生と渡邊啓久先生のご協力を得て、FTをハイブリッド形式で実施した。

<参加者感想>

本FTは、分科会で中心的に議論している再生可能エネルギー分野について、日本のトップローファームで日々活躍されている先生方のご講演・質問を通して新たな知見を得ることを目的として行った。先生方は、ご講演の中で、電力システム関連のお話をしてくださった。電力システム関連の議論は複雑であり、実務を知らない学生が議論することが難しい分野であっただけに、非常に貴重なご講演であると感じた。また、先生方は、我々が抱いた質問に対して、的確に回答してくださった。特に印象的だったのは、学生の着目する視点と先生方の着目する視点の違いであった。我々学生は、制度・規制を意識することが多い一方、先生方はよりビジネスを意識されていた。ビジネスを意識できるということは、より現実的に物事を考えることができるということであり、これはまさに当分科会が目指すところである。今回のFTは、当分科会の活動に新たな視点を与えてくれたと共に、分科会の目標の達成により近づけてくれた機会であったと思う。大変お忙しい中、快くご協力いただいた藤本先生、渡邊先生には厚くお礼申し上げる。

京都大学法学部4年 川西 晴太郎



経済産業省 田村英康さん

開催日 2024年5月25日

開催場所 日米会話学院

分科会 東アジアにおける日米関係

今回のフィールドトリップでは、外務省で日米関係を中心に外交に貢献してきた川口さんにお話をお伺いした。「自由で開かれたインド太平洋」構想を取り上げ、米中対立が深刻化するなか、日本が「第三勢力」といかに協力するかを学んだ。

<実行委員感想>

安倍元首相が掲げた世界平和を志す構想だったが、理想にとどまり、実質的な条約体制や国際関係には組み込めていないことを学んだ。それだけ昨今の国際情勢が複雑になっていることを普段とは異なる視点で考えることができた。勉強会後のディスカッションでは、現在の国際情勢と日本の立ち位置を再確認し、FOIP 構想の下で今後の日本のあるべき姿を模索した。

慶應義塾大学経済学部経済学科4年 荒木 太一



東京都産業労働局創業支援課

開催日 2024年5月27日

開催場所 オンライン

分科会 社会起業家

本勉強会では、行政によるスタートアップ支援をテーマに東京都産業労働局商工部創業支援課の方々にお話を伺った。

<参加者感想>

宮坂学副知事主導の下、新たに策定されたスタートアップ戦略と、創業支援課がご担当されている起業家育成事業について紹介していただいた。起業家支援政策の立案背景や、職員の方々が現場レベルで感じる起業家育成の課題等について言及してくださり、行政の視点を学ぶ貴重な機会となった。

個人的に興味深かったのは、起業家教育の早期化だ。職員の近藤様から、都内小中学校におけるアントレプレナーシップ教育事業についてお話していただき、起業家教育の裾野の広がりには驚かされた。初期教育段階から起業家精神を醸成する目的の下、仮想の会社立上げから決算までの工程をシミュレーションするプログラムを実施しているという。「総合的な学習の時間」や「外国語活動」が新設されたように、「起業家教育」が学習指導要領に組み込まれ、必修化する可能性を感じた。

慶應義塾大学法学部法律学科4年 藤木 果蓮



MTG Ventures 代表 藤田豪様

開催日 2024年5月28日

開催場所 オンライン

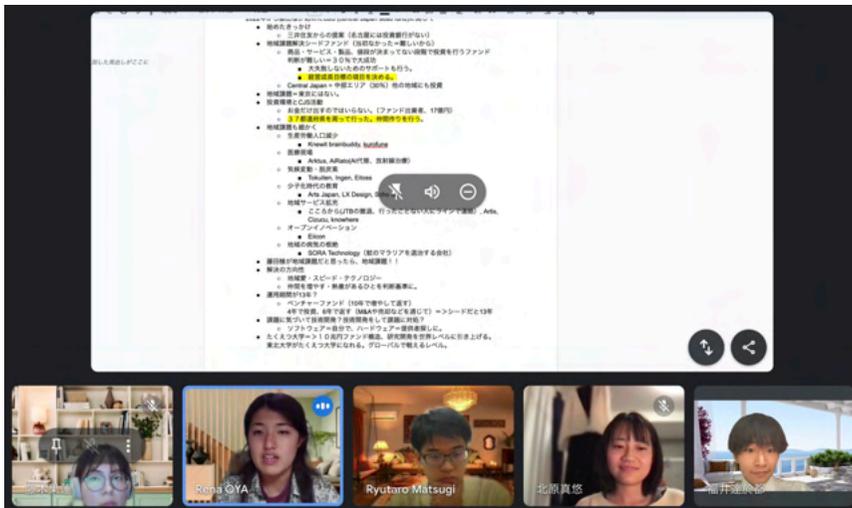
分科会 社会起業家

このFTでは、社会起業家における官民連携の課題や役割分担のあり方と社会起業家に対する投資基準を伺うためにMTG Ventures 藤田様にお話を頂いた後、行政と社会起業家の関係値について議論を行った。

<参加者感想>

藤田様の実経験を元にする、課題感や官民双方のメリットデメリットを伺うことで、文献研究だけでは得られない理解を深めた。全体論として官民連携は時間軸が遅く、他方面の配慮が必要になる一方で一般市民への浸透が早く、価値観の変動が実現できるというお話から、安倍政権と岸田政権の違いや具体的な市町村の中での長とベンチャーキャピタルと起業家の連携手段と展開速度の比較など具体的なお話まで幅広く知識を共有していただくことが出来た。また、藤田様自身が行っている地域課題解決シードファンドの設立理由や投資判断の基準を聞くことで、我々のケーススタディの理解と視点を増やすことが出来たと感じる。特に、技術やプランだけでなく熱意を持っているかと仲間作りが出来ているかで判断をするという点が、シードファンドの難しさであり、事業展開の命運を握るのであると理解した。

国際教養大学国際教養学部2年 大矢 玲菜



豊岡市コウノトリ共生部 農林水産課

開催日 2024年5月30日

開催場所 オンライン

分科会 社会起業家

本勉強会では、兵庫県豊岡市の農林水産課の山本隆之様と山本大紀様が豊岡市を最後の生息地としたコウノトリの野生復帰に関する取り組みを時系列に沿って説明していただき、講義を踏まえた上で、何故豊岡市ではコウノトリの野生復帰に成功することができたのか、市民と行政の関係づくり、市民が主導に立って地域社会を変革させていく豊岡市から学べる市民像や市長像を学び得ることができた。

<参加者感想>

特に印象に残ったお話は、市民の多くが多様な動物とも共生するために「コウノトリ育む農法」を生み出した取組であった。これまで社会起業家精神が語られる文脈における「市民参画」や「社会変革」という語彙は、理想を追いかける情熱的な活動として捉えてしまう傾向があるが、より身近な日常生活における素朴な変化や共同体の価値観形成に働きかけることから始まるということに気付かされた。もっとも、豊岡市においてコウノトリ野生復帰が成功した要因は、市民の多くが持つ奥ゆかしさにあったとされる。歴史的に水害の被害や猛暑が続く生活環境では市民も自然と上手く折り合うことに慣れており、コウノトリの最後の生息地となる豊岡市では他地域と異なり鉄鋼柵で追い詰めることはなく、子供に追い払わせたという。進化する科学技術は農業の効率性を向上させた一方、豊岡市が先立って化学肥料や農薬が登場する以前の農業に着目し、生き物の多様性が齎す食物連鎖を活かしたことから、既存の在り方を鵜呑みにするのではなく幾度となく問い直し変化させていくことの大切さに気付かされた。また、農法を変える上では新たなビジネスプランを立て直すことも必要であり、豊岡市で実装が開始される ToCSA (トコサ) も今後、「地消地産」を促進させ、農業者の収益の安定化を試みていくとされる。市民と行政の関わりを豊岡市の実経験をもとに聞くことが出来たことは、今後社会的価値を見出しながら、仲間と共に社会に働きかけた私たちにとって良い学びの場となった。

芸術文化観光専門職大学芸術文化・観光学部4年 北原 真悠



映画『関心領域』鑑賞

開催日 2024年6月6日

開催場所 オンライン

分科会 技術革新に伴う文化・芸術の変容、表現と規制

表現と規制 RT と技術革新による文化芸術の変容 RT は、合同で映画「関心領域」の鑑賞を行った。「関心領域」は2024年のアカデミー賞で二冠を達成した作品であり、アウシュビッツ強制収容所から塙を一枚隔てた豪邸で過ごす所長一家の牧歌的・理想的な暮らしぶりを題材としている。

<参加者感想>

「関心領域」は終始、強制収容所の様子が一切出てこないままに理想的な一家の暮らしとナチス高官たちの仕事ぶりが描かれている。ホロコーストの歴史を前提として知っている私たちにとっては、まるで箱庭の遊戯のように現実感のない彼らの生活が、映画には描かれないホロコーストの悲惨な現実性との対比の中で、一種の奇妙さをもって感じられて思わず見入ってしまった。

良質な映画鑑賞を通して表現の可能性の大きさを改めて実感したことが、RTへの議論にも影響を及ぼした。当時のトピックとして表現の規制の生成過程やその意義にフォーカスしていたが、表現の自由がもたらす可能性の大きさや創造性を誇大視しすぎることはないという意味で、規制と自由のバランス感覚を捉えなおす機会になったといえる。

早稲田大学政治経済学部4年 佐藤 知穂

Team Lab 訪問

開催日 2024年6月9日

開催場所 Team Lab

分科会 技術革新に伴う文化・芸術の変容、表現と規制

表現と規制分科会と、技術革新に伴う文化芸術の変容分科会で、チームラボボーダーレス（麻布台ヒルズ）の展示を見に行った。

＜実行委員感想＞

展示では、まさに「ボーダーレス」な空間が作り上げられていた。壁に鏡を取り付け、いつまでも展示空間が続くような錯覚を覚えさせたり、会場全体で共通のお花の匂いや音楽を流すことで作品間の境界線を曖昧にしたりしていた。

また、特に印象的だったのは「永遠の今の中で連続する生と死II」という作品だ。襖絵を連想させる背景に、日本画のタッチで華やかな花々が描かれ続ける。コンピュータープログラムによってリアルタイムで描かれるように設定された本作品では、現実世界のように、季節や、日の入りと日の出に応じて花の様子や種類が変化していくという。ある花は静かに散る一方、別の花は力強く咲いていくことで、全体としては常に美しい状態を保っている作品に、儚さとエネルギーを感じた。

慶應義塾大学総合政策学部3年 関根 奈央



参議院議員 宮沢洋一 自民党税制調査会長/元経済産業大臣

開催日 2024年6月10日

開催場所 参議院会館

JASCのアラムナイである宮沢喜一元首相の甥であり、第二次安倍改造内閣・第三次安倍内閣にて経済産業大臣をお務めになったほか、自由民主党の税制調査会会長を務められる、宮沢洋一参議院議員にご講演いただいた。宮沢喜一元首相のこと、経済産業大臣として臨んだ電力自由化改革のこと、税制調査会会長として行われた事業承継税制をはじめとする税制改革のことについてお話を伺い、質疑応答も行った。

<参加者感想>

日米学生会議OB、宮沢喜一元総理の甥の宮沢洋一参議院議員にご講演を賜った。まず、宮沢元総理と日米学生会議について。印象的だったのは、よく対照的に語られる宮沢元総理と中曽根元総理だが、戦争は二度としないという強い覚悟を持つ点で本質は同じだったというお話である。吉田自由党路線と鳩山民主党路線が、この点においては団結してきたからこそ、今日まで自民党も日本も存続してきたのだろうと感じた。経済産業大臣時代についてのお話では、先生自らが主体的に推進された電力の自由化に関して、当時の理想と現実の問題点との間で試行錯誤されていることを伺い、法整備の難しさとその後も改良を重ねることの重要性を認識できた。最後に、現在務められている税制調査会会長のお仕事について伺った。税調という組織は、一国民としてはなかなか理解しにくいところだったので、その内側について学べたのは大変貴重だった。困っている方々の意見を聞き、財務省と交渉するという仕事は本当に骨の折れるものであろうが、そのトップを7年間担われている先生の胆力や人間力を垣間見れた貴重な勉強会だった。

学習院大学法学部政治学科3年 赤瀬 朋基



福岡市創業支援課 中村様

開催日 2024年6月12日

開催場所 オンライン

分科会 社会起業家

本フィールドトリップでは、始めに福岡市創業支援課の方々から社会起業家の支援の現状・課題についてお話を伺った。その後、各人がこれまでの官民連携の現状について学んできたことをもとに質疑を行った。

<参加者感想>

本フィールドトリップは、現場で政策を動かされている方々から生の声を聞くことができ表面的な調査だけでは得られないような見識を得ることができた。特に福岡市は、昨年度から社会起業家支援が始まったばかりであった。きっかけは、福岡市で起業する起業家は福岡の社会課題に対して熱い思いがあることが認知され始めたからである。また、福岡市がスタートアップ創出に力を入れているのは地理的な要因にも起因することが分かってきた。直接担当者からお話を伺うことでウェブサイトから支援状況などをリサーチするだけでは分からなかった支援を取り巻く有機的なつながりが見えてきた。そのため、深い知識を要する場合は自分たちでリサーチすることはもちろんのこと、実際に最前線で活躍している方々からお話を伺うことが必要だと学んだ。

九州大学農学部生物資源環境学科2年 眞継 竜太郎



坂田奈津希様

開催日 2024年6月23日

開催場所 オンライン

分科会 表現と規制

現在 ATG エンターテインメントで Business Development Manager としてご活躍中の坂田奈津希様より、主に以下の点について、演劇を作り上げていく過程を通じての表現に関するお考えやご経験について、お話を伺った。

- 現在の職業に就かれた理由
- 表現に対する規制を感じる時、可能性を感じる時
- 第 61・62 回参加時のご経験

<参加者感想>

演劇は役者を媒介として発信者(制作側)と受信者(観客)が存在する。制作側と役者で齟齬が生じることも多いが、両者の認識が噛み合った時に相乗効果で想像以上のものができることがあるというお話が印象的だった。私はこれまでの議論で、発信者が当初意図していたものと異なる形で表現が受け取られることをマイナスに捉えていたが、媒介する人が新たな視点をもたらすことでより良い表現になりうるのだと知った。

信州大学医学部医学科 2年 舛尾 花尾

Woven Capital 加藤道子様

開催日 2024年6月28日

開催場所 オンライン

分科会 環境経済とエネルギー安全保障

「モビリティ市場の未来」をテーマに、JASC56/57 アラムナイで Woven Capital パートナーの加藤道子様より、Woven Capital が現在行っている投資や脱炭素社会で日本が勝っていく方法等について伺った。

<実行委員感想>

Woven Capital 勉強会では、定例ミーティング中に出た本分科会の議題に対して、実務的な観点からご意見をいただきました。例えば、本分科会の「脱炭素」は一時的なトレンドの一つであるという前提に対して、「脱炭素」は持続し続けるものであり、勝てそうな企業に投資しているとのご回答をいただいたり、日本が脱炭素社会で勝っていく方法として、EV やソフトウェア製造過程において、効率的な一気通貫型を推進し、一社間を超えて協力することを伺えたりした。また、普段の議論ではなかなか踏み出せない具体的なモビリティ技術に関して、投資先の斬新で面白かったアイデアとして、Foretellix が自動運転システムと ADAS のための安全主導の検証および検証ソリューションにおいてスペシャリストになろうとしている点や Whill がシニア世代や障害がある方に向けて自動運転サービスを空港で展開し始めている点を挙げていただき、大変興味深かった。

国際教養大学国際教養学部国際教養学科3年 宮本 希



東京大学 木宮正史教授

開催日 2024年7月2日

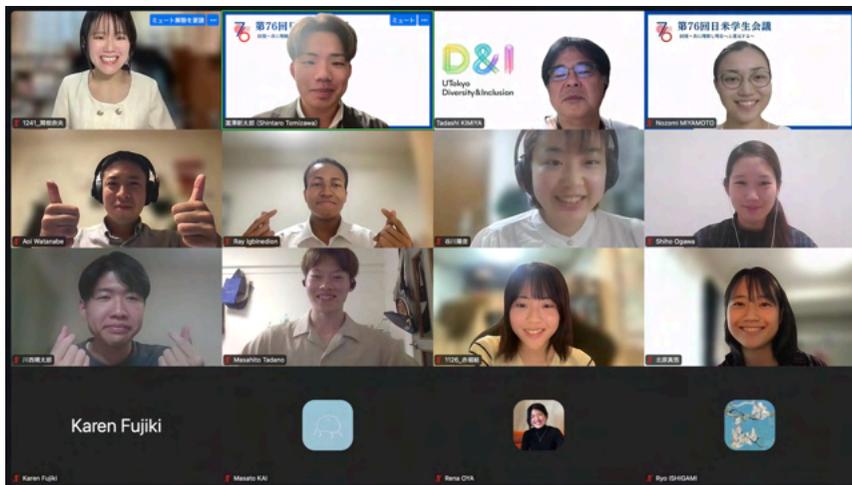
開催場所 オンライン

韓国研修に向け、東京大学で韓国の外交史を専門とされる木宮正史教授にご講演いただいた。予習として、木宮教授の著書『日韓関係史』(岩波新書 2021)⁶を読んだ上で、質疑応答を行った。

<参加者感想>

これまで、韓国文化に強く惹かれ、韓国に関心を持っていたが、今年の3月にDMZを訪れ、日韓関係をより深く学びたいと感じるようになった。そのため、木宮教授のご著書「日韓関係史」は、日韓関係の変遷を、段階ごとに分けて理解するのにとても役立った。実際に教授にお話を伺えたのは大変貴重な機会であり、たくさんのメモを取らせていただいた。数々の重要なお話の中で特に印象的だったことは、日韓関係における歴史問題の扱い方だ。3月の渡韓時に、韓国人学生と交流したり、博物館を訪れたりし、私自身はより一層韓国が好きになった。一方、中には歴史問題が障壁となって韓国にマイナスな感情を抱いている人もいる。これについて教授にご意見を伺ったところ、両国で歴史の認識を合致させることは難しいが、それが原因となって両者の文化・経済的な交流や協働の機会が失われてしまうことは避けるべきだとの意見をいただき、とても共感した。歴史問題を完全に解決するのは難しいが、向き合う姿勢は持ち続け、その他の分野での協働を促進していくべきだと考える。

慶應義塾大学総合政策学部3年 関根 奈央



⁶<https://amzn.asia/d/0YhvtLh>

ソウル大学 Byung-Yeon Kim 教授

開催日 2024年7月2日

開催場所 オンライン

本事前勉強会では、ソウル大学で通商経済をご専門とされる Byung-Yeon Kim 教授に、日韓関係の現状と展望についてご講演頂いた。Kim 教授はなぜ日韓の経済協力が必要なのかという問いを中心に、サプライチェーンの脆弱性など両国に共通する課題や、国際情勢の不安定化といった日韓を取り巻く状況について説明して下さった。

<参加者感想>

主に経済と安全保障の観点から今後の日韓協力の在り方をご提示頂いたが、それに加えてより多方面に渡る協力形態として、ドラマ制作などの文化事業への共同出資や日韓合同のスポーツリーグの創設などの案も紹介して頂いた。中でも印象的だったのは「労働市場の統合」であり、賃金上昇や労働力確保といった課題から日韓協力の可能性について考える新たな視座を得ることができた。参加者は最後に Kim 教授のご提案の中から最も支持するものを選び、なぜそのように考えるのか理由を述べた。

Kim 教授はご専門とされる通商経済の分野にとどまらず、日韓の法律に対する意識の違いや少子化といった社会問題についてなど、多岐に渡り示唆に富んだお話をしてくださった。本勉強会は1週間後に渡韓を控える参加者にとって、韓国側の視点から日本を客観視し、日韓関係を捉え直す有意義な機会となった。

東京外国語大学言語文化学部言語文化学科2年 小川 志穂



在日韓国留学生連合会との交流

開催日 2024年7月2日

開催場所 オンライン

韓国自主研修に赴くにあたり、日本の大学に留学に来ている韓国人の団体と交流をした。7月2日に韓国の実際の学生が感じる日米韓の三カ国協力、韓国実地で学びを得れる場所などについて教えていただいた。1ヶ月後の8月1日に韓国で学んだ事を共有し、感謝の意を述べた。

<実行委員感想>

自主研修の資金調達の途中で知り合った団体であったがいきなりの連絡だったにも関わらず一つ返事でこのイベントを組んでいただいた。韓国に実際に足を運ぶ前に交流ができた事で実地の状況や訪れた方が良い場所などを聞くことができた。在日韓国留学生連合会の歴史についても話を伺った。現在は大阪、名古屋、東京の三拠点で留学生のサポートや交流活動をしているようだ。我々も日本開催の際は何かと関わることができるかもしれないと淡い期待を抱かされた。また、日本人も今後留学を活発化させるためにこのような取り組みに習うことがあるかもしれないと感じさせられた。

研修後の交流では我々が韓国の実地で学んだことを共有した後、月島にモンジャを食べに行った。交流のおかげで研修が実りあるものになったことを聞いて大変喜んでいただいた。異国の地でも草の根活動を続け、母国のコミュニティを作る大切さを学ぶ良い機会となった。

慶應義塾大学環境情報学部3年 小金山 智弘

日本医療政策機構 乗竹様

開催日 2024年7月3日

開催場所 オンライン

分科会 福祉と倫理

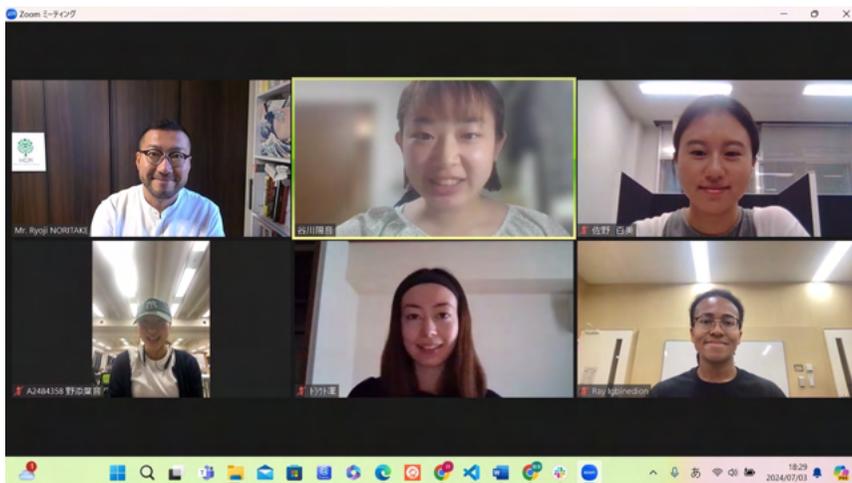
日本医療政策機構の乗竹様に、現在の医療制度が抱える問題と日本医療政策機構の役割について話を伺った。

＜実行委員感想＞

今までは医療モデルと呼ばれていたものが慢性的な疾患のコントロールなども意味する社会モデルに変容していったこと、日本はアメリカに比べて薬価が安く、誰でも薬を買うことができる社会である一方、新しい薬の導入の遅れやイノベーションの期待値が低くなるなどの問題があることなどを学んだ。また、高齢化社会における医療DX導入の可能性についても教えていただいた。

今まで分科会で話していた中で曖昧だった点を明確にすることができ、ヘルスケアにおいては例外的なアメリカの位置付けを知ることができた有意義なフィールドトリップとなった。

京都大学医学部人間健康科学科3年 谷川陽音



米国海軍の Commander Andrew Orchard さん

開催日 2024年7月5日

開催場所 日米会話学院

分科会 東アジアにおける日米関係、その他

東アジアにおける日米同盟の重要性や、実際に想定される事態においてどのように機能するかという点について、米国海軍のコマンダーである Orchard 氏により講義・質疑応答をいただいた。

<実行委員感想>

まず日米同盟の基本的な歴史の流れの概要について説明して頂いた。第2時世界大戦後から冷戦期の中国への接近、また集団的自衛権の容認、気候変動や災害対応まで日米同盟の歩みについて話していただいた。抑止について武力攻撃などの望ましくない行動を敵対者にとらせないための戦略として定義していた。事前に提出していた質問も丁寧に答えて頂き、アメリカの視点から、有事の日本への核兵器の持ち込みの是非、日本の核禁止条約への批准等は日本が民主主義的に決めるべき内政問題であると強調されていた。その上で、北朝鮮の脅威に関しては韓国との連携強化や、台湾有事に関しては法人保護の観点から日本がどうするのかのどの点をご指摘いただいた。日米同盟の強化に向けて、相互運用性の向上や、コミュニケーションや情報共有の円滑化とともに、人的交流を早いうちから行うことが重要であると述べていた。以上、拡大抑止について、アメリカのコマンダーの視点からお話して頂くことにより、米国としての見解や英語での議論を体験できる良い機会となった。

慶應義塾大学経済学部経済学科4年 早川 さくら



衆議院議員 武田良太 元総務大臣/日韓議員連盟幹事長

開催日 2024年7月8日

開催場所 衆議院第一会館

韓国研修を控え、日韓議員連盟幹事長を務める武田良太元総務大臣に、日韓関係の歴史的経緯や現状、展望についてお話を伺った。なお、日韓議員連盟は、歴代会長に首相経験者や議長経験者が名を連ねる超党派の権威の強い議連であり、韓国側との議員外交を通して、パイプを維持している。

<実行委員感想>

部屋に入るとともに「こんにちは！」と力強い挨拶をしていただいた。若大将とも称される、政治家然とした立ち振る舞いに、ものの数秒で惹かれてしまった。

勉強会では、日韓関係の重要性を強調されるとともに、将来世代に歴史問題を残さないことも指摘されていた。実際、来年は日韓国交正常化60周年であるとともに終戦80周年の年であるが、日本が韓国を植民地支配していた時代の指導者たちはとうにいなくなり、その時代を知っている人たちも数が大きく減ってきている。そのような中、今後もずっと謝り続けることが本当に未来志向と言えるのか、むしろ歴史問題からの教訓を生かしつつ、日韓関係の発展に尽力するべきではないかと仰り、いかに将来世代が謝り続けなくても良い環境を築くかということも指摘されていた。

また、外交をする上で重要なこととして、酒を飲み交わして心を開いて話し合うことの重要性も指摘されていた。私自身、飲みニケーションは好きであるが、飲みニケーションをうまく活用することにより、二国間関係も発展していくのだなあという軽い衝撃のようなものも覚えた。

東京大学教養学部理科三類2年 富澤 新太郎



長島昭久 衆議院議員

開催日 2024年7月16日

開催場所 国会議事堂、衆議院第一議員会館

分科会 東アジアにおける日米関係、その他

本 FT では長島昭久衆議院議員に政治家としての半生についてお話ししていただいた後、残りの議員人生で追求したいこととして、安全保障と子育て政策について現状も踏まえて語っていただいた。その後、質疑応答では学生の質問に快く答えていただき大変充実した時間となった。

<実行委員感想>

自身が官僚の道に進むことを伝えたところ、長島議員流の政治と官僚のあるべき関係性についてお話しいただき、その話が大変印象に残った。曰く、官僚は専門性が重要であり、歴史や政策の経緯などに精通したその道のプロでなければならない。その専門知識を、言葉を駆使して上手く政治家に伝え、政治家の思い込みを正すべきというものである。この教えを今後も胸に止めたい。また、日本における二大政党制の確立を志して民主党から出馬したこと、民主党から自民党に移ったことで選挙区が変更になり当初は大変辛い思いをしたことなどをお話しいただき、我々にとって必ずしも身近ではない政治家という職業について理解を深めることができた。後半では議員の代名詞とも言える安全保障について語っていただいた。曰く、現在、日本国憲法、日米安全保障条約、日米地位協定という三本柱の下での歪な日米関係を正常化させるために2004年に公開された日米合意議事録を見直すなどの是正が必要であるということである。今回のお話も踏まえ、本会議での議論に向けて今後も勉強していきたい。

東京大学法学部第3類4年 渡邊 蒼生



朝日新聞社

開催日 2024年7月17日

開催場所 朝日新聞東京本社

分科会 社会運動と人間心理

朝日新聞東京本社を見学し、新聞の作成現場を見て学ぶとともに、情報社会において新聞メディアの果たす役割について勉強した。

<参加者感想>

朝日新聞本社を見学して、従来の会社のイメージとは異なる、開放的な空間であることに驚いた。部門ごとの島はあるが中は自由席であったり、編集長を中心にして円形に各部門の記者が並んだり、朝日新聞者のリベラルな社風がデスクからも見てとれた。また、朝日新聞を購読していて図や数字による情報の可視化が特に印象的だったが、編集者だけでなくデザイナーやエンジニアが関わり文字によらない表現も追求しているのだと知ることができた。GEである春日様のお話で、朝日新聞者が民間企業であるゆえ読者の求める情報を発信する必要があるけれど、記者が本当に伝えたいと思って書いた記事は、想いが読者に伝わると仰っていたのが印象的だった。記者の関心を追求する研究者の一面と、読者の見たいものを提供する情報発信者の一面のどちらも持ち合わせていることが新聞というメディアの特性だと思った。情報社会の現代で、新聞社の果たす役割の大きさを再認識することができたFTだった。

信州大学医学部医学科2年 舩尾 花菜



兵庫県芦屋市 高島峻輔市長

開催日 2024年7月21日

開催場所 オンライン

灘高校から東大、ハーバード大学と進学し、教育改革等を掲げて史上最年少で芦屋市長に就任した、高島市長にお話を伺った。事前課題として、古舘伊知郎氏によるインタビュー動画⁷を見た上で、2時間弱にも及ぶ長時間、質疑応答を行った。

- 「若者」というレッテルに対する考え方
- 高島市長の教育への熱意、具体的施策、現場の事情
- 学校教育のあり方

<参加者感想>

高島様の芦屋市長としての取り組みや地方自治の現状、学生時代の経験談についてお話を伺った。最年少で地方自治体の首長となった高島市長の革新的かつ冷静な姿勢と実績から、地方自治や教育行政のあり方について学ぶことができた。また、若い人材が政治にどのように貢献し、地域社会のニーズに応えるのかという点についても、貴重な視点を提供してくださった。特に印象に残ったのは、公立小学校の活性化に関する高島市長の見解だ。高島市長は、公立小学校の教育の質を高めることが地域コミュニティ全体の活性化に寄与するという考えを示し、学校が地域の中心として機能することで、地域全体の活力が向上すると強調していた。この見解は、教育が地域社会の発展に及ぼす影響の大きさを再認識させるものであった。事実、芦屋市では、「ちょうどの学び」とそれを支える環境づくり」を、目指す教育像として掲げている。一人ひとりにとって公正かつ最適な「ちょうどの学び」が実現できる環境のことを指す。その実現のためには、こども一人ひとりの個性や興味関心、理解度等を考慮した最適な学びの環境が必要だと教えていただいた。また、渡米に際して高島市長から「現地の日常に触れてきてほしい。」という助言を受けた。高島市長は、アメリカの全てを見かけや情報で判断するのではなく、自分の目で現地の実情を見極めることが大切だと語っていた。この言葉は、私にとって国際的な視野を得るためには現地のリアルな状況や文化に直接触れることが不可欠だと気付かせられるものだった。そして、活発な意見交換をすることができ、本会議に向けて有意義な時間を過ごすことができた。お忙しい中、事前勉強会に協力してくれた高島市長に感謝申し上げたい。

上智大学総合人間科学部社会福祉学科1年 野添 葉音



⁷① <https://youtu.be/E6JBhjaSdSQ?si=tKcFqtqM0FUeKhHT>、② https://youtu.be/hJYYE_jK0GI?si=TxUWpe8OGLnzh83E、③ https://youtu.be/_00I099qXAI?si=OfD-zc0mi9opJwpJ

日本財団

開催日 2024年7月26日

開催場所 日本財団

分科会 福祉と倫理、社会運動と人間心理

公益法人日本財団に訪問し、シニアオフィサーの竹村利通様と勉強会を実施した。竹村様は医療ソーシャルワーカーとしてキャリアをスタートし、後に公務員や社会起業家として障害分野の課題に取り組んできた。特に起業した当時、日本財団からの87万円の助成金が転機となり、事業を再挑戦する機会を得たという話が印象的だった。

<参加者感想>

私は、社会問題に対する違和感を見過ごさず、自分ごととして捉えることで生じる葛藤との付き合い方は非常に難しいと感じてきた。だからこそ、現場に赴き、自分の目で現実に向き合い、解決に向けて奮闘してきた竹村様の一つ一つの言葉に重みを強く感じた。現在、竹村様は日本財団で助成金を提供する側として、中立な立場から社会をより良くするための仕掛けを行っている。助成金の提供とは、日本財団の主要な事業の一つであり、社会貢献を目指す非営利団体やプロジェクトに対して、資金的な支援を行う。この支援によって、地域社会や社会問題に対する解決策の実行を目指す団体のエンパワメントを後押しする役割を担う。このことから、私は公益セクターの特性として、発言権を持ち、多様なセクターとの協働が可能であることを実感した。また、竹村様のお話を通じて、明確な目的と情熱を持つ人々が集う組織だからこそ、自発的にプロジェクトを推進し、社会に大きな影響を与える力を持つことを確信した。以上より、私は市民や企業、ボランティアなど、様々なセクターが関わるプロジェクトにおける人のつながりの重要性を学ぶことができた。何より、広く社会の各分野において公共の福祉の増進に寄与してきた日本財団の多様な活動を知ることができる貴重な機会となった。お忙しい中、事前勉強会に協力してくださった竹村利通様に感謝申し上げたい。

上智大学総合人間科学部社会福祉学科1年 野添 葉音



山谷えり子 参議院議員

開催日 2024年7月29日

開催場所 自由民主党本部

分科会 東アジアにおける日米関係、環境経済とエネルギー安全保障、その他

永田町の議員事務所でインターンをしている学生で構成された「学永会」と合同の勉強会を実施し、「戦後レジームとあるべき日本の姿」というテーマで、山谷えり子参議院議員にご講演をお願いした。

<参加者感想>

講演では、憲法改正、皇位継承、拉致問題、日本の伝統文化、日台関係についてお話ください、最後に神勅を引用して日本の国柄をお示しいただいた。印象に残ったのは、国柄についてのお話で、フランス人やアメリカ人は自国の建国理念を理解しているが、日本人はそうでないという問題意識、こうした実態を是正するために、義務教育で古事記や日本書紀についての教育を施すべきという方針をお話いただいた。質疑応答では、教育基本法改正で日本の伝統文化を慈しみ愛国心を醸成することが明記されたが、実際には自虐教育からの変化はないという指摘がされた。こうした現状に対し山谷先生は、音楽や美術など芸術系の授業で西洋の文化よりも日本古来の文化を扱うなどさまざまな努力を進めていると回答された。日本人であるならば、日本の国柄を理解し誇りに思うことは当然であるのに、そうした教育が施されてこなかったことに強い危機感を覚える。日本ならではの皇室や伝統文化などを尊び、それらを教育することで愛国心溢れる日本人を醸成するという理想に向けて、国会で尽力する議員がこれからも必要だし、その先頭で山谷先生にご活躍いただきたいと考える。

講演後には、自民党本部内の総裁室と応接室、総裁選が行われる大ホールを見学させていただき、最後に党本部名物であるカレーをいただいた。国家の根本に関わる課題への理解を深め、また自民党の歴史に触れられたという意味で有意義な勉強会であった。

学習院大学法学部政治学科3年 赤瀬 朋基



第五章 本会議

第1サイト：Los Angeles

日程 2024年8月3日～9日

滞在場所 HI Hostel Santa Monica⁸

行程 計7日間

8月3日：Los Angeles 国際空港（LAX）到着、アイスブレイク（@ Santa Monica ビーチ）

8月4日：開会式・写真撮影・安全講習（@ USC）、Little Tokyo 散策、RT 議論

8月5日：Huntington ガーデン・裏千家茶道体験、RT 議論

8月6日：LGBT センター、Hollywood 散策、RT 議論

8月7日：Free Day、RT 議論

8月8日：RT 議論、Mid-term Forum（@ USC）

8月9日：移動日

1日目（8月3日） Los Angeles 国際空港（LAX）到着、アイスブレイク

本会議初日となる本日、日本側一行は、昼頃に Los Angeles 国際空港に到着した。その後、バスで30分ほどかけて Santa Monica のビーチから歩いて5分ほどの好立地のユースホテルへと移動した。Santa Monica は肌寒いほどの気温で、真夏とは思えなかった。

ホテル到着後、しばらく荷解きや休憩の時間をとり、夕方にビーチでアイスブレイクを行った。フルーツバスケットなど、自己紹介の機会を織り交ぜながら、参加者が楽しめるようなアクティビティであった。

1時間ほどのアイスブレイクの後、ホテルに戻り、夕食を摂った。



<参加者感想>

約10時間にも及ぶフライトを経て、最初のサイトであるロサンゼルスに到着した。まず印象的だったのは気候の違いである。東京とほぼ同緯度にあるにも関わらず、ロサンゼルスは涼

⁸住所：1436 2nd St, Santa Monica, CA 90401

しく肌寒さすら感じた（到着したのは夕方であった）。ホステルにチェックインした後、近くのビーチで顔合わせを行うために全員がロビーに集まった。数回にわたってオンラインで議論してきたアメデリと初めて直に顔を合わせる瞬間であった。顔も名前も知っている相手と初めて会うのは不思議な感じがしたが、本会議がいよいよ始まることを改めて実感した。ビーチではアイスブレイクとしてじゃんけん列車やフルーツバスケットを行い、初対面ながら互いの距離を縮めることができた。ホステルに戻った後は、本会議最初の RT ディスカッションが行われた。議論の内容自体は真新しいものではなかったが、対面だからこそ分かる点も数多くあり（アメデリ側の議論での立ち回り方など）、今後の議論に向けて充実した初日を過ごすことができた。
北海道大学経済学部経営学科 3年 多田野 真仁



2日目（8月4日） 開会式・写真撮影・安全講習、Little Tokyo 散策、RT 議論

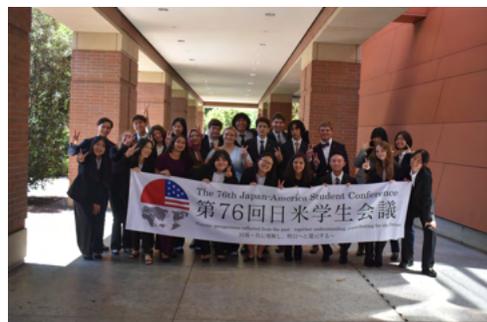
2日目となる本日は、南カルフォルニア大学（USC）の講堂にて、本会議開会式と写真撮影、在ロサンゼルス日本国総領事館の方々による安全講習を行なった。

その後、日米混合の小グループを作り、Little Tokyo を散策した。2時間の散策の後、グループごとに自由時間を楽しみ、各自夕食を摂った。夜は、ホステルにて、RT ごとに議論を行った。初めて対面で RT メンバーが揃い、アイスブレイクをするとともに、今後の議論の方向性を決める重要な会であった。

なお、この日は、日米同時株安の日であり、日本では、ブラックマンデー以来の下げ幅を記録した。

第 77 回日米学生会議 本会議開会式 式次第

| | | | |
|---|---------|---|---------------------------|
| 1 | 開式の辞 | 第 76 回日米学生会議 米国側実行委員長 | Yuki Tanizaki |
| 2 | 米国側主催挨拶 | International Student Conferences, Inc. Executive Director | Bahia Simons-Lane 様 |
| 3 | 日本側主催挨拶 | 国際教育振興会代表 日米学生会議事務局長 | 金野 洋 様 |
| 4 | 基調講演 | Sain José 大学 学長 | Cynthia Teniente-Matson 様 |
| 5 | 閉式の辞 | 第 76 回日米学生会議 日本側実行委員長 | 小金山 智弘 |



<参加者感想>

本会議 2 日目の今日は、まず開会式が行われた。式ではゲストスピーカーとして San José State University の第 31 代学長である Dr. Cynthia Teniente-Matson 氏にご講演いただいた。長い間日米の交流にご尽力されてきた Dr. Cynthia Teniente-Matson 氏のお話の中で 1 つ印象に残ったフレーズがある。それは「才能は誰しにも平等に与えられるが、機会はそうではない」というものだ。与えられた才能を活用し自ら機会を掴みに行くことが成功のカギであるというお話を聞き、JASC という機会を自ら掴み取った志のある 70 人と過ごすこれからの 3 週間への期待が一層高まった。開会式を無事に終え昼食をとったあとは、Japanese American National Museum へ向かった。日系アメリカ人の歴史とそれに付随する芸術に関する展示があり、日系アメリカ人がアメリカで人権を獲得していく過程を学ぶことが出来た。博物館の周辺にはリトル東京という日本の風情を体験できるエリアがあり、博物館見学の後にはグループに分かれ観光を楽しんだ。アメリカから見た日本はどのような国なのか、アメリカという国の中で日本という存在がどのように変化していったのかを知ることができた。

ソウル大学政治外交学部 1 年 篠原 花繪



3 日目 (8 月 5 日) Huntington ガーデン・裏千家茶道体験、RT 議論

午前中は、Huntington ガーデンを訪れ、壮麗な植物園を散策するとともに、園内にある裏千家の茶庵にて、裏千家の茶・茶菓子を体験した。

午後は、ホテルに戻り、RT 議論を行なった。

<参加者感想>

昨年の 75 回で京都においてお茶室に訪問したのに引き続き、ありがたい事に本年もハンティントンガーデンにあるお茶室にお邪魔させていただく運びとなった。

案内して下さった方はアメリカにお住いのアメリカ人であるにもかかわらず、日本文化に対する理解と熱意は筆舌に尽くしがたく、日本人であるというのにその知識の差に圧倒され、祖国の文化がこうも国外で愛されているという事に感動し、また自身も日本という国の文化理解により励まなくてはならないと思わされた。

日米双方の参加者から日本の茶道文化について理解を深める事ができたとの声があり、企画してよかったと心から思った。また、現地でお茶を学ぶ方々との交流では、日本の文化についてより理解したい思っている人や緑茶のみならずお茶全体が好きの人が学んでいたりと、駐在員の奥方が通っていたりと思いがけず多様な人の居場所になっている事をしり、こうした場所の重要性を改めて知らされた。

慶應義塾大学環境情報学部 3 年 小金山 智弘



4日目（8月6日） LGBTセンター、Hollywood 散策、RT 議論

いよいよ時差ぼけにも慣れ、Los Angeles の爽快な気候を感じる余裕が出てきた頃である。この日の午前中は、Los Angeles LGBTセンターに赴き、これまでの多様性の変遷やそのあり方について学びを深めた。前半に職員の方から60分程度の講義を受けた後、施設の職員の5名のパネルディスカッションを行った。その後、RTごとに分かれてHollywood周辺を散策した。滞在するホステルに戻った後は、迫るMid-term Forumに向けて議論を行った。



<参加者感想>

ロサンゼルスは、アメリカ合衆国の中で最も多様な人種が共に暮らしている地域のひとつであるため、LGBTQについて知ることができるロサンゼルスLGBTQセンターは楽しみにしていたイベントの一つであった。施設に到着後、すぐに施設の目の前に掲げられたレインボーフラッグが目に入り、同時にその周囲にはトランスジェンダーの方が多くいた。このフィールドトリップでは、自己の存在をありのままに主張することの大切さを学んだ。自己の存在を主張することで、これまで他人にいうことが出来ずマジョリティの圧力と同調せざるを得なかった人たちが集まり、新たなコミュニティが形成される。この良いサイクルを生み出していくことで社会にとって良い流れにつながることを学んだ。また、ハリウッド周辺の散策では、テレビの中でしか見て来なかった光景を自分たちの目で見ることができ、ロサンゼルスにいること

を身に染みて実感し興奮した。これまで映像でしか見て来なかった光景の裏側にどのような建物がある、どのような音・臭いが漂っているのか映像だけでは見えてこない現場に行くからこそ見えるの真の情報を得ることができ、フィールドトリップを行う意義を実感した。

その後の分科会での議論ではそれぞれが侃々諤々に議論を行っていた。

九州大学農学部生物資源環境学科2年 眞継 竜太郎



5日目(8月7日) Free Day、RT 議論

本日は、LA サイトの Free Day であった。各自が自由に行きたい所に赴いた。以下の施設を訪れた参加者が多かったようである。

1. Disney California Adventure Park
2. Universal Studio Hollywood
3. Beverly Hills
4. Venice Beach
5. The Broad Museum
6. Dodger Stadium

<参加者感想>

本会議ではサイトごとに休息日としてフリーデイが設けられており、個々人が思い思いにアメリカを散策することができる。ロサンゼルスサイトでは、ベニスビーチでアメリカ側参加者と交流した。ビーチに吹きつける潮風と、砂浜全体を包み込むような白光の中でふと、海岸沿いで日光浴を楽しむホームレス達を度々見かけた。福祉政策の対象となる彼らは生活に困窮し、弱々しい姿なのだとか想像していた。勿論、街頭にはそのような人々もいる。例えばサービスの量が多いことで有名なメキシコ料理チェーン店 Chipotle のゴミ箱には、その日の食料を求めて彷徨うホームレスがよく見受けられる。つまり、不確実な余剰生産に頼らざるを得ないのである。まさにロサンゼルスは社会が多面的であり、規範的人物像のようなものが無いからこそ、そこには多様性が内包されているのだろう。ビーチを謳歌する彼らの姿からは、フリーデイの私達よりも自由を感じられた。

明治大学法学部法律学科3年 イビネディオ 嶺

フリーデイの本日、まずはカリフォルニアディズニーを楽しんだ。日米の物価の差やドル円を考慮すると、カリフォルニアディズニーは日本のディズニーと比べて良心的な価格設定だった。また、恣意的な感想ではあるが、日本のディズニーランドと比べ、世界観の作り込みが甘く、国民性の違いが垣間見えた。ディズニーの次はドジャーススタジアムへと直行した。ちょうど到着した時に大谷翔平選手の打席が始まっていたのだが、凄まじい歓声が飛び交っており、アメリカらしさを身をもって体感できた。自分は今回の訪問以前で、東海岸しか訪れたことはなかったのだが、スポーツカルチャーがどの地域にも深く根付いていることを確信することができた体験であった。

東京大学教養学部理科一類2年 下小野田 崇仁

今日は待ちに待った Free day。LA 到着後から毎日イベントが盛り沢山だったため、のんびり自由に過ごせるこの日を心待ちにしていた。アミューズメントパークに行く人がいたり、美術館をのんびり巡る人がいたり各自が思い思いの時間を過ごしていた。私は午前中に翌日の mid term forum に向けた準備を行った後、アメデリ、ジャパデリの数名と共に Beverly Hills、Hollywood、そして Dodger Stadium を訪れた。Beverly Hills は豪邸や別荘が立ち並ぶ高級住宅街として知られるだけあり、大通りには世界的な高級ブランドがずらりと並び、歩いているだけで自分もセレブになったような感覚を楽しむことができた。Hollywood では、エンターテインメント界で活躍した人物の名前を掘った星形のプレートが埋め込まれた Hollywood Walk of Fame を散策した。通りの両側に並ぶ著名人の名前を、行列をなした観光客が俯きながら探している光景は珍妙だったが、何千もの星形のプレートを通してこれまでのエンターテインメントの歴史を刻んできた人達に思いを馳せられる趣ある場所であったことは間違いない。そして Free day の締めとして向かったのが Dodger Stadium だ。テレビのニュースを通して見ていた球場の実物は想像以上に大きく、青い Dodger グッズを身につけた観客で巨大な球場の観客席が埋まっていく様子は圧巻だった。残念ながらこの日はお目当ての大谷翔平選手の本塁打はなかったものの、Dodger のホームスタジアムで試合を観戦できたという事実に私は大満足だった。今日一日を通して多様な側面を持つ LA の、文化の発信地としての伝統とエネルギーを感じることができた。今日の経験を残り2週間強の学びにも繋げていきたい。

早稲田大学政治経済学部国際政治経済学科4年 坂東 璃加

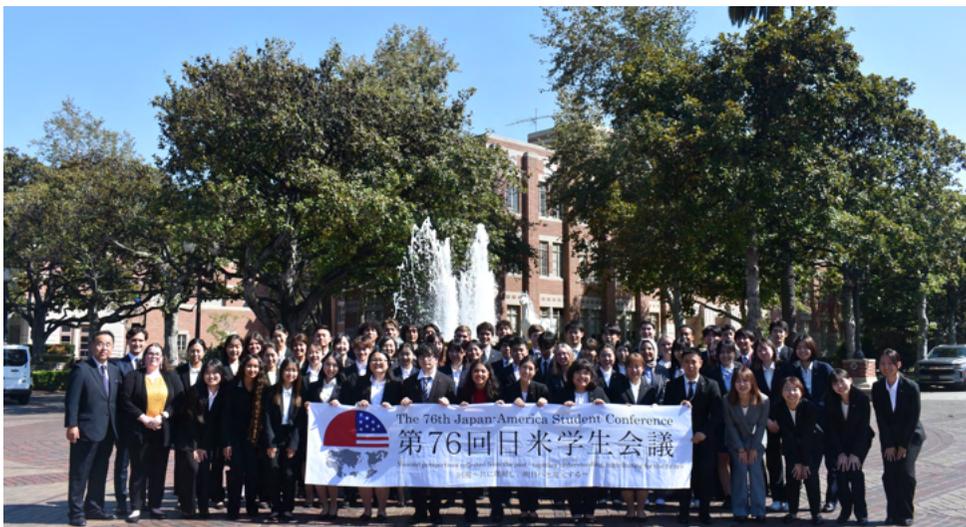


6 日目 (8 月 8 日) RT 議論、Mid-term Forum

LA サイト最終日の本日は、再び USC の講堂に赴き、Mid-term Forum を行なった。本 Forum では、今後 2 週間の議論の方向性を整理した上で示し、相互にフィードバックを与え合うことを目的としていた。

第 77 回日米学生会議 Mid-term Forum 式次第

| | | | |
|---|---------|---|----------------------------------|
| 1 | 開式の辞 | 第 76 回日米学生会議 米国側実行委員長 | Yuki Tanizaki |
| 2 | 発表・質疑応答 | 技術革新に伴う文化・芸術の変容 社会運動と人間心理 東アジアにおける日米関係 表現と規制 環境経済とエネルギー安全保障 社会起業家 福祉と倫理 | |
| 3 | 日本側主催挨拶 | 国際教育振興会代表 日米学生会議事務局長 | 金野 洋 様 |
| 4 | 米国側主催挨拶 | International Student Conferences, Inc. Intern | Krislyn Massay |
| 5 | デリ代表挨拶 | アメデリ代表 ジャパデリ代表 | Carlos Rueda (3EP) 篠原 花綸 (JK) |
| 6 | 閉式の辞 | 第 76 回日米学生会議 日本側実行委員長 | 小金山 智弘 |



<参加者感想>

ロサンゼルスサイト 5 日目となる今日は本会議の中間地点として Midterm Forum が開催され各チームによる発表があった。私は自分たちの RT のプレゼンも含め全体の出来栄にまだまだ満足していない。それは、私たちが飛行機に乗ってはるばるアメリカにやって来たということが十分には生かされていないと思うからだ。もちろんラウンドテーブルのテーマによって

自分たちがアメリカで見聞きしたことを取り込みやすいかどうかは異なる。しかし、その点で表現と規制 RT はその中でも、一番印象に残った発表であった。彼らは LACMA(ロサンゼルス・カウンティ美術館) の展示作品やハンティントン庭園で体験した茶の湯を自らの表現と規制の枠組みで分類し、日本での事前学習とアメリカに来てからの経験を上手く統合させられていた。次はニューオーリンズサイトである。LA と NO という二つの比較対象を得て、私たちのアメリカに対する理解はより立体的になるだろう。今日を境に残りのサイトでは自らのアメリカでの学びをどのように分科会での議論に反映させられるか、常に自問自答しながら、Final Forum までの残り時間を過ごしたい。

東京大学法学部第3類4年 渡邊 蒼生



LA サイトを振り返って

<参加者感想>

During my recent trip to Los Angeles, I immersed myself in a diverse range of experiences that deeply enriched my understanding of both Japanese culture and the pressing social issues affecting the city. On the first day, we kickstarted JASC76 with the opening ceremony and understand the core JASCer values. On the second day we had the opportunity to visit a traditional Japanese garden and participate in a tea ceremony. This serene experience offered a profound insight into Japanese cultural values, emphasizing harmony, respect, and the beauty of simplicity. The meticulous nature of the tea ceremony, coupled with the tranquil garden setting, provided a reflective space that highlighted the importance of mindfulness and appreciation in daily life. The following day, we shifted focus to social advocacy by visiting the LGBTQ Center, where we learned about the challenges and support systems for homeless LGBTQ youth. The center's work was both eye-opening and inspiring, shedding light on the significant barriers faced by this vulnerable group and the vital resources provided to assist them. This visit deepened my awareness of the intersection between social justice and community support. On day four, we had free day where I chose to go to Venice beach

with a group of amedeles and japadeles. We swam in the ocean then went to the Venice beach skate park to watch skaters then went to in n out for lunch, getting the whole “west coast experience”. For my midterm presentation my RT focused on the correlation between homelessness and addiction using statistics and welfare programs. I used data to illustrate the scope of homelessness in the city, incorporating insights from my visits to demonstrate the multifaceted nature of the issue. This presentation allowed me to critically analyze the effectiveness of various welfare programs and highlight the areas needing improvement. Overall, the trip was a rich educational journey, blending cultural exploration with a deep dive into social issues, and it significantly enhanced my understanding of both Japanese traditions and the complexities of homelessness and LGBTQ youth welfare.

群馬大学医学部医学科3年 トラウト 凜

<実行委員感想>

ロサンゼルスは、エンターテインメントの中心地でありながら、同時に様々な社会的な課題を内包している。こうした、光と影の調和を図るため、プログラム設計は繊細さが要求された。

特に、参加者の安全確保は重要な課題であり、行動範囲や宿泊地の選定においては、犯罪リスクを考慮した綿密な調整が行われた。

そして、訪問先の「LGBTセンター」では、当事者と直接接する機会を得られ、参加者は制度論を超えた現場のリアリティを体験した。また、「ハンティントン日本庭園」では、伝統文化の静謐さが体感され、参加者は異文化との対話を通じた新たな気づきを得ることができた。

ロサンゼルスは、単なる観光地の魅力を超え、深層に眠る多くの厳しい問いを参加者に投げかける場所であった。この経験は、異なる文化や視点を持つ者同士の対話を促す、第一サイトにふさわしいものとなったと思う。

慶應義塾大学法学部3年 福井 達於都





第2サイト：New Orleans

日程 2024年8月9日～14日

滞在場所 HI New Orleans Hostel⁹

行程 計6日間

8月9日：移動日

8月10日：安全講習・サイト説明・EC選挙説明、国立WWII博物館、RT議論

8月11日：The Historic New Orleans Collection、FT、カレー作り、Night Jazz Bar

8月12日：Free Day

8月13日：Reflection Forum (@ Hilton Garden Inn)

8月14日：移動日

7日目（8月9日） 移動日

本日は、LAサイトからNOサイトへの移動日であった。長旅でもあることから、公式プログラムは他になく、各デリも休養日として活用していたようであった。

New Orleansは、アメリカの中でも南部に位置することから、Santa Monicaとは異なり、日本を思い起こすような蒸し暑さであった。それでも、日本に比べれば幾分も過ごしやすい気候であった。

<参加者感想>

本日は、ロサンゼルスサイトからニューオーリンズサイトへの移動を行った。ニューオーリンズ行きの飛行機の都合により、ホステルの出発時刻はアメリカ側の参加者が午前3時30分、日本側の参加者が午前7時30分となり、アメリカ側の参加者は早朝移動となった。そのため起床時間にも差異が生まれたが、アメリカ側参加者は寝ている日本側参加者に配慮しながら起床し、出発してくれた。その配慮に心が温まる朝となった。

その後、日本側の参加者も出発し、アメリカ側の参加者を追うような形で無事にホステルに到着した。私たちの到着時には、アメリカ側の参加者が出迎えてくれ、ロサンゼルスで参加者同士の心の距離が縮まっていたことを実感した。そして、新たな部屋割りのメンバーと対面後、夕食となった。

夕食はアジア・ルイジアナ料理であった。餃子などの見慣れた料理や、レッドビーンズライスのような見慣れていない料理まで様々な料理が並んだ。どの料理もおいしく、食事のおいしさと共に話も弾む夕飯であった。食事の時にはロサンゼルスサイトで生まれた交流を生かしたメンバーで食事をする様子や初対面のメンバー同士で食事をする様子が見られた。私は第76回のメンバーの魅力の一つに社交性があると考えている。皆、あまり交流がないメンバーとも楽しく食事ができるのである。そんな社交性が皆のさらなる人間関係を拡大し、この会議中の生活、さらには会議終了後の生活をより良いものとするのではないかと推察する。

しかし、そろそろ、全員に疲れがみえてくる頃である。そのため、いくつかストレスを生むトラブルが発生することは予想できる。私にできることの一つとして、私自身が周囲や全体が充実した学びを得ることにどのように貢献できるのかを考え、明日以降の行動に反映することとする。

東京学芸大学大学院国際理解・外国人児童生徒教育 SP2年 高橋 美咲

⁹住所：1028 Canal St, New Orleans, LA 70112



8日目（8月10日） 安全講習・サイト説明ほか、国立 WWII 博物館、RT 議論

NO サイト 2 日目は、本サイトの目玉である National WWII Museum を訪れた。まず、本博物館の教室で、NO サイトに関する安全講習を JASC37 のアラムナイである Susie Allen 様より受けた後、サイト担当により NO サイトについての説明・諸注意を行なった。また、本会議の最後に行われる EC 選挙を見据え、EC がどのような業務を行なっているかを説明するとともに、EC の魅力を伝えるべく、選考担当より説明・質疑応答を行なった。

その後、博物館近辺で自由に昼食を摂り、午後に博物館の見学を行なった。本博物館は、網羅的に第二次世界大戦を扱った巨大な施設であり、内装にも工夫が幾重にも施され、数時間かけても見足りないほどの博物館であった。

夕方からは自由時間となり、ホテルに帰って休養する者もいれば、博物館近辺のカフェを巡る者もいた。



<参加者感想>

RT 混合ディスカッションでは WWII Museum でそれぞれが感じたことについて話し合った。私の感じたこと、ディスカッションで話し合った WWII Museum と原爆ドームの違いについて以下に述べる。

WWII Museum では第二次世界大戦がどのように始まったか、アメリカがどのように勝利を収めたかについての詳細が展示されており、特に勝利が強調されていたように感じた。その一方で原爆ドームの展示内容に戦争発端の経緯は含まれておらず、甚大な被害の様子が詳述されている。両者の第二次世界大戦への態度の違いが大変興味深いもので、日本とアメリカ双方のデリの間で議論が白熱した。日本が核武装したならばアメリカはどう反応するのか。核を用いずに戦争を終わらせることは果たして可能だったのか。

自分は第二次大戦を対米+その同盟国としてみていたが、アメリカにとって第二次大戦は対核+伊の戦いという認識で、大変衝撃的だった。自国の歴史を多角的な視点から俯瞰する姿勢

を疎かにしてはならないことを認識させられた。

また、映画「オッペンハイマー」について日本で取り上げられているさまざまな批評を共有し意見交換できたことも印象的だった。映画「オッペンハイマー」では、広島・長崎の描写はなく、もはや人々の手に追えない核を作り出してしまった科学者オッペンハイマー自身の苦悩が中心に描写されている。自分はこの一連の描写を反核のメッセージとして十分なものと捉えていいのだろうかという疑問がよぎった。

分科会別ディスカッションにおいて環境経済とエネルギー安全保障分科会はLA サイトにて実施した Mid-term Forum のリフレクションを行い、個人としての目標と分科会としての目標を共有し、今後 Final Forum に向けてどのような道筋を辿るべきか、加えて Final Forum のトピック決めの話し合いを行った。議論のための議論は最小限にし、メインの議論に力を入れたい。

WWII について日米の学生が普段できない本音の議論をした。この経験は日米学生会議 本会議においてもっとも充実した経験の一つだったに違いない。ニューオーリンズののちに滞在するワシントン D.C. にて更なる議論ができることを心待ちにしている。

早稲田大学先進理工学部生命医科学科 2 年 石賀 悠



9 日目 (8 月 11 日) The Historic New Orleans Collection、FT、カレー作り

午前中は、ホステルより徒歩数分の The Historic New Orleans Collection を訪れ、フランスの植民地としての歴史を持つ New Orleans について学んだ。その後、分科会ごとに FT に赴いた。

夕方は、分科会間の交流を深めるため、ホステルのキッチンで日本式のカレー作りをしたり、RT 混合でリフレクションの時間を取ったりした。また、夜は、任意プログラムとして、New Orleans の Night Jazz Bar に行った。

3EP Tulane Institute on Water Resources Law and Policy

Tulane 大学で水資源の法律と政策を専門とする Mark S. Davis 教授のもとへ伺った。テーマは「Rever that were, are, and may be」。ミシシッピ川流域の治水に関する歴史や課題についてお話しいただいた後、質疑応答形式で議論をした。

具体的に講義では、ニューオーリンズのミシシッピ川流域において、権益争いや自然災害といった社会課題をどう解決してきて、今はどのような課題が残っているのかについて学んだ。質疑応答では、法整備や技術確保の難しさに関しての議論がなされた。洪水で苦しむ住民を描いた当時の絵画を見せていただくなど、当事者の視点も含めた様々な切り口からお話しされているのが印象的であった。

東京大学教養学部文科 2 類 2 年 佐藤 未羽

WE/JK The Warehouse

ハリケーン・カトリーナの生存者であるダイアン・パウエルに会う機会があった。氏がハリケーンが多発地帯であるニューオーリンズでの生活や、ハリケーン・カトリーナ後の避難と再定住について語るのを聞いた。氏は災害後の写真やビデオを共有してくれ、それがこの災害の深刻さとニューオーリンズの住民に与えた個人的な影響を理解するのに役立った。特に写真は、家が浸水し、町がほとんど完全に壊滅した様子を示していた一方で、街とその住民が失われた多くのものをどのように再建したかも示していた。また、

氏は、南部のコミュニティが非常に結びつきが強く、コミュニティの関係を重視しているため、多くの人にとって自然災害時の避難が精神的に困難であることを教えてくれた。これにより、災害による犠牲者が倫理観や価値観と密接に関係していることや、低所得層にとって避難を可能にする福祉システムの重要性について考えさせられた。

群馬大学医学部医学科 3年 トラウト 凜

CAT/XL/SOY/SoHu Toulouse Theatre

RT 別のフィールドトリップでは、preservation hall にてジャズの生演奏を聴く機会に恵まれた。ジャズの聖地であるニューオリンズで綿々と受け継がれてきた伝統ある曲の数々で演奏は構成され、新鮮でありながらどこか懐かしさが残るハーモニーが深く心に響いた。同時に、様々な楽器・カルチャー・歴史が溶けあって確立されたジャズという表現の魅力を存分に感じたことで、その後の RT 議論は白熱したものとなった。

早稲田大学政治経済学部政治学科 4年 佐藤 知穂



<参加者感想>

二日目は、The Historic New Orleans Collection を訪問した。開館を待つ間に、近くのアートギャラリーに立ち寄った。店主とは日米学生会議やおすすめのスポットについて、心弾む会話を交わした。お店を出た後には彼が駆け寄ってくれて冷たいペットボトルを渡してくれた。この体験は、思いやりに言語や国籍の壁がないことを教えてくれるものだった。The Historic New Orleans Collection では、ニューオリンズについてあらゆる視点で学ぶことができた。まず、フランスやクレオールの影響を受け、様々な人種や民族、歴史が交差し、独自の文化を発展させてきたことが分かった。また、ニューオリンズの多様性は偶然の産物ではなく、地元の人々が長い年月をかけて築き上げてきたものだとして学んだ。多様で豊かなこの街で生まれた音楽、料理、建築、方言、産業などは人々を強く惹きつける。ニューオリンズの情熱と文化が瞬間的な美しさを生み出し、それが人々の心を捉えるのは確かだ。一方で、2005年に発生したハリケーン・カトリーナによって街の80%が水没し、多くの命が失われた過去を持つ都市でもある。災害支援や衣食住の確保、緊急支援を乗り越えたニューオリンズは、ビジネスの再建に迅速に動き出した。この復興過程を通じて、都市の政策決定が住民や文化にどう影響するのか、災害へのアプローチがどう変わるのかを学ぶ機会となった。現在もニューオリンズでは様々なセクターが協力して復興に尽力しており、東日本大震災と重なる点を感じた。特に、私の中で福島第一原子力発電所事故が思い浮かんだ。両者には共通する側面が見え、福島第一原子力発電所事故は放射線漏れにより、多くの住民が避難し、放射線の健康リスクや生活環境の変化を余儀なくされた。また、地域経済の基盤も大きな打撃を受け、これまで経済復興にも長期間を要してきた。ニューオリンズでの経験を通じて、日本の原発事故の復興状況を自分の目で確かめたいと思い、来月福島を訪れる予定だ。東日本大震災から13年半を迎える福島県で、「福島の人々の記憶を風化させない」ためにできることをじっくり考えたい。

上智大学総合人間科学部社会福祉学科 1年 野添 葉音



10 日目 (8 月 12 日)

本日は NO サイトの Free Day であった。各自が行きたいところに赴いた。以下の施設を訪れた参加者が多かったようである。

1. Mississippi River クルーズ
2. French Market / French Square / Café du Monde
3. Ogden Museum of Souther Art

＜参加者感想＞

8 月 12 日の Freeday は、ニューオーリンズで有名なミシシッピ川クルーズに乗った後、フレンチマーケットなどに行った。ミシシッピ川クルーズを選んだのは、ニューオーリンズで有名であったことと、あまり遠出できない中、クルーズであれば遠く離れたニューオーリンズの町並みを眺めることができると思ったからだ。朝 11 時 30 分出航の便に乗り、まずは船上でニューオーリンズ名物をいただいた。どれもとてもおいしくニューオーリンズ名物を一度に色々楽しめたので、良かった。ご飯を食べ終わった後は、外に出て心地よい風を感じながら、ニューオーリンズの町並みを眺めた。意外にも工場地帯が多く、少しがっかりしたが、それでも趣のあるニューオーリンズの住宅街を眺めることができ、ニューオーリンズの文化を十二分に感じる事ができた。また、船内では、ジャズの演奏がなされていた。前日の夜もジャズ演奏を聞いたが、それとはまた違う雰囲気のジャズ演奏であった。このクルーズを通して、ニューオーリンズの食文化、街並み、音楽文化、ミシシッピ川の雄大な自然を感じることができ、大満足であった。クルーズから下船した後は、フレンチクォータの色々なお店を回りながら、フレンチマーケットに行った。フレンチマーケットは全米最古の市場であり、昔は食料品が中心だったが、現在は装飾品などが多く販売されている。フレンチという名ではあるが、ワニの装飾品が販売されていたりと、ミシシッピ川周辺地域の文化を感じる事ができた。観光ばかりの Freeday とはなったが、様々な文化を肌で感じる事ができ、非常に有意義であった。

京都大学法学部 4 年 川西 晴太郎

8 月 12 日、ニューオーリンズでの自由時間はアメリカ南部独自の文化を五感で味わう貴重な機会となった。朝、蒸し暑さの中、カフェ・デュモンでチコリコーヒーとベニエを食べた。昼下がり、ナッチェス号に乗り込み、ジャズの生演奏を聞きながらミシシッピ川を横目にクレオール料理を味わった。下船後、フレンチクォーターやフレンチマーケットを練り歩き、帰途に着いた。体験するものすべてが新鮮に映り、またこの街を訪れたいと心から思った。

参加者の中には、第一サイトのロサンゼルスと第二サイトのニューオーリンズ、両都市の違いを感じた者が多くいた。ロサンゼルスでは、日本村やチャイナタウンのように多種多様な移民文化が各自のアイデンティティを保ちながら共存している。一方、ニューオーリンズではフランス、スペイン、アフリカ、カリブ海地域などの多様な文化が完全に混ざり合い、新たな文化を確立していた。ロサンゼルスにおける多文化共存とニューオーリンズにおける多文化融合、訪れた都市の比較を通じて魅力を更に深く理解することができたように思う。

慶應義塾大学法学部法律学科 4 年 藤木 果蓮

自由に計画を立てて過ごせる日。美術は人間の心のうちや文化的背景を理解する上で一番効果的であると考え私はアメリカ南部の美術品を収蔵するオグデン美術館へ足を運んだが、ミシシッピ川のクルーズ船に乗った人やニューオーリンズの沼地を舟航し、ワニを含むニューオーリンズの動植物を見た人など思い思いにニューオーリンズを満喫した。

フランスの文化を受け継ぎ、アフリカ系アメリカ人の影響を受けたニューオーリンズ。私の 1 日はニューオーリンズ名物のベニエを老舗のカフェデュモンで頂くところから始まった。ベニエとはフランス発祥の揚げドーナツにたっぷり粉砂糖を振りかけた伝統菓子で、甘さ控えめなカフェオレと相性がぴったりであった。その後、ニューオーリンズの中心地フレンチクォーターを散策し、古本屋さんに入った。読んだことのある本や読みたい本について語り合いなが

ら各々本を手にとった。フレンチクォーターを後にし、「欲望という名の電車」に登場する路面電車に乗り、レトロな内装の車内で木のベンチの上で揺られながらオグデン美術館へ向かった。アメリカ南部の美術を収蔵するオグデン美術館では南部の自然を描いた風景画からアフリカ系アメリカ人の抽象画等多彩な視点から南部の文化的な構成が表現されていた。

慶應義塾大学経済学部経済学科 3年 早川 さくら

8月12日、ニューオーリンズのフリーデイは特に印象的だった。前日の深夜、宿泊地の HI NewOrleans ホテルで過ごした時間が忘れられない。ホテルのロビーとダイニングホールが吹き抜けになっているスペースで、夜中12時に皆でJECの誕生日を祝い、バースデーソングを歌った。夜遅くにも関わらず、集まった人々の笑顔と温かい雰囲気が心に残っている。ロビーのスタッフも苦笑いしつつ、参加してくれたこの瞬間は一生の思い出だ。

その翌日も、眠気と戦いながらミーティングに参加し、日中はカフェ、Street Art、本屋を巡った。特に有名なCafe du Mondeで味わったベニエは、サクサクとした外側と柔らかな食感が絶妙で、まさに地元の味を楽しむことができた。その後、Acme Oyster Houseでは初めてオイスターショットに挑戦。少し変わった味だったが、刺激的で忘れられない体験となった。午後にはオグデン南美術館を訪れた。現地滞在中にさまざまな美術館や博物館を訪れた際に出会った多くの作品の中でも、特にその作品に引き込まれ、時間を忘れて見入ってしまった。夜は、予定していた早めの就寝を諦め、数人と長く対話を楽しんだ。JECやアメドリと深く深く話し、互いに考えを共有し合う中で、学生会議の脆さや運営の一貫性の大切さを実感した。対話を通じて深まった理解は、今後の活動にもつながる貴重な経験となった。

フリーデイを通じて、ニューオーリンズの街並みや文化に触れ、貴重な体験を得ることができた。アカデミックな議論に没頭する日々も意義深いのが、街に出て生きた文化と向き合い、その余韻を共有しながら仲間と自由な議論を繰り広げることができるのも、JASCの魅力の一つだと感じた。このような多面的な対話の機会が、より包括的な他者理解と新たな視点をもたらしてくれる。

創価大学理工学部情報システム工学科 4年 石上 諒



11日目 (8月13日) Reflection Forum

NOサイト最終日は、Reflection Forumを行った。このフォーラムでは、これまでの統括および次なるサイトでの目的を明確化することが意図されていた。

はじめに、グループディスカッションでは個々人の思う JASC や各サイトでの目的を内省し、それらをアメリカ側及び日本側の参加者間で共有した。JASC 内部における興味関心の多様性と価値観の交錯に感心しながら、Washington D.C. への準備を進めた。

次に、RT ごとの短時間発表では、各自の活動経過や Final Forum へ向けた議題の報告が行われた。

最後に、外部から 2 人のパネルを招き、アメリカ側及び日本側参加者それぞれを含め 4 人で行われたパネルディスカッションにおいては、「ニューオーリンズにおけるハリケーン被害からの復興」を議題として議論が繰り広げられた。台風や地震等の自然災害に悩まされる日本にも関連した問題であるため、皆が学びを得ることができ、実りあるものであった。

第 77 回日米学生会議 Reflection Forum 式次第

| | | | |
|---|------------------------|---|---------------|
| 1 | 開式の辞 | 第 76 回日米学生会議 米国側実行委員長 | Yuki Tanizaki |
| 2 | Mixed Group Discussion | | |
| 3 | RT Updates | | |
| 4 | Panel Discussion | (進行) 宮本 希 Susie Allen 様 Harrison Crabtree 様 (ジャパデリ) イビネディオン 嶺 (アメデリ) Emile Shah | |
| 5 | 閉式の辞 | 第 76 回日米学生会議 日本側実行委員長 | 小金山 智弘 |



<参加者感想>

ロサンゼルスは文化的に多元な社会ではないと考える。人種や経済格差、不平等なインフラ整備を基準線として文化が棲み分けられているだけであり、融合が見られないからである。しかし、ニューオーリンズにおける文化的様相は全く異なるものであった。つまり、歴史におけるフランスの影響やアフリカ文化とともに、社会を飲み込む黒人文化を感じた。州や都市ごとに異なる社会が構成されていることは、アメリカ一国における多様性と自由性を理解する契機をもたらしてくれた。

ハリケーンという巨大な災害は、ニューオーリンズ社会における政府間の権限不在や非効率といった脆弱性を明らかにした。アメリカはこれを受け止め、改善に注力している。特に、連邦政府が資金を拠出しながらも州政府に権限を集中させている点は連邦国家ならではの点といえる。また、コミュニティが復興における主体的な役割を果たしている点も、経済に関して自由主義的側面の強いアメリカがゆえであるのだろう。

専門家とともにこのような議論を重ねるパネルディスカッションは非常に緊張するものであったが、独自の知見を加えながらも議論の流れをまとめる力を養うことができたため、自己成長へと繋がる良い機会であった。

明治大学法学部法律学科 3 年 イビネディオン 嶺



NO サイトを振り返って

<参加者感想>

The five days spent in New Orleans provided a valuable opportunity to learn about the process through which a unique culture has been formed and developed through various historical events. In New Orleans, once a center of the Black slave trade, we experienced the jazz culture that was created by Black people who had endured social oppression. We also learned about the history of the slave trade at a museum, strolled through markets influenced by French culture, listened to discussions about the recovery process from the flood, and revisited the Pacific War from an American perspective at the National WWII Museum. These experiences offered us a precious chance to reflect on the history of a city in the central United States and to understand contemporary American society.

In a city where people with various backgrounds—such as white individuals who built wealth through plantation agriculture using Black slaves after the independence movement, and Black people who were freed from the life of slavery—came together to form a unique culture, I could see the actions and strong will for freedom of the oppressed citizens. On the other hand, considering that the proportion of Black prisoners in prisons remains high, and that there is a disparity in poverty rates between Black and white people, it is clear that issues related to race cannot be dismissed as matters of the past. I felt that these are issues that should also be considered in the context of how socially vulnerable people are treated in Japanese society.

The discussion I had with Amédée after viewing the Pacific War exhibit at the WWII Museum from the American government's perspective was also incredibly stimulating. The differences in historical interpretations between Japan and the U.S. that we learned from the exhibits, the current state and future of history education, and how past reflections can be applied to the two ongoing wars today—understanding the points of agreement and disagreement between individuals raised in two different countries, Japan and the U.S., was a significant achievement. This experience made me realize that, rather than blindly trusting only what I have learned so far, having an attitude of accepting perspectives from different standpoints can contribute to the fundamental resolution of conflicts between countries in the current international community.

Lastly, the lecture on the recovery from the floods in New Orleans was extremely valuable in considering how Japan, a country prone to natural disasters, should approach its own recovery. New Orleans was struck by Hurricane Katrina in 2005, with 80% of the city submerged. Over

the approximately 20 years since then, a recovery plan focused on building a disaster-resistant city has been implemented. Despite facing several obstacles, such as a significant population decline and delayed recovery, I was deeply impressed by how the unique culture that has been nurtured up to this point continues to be preserved.

The experiences in New Orleans, where a unique culture has been formed through various historical events, made me keenly aware of the diversity of America. I would like to express my heartfelt gratitude to the JASC EC for providing us with the opportunity to experience and reflect on these matters on-site.

早稲田大学政治経済学部国際政治経済学科 4年 坂東 璃加

<実行委員感想>

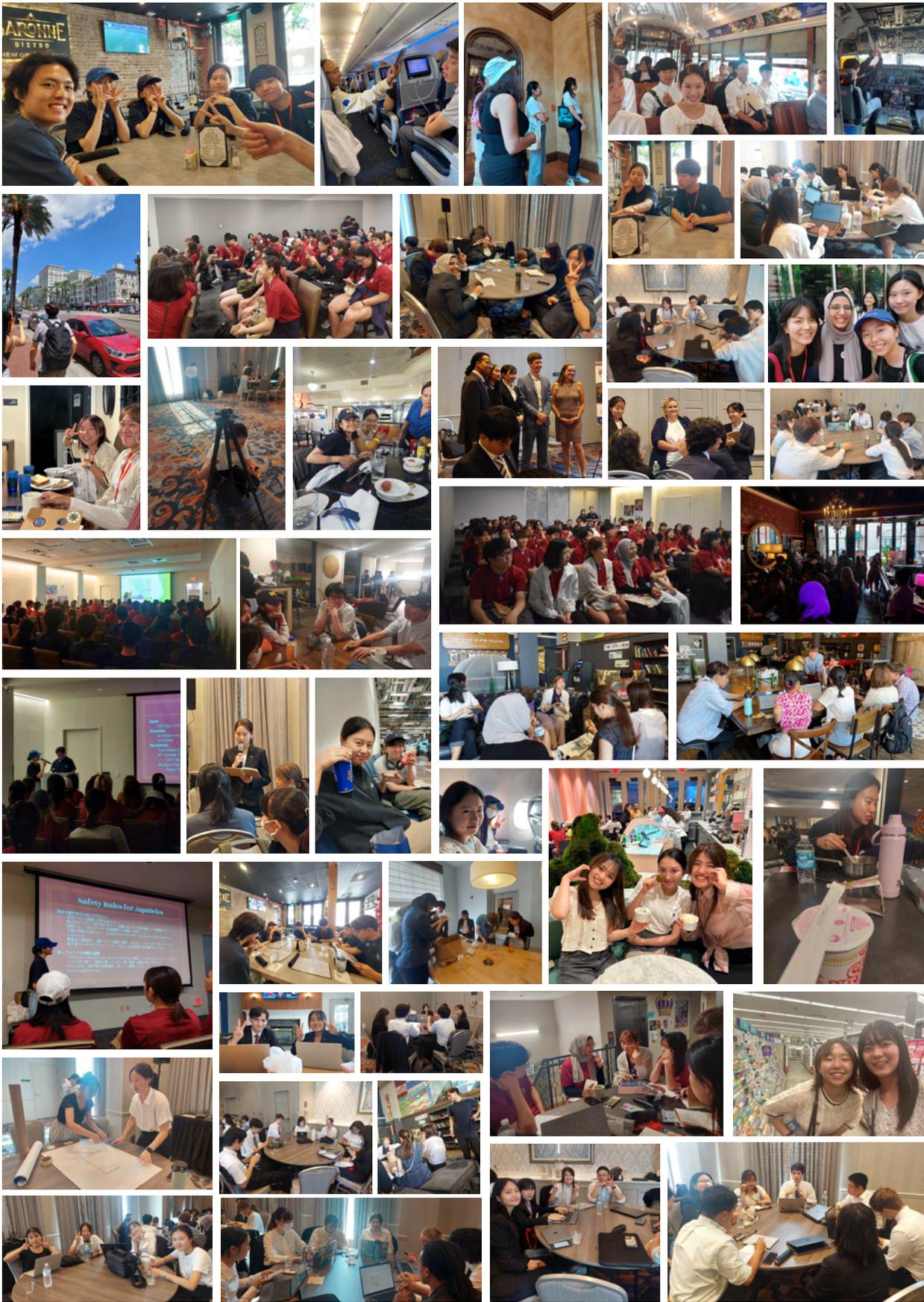
参加者から多く寄せられたのは、ロサンゼルスとは一変した街並み、そしてフランスとクレオール文化が息づく New Orleans の独特な魅力についてである。街には芸術作品があふれ、絶え間なく音楽が流れるこの街では、芸術と文化を存分に堪能することができた。文化のみならず、方言や建築、料理などのあらゆる面において特色があり、街を歩くだけでも New Orleans の魅力を大いに感じることもできた。また、1年前までは名前すら知らなかった場所が、今では一度訪れただけでまるでホームのような温かさを感じさせてくれた。しかし、同時に3つのサイトの中で最も治安が悪く、気温も高いという一面もあった。それでも、参加者全員の体調管理と安全対策に気を配り、全員が無事に次のサイトへと移動できたことに、心から安堵している。

New Orleans での滞在は、移動日を除けばわずか4日間と他のサイトに比べて短いものであったが、その時間は大変充実した、有意義なものとなった。私は、New Orleans 担当であったが、実質的な運営を担っていたのは、米国側実行委員の Yuki、Will、そして日本側として共に担当したのんちゃんだ。公共交通機関が予定通りに来ない、プログラムが急遽キャンセルされるといった予期せぬトラブルがあったにも関わらず、サイト運営が円滑に進んだのは、彼らの MTG 段階からの緻密なスケジュール管理と臨機応変な対応があったからだ。3人の柔軟な対応力、実行力、人柄を心から尊敬している。1年間、本当にありがとう。

最後に、サイト運営にご協力いただいたすべての方々に、心より感謝申し上げます。

岡山大学工学部環境・社会基盤系 2年 志田 夏音





第3サイト：Washington D.C.

日程 2024年8月14日～24日

滞在場所 Generator Washington D.C.¹⁰

行程 計10日間

- 8月14日：移動日
- 8月15日：Smithsonian 博物館、Washington 公園ピクニック、創立90周年式典
- 8月16日：IMF 本部、模擬国連 (@ KEI)、RT 議論
- 8月17日：FT、ピザパーティー、RT 議論
- 8月18日：Georgetown 大学見学、RT 議論
- 8月19日：Final Forum 準備 (RT 議論)、キャリア講義 (@ ISC)
- 8月20日：Final Forum 準備 (RT 議論)
- 8月21日：Final Forum、Free Time
- 8月22日：77EC 選挙、カラオケパーティー
- 8月23日：Free Day
- 8月24日：移動日

12日目 (8月14日) 移動日

本日は移動日である。New Orleans 国際空港から、世界最大のハブ空港・Hartsfield-Jackson Atlanta 国際空港で乗り継ぎ、Ronald Reagan Washington 国際空港に到着した。

Washington D.C は、New Orleans とは打って変わって涼しい気候であった。また、首都だけあって、西洋風の壮麗な建物が整然と並び、道路も綺麗で、歴史を感じる街であった New Orleans とは全く異なる雰囲気を感じ出していた。

<参加者感想>

次のサイトであるワシントン DC に向けて、早朝にニューオリンズを出発した。日本側参加者・アメリカ側参加者はそれぞれ別のフライトスケジュールであったため、久しぶりに日本側参加者だけで過ごす時間となった。空港では参加者が最後にお土産や昼食を買い求め、充実したニューオリンズでの日々を思いを馳せながら飛行機に乗った。アトランタでの乗り継ぎを経て到着したワシントン DC では、蒸し暑かった NO とは異なるからとした気候が参加者たちを喜ばせた。バスの外に広がる街並みに目を向けると、モニュメントやホワイトハウスなど象徴的な建物の数々が目に飛び込んできて、ワシントン DC に来たことへの実感が湧いた。今日から始まる DC での日々に対する期待が高まった一方で、全日程の半分が終わってしまったこともまた現実味を持って感じられ、JASC で過ごすことのできる時間の短さに身が引き締まる思いがした。ホテル到着後は夕食をとり、DC の街を散策した。その治安の良さや食事の種類の豊富さ、街の雰囲気など、LA や NO と比較しながら DC に対する印象を共有し合うことのできる時間となった。

早稲田大学政治経済学部政治学科4年 佐藤 知穂

13日目 (8月15日) Smithsonian 博物館、Washington 公園、創立90周年式典

DC サイト2日目は、Smithsonian 博物館のうち、希望に応じて、国立自然史博物館・国立アメリカ史博物館・国立美術館を見学した¹¹。博物館を見学した後は、Washington 公園の木陰で、ピクニック形式でランチボックスを食した。

¹⁰住所：1900 Connecticut Ave NW, Washington, DC 20009

¹¹元々候補としていた国立航空宇宙博物館は入場不可であった。また、国立美術館の運営はスミソニアン協会に拠っていないため、正確には Smithsonian 博物館に含まれない。

午後は、2024年で創立90周年を迎える日米学生会議の、創立90周年式典を行った。豪華な和食とソフトドリンク・アルコールを楽しみながら、来賓・アラムナイの方々との交流を行った。なお、式典に際し、上川陽子外務大臣からのビデオメッセージを拝受したが、当該メッセージは外務省の公式サイトにおいて公開されている¹²。



第77回日米学生会議 創立90周年式典 式次第

| | | | |
|---|-----------|---|--------------------------------------|
| 1 | 歓迎の挨拶 | International Student Conferences, Inc. Chairman, Board of Directors | Kurt Tong 様 |
| 2 | 日本側主催挨拶 | 国際教育振興会代表 日米学生会議事務局長 | 金野 洋 様 |
| 3 | 記念挨拶（代読） | 米国国務省 国務長官 代読：米国国務省 副次官補 | Antony Blinken 様 Robert Koepcke 様 |
| 4 | 記念挨拶（ビデオ） | 日本国外務省 外務大臣 | 上川 陽子 様 |
| 5 | 記念挨拶 | 在米日本国大使館 特命全権公使 | 相 航一 様 |
| 6 | 記念挨拶 | JASC22・23 アラムナイ | Glen S. Fukushima 様 |
| 7 | 閉式の辞 | JASC 同窓会 会長 | 岡本 実 様 |
| 8 | 乾杯の挨拶 | 日本側実行委員長 米国側実行委員長 | 小金山 智弘 Yuki Tanizaki |



¹²日米学生会議創設90周年記念式典における上川外務大臣のビデオ・メッセージ発出：https://www.mofa.go.jp/mofaj/p-pd/ep/pageit_000001_00997.html

<参加者感想>

午前中は国立自然史博物館に行った。入口を抜けると大きなアフリカゾウが我々を出迎え、哺乳類のホール、オーシャンホール、アフリカ文化のホールなどにつながっていた。興味深かったのは恐竜の化石の展示だ。ティラノサウルスにも人間の肺胞に相当する空間が首の骨に存在することを初めて知った。人間と恐竜の起源は異なるけれど、構造に共通点が見つかり面白かった。その後博物館近くの公園でピクニックをした。国会議事堂とワシントン記念塔を眺めることのできるロケーションで、気持ち良い午後を過ごすことができた。夜は JASC の 90 周年式典に参加した。大学で私と同じ学部を専攻し現在アメリカの大学院で学んでいる方とお話しし、キャリアを考える機会を得たり、外務省からアメリカの大使館に向向している方から英語の勉強法を伺ったりした。アメリカの滞在で 2 週間が過ぎ恋しくなっていた日本食を食べながら、様々なフィールドで活躍されるアラムライの方々と交流できる空間は、JASC に参加したからできる経験だと思った。これまで出会うことのなかった人と人がつながる体験こそ JASC の持つ価値なのだと感じた。

信州大学医学部医学科 2 年 舛尾 花菜



14 日目 (8 月 16 日) IMF 本部、模擬国連 (@ KEI)、RT 議論

午前中は、国際通貨基金 (IMF) 本部を訪れ、世界経済における IMF の役割や、現下の不確実性の高い世界経済の見方についての講義を受けた。その後、韓米経済研究所 (KEI) を訪問し、2003 年 8 月から 2007 年 3 月に行われた、北朝鮮の非核化に関する六者会合¹³を題材とした模擬国連を実施し、利害が相反する多国間での合意形成の難しさをロールプレイング形式で学習した。



¹³六者とは、日本・アメリカ・中国・ロシア・韓国・北朝鮮の 6 カ国を指す。関係国外交当局の局長級の担当者が直接協議を行う会議であった。議長は一貫して中国であり、第 1 回から第 3 回の中国側の代表は、当時外交副部長であった王毅氏であった (現在、共産党中央外事工作委员会办公室主任・外交部長を務め、中国の外交トップである。) 第 1 回から第 3 回までの日本側の代表は、藪中三十二氏、第 4 回から第 6 回までの日本側の代表は佐々江賢一郎氏であった (両者ともに当時外務省アジア大洋州局長)。

＜参加者感想＞

8月16日、IMF（国際通貨基金）の訪問と KEI（Korea Economic Institute of America）でのシミュレーションが行われた。この日は多くの学びと笑いが詰まった一日だった。

個人的に特に IMF 訪問に期待感が高まっていた理由は、IMF が大学の先輩のオフィスだったからだ。先輩が働く国際的な舞台に足を踏み入れ、自分も将来このような場で貢献したいという強い思いを抱いた。

IMF における各国の投票権を表したスライドでは、アメリカが 16.5 % と圧倒的な影響力を持ち、日本も 6.14 % と大きな役割を果たしていることがわかった。また、IMF に対して「IMF はすべての支援プログラムにおいて、問題定義からフィードバックまでのプロセスを完全に適用しているのか？途中でプログラムを中止することがある場合、その影響はどのように対応されるのか？」という質問を私したところ、担当者は定期的に監査を行い、修正のための予算も確保されていることを教えて下さった。また自分の質問が議論に貢献できたことに、達成感を感じることができた。

午後には KEI が主催するシミュレーションに参加した。テーマは「朝鮮半島の非核化と平和構築」であり、私は韓国代表として討議に臨んだ。シミュレーションでは、北朝鮮の核問題、人道的安全保障、平和協定の実施、財政支援の 4 つの主要議題が取り上げられ、各国の代表者がそれぞれの立場から解決策を模索した。印象深い出来事として、北朝鮮代表の学生が「Kim Jong Un's gonna bomb you!」などの発言をしたとき、会場は笑いに包まれた。こうした発言は、真剣な議論の中にもユーモアを感じさせるもので、関係者間の距離を縮める効果が確かにあった。どこか英国の国会内の人間味を彷彿とさせるものがあり、非常に興味深かった。隣接国である韓国としては、非核化が平和への重要なステップであり、段階的なアプローチで核開発を停止させることが最優先であると主張した。交渉の中では、北朝鮮のプルトニウムと高濃縮ウランの廃棄が最も重要な課題とされ、これに対する各国の協力が求められた。最終的に、各国は段階的な非核化プロセスに合意し、韓国としても一定の成果を得ることができた。

今回の経験を通じて、私の将来の展望がさらに鮮明になった。国際連合傘下で専門職員として働くことを目標の一つとしており、そのための大学院進学を視野に入れている。国際機関での仕事の解像度が一層高まり、進むべき方向がより明確になった。これらの経験は、私のキャリア形成において非常に重要な意味を持つものであった。

創価大学理工学部情報システム工学科 4 年 石上 諒



15 日目（8月17日） FT、ピザパーティー、RT 議論

DC サイト 3 日目は、RT ごとの FT Day であった。RT ごとにさまざまな施設を訪れた。また、夜にはホテル併設のプール横で、ピザパーティーを行い、RT 混合でリフレクションも行った。

JK 米国国務省¹⁴

東アジアにおける日米関係分科会は、国立アメリカ外交博物館を訪問し、シミュレーションを行った。太平洋における乱獲問題をテーマに国連・アメリカ外務省・NGO等5つのチームに分かれ議論を行い、合意形成を図った。シミュレーション終了後は博物館見学を行った。

ソウル大学政治外交学部1年 篠原 花繪

WE Johns Hopkins University

Johns Hopkins Universityにおいて、「Environmental Justice」について講義を受けた。アメリカでは、国内における人種間格差や経済格差という焦点から環境正義が捉えられており興味深かった。「白人が空気を汚し、黒人やヒスパニックがそれを吸う」。つまり、環境汚染の副作用を伴う財を多分に消費するのは白人であり、発電所近辺の低所得地域に住みながら工場勤務しているのは黒人やヒスパニックであるということを示唆しており、まさにアメリカにおける富の偏在と不正義を如実に示しているのである。しかし日本では、正義は果たされているだろうか？

明治大学法学部法律学科3年 イビネディオン 嶺

3EP Johns Hopkins University、William F. Martin 元米国エネルギー副長官訪問¹⁵

今回、マーティン氏にはトランプ政権2.0が描くエネルギー・環境政策や市場、米国大統領選挙と政治全般におけるエネルギー基本計画について講演いただいた。加えて、イスラエル・パレスチナ問題、環境問題、エネルギー安全保障といったデリが早急な解決が必要だと感じている重要テーマについても、意見を交わし、オープンなディスカッションが行われた。

ディスカッションの中でマーティン氏が特に強調したのは、次の2点であった。①米国にとって最も重要なパートナーは日本であること、②敵対国との協議に臨む前に、まずは同盟国との対話を優先するべきであること。

さらに、マーティン氏は「Dany's Robin Hood Farm」の経営者でもあり、地熱エネルギーを活用した持続可能な農業を実践している。この農場では、環境やエネルギーに関する取り組みを積極的に推進しており、再生可能エネルギーの導入による持続可能な未来の実現に向けたモデルケースとして注目されている。

早稲田大学先進理工学部生命医科学科2年 石賀 悠

CAT ARTECHOUSE

CATは、近代的なテクノロジーとアートが融合された展示が行われるARTECHOUSEを訪れた。展示名は「ISEKAI: BLOOMING PARALLEL WORLDS」という日本が関連した展示であった。そこでは、日本がD.C.へ寄贈した桜をモチーフにした空間や、モーションセンサーによって鑑賞者の動きが反映される作品などがあり、アメリカから見た日本が表現されていて興味深かった。

東京学芸大学教職大学院国際理解・外国人児童生徒教育SP2年 高橋 美咲

SOY D.C. Central Kitchen

分科会FTとしてホームレスを食から解決するNPOを訪れた。自分がアメリカで目の当たりにしてきたホームレス問題に対する実効的な支援は非常に興味深かったと共に、政治との関係性や非営利団体だから出来ること、すなわち社会起業家の限界に直面し、全ての社会問題をビジネスで解決することは非常に難しいという現実と直面した。

国際教養大学国際教養学部2年 大矢 玲菜

XL/SoHu Holocaust 博物館

RT別のフィールドトリップでは、preservation hallにてジャズの生演奏を聴く機会に

¹⁴本FTのみ、8月20日に実施

¹⁵氏は、レーガン政権下で国家安全保障会議事務局長およびエネルギー省副長官を務め、ブッシュ政権およびオバマ政権下ではエネルギー省原子力諮問委員会の委員長を歴任。その後同委員会の国際委員会の座長を務められた。

恵まれた。ジャズの聖地であるニューオリンズで綿々と受け継がれてきた伝統ある曲の数々で演奏は構成され、新鮮でありながらどこか懐かしさが残るハーモニーが深く心に響いた。同時に、様々な楽器・カルチャー・歴史が溶けあって確立されたジャズという表現の魅力を感じたことで、その後の RT 議論は白熱したものとなった。

早稲田大学政治経済学部政治学科 4 年 佐藤 知穂

SoHu (アンケート調査)

社会運動と人間心理の分科会では、本会議中 FT を行わない代わりに JASC76 の参加者全員に社会運動に対する意識調査を実施した。フォーム回答型のアンケートと対面でのインタビューの双方を行うことで調査結果の具体性を担保しつつ、客観的に分析することを意識した。日米間での社会運動への意識の違い、社会全体と比較した JASCer の特徴等、日米の学生が一同に会する本会議ならではの調査を行うことができたと感じている。

早稲田大学政治経済学部国際政治経済学科 4 年 坂東 璃加



<参加者感想>

2時間の RT 議論を経て私たちはアメリカ合衆国ホロコースト記念博物館へ向かった。建物に入って目に飛び込んだのは私はホロコーストの生存者ですと書かれた標識とその下に座る白髪の方の姿だった。エレベーターに乗ると今から時間が巻き戻り、ナチスドイツの台頭が始まった 1933 年に戻ると説明を受けた。暗く緊張した雰囲気の中で始まるナチスドイツがどのようにして力をつけ、反対勢力を潰し、言論を統制し、反ユダヤ主義的で優生主義的な政策を推し進めたのかについての説明。ナチスによって焼き払われた書籍の山。アメリカの新聞でのドイツでのユダヤ人への差別的な施策や残虐行為についての初期の新聞記事。強制収容所で刈り取られた髪の毛の束。徐々に激化する迫害の様子が克明に記録された写真や証言が続き、その過程で命を奪われた数多くの無実の人々の名前が記された壁があった。アウシュビッツなどの強制収容所の模型や映像が映し出され、私たちは人類がいかにして人間性を失い、極限の残虐行為に走ったのかに向き合わされた。ホロコーストは歴史的に比類のない虐殺であり、歴史の重さと責任を感じた。しかし、その教訓は過去の出来事にとどまるものではなく、現代社会にも深く関わっている。差別や憎悪、偏見がどのようにして社会を蝕み、そしてそれに対して行動しないことがどれほど危険いかを、私はこの展示を通じて痛感した。

慶應義塾大学経済学部経済学科 3 年 早川 さくら

環境経済とエネルギー安全保障分科会 (3EP) は FT を行い、① Johns Hopkins University への訪問、② William Flynn Martin 様への訪問を行った。以下、それぞれについて述べる。

① Johns Hopkins University への訪問

午前中は Johns Hopkins University を訪問し、environmental justice に関する講義をいただいた。講義では、環境正義とは何かという内容に加えて、パブリックヘルスの観点から気候変動が脆弱なコミュニティに与える影響をデータを通して学習した。講義の最後には、各地の先住民が直面する課題（砂漠化による居住地の消失など）について、提示されたいくつかの先住民の視点に分かれた上でディスカッションを行った。それぞれが抱える課題について共通点や取り組みの優先順位を話し合う中で、気候変動が引き起こす問題に公正な形で解決策を与えるのは相当に困難であることを改めて実感した。

② William Flynn Martin 様への訪問

午後は、米国エネルギー省副長官や国家安全保障担当特別補佐官を歴任された William Flynn Martin 様のご自宅を訪問し、エネルギー問題や経済安全保障といった広範な話題についてディスカッション形式でお話をいただいた。外交戦略に関する話では、「いかに早く同盟国に会うかが重要である」という旨のお話をされていたのが印象的であった。オーソドックスなことではあるが、国家間交渉の第一線で活躍されている方の言葉は非常に現実的かつ重く感じた。また、日本が国際社会で果たしてきた役割の大きさや米国にとって最も重要な同盟国は日本であるということも強調されており、個人的には意外であった。日本経済の低迷や国際社会における地位の低下は以前から叫ばれ続けていることであり、それでもなお日本がこれほどまでに米国から重要視されていることは純粋に嬉しかった。一方、同時に日本は果たしてそれに応えられているのか、どのような立場をとっていくべきなのかを示唆されたように感じた。

北海道大学経済学部経営学科3年 多田野 真仁

社会起業家分科会にとって、本会議が始まる前から待ち望んでいた「D.C. Central Kitchen」の訪問は、期待を大きく超える貴重な現場学習となった。「D.C. Central Kitchen」は非営利組織であり、路上生活を強いられていたり、一度は刑務所に入った人々が社会に再適応できるよう、料理の技術を学び収入を得られるよう支援している。訪問では、事業の開始当初の経緯や、スケールアップの過程での官民連携の重要性について従業員から直接話を聞くことができた。非営利団体ならではの強みを感じる一方で、事業の持続可能性において政府の補助金に依存することによる脆弱性も見受けられると感じた。

フィールドトリップで得た学びを経て、午後は分科会の仲間と共にワシントン D.C. の博物館や街を散策し、リンカーンの暗殺現場としても知られるフォード劇場を訪れるなど、観光を満喫した。夜はピザを楽しんだ後、ホステルのプールで友達と水遊びをする時間が、とても楽しい思い出となった。本会議の終わりが近づくにつれて、JASCer 同士の友情が深まるとともに、なぜこの会議に参加したのかという原点を再確認する瞬間があった。残りわずかな時間をどのように過ごすかについて、思いを巡らせる1日だった。

芸術文化観光専門職大学芸術文化観光学部4年 北原 真悠

16 日目 (8 月 18 日) Georgetown 大学見学、RT 議論

DC サイト 4 日目は、Georgetown 大学を訪れ、図書館で RT 議論を行った後、大学構内を見学した。途中、大学関係者所有の、Tesla 社のピックアップトラックを発見して皆が注目する場面もあった。昼食として大学の学食を体験し、また大学のグッズショップにも足を運んだ。その後の校内ツアーでは、74・75 回アラムナイの Helen Cecile Nowatka 様にガイドをしていただいた。

ツアー後は、Free Time として、観光客も多い Georgetown を散策した。ホテルへ帰った後は、迫る Final Forum に向け、RT 議論を行った。



＜参加者感想＞

8月18日、ジョージタウン大学を訪れた。当初予定されていた講義は諸事情により中止となったが、現役学生の案内によるキャンパスツアーと食堂でのランチを楽しむことができた。私は別のプログラムで当大学を訪れたことがあり、今回は2年ぶりの再訪となった。ゴシック調の趣あるレンガ造りの建物と緑が映える美しいキャンパスは当時と変わらず懐かしさを覚えた。一方メディカルセンターの新設や正門の改築といった変化も見られ、大学の進化を実感した。ツアー後はジョージタウンの街を各自自由に散策した。歴史的なタウンハウスが並ぶ街並みを歩き、モダンなアパレルショップや洗練されたカフェに立ち寄った。歴史と現代が調和するジョージタウンの魅力を再発見する日になった。

慶應義塾大学法学部法律学科4年 藤木 果蓮



17日目（8月19日） Final Forum 準備（RT 議論）、キャリア講義（@ISC）

Final Forum に向け、RT ごとに議論を進めた。夕方は、ISC のオフィスに移動し、キャリア講義を受けた。

＜参加者感想＞

今日は一日ファイナルフォーラムの準備に明け暮れた。もう少しで日米学生会議が終わってしまうという寂しさとファイナルフォーラムまでの準備がまだ十分でない焦りと少しずつ着実に溜まっている疲労により記憶はほとんどない。ただひたすら議論し、意見を交わしながらスライド作成に明け暮れ、気づけば夜中になっていた。分科会内では議論後ジャパデリで反省会を行うことが多かった。「思うように英語で伝えられない」「なかなか前に進まない」と反省しながら直面したくない現実と向き合う時間だった。この日はふと、私たちがなぜ JASCer になれたのか、どのような価値を与えられるのか、という話になった。この日に話すことではないと思いながらも、改めてこの会議を俯瞰する良い機会になった。

京都大学医学部人間健康科学科3年 谷川 陽音



18日目（8月20日） Final Forum 準備（RT 議論）

Final Forum に向け、RT ごとに議論を進めた。また、リハーサルとして発表を行い、RT 混合リフレクションにおいて、相互にフィードバックを行った。

<参加者感想>

翌日のファイナルフォーラムに向けたリハーサルを実施した後、東アジアにおける日米関係分科会は、国務省を訪問し海洋政策に関するシュミレーションゲームを行った。小さな島国の排他的経済水域における乱獲を主題として、アメリカや国連など様々なアクターが問題解決に向けて交渉を行うというもの。各アクターの利益が対立する中でどう妥協点を探すかが問われたが、資金力を背景に強硬な立場をとるアメリカと、アメリカの言いなりにはなりたくない小国との対立は現実世界そのもので、非常に勉強になった。日本というアクターは存在しなかったが、個人的には日本ならどう振る舞いはするだろうかという視点は常に意識しながらシュミレーションに参加した。「アメリカらしい振る舞い」とは一線を画し、小国に寄り添うという姿勢こそがわが国の経済外交における基本姿勢だと理解していたが、その不可欠性を痛感し、またその重要性を日本国民に広く理解してもらいたいと感じた。

国務省訪問後は、RT メンバーでアーリントン墓地を見学した。想像以上に広大な敷地に辺り一面の墓碑。国策に殉じた先祖を国家をあげて供養することの重要性と、それがわが国で十分に出来ていない不甲斐なさを同時に感じた。JASC77 では、靖國神社を訪問し、先祖に哀悼の誠を捧げるとともに世界平和を祈りたい。

学習院大学法学部政治学科3年 赤瀬 朋基



19日目（8月21日） Final Forum、Free Time

遂に Final Forum の実施日である。いくつかのトラブルはあったものの、大きな支障なく、各 RT が今までの議論の成果を発表した。ハイブリッド形式で一般公開を行い、多くの方々にご覧いただいた。

第 77 回日米学生会議 Final Forum 式次第¹⁶

| | | | |
|---|---------|---|----------------------------|
| 1 | 開式の辞 | 第 76 回日米学生会議 米国側実行委員長 | Yuki Tanizaki |
| 2 | 基調講演 | CSIS アジアプログラム シニアフェロー | Erin Murphy 様 |
| 3 | 発表・質疑応答 | 技術革新に伴う文化・芸術の変容 社会運動と人間心理 福祉と倫理 東アジアにおける日米関係 環境経済とエネルギー安全保障 社会起業家 表現と規制 | |
| 4 | デリ代表挨拶 | ジャパデリ代表 アメデリ代表 | 赤堀 結 (SoHu) Amy Wu (XL) |
| 5 | 閉式の辞 | 第 76 回日米学生会議 日本側実行委員長 | 小金山 智弘 |



<参加者感想>

ついにこの日が来た。日米学生会議のメインであり約3週間積み重ねてきた「会議」の部分が今日終わってしまうという不思議な感慨を胸に、私はファイナルフォーラム会場へ向かった。各分科会の発表前にはISCのBahia氏、IECの金野さんからそれぞれ激励を戴いたほか、ゲストスピーカーとしてMurphy氏からお話を頂戴した。その後、各分科会による発表が行われた。いずれの発表も平坦な道のりではなかった3週間の努力が見て取れる素晴らしいものであり、客席との間では活発な質疑が交わされた。そして最後は、第76回日米学生会議のテーマである「回視」に触れ、90年の歴史に立ち返った「表現と規制」分科会の発表によりフォーラムの幕が下りた。フォーラム終了後は、ジャパデリもアメデリも垣根なく互いを労いあい、祭の後のような雰囲気であった。私自身も、終わってしまったという一抹の寂しさを感じながら、その場にいたデリたちと写真を何枚も撮った。将来これらの写真を見てJASC76を懐かしく思い出すときが必ず来ると確信する。改めて、ここまでの3週間の議論は容易なものではなかった。私たちの分科会はデリに対してインタビューを行ったが、そこから得られた情報をどのように料理するかで揉め、発表直前の数日間は重い空気が流れていた。正直、議論の時間が来るのが億劫なこともあったが、重い空気の中でも恐れずに英語で発言し議論を進めていくという経験は他では得難いものだった。これを通じて、自分も議論に貢献できるという自信が少し芽生えた一方で至らない部分もはっきり分かった。それは有り体に言えば英語力である。英語試験の点数が少し良かろうが、今の自分の英語力は自分の考えを過不足なく伝えるには到底足りないことを痛感した。今後はそのレベルの英語力を獲得すべく精進していきたい。そのようなことを

¹⁶各 RT の発表内容については、第六章 分科会の項目を参照されたし。

思いながらファイナルフォーラムを終えた。

東京大学大学院公共政策学教育部公共政策学専攻 2年 翠川 溪



20 日目（8 月 22 日） 77EC 選挙、カラオケパーティー

Final Forum から一夜明け、第 77 回の実行委員選挙を行った。当日中に、スピーチ・質疑応答を行った後に投票し、集計の結果、日本側・アメリカ側各 8 名の第 77 回日米学生会議実行委員を選出した。

その後、レンタルスペースに移動し、余興としてカラオケ・ピザパーティーを楽しんだ。パーティーが始まる前に、各デリに、その担当 EC から jASC 参加の Certificate が手渡された。

<参加者感想>

この日は先ず、第 77 回日米学生会議を背負う実行委員を決める選挙が行われた。各候補者は 2 分間のスピーチと質疑応答をし、その後投票が行われた。8 名の枠を争い 14 名が立候補し、とても活気のある選挙となった。

これは全くもって私個人の印象なのだが、理想論や一般論を述べるのに時間を割かず、現実的に何をやりたいか、どこを訪問したいかなどの具体的な情報を述べた立候補者群が支持を得て、当選したように感じられた。

選挙の後はセレモニーが行われ、Final Forum を乗り切った Delegates 一人一人に分科会の EC から証書が手渡された。Final Forum、選挙と重苦しいイベントの後の反動かは分からないが、皆晴々とした表情で来たる終わりを嘯み締めていた。

セレモニーの後はカラオケ大会が行われた。全ての American Delegates が日本語を聞き取れるわけではないので、英語の曲を歌うのだとばかり思っていたのだが、トップバッターの社会起業家のメンバーがアナと雪の女王の劇中歌「とびら開けて」を歌い出した。そこからは両国の様々な歌が飛び交い、最後には GREEN の「キセキ」という曲をバックに肩をくみ出した。戦後の日米関係、90年に及ぶ日米学生会議の存続、偶々応募したことがきっかけでワシントン DC に集まった第76回の日米関係、それら全ての奇跡と軌跡を象徴するのに相応しいラストソングだったと思う。

東京大学教養学部理科一類2年 下小野田 崇仁

JASC77に向けた EC 選挙が開催された1日であった。会場は Martin Luther King Jr. Memorial Library という公立図書館であった。日本で生まれ育った私にとって、公立図書館といえば書籍の貸し借りをするための施設というイメージが強い。しかし、本図書館はそれに留まらず公民権運動に関する数々の展示や、子どもが遊べる滑り台、貸し会議室やホール、カフェなどがある充実した施設であった。

選挙は、アメリカ側、日本側で別れて行われた。選挙を通して強く感じたことは2つあった。1つ目は、JASC や候補者への関心が強いとこんなにも投票先を真剣に悩みたくなるということである。私は成人しているため、既に何度か投票を経験してきた。いずれも真剣に投票をしてきたつもりである。しかし正直なところ、今回の EC 選挙は過去最も真剣に悩んだ選挙の中の1つとなったかもしれない。もちろん、EC 選挙と一般的な選挙ではあらゆる条件も異なるため単純比較はできない。ただこの経験から、教員志望の私にとっては、子どもたちが社会に関心を持てるように留意して指導をすることが、私のできる社会貢献のひとつであるかもしれないとも考えられるようになった。

2つ目は、この3週間、尊敬できる素敵なメンバーに囲まれながら学べたのだなということである。立候補者や真剣に話を聞いて質問をするメンバーを見ながらそのように感じた。特に立候補者においては、仲間に心のうちから考えを表現し、評価され、投票されるということがどれほど緊張し、怖いものであったのだろうか。選挙に立候補し、真正面から演説をし、EC に挑んだ皆を心から尊敬する。

その後は移動をし、修了証の授与や表彰の後、カラオケとなった。音楽は世界を繋ぐということが目に見えてわかるような、そんな楽しい会となった。

東京学芸大学教職大学院国際理解・外国人児童生徒教育 SP2 年 高橋 美咲



21 日目 (8 月 23 日) Free Day

本日は、DC サイトの Free Day であった。各自が自由に行きたい所に赴いた。

なお、第76回・第77回の実行委員会は、午前中に引き継ぎのミーティングを行うとともに、第77回実行委員会の写真撮影も行った。

<参加者感想>

次年度の EC 選挙も前日で終わり、いよいよ DC サイトでの最終日となった9日目はフリーデーとして思い思いに米国の首都であるワシントン DC の街を楽しみ尽くした。私は主に国会

議事堂とアフリカ系アメリカ人歴史文化博物館の2箇所を中心に回った。国会議事堂では、実際に上院の議場に入り、議論こそ行われていなかったものの民主主義の本場の雰囲気を感じた。興味を引いたのは議場の中心に書かれた”In God we trust”という言葉である。一緒に回っていたアメリカの友人とGodが何を表すのか議論になった。国家の中心にGodと書き込むのは宗教分離に反するのではないかと、Godは暗黙のうちにキリスト教の神を示しておりアメリカの本質である多様性が尊重されていないのではないかと、小さなことも鵜呑みにせず疑い議論する姿勢を見習っていきたくと思った。その後のアフリカ系アメリカ人歴史文化博物館は、いわゆる黒人の歴史にのみ焦点を当てた巨大な博物館であった。数ある展示の中で、直前に訪れた国会議事堂などワシントンDCを象徴する建物の多くが、黒人奴隷の労働によって建てられたという趣旨の展示が、アメリカの光と影を象徴しており歴史の皮肉を感じた。ワシントンDCを隅々まで味わい尽くすことができJASCの最終日にふさわしい一日となった。

東京大学法学部第3類政治コース4年 渡邊 蒼生

ワシントンD.C.のフリーデーは、他のデリと共に国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館を訪れた。当博物館は2016年にオープンした新しい博物館である。地下フロアには、奴隷制度や人種差別、公民権運動についての展示があり、人種隔離政策時の標識などの展示物や、アイダ・B・ウェルズをはじめとした各時代の人物の説明パネルが並べられていた。地上階の展示はより文化的な側面に焦点を当てたものとなっており、スポーツや音楽・舞踊などの芸術分野におけるアフリカ系アメリカ人の歴史が紹介されていた。その中には、表現と規制分科会の事前勉強会で扱った minstrel show についての説明もあり、ジム・クロウ法の「ジム・クロウ」が、ショーの中のキャラクター名に由来することなどが説明されていた。文化と政治の切っても切り離せない関係が随所に見られる展示だった。当博物館はスミソニアン博物館群の中でも特に訪れたいと思っていた博物館の一つであったため、非常に価値のある学びの機会となった。博物館を見学した後は、連邦議会議事堂を訪れた。議事堂というと、2021年に起こった襲撃事件の映像が記憶に新しかったが、実際には正面に芝生の広がる穏やかな空間であり、当時ニュースで目にした光景の異様さを感じられた。夕日に照らされた芝生と池、そしてその先に見えるワシントンモニュメントの風景に心が安らぎ、怒濤のような本会議の日々を思い返ししながら、その景色を皆でしばらく眺めていた。夕食は議事堂近くのバーベキューレストランで、大盛りのプルドポークやマカロニ&チーズを分け合って食べた。ホテルに戻ってからは、これまで3週間寝食を共にしたデリとJASCメール（参加者同士に宛てて書く手紙のこと）を交換するなどして、最後のひとときを過ごした。表現と規制分科会は、メンバー全員でロビーに集まり、ECとして分科会を支えてくれた2人に手紙を渡したり、集合写真を撮ったりして、名残を惜しんだ。

東京外国語大学言語文化学部言語文化学科2年 小川 志穂



22日目（8月24日）

遂に最終日となった。早朝にホテルを出発し、Ronald Reagan Washington 国際空港から Detroit Metro 空港で乗り継ぎ、羽田国際空港へと向かった。



<参加者感想>

早朝、寝ぼけた様子の日本人がワシントン一角のホテルに集まる。この日は、ジャパデリが日本に帰る日。思い出に浸る間もなく8月を駆け抜けていたみんなへ、急に JASC76 最終日だという現実だけが押し寄せる。日本側のために起きてくれたアメリカ側に送り出され、JASCメールを交換したり、ハグしたり、気恥ずかしさなど忘れて別れを惜しみながら空港に向かうバスに乗った。十数時間のフライトが、ジャパデリを頼りなく繋ぎ止める最後の猶予のように存在した。思い思いの時間を過ごしながら、何を考え、どう変わって日本に向かうのだろうか。

思えば、本会議が始まってから、分科会の議論で、移動中の些細な会話で、食事の場で、深夜の部屋で、ホテルのロビーで、あらゆる場面で、日米の違いにとどまらない、一人一人の違いに触れ、対立を学び、尊敬することを学び、視点を広げながら対話を重ねてきた。世界が分断の時代に向かっても、この8月を通じて築いた知見と絆が複雑に絡み合い結びつくれると信じて、将来に引き継ぐ情熱と責任を：Once a JASCer. Always a JASCer. この夏の思い出をありがとう！

東京大学教養学部文科二類2年 佐藤 未羽

DC サイトを振り返って

<参加者感想>

Washington D.C., the centre of politics and diplomacy, was chosen as the JASC 76 culmination site. The 90th ceremony, which brought together alumni, government representatives, and officials from ISC and IEC, was the first event to kick off activities at the D.C. site. Engaging with American delegates alumni was a novel experience for me, but I found it fascinating to see that despite differences in the years they participated, the host country, and the delegates themselves, there were common struggles and experiences related to JASC.

I visited the United States Holocaust Memorial Museum on the field trip day. It was noteworthy that the exhibition depicts not only the brutal realities of the massacre but also the detailed process from the rise of the Nazis to the deportation to concentration camps. I realized how people began to believe the holocaust through manipulative rhetoric. The Holocaust happened not only because of the anti-Semitic leader, Hitler but also because of holocaust-justifying theories based on medical and legal principles, and the many people who they convinced.

I keenly felt throughout this period that the outcome of the discussion is determined more by factors such as language, manner of speaking, and the speaker's characteristics, rather than by the actual content of their statements. KEI (Korea Economic Institute of America) multilateral simulation was a straightforward example.

This simulation assumes the international conference regarding North Korea's nuclear program and each delegate represented the United States, Japan, Korea, North Korea, and Russia. We hardly mentioned the global stance on nuclear weapons, but made claims that aim to maximize the score for the country they represent, based on the simulation rules. During this time, delegates who speak English fluently, conduct advance pre-negotiations with other countries' representatives and simultaneously act as mediators while pursuing their interests hold an advantage in the discussion. As a representative of North Korea, it was extremely difficult to cooperate with other countries in the face of the enormous benefits of not agreeing. Although this simulation differs from reality in various ways, including the existence of press, and translation problems, it was an intriguing experience to realize the structure of actual international conferences.

Lastly, the final forum, which represented the culmination of JASC was held at the D.C. site. Various tensions and challenges arose during the discussion leading up to the final forum. Here as well, the flow of discussion was often influenced more by the characteristics of the speakers and the surrounding environment than by the content of the arguments. At times, opinions that seemed important were disregarded. Given the limited time, the priority shifted from thoroughly examining each perspective to forcing the discussion in a direction that seemed to be more cohesive. Through these experiences, I was prompted to reflect on how to facilitate discussions, particularly on how to engage equally with others who may not share the same values or background knowledge. Moreover, I considered how to build the trust necessary for open and honest dialogue.

慶應義塾大学法学部政治学科 2年 赤堀 結

<実行委員感想感想>

ワシントン DC はアメリカの政治の中心地であり、ホワイトハウスや連邦議会議事堂、歴史的なモニュメントや記念碑が数多く存在する。また、IMFをはじめとする多くの国際機関の本部があり、グローバルな経済政策や貿易においても大きな影響力を持つ。さらに、世界最大級の博物館群であるスミソニアン博物館群が集積し、文化と知識の集積地でもある。こうした多様な側面から、ワシントン DC は非常に重要な都市であると言える。

第 76 回日米学生会議にとっても、ワシントン DC. は移動日を含めると 11 日間という比較的に長い滞在期間があり、90 周年記念式典や 76 回の集大成となるファイナルフォーラムを開催した場所として、参加者にとって非常に思い出深いサイトとなった。

ワシントン D.C. 担当として一番印象に残っている場面は、日本側の参加者が帰国するために空港行きのバスをロビーで待っていた時、早朝にもかかわらず、多くのアメリカ側の参加者や実行委員がホテルのロビーまで降りて見送りに来てくれたことである。涙ながらに手紙を渡し合い、日本側のメンバーがバスに乗り込んだ後も、手を振って見送ってくれた光景は私を含め多くの参加者の心に残っているだろう。参加者にとって DC サイトが有意義な時間であり、これからも日米学生会議で得た経験やつながりを大事にしてくれることを願う。

最後に、ワシントン DC サイトへご尽力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

国際基督教大学教養学部 3年 バック キャスリーン 光





第六章 分科会

東アジアにおける日米関係分科会

～東アジアの安定は世界の平和に直結する～

分科会概要

中国や北朝鮮といった東アジアにおける権威主義国家は、領域問題やミサイル問題など様々な問題を引き起こし、近隣諸国との軋轢を生んでいる。これに対し、日本とアメリカは強固な関係を築き、両国を牽制して新冷戦と呼ばれる構図が形成されている。欧州もインド太平洋戦略の名の下、台湾や朝鮮半島といった問題のある東アジアに関与する姿勢を強めている。一方、第三極として成長著しい東南アジアは、両陣営から適度に距離をとる漁夫の利戦略を企図している。以上の背景を踏まえ、本分科会では、現在最も重要な二国間関係のひとつである日米関係と東アジアの関係を再検討し、東アジアにおける日米関係の理想と現実的な施策について議論する。

分科会コーディネーター紹介



荒木 太一 Taichi ARAKI

所属：慶應義塾大学経済学部 4年

興味：経済政策

趣味：サーフィン、サッカー

▶ 自己紹介

中高時代は海陽学園という全寮制、男子校の過酷な環境で過ごしました。外出やインターネットが制限されていたこともあり、外部の情報に触れようとかなり意識をして課外活動に励みました。3度の留学、HLABへの参加などで、自分の力不足を経験しつつ、常に優秀な友人たちに囲まれて成長をつづけてきました。

一方、慶應義塾大学に入学後はコロナ禍ということもあり、サークルや学生団体の活動が制限され、思うような学生生活を送っていませんでしたが、運よく日米学生会議に参加させてもらうことができました。日米学生会議の経験は卒業後の進路を決めるにあたり、自分の軸とは何か、人生を通して実現したいことは何かを気づかせてくれた貴重な経験でした。分科会設置の意図等読んでいただければ、なんとなく私が考えていたことが分かるかなと思います。

他の実行委員とは違い、自分という人間を客観的に示してくれる「肩書」はありませんが、自分はこうしたいという意志は人一倍強かったと思います。今後の日米学生会議でもゴリゴリのバリキャリア人間だけでなく、自分のような泥臭い人間が活躍できるような人間味あふれる会議になってほしいなと思います。

分科会の設置意図並びに活動内容

本分科会の設置意図は主に2つである。①東アジア情勢の複雑化を背景とした日米関係を再考すること。②将来的な政治・行政の担い手を輩出することで日米学生会議のテーマを今一度実現させること。

①については分科会概要を参照してほしい。②については、私情も含まれている。近年、官僚不足や政治家の汚職が嘆かれ、国民の政治に対する不信感が高まっている。日米学生会議においては、依然、政治や国際関係等の分野が人気ではあるものの、その後の進路選択として官

僚や政治家という選択肢は減少してきているように感じている。宮沢元首相ののちに日米学生会議アラムナイから首相が誕生していないことが一つの証明である。そこで、本分科会では将来の日本、日米関係、世界平和を実現する担い手を輩出し、日米学生会議の持続性を担保するだけでなく、日本の国益をも実現しようとするをひとつの目的とした。

上記の意図の下、週1のミーティングでは各自で調査した内容を共有しつつ、専門的な議論を重ねた。また官僚や政治家へのFTを企画し、他分科会への参加を推奨した。

主に扱ったトピック（一例）とその詳細

1. 経済安全保障

経済安全保障とはウクライナ戦争、中国の台頭等を背景としたリスク顕在化を受けて、経済の側面から、安全保障を確保することである。日本においては経済安全保障推進法やセキュリティ・クリアランス法の制定がすすむ一方、他の先進国と比較してインテリジェンスに関する法整備が進んでいない。先進技術などの情報をいかに保護し、ファイブアイズをはじめとした先進国との連携をいかにするかについて議論した。

また、FTを通し、自由貿易と経済安保の両立という日本のとるべき方針を学び、そのうえで東南アジアやインドをFOIPなどでいかに取り込むかについても議論を重ねた。

2. 選挙と外交安全保障

2024年は台湾、韓国、日本、インド、EU、アメリカなどで大規模な選挙が行われ、「選挙イヤー」と評された。韓国やアメリカなど大統領制を採用する国々では、政権交代と共に外交方針が変わることがよくある。それは「もしトラ」に代表されるように、各国の対日政策の転換でもある。それらを踏まえて、各国の情勢についての理解を深め、外交方針の変化に日本がいかに対応していくかについて議論をした。

3. 歴史問題

外交政策と歴史問題は切っても切り離せない関係にある。例えば、戦後の日韓関係は日本の戦争責任がどのように果たされるべきかについて主眼が置かれていた。未来の日本を背負う主体として歴史問題への理解を深めると同時に、政府としてどのような対応をとっていくべきかについて議論をした。具体的には、韓国、ロシア、中国、アメリカについて、それぞれ日本との歴史問題を洗い出し、現代における外交関係を見直した。

特に盛り上がったのは、日米関係である。今日の日米関係は史上最も良好といっても過言ではないが、戦後80年間を日米安全保障条約を軸に見直した結果、アメリカの強権ぶりが浮かび上がった。彼らの帝国主義的な姿勢が現代の米中対立を激化させる一因にもなっているのではないかという議論があり、大変興味深かった。また、「戦争の歴史を乗り越えてどう協力していけるか」、「見方によって見え方が異なる歴史をどう教育していくべきか」など過去の分析にとどまらず、未来に向けた議論ができた。



本会議中の議論並びにフォーラムでの発表

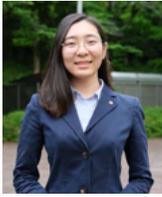
本会議では主に核兵器の是非について議論を重ねた。核について詳しい学生がおり、また事前学習の段階で「核と安全保障」について勉強を重ねていたため、知識的には問題なく議論がすすんだ。最終発表においては核はダメ、戦争反対、安全保障上必要だから核は持つべきなどといった稚拙な見解に留まらず、戦略兵器との違いはなにか、ターゲットによって核はダメという倫理観は変わってくるのではないかと、短期的な影響と中長期的な影響を鑑みたときに核兵器の妥当性は評価されるのか、など様々な観点から考察を行った。唯一、核兵器を経験した日本とアメリカの間で、感情論ベースにならずに核兵器の議論ができたことは、今後の日米関係が過去に囚われずに前進していく様を形容しているようでもあった。

【発表資料（一部）】

The presentation slides are organized as follows:

- Slide 1: Japan-U.S. Relations and Nuclear Deterrence**
 - Topic: Japan-U.S. Relations in East Asia
- Slide 2: Potential Paths for Japan's Defense**
 - Options: Pacifism (平和主義), Autonomous Defense (自衛), Multilateralism (UN) (多国間主義)
 - Outcomes: Cannot protect Japan when attacked, Costly, unpopular, Dysfunctional due to veto power
- Slide 3: Asymmetry of the JASA**
 - Comparison of costs between the US and Japan.
 - US side: The cost in peacetime → Use of Bases in Japan
 - Japan side: The cost in a contingency → Dispatch of U.S. Forces
- Slide 4: Benefits for Both**
 - The U.S.:** Rapid response in a contingency, Cooperation in East Asia, Gains a strategic ally in the indo-pacific
 - Japan:** Defense obligation to Japan, Stability of Far East, Nuclear umbrella
- Slide 5: Current State of Deterrence**
 - Issue: U.S. nuclear umbrella insufficient
 - Map showing China's nuclear expansion.
 - Arrow: Increase in Nuclear Deterrence
- Slide 6: Moral Frameworks**
 - For: More autonomy, Stronger deterrence
 - Against: Public backlash, International regulations, Security dilemma, **Immorality of nuclear weapons**
- Slide 7: Our Debates on Nuclear Ethics**
 - Themes: Popular Will (Tension between Democracy and Military), Capacity to Create (Japan's distance away from "going nuclear"), Military Expansion (Proliferation of military vs nuclear weapons)
 - Question: Is there a fundamental moral distinction between conventional and nuclear weapons?
- Slide 8: Moral Frameworks**
 - 1. Consequentialist: +2 (benefit) vs -1 (cost)
 - 2. Rules-Based: +3 (benefit) vs -3 (cost)
- Slide 9: Conventional vs. Nuclear**
 - Points: Military vs. Civilian Targets, Short and Long Term Effects, Instant Devastation
- Slide 10: Conclusions and Future Conversations**
 - Points: Nuclear ethics in the context of US-Japan relations, What does nuclear war look like, and can it be won?
- Slide 11: Thank You!**
 - Group photo of participants: Hudson Pitchford, Aoi Watanabe, Sakura Hayakawa, Tomoki Akase, Ryme Hisada, Taichi Araki, Karin Shinohara, Risa Eda.

日本側メンバー紹介



早川 さくら Sakura HAYAKAWA

所属：慶應義塾大学経済学部経済学科3年

興味：経済安全保障

趣味：美術館巡り、読書、お菓子作り

▶ 自己紹介

性格としては、知的好奇心があり、責任感が強く、行動力があると思います。経済安全保障に興味があり、過去にはシンクタンクでインターンをし、日本企業100社に対して経済安全保障に関するアンケートに携わったこともあります。また、多様性の共生できる社会に興味があり、大学の共生環境推進室でも一年間インターンをして、LGBTQ+に関するイベントを学生主体で運営していました。先週、その活動について東京の超異分野学会でポスター発表をしました。また、昨年末会社の業績を予想する大会に友人と参加し、入賞したので今週は東京証券取引所で上位を決定するプレゼンをする予定です。そのため、最近ではExcelのモデルと睨めっこをしながらファンダメンタル分析を行っていました。趣味は、読書、美術館巡り、そしてお菓子作りです。最近ではForce and Statecraftを読み、民主主義国家として、外交において国民感情と長期的国益をどのようにバランスするか、や降参以外の国際紛争の終わらせ方について考えさせられました。展覧会はポーラ美術館のモダン・タイムス・イン・パリに行ってきた、お菓子作りではチョコプリンタルトを作りました。

▶ 印象に残っている議論

最も印象に残っている議論は経済安全保障か自由貿易かについての議論です。自由貿易は前提として、経済安全保障は国家の安全保障に関わる機微な分野に限るべきであるという意見を持っていました。しかし、それは経済安全保障は市場の失敗の補正であるという認識から来ていました。具体的には、国家が戦略的に重要な産業を保護し、国際競争において劣位に立たないようにする必要があるという主張です。例えば、半導体やエネルギーなどの重要な技術や資源については、自由貿易の原則に従いつつも、国家の介入が必要であると考えられていました。経済安全保障の射程を見極める中で、市場への影響性についての考慮も重要であるとの論もありました。アメリカのように、範囲は狭く障壁は高く設ける政策が良いのではないかと思います。



赤瀬 朋基 Tomoki AKASE

所属：学習院大学法学部政治学科3年

興味：国際関係論

趣味：メジャーリーグ、読売ジャイアンツ、「男はつらいよ」

▶ 自己紹介

興味関心の向いたものには積極的に飛び込むような心がけている。大学入学後は、日本の外交・安全保障に興味を持ったので、国会議員事務所でのインターンや政党の勉強会に参加してきた。今は安全保障の最前線を肌で感じたいと思い台湾に留学に来ている。こちらの学生と話していると、有事への危機管理だけでなく、主権者意識の高さや若者中心の政治文化に心底驚かされる。もうひとつ印象的なのは、日本文化が広く浸透していることだ。

特にアニメやマンガは台湾の学生を魅了しているが、僕はワンピースしか読んだことがない。

台湾人に「このマンガを知らないのか？日本人なのに。」と言われることに耐えかねて、先週、『進撃の巨人』を読み始めた。しかし台湾で読むとなかなかリアリティがある。東アジアにおける日米関係分科会では、“巨人”が壁を破ってくることがないよう、日米に出来ることを議論したい。

▶ 印象に残っている議論

韓国研修前に、歴史認識問題について実施した議論が印象に残っている。アメリカ、韓国、中国との間に存在する歴史問題について、分科会メンバーがそれぞれ1週間で事前学習、ミーティングでは調査内容の発表の後、議論を行った。自分は韓国との歴史問題を担当し、朝鮮半島出身労働者問題、慰安婦問題、竹島問題を取り上げた。日本政府の資料を提示して1965年の日韓請求協定で歴史問題は解決しているとの立場に立ち、韓国側が謝罪や賠償金を求めていることに抗議する旨を主張した。これに対し、分科会のメンバーから同意する声もあったものの、「被害者の立場に立ってない」、「自分の家族が被害者だったら同じことが言えるか」などの意見が相次いだ。一連の議論から学んだのは、個人の立場に立つか、国家の立場に立つかで主張が大きく変わるということだ。政治学を学んでいたり、議員事務所でインターンをしたりしていると、国家の視点から物事を考える癖がついてしまい、国家の政策によって虐げられた人々についての認識が足りていないことに気づいた。こうした議論を重ねたことで、韓国ではKASCの学生たちの主張にも真摯に耳を傾け彼らの主張を理解できるようになったと考える。自分の意見が180度変わったということはないが、180度違う意見を受け入れ、また議論の構造的な違いを学べたという意味で、収穫のある議論であった。



渡邊 蒼生 Aoi WATANABE

所属：東京大学法学部第3類政治コース4年

興味：国際政治(特に米、中、豪)、日本政治(日本の女性知事)

趣味：釣り、筋トレ、ドライブ

▶ 自己紹介

中高の6年間では吹奏楽に打ち込み、クラリネットとユーフォニアムという二足の草鞋で音楽を通じ周りの仲間たちと向き合ってきました。そのためか、他者に対する感受性、共感性、気遣いが人一倍強いように感じます。

大学に入ってから、そのような視点で見ると私がしてきたことには一つの筋が通っているように思えます。大学1-2年で所属した教育系サークルでは、周りの環境にうまく馴染めない中高生に「対話」と呼ばれる議論を通じ、自分の意見を素直に語り相手の意見に真摯に耳を傾けることのできる第三の場所を提供してきました。大学3年では「模擬裁判」と呼ばれる演劇を通じ、自分の演じるキャラをメタ的な視点で捉え直し如何に役に憑依できるかに心血を注ぎました。また、国際ビジネスを題材にした英語ディベート大会ではリーダーとしてメンバーそれぞれの強みを活かすようにチームとしての総合力を高めるかに苦心しました。大学4年では日本を飛び出し、オーストラリアという異国の地で異なるバックグラウンドの人々と関わるとはどういうことか交換留学を通じて学びました。学外でも、いわゆる「ホームレス」の方々との会話を通じ、人間関係が絶たれがちな路上生活で少しでも人間的な暖かみを提供することを目指すボランティア活動に参加してきました。

「外交は最終的に人間と人間の関係だ」という言葉があります。つまり外交に携わる一人一人の総合力がそのまま外交の結果に直結するということです。それゆえ一人間としての自分の総合力をどのようにして向上させるか日々考えながら生きています。

▶ 印象に残っている議論

東アジアにおける日米関係分科会では近年関心の高まっている経済安全保障について深く学んだことが印象に残っている。まずは、前提知識の不足を補うために2024年5月に施行されたばかりの経済安全保障推進法について法律の4つの柱を一人ずつ分担してそれぞれ理解し、お互いに学びを共有し合っ分科会メンバーの前提知識を揃えた。その後、春合宿内の議論時間を使い、戦後の潮流であるGATTから現在のWTO体制に至る世界的な自由貿易志向と近年の潮流である経済安全保障は対立するののかという論点について議論を行った。議論の中で、経済安全保障を自由貿易の補完として捉えたり、自由貿易を経済安全保障の土台と捉えたりと、一見対立するように思われる二つの概念が、必ずしも対立する概念ではないと結論づけることができた。分科会の学びと現実世界が繋がった点で分科会の活動の中で非常に印象に残っている。



篠原 花綸 Karin SHINOHARA

所属：ソウル大学政治外交学部政治外交学科1年

興味：政治外交、核抑止力

趣味：バスケ、音楽鑑賞

▶ 自己紹介

ソウル国立大学学士課程に在籍中です。大学では政治外交を専攻しており、核兵器関連問題や北朝鮮情勢に興味があります。

まだ1年生なので教養科目中心で履修していますが、この1年で特に印象に残っている授業は「北朝鮮概論」です。北朝鮮の政治や経済、人々の生活などを幅広く学べる授業で、韓国の言語と北朝鮮の言語の違いなど普段着目しない部分まで学ぶことができました。日本ではなかなか知ることのできない北朝鮮についての知識を習得でき、とても興味深かったです。

韓国で生活し、大学生活を送る中で、東アジアにおける日本、韓国、アメリカの役割の大きさを実感しました。自由と民主主義、そして国際協調関係を積極的かつ継続的に推進するために日本、アメリカはどのような行動をするべきなのか。また日米関係は今後どうあるべきなのか。このような疑問をぶつけ合う絶好の機会だと思い日米学生会議に参加しました。

体を動かすことが好きで中高とバスケ部に所属していました。スポーツによる国際交流にも興味があります。

▶ 印象に残っている議論

事前活動ラスト回で行った「日米関係を批判的に捉え直す」という議論が一番印象に残っています。

私たちの分科会は知識共有がメインになることが多く、知ること・分かることに重点を置いた議論がほとんどでした。しかし分科会メンバーで話し合った結果、自分の意見に基づいた議論も必要なのではないかという結論に至りました。以前の議論での問題点として「前提を疑う視点が無い」という指摘が上がり、最終回では日米関係を批判的に捉え議論することになりました。

前提を疑うことで、単なる知識共有ではなくオリジナルな意見のぶつかり合いが積極的に出来たのではないかと思います。メンバーそれぞれの根本的な考え方を知るいい機会になりました。

アメリカ側メンバー紹介



分科会統括

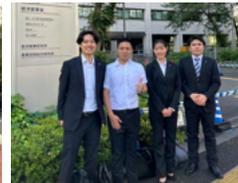
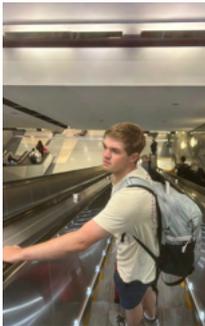
分科会設置意図である日米関係の再考、将来の政治・行政の担い手養成は概ね達成したと結論付けたい。事前活動の段階から現代の日米関係について疑問を投げかけ、戦後レジームを見直し、独立した国家のあるべき姿を模索した。そしてファイナルフォーラムにおいても、日本が被害者でアメリカが加害者であるという短絡的な被害者意識を脱し、今後の世界平和に向けた核兵器の是非について対等に議論できた。

当時は手探り状態であったが、振り返ってみると大きな軸が形成できていたことは、参加者間において日米関係、そして世界の平和は自分たちで作っていくという気概があったからではないだろうか。もし他人事のように捉えていたならば、核兵器の残虐性を盲目的に批判し、核兵器を過去に用いたアメリカに責任を追求し、仲良しこよしで非核化をすすめていこうというような、非現実的かつ無意味な議論に終始していただろう。彼らに当事者意識があったからこそ、こすりにこすられ続けてきた「核兵器」の議論を丁寧に要素分解して分析し、社会に向けて核兵器について思考するうえでの論点を提示するに至ったのだと思う。

デリゲートには、本分科会で培った高い分析能力と当事者意識を持ち続け、国益や世界平和を現実的に追求し続けることを期待している。

担当実行委員：慶應義塾大学経済学部 4年 荒木 太一





環境経済とエネルギー安全保障分科会

～現実を知り、現実を問い直す、現実的な議論～

分科会概要

パリ協定以降、各国は経済界の脱炭素潮流に後押しされ、CN 宣言・ESG 投資支援拡充を行い、日本も再エネ・省エネ・原子力等を中心に、産学官が連携して脱炭素を慫慂している。一方、依然世界は化石燃料に依存し、2050 年 CN は見通せない。バイオマスや核融合等の技術は経済合理的な段階になく、炭素税や LNG シフト等は南北問題を顕在化させている。国内に目を向けても、Hard-to-Abate セクターのような脱炭素が技術的・コスト的に難しい分野への対応や、“脱炭素”では捉えきれない環境問題群（マイクロプラスチックや PFAS 等の環境汚染、電化・系統増強に伴う銅価格の高騰、旺盛な砂需要による世界的な砂不足等）への対策、これらを支える財源の問題等、多種多様な課題を抱えている。

日本社会は、「最も成功した社会主義国家」と形容されたが、平成以降、グローバル化の名の下に、急速に現下の変動性・不確実性著しい生の資本主義に翻弄され、苦境にある。一方、米中新冷戦の開始に伴い、経済安保の時代へと移行したことで、自由主義側諸国が「国家資本主義」と銘打った保護主義的経済政策に傾倒しつつある。本分科会では、環境・エネルギー分野をテーマに、国際政治・科学技術・市場動向等の観点から現状を十分に分析し、資本主義的・国家資本主義的な政治・経済の見方を涵養することを目指す。

分科会コーディネーター紹介



富澤 新太郎 Shintaro TOMIZAWA

所属：東京大学教養学部理科三類 2 年

興味：(主) 分子生物学 (EVs・ソフトマター・脂質ラフトなど)

(副) 産業政策 (知財・独禁法、ルール形成戦略、エネルギー、創業)

趣味：寿司・日本酒、柔道、ベース、語学

▶ 自己紹介

歴史ある日米学生会議の一員として、2 年間の活動に当たれたこと、そして特に 90 周年という記念すべき年に実行委員を務められたことを非常に幸運に思います。平素より、日米学生会議のご活動にご支援賜りまして、誠にありがとうございます。

私は、筑波大学附属の 130 回生として（悠仁親王殿下とはちょうど入れ替わりでした）卒業の後、露宇戦争勃発直後の 2022 年 4 月に東京大学教養学部理科三類に入学しました。昔から人と違う感性を持っていたようで、逆張りをしてみたいと、入学同期では唯一医学部を蹴って工学部に進学してみたものの、自分が変な方向に尖ってしまったことを認識して、医学部に戻るため再度進振りに進もうとしています。思えば、中学時に羽目を外して修学旅行を途中で強制送還処分となったり、某大手大学受験塾の教務陣と折り合いが悪く、バイトとして雇われの身でありながら独自性の高い授業を行って FIRE を食らったりと、なかなか他の人では経験できない人生を歩んできてしまいました。「そんなに尖っているとどこかで痛い目を見るよ」なんて高校の恩師に言われましたが、案外早く痛い目をみています。今後数年間で少しは丸くなれるといいなと思いつつ、日々自己研鑽と称して砥石で自己を磨いています。

▶ 印象に残っている議論

どのようなトピックをどの順番でやれば飽きずに色々な分野を一定の深さで議論できるのだろうか... と四苦八苦していたので、特にこれ！という議論があるかというよりは、全体で大きな一つのストーリーとして楽しんでいったという感じに近かったです。強いて一つあげるとすれ

ば、舞台が豪華というのもあったでしょうが、2024 年末に策定される第 7 次エネルギー基本計画の意見交換会のために行った、「結局日本のエネルギー政策はどういう方向で進めるべきなのか？何が大きな課題なのか？」といった包括的・各論的テーマ交々の議論でした。詳細は後段の紹介に譲りますが、3 月以来の活動の総括として、有終の美を飾れたのではないかと考えています。



宮本 希 Nozomi MIYAMOTO

所属：国際教養大学国際教養学部 3 年

興味：国際開発学、気候変動

趣味：グルメ、料理、睡眠、瞑想

▶ 自己紹介

生まれは新潟県新潟市、基本的に育ちは仙台だが、幼少期の 2 年を英国ロンドン北部で、一旦日本に本帰国した後、中高時代の 3 年 9 カ月を米国のメリーランド州で過ごした。

その結果、純ジャパでもネイティブでもない、中途半端な自身のアイデンティティに少し悩まされる。私のアイデンティティはどこに分類されるのか。私の居場所は一体どこなのか。大学入学前までアイデンティティクライシスを経験した（JASC75 では、似た境遇を持つ佐野やバックと、アイデンティティに関する議論を何度か行ったことも）。

在籍中の国際教養大学では、学生がお互いの個性を尊重し合っていて、そんな環境に居心地の良さを感じながらも、個性的で好奇心旺盛、そして高い行動力のある彼らに刺激を受け、様々な挑戦した。具体的には、ディスカッションの機会を求め、学内では模擬国連部、学外では日米学生会議に参加したり、国際開発学の学びの場を増やすため、国際開発学会に複数回参加したりした。

体を動かすことも好きで、小学時代に始めたテニスの他、日本の高校ではハンドボール、大学ではフットサルもかじったが、ここ最近は、体をほとんど動かしていないので、今秋から留学する英国のサセックス大学で、テニスを再開しようと考えている。歌うことも好きなので、コーラスのソサエティもいいかなと思ったり。

兎にも角にも、今は、大学一年時から夢に見ていた環境で一年間、開発の世界にどっぷり漬かれることを楽しみにしている。

▶ 印象に残っている議論

下記にも記述があるため、具体的なトピックに関するコメントは割愛させていただくが、本会議中、印象的だったこととして、ジャパデリとアメデリで結論の導き方に差異があったことを挙げたい。ジャパデリが課題への解決策として政府に対する提言を挙げたのに対し、アメデリは自らが実施可能な方法を探究した。その理由として、アメリカでは、最短で 4 年に一度の大統領選挙の度に、政策が 180 度ひっくり返ってしまうことへの不信感があった。改めて、こうした一瞬一瞬に、日米間における議論の前提の違いを感じることができ、とても興味深かった。

分科会の設置意図並びに活動内容

環境・エネルギー分野は、科学技術・政治・経済が大きく交錯する分野であり、歴史的に、当該分野の関連市場は政治的作用に大きな影響を受けながら形成されてきた。これは、一般には、外部経済性が強いことに主因を見出す向きがあるが、当然に資源の希少性やイノベーションの源泉としての役割に根拠を求めるところもできよう。殊に、資源の博物館と揶揄され、失われた 30 年の間に技術立国の矜持が毀損されつつある我が国にあつては、積極的に環境・エネルギー分野のルール形成に与り、今後の経済成長を賭した戦略性を持つ必要がある。

本分科会では、このような課題意識から、環境・エネルギーのルール形成を、その技術・市場動向に通曉した者が熟議することに価値があるとの理念の元、意欲ある者に開かれた分科会として設計した。週ごとにテーマを設定し、毎週2回の定例会議のうち、1回目では、政府資料・企業資料・その他論考を渉猟し、当該テーマについての情報をメンバーが共有し、技術・市場動向への理解を深めるとともに実証的に論点を詳らかにした。2回目では、1回目の議論を踏まえ、規範的な観点から、どのような市場環境をイメージし、そのためにはどのようなルール形成・政策デザインを行えば既存の課題の解決への一歩となるかということを議論した。

また、多様な産学官＋政・法のステークホルダーに対してフィールドトリップを行い、実務上の最先端の論点を学ぶとともに、我々の議論内容を壁打ちする機会を確保することにも注力した。7月末には、今年3年ぶりに策定される第7次エネルギー基本計画につき、学生団体として資源エネルギー庁の課長級と意見交換する機会も得られ、さらには9月の基本政策分科会（有識者会議）での提言の機会も得るに至った。

主に扱ったトピック（一例）とその詳細

1. 原子力発電所・大規模再エネ設備の稼働と地元理解

原子力発電所・大規模再エネ設備は、設置地域の住民の理解を得られない場合がある。大規模な設備は、地域を特色づけるものとして地方創生に寄与し、財政的にも支援となるものであるが、災害・自然環境への影響等を危惧しての反対意見も根強い。その問題点は、現況では事業者の責任が大きいところ、事業の継続期間や公益性を鑑みれば、外部経済的な影響を受けやすい分野として国主導での責任所在の明確化に取り組むべきとの意見に集約した。例えば、原発周縁地域における有事の避難計画の妥当性を検証する第三者機関の設置や維持管理の指導を行う第三者機関の設置等が意見として挙がった。

2. 洋上風力発電設備の法的課題

近年、洋上風力発電が興隆を見せているが、EEZ内に設置された設備は国連海洋法上の「船舶」に該るのか、国内船舶法上の「船舶」に該るのかなど、「その設備が何なのか」という点から問題が生じる。その定義に付随した、旗国主義の適用可否や、民法上の動産として処理することの是非などの問題についても議論を行った。

日本政府としては、既存の枠組みに囚われない、新規特別カテゴリとして定める方向性を国際的に提示するとともに、公海での浮体・移動式洋上風力発電設備の設置規制、原状復帰義務のコンセンサス構築等を行うべきとの結論に至った。

3. 「もったいない」をどのように定義するか

ワンガリ・マータイ氏により世界的な言葉となった「もったいない」であるが、元は仏教の言葉であり、3R + Respectの要素を内包すると考えられている。しかし、現代日本社会における「もったいない」の用法は、上記定義とやや乖離がある。食品廃棄や思い出の品の処分、使い捨ての製品等の日常事例を観念しながら、我々が日常的に用いる「もったいない」の定義を吟味した。

一時、物品の再利用等を念頭に置き、「まだ使えるものを廃棄したとき」「生み出した余剰が顕在化したとき」といったケースに感じるものとしたが、思い出の品等の金銭的価値を認め難いものや「時間ももったいない」といった用例も考慮した結果、その定義を「何かに利用できる可能性を喪失する可能性に対して覚える感情」と整理した。大量消費社会の確立や、サプライチェーン伸長による生産者の存在感の希薄化が、Respectの要素を剥落したとの帰結にも至った。

また、当該議論を敷衍して、昨今のホットトピックであるリマニファクチャリングとサーキュラーエコノミーのルールデザインについても議論を行った。

本会議中の議論並びにフォーラムでの発表

気候変動に対する国際的枠組みは、関係国の利害対立を乗り越えながら、より包括的で実効性の高いものへと進化してきた。最も新しいパリ協定は、京都議定書において発展途上国の排出削減義務を設けなかったことにより削減義務に不均衡が生じていることなどの反省点を踏まえ、全ての国が自主的に目標を設定し、定期報告を行うという枠組みとなった。

しかし、新興国・発展途上国も含めた包括的な協定となった一方、国家間の目標の不一致や、コミットメント不足など、足並みが揃わずにフリーライダー的に振舞う国家が存在することが、その実効性への疑念を深めている。我々は、このような課題意識に基づき、パリ協定を Revise し、包括性と実効性のバランスを調整しようと試みた。

KEI での模擬国連の経験を通じて学んだ「利害の調整のために規制とインセンティブのバランスをとる」ことや、IMF で学習した国際ファイナンスの重要性等の要素を盛り込み、各国家の排出量・経済規模に応じた応能負担を求める“Gringotts Vault”を形成することを提案した。即ち、各国は排出削減によって負担を低減できるとともに、Vault の資金の用途決定に対する影響力を高めるインセンティブを持ち、排出削減を進めれば、新興国投資を通じてサプライチェーンでの影響力を高めることができるものとするのである。

また、さらにインセンティブを強化するため、資金負担に応じて炭素市場に参加できる度合いを調整し、排出削減によって企業が利潤を高められるようなシステムを作ろうと模索した。

【発表資料（一部）】

The presentation slides are organized as follows:

- 01-2 The Paris Agreement: Major Challenges**: Discusses Lack of Transparency, Technological Inequality, Historical Responsibility, Universal Anarchy, and Lack of Accountability.
- 02-1 Theme**: Shows a balance between Incentives and Restrictions, with the goal of 'Restrictions + Incentive to commit' and 'Incentives to prevent withdrawal'.
- 02-1 Ideas Proposed but Dismissed...**: Lists ideas like Drive competition, Satisfy domestic needs, Increase global surveillance, and Expand the market, concluding with 'Low Feasibility, Smaller Impacts on Decarbonization'.
- 02-2 Restrictions: "Gringotts Vault" (collateral)**: Explains how top countries deposit into a vault to ensure high carbon-emitting countries meet reduction targets, with a developing fund for others.
- 02-2 Detail: Ranking system**: Shows a pyramid ranking system where participants are 1% of world share, with an exception for low GDP/developing countries.
- 02-2 Detail: Reassessment**: Details how much to deposit is re-evaluated every 2 years based on criteria like GDP and CO2 reduction.
- 02-2 Simplify Example**: Illustrates the process from Beginning of Period to End of Period, showing countries like Japan, USA, and China contributing to the vault and receiving incentives.
- 02-2 Detail: Competitive Principle**: Shows a table of country rankings (Top 5 and outside rankings) before and after 8 years.
- 02-3 Incentive: Carbon Market**: Focuses on Defection Deterrence through Clean Development Mechanism, Compliance vs Voluntary, and other carbon credit mechanisms.
- 03-1 Conclusion + Significance**: Concludes that the system means addressing environmental issues and considers the path forward from Kyoto Protocol to Paris Agreement to a New Arrangement.

日本側メンバー紹介



川西 晴太郎 Seitaro KAWANISHI

所属：京都大学法学部 4年

興味：法律学（最近は AI 規制や LGBTQ に関する法整備にも）

趣味：釣り

▶ 自己紹介

京都大学法学部 4年生の川西晴太郎と言います。大学卒業後は院進した後、弁護士として働くことを予定しています。大学 1、2年生の時は、司法試験の学習に注力し、大学 3年生の時は、サークルの代表として部の再建活動を行ってきました。学部生時代の専攻は、法学でしたが、今後はそれ以外の分野についても貪欲に学習していくことができればと思っています。自分の長所は、真面目で優しい所かなと思っていますが（少し恥ずかしいです笑）、真面目ゆえに親しみづらさが出てしまっていると感じるので、この点は短所でもあるのかなと感じています。JASC では、真面目に課題に取り組みつつも、ゆるふわ系男子として親しみ易い雰囲気を作っていきたいと思います。

ですので、気軽に話しかけていただくと大変助かります。趣味は、釣りですが、アウトドア系は大概好きです。最近あまり行けてないですが、また秋頃に行きたいなと思ったりします。今ハマっていることは特にはないのですが、今回 JASC に参加したことで言語を学ぶ面白さを感じたので、今後は中国語などの英語以外の言語についても学習していければと考えています。最後に jasc にかける思いを簡単に述べさせていただきます。JASC は、私にとって、初めて参加する国際交流プログラムになります。英語を上手く話せず、議論に上手く入り込めない時も多いですが、何とか議論に入り込もうと努力しています。伝えることを諦めたらそこで成長が止まってしまうと思うので、諦めることなく、議論に貢献していくことができればと考えています。短い間ですが、よろしく願いいたします。

▶ 印象に残っている議論

最も印象に残った議論は、春合宿で行った 2035 年時点における BEV の市場予測に関する議論である。この議論では、「数字で語る」ことだけでなく、考えられる様々なファクターを皆で考えることが目的であり、要求された。文系人間である私にとっては、数字で語ることに最初は少し抵抗があった。自分がリサーチして持ってきたデータについても、どこから持ってきたのか、本当に使えるのかについて、議論した。そして、今後の市場予測に影響を与える要素について、皆で自由に意見を出し合った。例えば、東南アジア市場の伸びや各国の規制の動向などによって、市場予測が変動するという意見が出た。ただ、変動しうる要素をあげられたとしても、それがどの程度、市場予測に影響を与えるのかについては議論があった。明確な資料があるわけではなかったが、各々が各自のパートについて調べてきて、お互いのパートについて、意見を出し合った。結局、最終的に、厳格な数字予想は出来なかったものの、一定の資料収集、議論を通じて、一つの成果物を完成させられたことは良かったと思う。また、この春合宿での議論が基礎となって、それ以降の議論を充実化させることができたと思う。



多田野 真仁 Masahito TADANO

所属：北海道大学経済学部経営学科 3年

興味：経済学、エネルギー政策

趣味：スポーツ（見るのもプレイするのも）、ぼーっとすること、読書

▶ 自己紹介

私はドイツのハンブルクで生まれ、東京で育ち、今は北海道にある北海道大学で経済を勉強しています。自分は海外志向が割と強いのですが、生まれが海外・育ちは日本というバックグラウンドが影響しているのだと思います。なので生まれた場所はまだ行ったことがなく、たまに不思議な感覚になります。

さて、小中高とずっとなんらかのスポーツをしてきて大学ではハンドボールをしています。自分は落ち着いた性格（自己評価）なのですが、スポーツをしているときは割とテンションが高いです。趣味は運動すること、それからぼーっとすることです。対極ではあるのですが、運動した分をチャージするために家ではぼーっとしている感じです。普段も真顔でどこかを見つめていることが結構あります。

JASCでは環境経済やエネルギー分野への興味から参加しましたが、現状知識面では非常に強化されたと感じています。幼い頃から海外のことに興味があり、ニュースで見る貧困や紛争について思案することもそれなりにありました。これらに取り組む方法として開発やエネルギー問題についても興味を持っていましたが、将来のキャリアとして追求するほどではなく、かといって大学の授業で深く扱うこともない状況でした。ただ、自分の興味の延長としてしっかりと理解したいという思いは常にありました。そんな矢先日米学生会議を見つけ、自分の興味について同様の関心を持つ人と議論できる環境に魅力を感じました。JASCでは環境経済やエネルギー問題に関する知識の獲得に力を注ぎ、それを元に着実な議論ができるようにしたいです。また、議論を通して自分についてもっと理解したいです。ディスカッションをしていると、思ってもみない意見が口をついて出てくることがありますが、その度に自分の知らない自分を知ったような感覚になります。このように議論を通して自分の根底にある考えや価値観などの輪郭を掴めることを期待しています。日米両国の優秀な学生と寝食を共にする貴重な機会を純粋に楽しみつつ、いろいろな考えや経験を吸収できればと思います。

▶ 印象に残っている議論

印象に残った議論は2つある。1つ目は洋上風力、2つ目は「もったいないを再定義する」である。

1つ目の議論に関してはリサーチ量が最も多かったこともあり、非常に幅広い観点から議論ができたため、議論のボリューム・質共に満足感があつた。私個人は洋上風力分野における原状回復・環境アセスメントという部分についてリサーチを行い、自分としてもかなり理解が深まった。この議論のためのリサーチを行ったおかげでのちに行つた議論でも知識が活かせる場面があつた。

2つ目の議論に関しては普段の議論とは異なる抽象的なテーマであり、新鮮であつた。「もったいない」とは「可能性の喪失である」という抽象的なアイデアをもとに具体的な「もったいない」事例にどのように当てはまっているかについて考えた。このような抽象と具体の反復を通して議論が進んでいくのは新鮮であつたと同時に議論として非常に満足のいくものであつた。



佐藤 未羽 Miu SATO

所属：東京大学教養学部文科二類2年

興味：経済学/政治学、経済安全保障、国際政治

趣味：音楽、スポーツ

▶ 自己紹介

佐藤未羽といます。趣味は音楽やスポーツです。音楽は聞くのも弾くのも好きで、ピアノ、バイオリン、サクソ、ギターを触ったことがあります。スポーツは、自分で体を動かすのも好きですが、最近には特にサッカー観戦にはまっています。所属は東京大学で、今は主に経済学や

政治学を中心に学んでいます。大学は自分が知らないことも知らなかったような学びとの出会いに溢れていることに魅力を感じているので、貪欲にアンテナを張って幅広く学びたいと思っています。JASCに応募するきっかけとなった心境として、大学生としての時間が一瞬ですぎてしまうことに怖さを感じていたことがあります。授業やバイトを何となくこなしている間に、周囲がどんどん他に何か打ち込むものや「帰る場所」を見つけていく様子を見て置いていかれているような感覚になっていました。そんな矢先、たまたま見つけたJASCにやる後悔よりやらない後悔ということで締切日の夜中に小論文を書いてギリギリで応募に踏み切りました。JASCには、人と人との対話、アカデミックな対話を本気でできる場があることに魅力を感じています。議論で発言するなかで、思いもよらなかった価値観や考え方に会うことがあります。JASCでの議論を通じて、自分の価値観や考え方に対して理解を深め、机上の空論のように感じていた国際関係に対して当事者意識が芽生えることを期待しています。

▶ 印象に残っている議論

最も印象に残った議論は、「もったいないを再定義する」というテーマの議論である。このテーマは、これまでの議論が知識ベースで現実論に偏っていたことを課題とし、知識にとらわれ過ぎず、学生ならではの社会をこうしたいというデザインをアウトプットとして出すという目的意識で設定された。議論の流れに関して、各自あらかじめ調べた基礎知識をすり合わせ、前提条件を確認するところからはじめた。自分たちの考えを生み出すという作業に慣れていなかったもので、定義は確認できたけど...と議論が行き詰まったが、具体的なもったいないの例をできる限りあげて、帰納的に検討することにした。そこから、自分たちが何に対してもったいないと感じるのか考えつつ、時間やお金、思い出の品などを包括的に説明できる定義について話し合った。結果としては、「可能性」に対してもったいないと感じるのでは、という考えに至り、最終的に詳細を補完して、もったいないを「可能性を喪失する可能性に対し感じる」と定義付けることにした。議論のなかでは、そもそもこうじゃない？というそもそも論で逆戻りしたり、結局既存の考えと同じで独自性がないとなったりしたこともあったが、その都度話し合いで解決策を探しながら進めるという議論らしい議論ができた点で、テーマ設定の目的を達成できたように思う。



石賀 悠 Haruka ISHIGA

所属：早稲田大学先進理工学部生命医科学科2年

興味：生命医科学

趣味：テニス、映画鑑賞

▶ 自己紹介

早稲田大学 先進理工学部 生命医科学科 2年の石賀悠です。趣味はテニスで、中学ではテニス部に所属し、真剣に取り組み充実した時間を過ごしました。現在も大学のテニスサークルで副幹事長として活動しています。

第76回日米学生会議を通して、私は新しいことに物怖じせず、コンフォートゾーンから抜け出すことができる質の高い行動力を身につけることを目標に日々精進しました。

自身の専攻分野である生命医科学とは異なるエネルギー分野に関する、英語を用いた本音の議論は今まで私が経験してきたどの経験よりはるかにアカデミックでハードなものでした。この壁を乗り越えようともがく中で自分自身がこれまで感じたことのない「成長」を遂げることができたと自負しています。その壁を乗り越える経験は、自分一人ではなしえないものであり、何度もぶつかり合ってくれたECや、分科会の仲間の存在によってはじめて達成されたものだと感じています。JASCで出会った沢山の素敵な仲間たちへの計り知れないほどの感謝をここに捧げたいと思います。

▶ 印象に残っている議論

最も印象に残っている議論は勿体無いを定義しようの議論である。自分たちの価値観や経験からもったいない、という言葉はどの場面で使うのか、また定義はどういうものかについて議論した。議論ってこういうものだと感じることでできた回だった。調べ学習がメインで具体性の高いいつもの議論とは一味違った議論ができ終始和やかな雰囲気での議論が進んだのが印象的だった。結論として可能性が喪失する可能性のある状態のことをもったいないと定義した。いくつか自分たちでもったいないと感じるシーンを思い浮かべ、それら全てを包含できるような定義付けをした。ジャスクカムバックの際に学生ならではの視点を生かし、議論している意味を考えながら議論してほしいというお言葉をいただいて振り返ってみた際にこれからの時代を見据えて環境とはということ話すための準備材料として非常に有意義な議論だったと思った。特に、個々の価値観が議論の中でしっかりと表現され、それが他の参加者にも大きな影響を与えたことは、議論の質を高める大きな要因となったと感じた。デリの熱意と真剣さが議論をより充実したものにし、私自身結論の出し方、上手い議論の進め方について学ぶことができたと感じている。

アメリカ側メンバー紹介



第7次エネルギー基本計画に係る基本政策分科会での提言

経済産業省資源エネルギー庁総務課の方々にご招待いただき、7月29日開催の若者団体との意見交換会（非公開）と9月26日開催の基本政策分科会において提言・議論を行った。後者の提言資料・議事録は、資源エネルギー庁のサイト¹⁷よりアクセスが可能である。

また、当ヒアリングは、NHK¹⁸および原子力産業新聞¹⁹によって報道されている。

エネルギー基本計画改定へ若い世代から聞き取り原発めぐり意見

2024年9月26日 15時21分 | 各地の原発

国のエネルギー基本計画の改定に向けた審議会で、学生団体や環境団体など若い世代を対象にした聞き取りが行われ、焦点となっている原子力発電所をめぐって、将来的な廃止を求める声があった一方で、電力の安定供給には欠かせないといった声も聞かれました。

一方、日米の学生でつくる団体からは、電力の安定供給には原発が欠かせず、国として、今後30年は、原発関連の産業が成長していくという将来像を示し、人材育成などを回っていくべきだといった意見も出されました。

審議会では、さらに議論を進め、年内には骨子案を固めたくうえで、今年度中に新しいエネルギー基本計画をとりまとめる方針です。

原子力産業新聞

総合資源エネルギー調査会の基本政策分科会（分科会長＝岡修三・東京海上日動火災保険相談役）は9月26日の会合で、「日本若者協議会」など、6団体からのヒアリングを行った。（配布資料はこちら）

同調査会は、次期エネルギー基本計画策定に向け、5月より検討を開始。これまでに委員からは、次世代を担う若手との議論を求める声も寄せられた。今回、その9回目となる会合に際し、資源エネルギー庁の村瀬佳史史官は、「様々な観点から議論を深めていきたい」と、広範なステークホルダーによる意見の聴取をいとおなじ姿勢を強調。オンライン参加の団体もあり、非常に限られた時間枠でプレゼン・質疑が行われた。

また、1934年結成の日本最古とされる日米協力の学生団体「日米学生会議」代表の富澤新太郎氏は、環境経済やエネルギー安全保障の分野における交流について紹介。日米間相互の合宿研修などを通じて得られた視点として、「わが国は、資源小国だがエネルギー大国として存在することは可能だ」と強調。次期エネルギー基本計画の検討に向けて、「エネルギー産業を成長産業として戦略的に育成」、「複数シナリオを用意して柔軟に目標を設定」と提言した。さらに、原子力発電所事故を受けた「原発は是非か」という二項対立のムードが払拭されておらず、未だに内向きだと懸念。大学における原子力人材育成の課題にも言及した上、産学官の強力な連携を通じ「日米の原子力産業」を成長させる必要性を訴えた。



¹⁷https://www.enecho.meti.go.jp/committee/council/basic_policy_subcommittee/2024/063/063_007.pdf
ヒアリング動画 (YouTube) : <https://www.youtube.com/live/4GIFcZ3rIEs>

¹⁸エネルギー基本計画改定へ若い世代から聞き取り原発めぐり意見 <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240926/k10014592701000.html>

¹⁹総合エネ調 若手団体他よりヒア https://www.jaif.or.jp/journal/japan/24986.html?utm_campaign=shareaholic&utm_medium=twitter&utm_source=socialnetwork

資料4

日本がエネルギー国際競争を勝ち抜くために

「エネルギー大国」日本を目指して

日本学術会議 環境経済とエネルギー安全保障分科会
 環境省(代表) 東京大学国際研究センター
 経済産業省 国立国際総合研究機関
 文部科学省 東京大学国際研究センター
 外務省 経済学研究所
 研究員 京都大学大学院工学部エネルギー学専攻

参考 環境経済とエネルギー安全保障分科会

Environmental Economics and Energy Policy (EEP)

1st Field Trip 1st Joint MTG
 2nd Joint MTG

1st MTG (2018.10.25) 2nd MTG (2019.10.25)

1st MTG (2019.10.25) 2nd MTG (2020.10.25)

1st MTG (2020.10.25) 2nd MTG (2021.10.25)

1st MTG (2021.10.25) 2nd MTG (2022.10.25)

1st MTG (2022.10.25) 2nd MTG (2023.10.25)

1st MTG (2023.10.25) 2nd MTG (2024.10.25)

1st MTG (2024.10.25) 2nd MTG (2025.10.25)

目次

目次

1. 環境経済とエネルギー安全保障分科会
 2. 環境省(代表) 東京大学国際研究センター
 3. 経済産業省 国立国際総合研究機関
 4. 文部科学省 東京大学国際研究センター
 5. 外務省 経済学研究所
 6. 研究員 京都大学大学院工学部エネルギー学専攻

1. 国際競争の基本的立ち場(基本的姿勢)

環境経済とエネルギー安全保障分科会
 環境省(代表) 東京大学国際研究センター
 経済産業省 国立国際総合研究機関
 文部科学省 東京大学国際研究センター
 外務省 経済学研究所
 研究員 京都大学大学院工学部エネルギー学専攻

2. コアメッセージ

日本の産業が国際的に競争力を失い続ける「高エネルギー政策」の設計

日本の産業が国際的に競争力を失い続ける「高エネルギー政策」の設計

日本の産業が国際的に競争力を失い続ける「高エネルギー政策」の設計

3. 投資実行①: エネルギー成長産業として戦略的に育成すべき

投資実行①: エネルギー成長産業として戦略的に育成すべき

投資実行①: エネルギー成長産業として戦略的に育成すべき

4. 投資実行②: 産業シナリオを用いて数値目標を設定すべき

投資実行②: 産業シナリオを用いて数値目標を設定すべき

投資実行②: 産業シナリオを用いて数値目標を設定すべき

5. 再エネには投資可能な機会を示すべき

再エネには投資可能な機会を示すべき

再エネには投資可能な機会を示すべき

6. コスト要因の削減-#1: FITの進め方に注力すべき

コスト要因の削減-#1: FITの進め方に注力すべき

コスト要因の削減-#1: FITの進め方に注力すべき

7. 7. 太陽光は再エネ最大の成長点となる

7. 太陽光は再エネ最大の成長点となる

7. 太陽光は再エネ最大の成長点となる

8. 日9原子力産業もマクロに合わせて成長を目指すべき

日9原子力産業もマクロに合わせて成長を目指すべき

日9原子力産業もマクロに合わせて成長を目指すべき

9. マクロ環境は従来の歴史的な再拡大期に入る

マクロ環境は従来の歴史的な再拡大期に入る

マクロ環境は従来の歴史的な再拡大期に入る

10. 技術者・技術育成支援を強化すべき

技術者・技術育成支援を強化すべき

技術者・技術育成支援を強化すべき

11. 旺盛な市場が投資促進・人材育成には必要

旺盛な市場が投資促進・人材育成には必要

旺盛な市場が投資促進・人材育成には必要

12. 国主導の産業形成戦略の例

国主導の産業形成戦略の例

国主導の産業形成戦略の例

13. 電力安定供給には、重層的な調整力の機能が重要

電力安定供給には、重層的な調整力の機能が重要

電力安定供給には、重層的な調整力の機能が重要

14. 多様な観点から調整力-#1: 貯蔵力の確保を行うべき

多様な観点から調整力-#1: 貯蔵力の確保を行うべき

多様な観点から調整力-#1: 貯蔵力の確保を行うべき

15. 短期電力-#1: 価格をいかに確保するかについての議論を行うべき

短期電力-#1: 価格をいかに確保するかについての議論を行うべき

短期電力-#1: 価格をいかに確保するかについての議論を行うべき

16. 16. 貯蔵力の確保は調整力の確保に重要

貯蔵力の確保は調整力の確保に重要

貯蔵力の確保は調整力の確保に重要

17. LNGの長期的機能が急務である

LNGの長期的機能が急務である

LNGの長期的機能が急務である

18. LNGのリード燃料化により価格安定を促すのが重要である

LNGのリード燃料化により価格安定を促すのが重要である

LNGのリード燃料化により価格安定を促すのが重要である

19. 19. 調整力は調整力に選ばれるとは限らない

調整力は調整力に選ばれるとは限らない

調整力は調整力に選ばれるとは限らない

20. 20. 再エネ導入スピードは鈍化傾向にある

再エネ導入スピードは鈍化傾向にある

再エネ導入スピードは鈍化傾向にある

21. 21. 気候変動の影響緩和も重要な観点となる

気候変動の影響緩和も重要な観点となる

気候変動の影響緩和も重要な観点となる

分科会統括

議論のマネジメントは存外難しいことであつた。知識がなければ自分の意見を持つことも難しく、インプットを下敷にした上で議論する必要があるというのが、昨年 75 回に参加して強く感じた教訓であつた。一方、インプットだけに終始すれば、それはただの「勉強会」であり、ある程度抽象的な物事に対して自分の意見を伝え合い、考えを練り上げるという「議論」の醍醐味からはかけ離れてしまう。ところが、抽象度が高すぎると、いざ会議が終了した時に、自己の成長が一見実感しづらくなり、空虚な感じもしてしまう。

この分科会が 3 月に始まって以来、常々この葛藤と戦ってきた。そして、課題はこれだけではなく、もうふたつの 75 の反省点であつたマンネリ化・分科会の和気藹々とした雰囲気醸成とも奮闘してきた。多読によるインプットを基調としつつ、企画ものとして色々なタイプの議論を行い、毎週どのようなトピックを選べば包括的に環境経済・エネルギー安全保障という広大な分野を一通り掴めるかプランを組み... と、この半年間、この分科会の運営にかけた労力と時間は計り知れない。自分の 2024 年の半分を明確に象徴する出来事であつた。

自分は思い出を美化する方なので、JASC がいざ終わってみると、とても自画自賛したい気分になる。まあこういう時くらいいいかな、と思いながら思い切り自画自賛させてもらおうと、かけた時間の分、デリたちもこの分科会の活動に対してコミットメントを重ねてくれ、終始和気藹々とした雰囲気であり、一方、色々なステークホルダーに会って意見交換をすることができ、質的にも担保された非常に良い分科会ができたのではなかろうか。今現在、こういう気分で見られることに、デリたちと、そして何よりももう 1 人の EC であつた宮本への感謝が欠かせない。色々衝突することもあつたが、最終的に良い形で締められたことに安堵している。

最後に、本分科会の活動を通して、デリたちが少しでも多く何かを学べ、それに満足することができていれば願ったり叶ったりである。この分科会の大事な大事なデリたちが、この活動を糧にさらなる一步を踏み出してくれることを強く願う。そして、僕自身も彼らに負けじと努力を重ねていきたいと思う。

東京大学教養学部理科三類 2 年 富澤 新太郎

第 75 回日米学生会議の反省を踏まえ、地に足の着いた議論の実現を掲げ始動した第 76 回日米学生会議。環境分野における議論は、脱炭素と経済合理性との両立が難しく、結論が非現実的になりやすいため、本分科会では、議論の「現実性」をより重視したが、その「現実性」を追求するうえで、様々なバランスを考慮する必要があつた。

エネルギー分野の知識が豊富な富澤は、事前勉強のマテリアル提供から議論の流れ設定まで、参加者に指針を示して議論をリードした一方、参加者の間では逆に議論の方向性が偏ってしまったり、知識ベースであるがゆえに議論が情報の羅列に終始し、個人のカラーを出せない場面も事前活動中には見受けられたりした。そうした反省を踏まえ、本会議では、各参加者の主体性を重んじ、彼らの経験に基づく抽象的な議論も行えたが、そうした議論が成り立ったのも、富澤を主体に進められた本会議前の事前勉強があつてこそだと痛感している。

また、各メンバーが分科会活動に異なる思いや熱意を寄せる中、それぞれの目標をどうしたら協調できるかについては、ファイナルフォーラムまで模索し続けた部分であつた。本分科会には、富澤含め、分科会活動に特に注力する者が複数在籍し、各々の目標達成を追求する過程において、お互い衝突する場面も多々見られた。それにも関わらず、各参加者及び実行委員の双方において、最終的に納得のいく形でコンセンサスを得られたことは、本分科会で得られたもう一つの成果ではないだろうか。

最後に学術的な視点から述べると、日本のエネルギーセキュリティに力点を置いた日本側に対し、多様なバックグラウンドを持つアメリカ側は、環境問題における南北問題に焦点を当てた。アリゾナ州で税について学ぶ参加者や、気候変動の直接的な影響を受けるエクアドル出身の参加者、本会議前にトゴに渡航した日本人参加者等、それぞれの経験や知識を活かしながら、異なる状況下にある各国が「脱炭素」という世界共通の目標に向けて、どのように歩調を合わせていくのか検討した。実際に本会議では、多彩な国々を巻き込んだことによる妥協への懸念が拭い切れないパリ協定を軸に、議論が繰り広げられ、脱炭素を達成するうえで、避けては通れない南北対立を含む諸課題に向き合い、「現実的」な提案を導出できたのは良かったのではないかと。

国際教養大学国際教養学部国際教養学科 3 年 宮本 希



技術革新による文化・芸術の変容分科会

～文化、芸術が技術の発達と共にいかなる変容を遂げるのかを探求する～

分科会概要

技術革新に伴うデジタルプラットフォームの台頭により、芸術のフィールドは爆発的に広がった。今日、インターネットを通じ、かつてないほどに情報世界に露出されている我々はインフルエンサーという新しい肩書を得たアーティストと日々対峙している。文化、芸術、テクノロジーの融合はトレンド分析を加速させ、人々の行動に影響を及ぼすまでに至った。技術の進化によって文化や芸術の生まれ方や提供のされ方も変わった今、それらは我々にどのような影響を及ぼすのだろうか。また、これらの共有されたデジタル空間は日米関係において新たな文化交流、技術革新、そして国家間の絆を強化する道を見出すツールとなり得るのだろうか。

分科会コーディネーター紹介



小金山 智弘 Tomohiro KOGANEYAMA

所属：慶應義塾大学環境情報学部3年

興味：量子コンピューティング、サイバーセキュリティ

趣味：サッカー、映画

▶ 自己紹介

東京のコンクリートジャングルで生まれ育ち、喧騒とマウンティングの世界で幼少期を過ごしました。私の家庭においてもそれは例外ではなく、人様の目についても恥ずかしくないようにと厳しい教育の下、ゲームやアニメ漫画などに触れず育ち、中学受験を経て開成中学に入学。父の暴力により施設に入った後ニュージーランドの高校に留学させられるなどタフな人生を歩んだように思う。とはいえ、施設での半グレの子達との出会いや留学で培った英語力などはなんだかんだで人生を豊かにしてくれたように感じる。

第76回会議では、インターネットが肥大した現在において日米双方が取れるソフトパワー戦略や、新技術の社会への実装とその影響などを分科会メンバーで話し合った。いわゆるエリート街道を歩んできた人とは違う破天荒な運営についてきてくれた分科会参加者、実行委員各位には感謝したい。

▶ 印象に残っている議論

印象に残った議論としては、現代におけるアートの立ち位置と影響について日本側で話し合ったものがある。アートのオークションに携わるインターンシップを務めている参加者は無論アートに対しての愛があり、アートがなくては人生は薄暗いネズミ色の世界で過ごすことになってしまうと主張していた。一方で、技術専攻の参加者はより冷めた見方をしており、人生の彩りを豊かにするツールよりかは宣伝広告や主義主張をするツールであると捉えており、思想の多様化や市場の流動性を助長するための触媒としてアートの有用性を語っていた。分科会コーディネーターとしてこのような見方に新しく気付かされ、また、この議論が後のアメリカ側参加者との議論につながっていった転換点であった事を振り返り、芸術に対しての重要な視点である事に改めて唸らされた。

分科会の設置意図並びに活動内容

安全保障、環境問題、少子高齢化と日本は様々な社会問題に面しており、これらの問題と向き合いながら世界におけるプレゼンスを維持・向上し、国民の生活の質を担保する一つの切

り口として技術の革新があるだろう。一方で、急速な技術革新は国固有の文化を一変させ、国に根づくルーツやアイデンティティを思わぬ方向に遷移させてしまう懸念もある。本分科会ではその二軸のバランスと相乗効果について探索し、これからの日本の在り方、於いては日米関係というコンテクストでの技術・文化の相互交換の在り方にフォーカスし、学びを深めた。

分科会運営の方針として、属性に応じて文化・芸術チームと技術チームに振り分け、各チームが担当の勉強分野のリサーチ・技術実装を行い、合同ミーティングの際に発表・議題提供をした。また、アメリカ側実行委員の意向を汲み、作品制作を一つの最終目標として掲げ、試行錯誤をする為に事前準備の段階で各自作品プロトタイプを作成した。

主に扱ったトピック（一例）とその詳細

1. ソフトパワー

グローバル化と通信技術の拡大に伴い自国文化の発信をより広い層にアプローチできるようになった。同時に地政学上の不安定さは増し、ソフトパワーの力を用いた外交戦略による安全保障予防の重要性も増した。また、コンテンツの力による経済的利益を見逃せるものではなく、日本はクールジャパン戦略を掲げ、「食」、「アニメ」、「ポップカルチャー」をはじめとした日本の魅力を世界に発信する取り組みを2012年から始動した。当分科会ではそうしたソフトパワーによる日米関係の更なる強化を図る為、ポップカルチャーを相互の媒体によって発信、サジェストする為のアルゴリズムを作成した。

2. 計算機・通信機の歴史

技術が文化に作用するように、文化や歴史的な文脈は技術の発達に多分に作用してきた。この議論では計算機及び通信機がいかに歴史的な背景と共に革新を遂げて行った背景を振り返りながら今後の人類、日米社会が技術といかに付き合っていくかという議論をした。古代ギリシャで作成された最古の複雑な計算機に始まり、現代コンピューターの基盤とされるチューリングマシン、そして macbook の誕生までをおさらいした後、それらの発達がいかに戦争などの外圧によって助長され、社会を変えたかを学んだ。

昨今においては人工知能道義的利活用が話題になっている事から、特にアーティストと人工知能の共生の道について議論をし、アーティストの生み出す価値について再理解を図る機会となった。

3. 文化・芸術史

分科会メンバーにアートオークション企業にてインターンシップをしている者がいた事から芸術史を包括的に振り返り、それがいかなる外圧によって生まれ、さらにその後社会にどのような影響を与えたのかを学んだ。美術が宗教の宣伝広告の枠をでて貴族の繁栄を記録する媒体となった先に生まれたロココ調や、サロンに対抗し、写実主義ではなく感じたものを表現せんと生まれた印象派など社会の変容は芸術にたくさんの影響を与えてきた。

中でもジャポニズムのように異文化が芸術作品の中に取り込まれてマージされる様子に分科会メンバーが興味を持ち、現代の作品の中でも例えば hiphop における featuring などにおいて、異文化同士の相互理解が促進されるキーになると着目した。



本会議中の議論並びにフォーラムでの発表

本会議中の議論を通じ、日米学生間でお互いの関心分野・各サイトの訪問先での学びを共有しあい、最終フォーラムでは「技術活用による音楽産業の発展」についてプレゼンテーションを行った。

まず最初の都市 LA では、「技術が文化・芸術に与える影響」という軸に沿って各々話し合いたいトピックを提案しあった。その結果「ストリーミング配信サービスが楽曲の人気獲得に与える影響」「生成 AI がアーティストの作品作りに与える影響」の2つを話し合っていくこととした。しかし、Midterm Forum にて、2つのテーマに一貫性を持たせるべきという意見を受け、NO では、音楽産業のみに焦点を当てることに決めた。そして最後の都市 DC では、ファイナルフォーラムの本格的な準備に取り掛かった。『ストリーミングサービスのおすすめ機能による選曲の「エコーチェンバー」問題』と『生成 AI が音楽アーティストの制作活動に与える影響』の2つの問題を取り上げることとした。フォーラムでは議論内容とともに、エコーチェンバーを打破するおすすめ機能を実装したものや、人間のみに生成 AI のみ・人間と生成 AI 協働によるアルバムカバーの作品を紹介し、聞き手の関心を惹きつけることができた。

これらの議論を通じて、「文化への理解が米国国内のアジア人差別の軽減に与える影響」「生成 AI による作品の著作権の扱い方」「他国作品の登場人物に対して自己投影ができるか」など、RT の関連テーマの議論を深められた。また、日米間の学生間での議論の進め方やプレゼンテーションに対する考え方の違いによる認識のズレ、言語の壁による意見発出の難しさなどの問題に対して、一緒に改善に向けて協力し合うことができた。その一方で、3 週間・3 都市を巡っての議論で難しかったことは、各都市での発見を活かしながら、技術メンバーと文化・芸術メンバーのそれぞれの知識や能力を活かせる議論のテーマを定めることだ。ファイナルフォーラムのテーマ決めに想定以上に時間がかかってしまい、詳細なテーマの議論を十分に深掘りできなかった点が反省点としてあげられるだろう。

【発表資料（一部）】

The image displays a collection of presentation slides from the conference. The slides are organized into a grid and cover various topics related to the conference's theme of technology and music. Key slides include:

- Revolutionizing Music Through Technology:** A slide with a vinyl record background and the text "JASC78 CULTURE, ARTS AND TECHNOLOGY ROUNDTABLE".
- AGENDA:** A flowchart showing the structure of the event: I. VISION + THEME, II. JASC SITES, III. MUSIC INDUSTRY OVERVIEW, IV. PROBLEM 1: DANGERS OF CULTURAL ECHO CHAMBERS, V. PROBLEM 2: AI ARTISTS CAN REPLACE HUMAN ARTISTS, VI. CONCLUSION.
- Vision + Theme:** A slide with a blue and orange background, stating "Cultural exchange Mutual understanding reduce prejudice" and "Revolutionizing music through technology".
- JASC SITES & HOW THEY INSPIRED OUR THEME:** A slide listing three locations: LOS ANGELES (BERGAMOT STATION), NEW ORLEANS (JAZZ CONCERT), and WASHINGTON D.C. (ARTS CENTER).
- MUSIC INDUSTRY OVERVIEW:** A Venn diagram comparing the music industry in the US and Japan. The US side notes that artists have free social media presence, soloists are more popular than groups, and fan interaction is personal. The Japan side notes that CD sales are bigger than streaming, artists have no free social media preference, groups are popular, and fan interaction is more personal. A central note mentions "Diverse identities" and "Lots of Japanese artists".
- Our Opinion: How do we combat echo chambers caused by streaming services?** A slide with a downward arrow pointing to "exposure to different cultures".
- How do we combat geopolitical fragmentation?** A slide with a downward arrow pointing to "exposure to different cultures" and a link to the CAT Multinational Music Recommendation App.
- Can AI Replace Human Artists?:** Two slides featuring AI-generated prompts for music. One prompt asks for a song invoking the y2k movement of the late 90s and early 2000s with elegant and feminine vibes. The other prompt asks for a song invoking the y2k movement of the late 90s and early 2000s with elegant and feminine vibes, with a nostalgic feeling.
- Generative AI: Pros and Cons:** A slide listing "Pros" (Easy to use, Cheap, Tech is improving) and "Cons" (No copyright, Lack of Depth).
- Our Opinions:** A slide with two sections: "CONSENSUS" (It can be helpful, Hard to keep up, It will impact the future, Driven by Big Tech) and "FUTURE DISCUSSIONS" (How can we protect artists? What should copyright legally protect? What are the ethics and implications of AI? What does human creativity mean?).

日本側メンバー紹介



高橋 美咲 Misaki TAKAHASHI

所属：東京学芸大学教職大学院修士2年

興味：国際理解教育、社会科教育

趣味：旅行、音楽鑑賞

▶ 自己紹介

こんにちは、高橋美咲です。大学卒業後に社会人を経て、現在は大学院で教員を目指して、国際理解教育や多文化共生教育、社会科教育などを学んでいます。現在の研究のテーマは、「子どもたちが異なる価値観を持つ人々と協働して問題を解決するための力を育む教材の開発と授業の実践」です。

今回日米学生会議に参加する中で、国内外の多様な価値観を持つメンバーと意見を交換する場面が数多くあるかと考えます。その中で感じた喜び、感動、不安、焦り、難しさなどは、将来教員になれた際に子どもたちの気持ちや考えを理解したりすることに役立つと考えています。

学生時代は約14年間テニスを続けました。特に中高時代のテニス部での活動が印象に残っています。そこでは、一人では困難なことでもチームで力を合わせれば壁を超えられる可能性が高まることを学びました。一緒に壁を乗り越えてきたテニス部のメンバーとは現在も良い関係が続いています。本会議でも難しいことが多々起こると考えますが、それもRTで一つずつ乗り越え、RTの仲間たちと良好な関係を築けることを期待しています。また、他のRTの仲間達との出会いも貴重なものとなります。他のRTのメンバーとも交流し良い関係を築きたいと心から思っています。

趣味は旅行と音楽鑑賞です。旅行は国内外問わず、行ける時には足を伸ばすようにしています。音楽はJ-POPを聴くことが多いです。特に、宇多田ヒカルとMISIAの曲をよく聴きます。

▶ 印象に残っている議論

最も印象に残っている議論は、生成AIによってアーティストの仕事は本当に減るのかという議論である。議論をしているうちに考えがアップデートされる議論だったため、印象に残っている。

私は、アーティストの仕事は減らないと主張していた。(なお、議論をしてもその考えは変わっていない。)なぜなら、過去において、技術の革新による新たなアートの形が生まれていることを鑑みると、アーティストの仕事内容も時代によって変化していくものであるから、新たな仕事が増える機会となると考えるからである。

そのような主張をした中、あるメンバーから、AIを使って作ったイラストをフリー素材として販売するビジネスがある例が主張された。この例は、一般的に絵を描く技術や感性が長けていると認識されているイラストレーターというアーティストの仕事がAIに肩代わりされている例である。この主張を聞いた時、アーティストの概念が変わる可能性に気づくことができた。つまり、人々に需要のある作品や魅力を感じさせる作品を作ることができるのであれば、絵筆等を使わずとも生成AIを使いこなしてアートを生み出す力もアーティストの技術となりうるのではないかということである。もともとはこの考え方を持ち合わせていなかったため、私の考えがアップデートされる議論となった。

そしてこの気づきから、生成AIがアーティストの代替となるという捉え方ではなく、生成AIをアーティストが活用すること等から、生成AIとアーティストは共存していくものという捉え方ができるようになった。



甲斐 聖人 Masato KAI

所属：国際教養大学国際教養学部国際教養学科3年

興味：統計学、比較宗教学、現代宗教論

趣味：昭和歌謡、ダンス、ドライブ、人間観察、読書

▶ 自己紹介

秋田県にある国際教養大学で現在3年生をしています、甲斐聖人と申します。

屈屈っぽい性格もあり、数多くの曖昧で溢れたこの世界を数字という根拠を持って理解したいという思いから、統計学に関心を持っています。また、尼僧の祖母を持つとともに地元には私の先祖を祀った神社まであり、何かと宗教に関連する境遇で育ったにも関わらず、私は無宗教の立場であり、ただし初詣やクリスマスなどの宗教行事は局所的に楽しんでいるという現状にふと疑問を抱き、宗教学にも関心を寄せるようになりました。

最近の人生のキーワードは「人としての深み」です。私が高校2年生のときに他県のスラムを偶然訪れ、その惨たらしい光景に階層社会の格差や人権といった根深い問題を突きつけられる経験をしました。自分の認知するところの外側に未知の世界が広がっている可能性に17年間も意識を向けることができなかつた悔恨から、それ以来「自分の視野を際限なく広げること」が私の中の確固たる軸となっています。具体的には、将来の行動範囲を広げるべく英語を公用語とする大学に入学したり、世界の実情を探るべく国外のスラムで人々と交流したり、関わる人々の層を学生以外にも広げるべく高校生長期留学派遣事業にて政治家やメディア関係者等の方々との対話の機会を得たり、それぞれの色を持つ日米の他大学の人々と意見を交わすべくこうして日米学生会議に参加させていただいたりなど、その軸を貫きながらこれまで日々邁進してきました。こうして広範な視野を磨く中で、かつて薄っぺらかつた自分に少し「人としての深み」が増したような感覚を覚えています。人間の深みとはどこから来るのか、どのような方法で更に磨きをかけることができるのかを探りながら、これからも楽しく精進していきます。”

▶ 印象に残っている議論

元来技術分野に強い関心があったメンバーと文化や芸術分野に強い関心があったメンバーとが分科会の中で共存している手前、ある程度の時間を知識のインプット作業に割かざるを得なかつたが、各メンバーの熱心なコミットメントにより数多くの有意義なディスカッションを実現できた。私の中で個人的に最も印象に残っているのはアーティストと生成AIとの関わりについて、「生成AIの台頭によってアーティストの仕事は本当に減少するのか？」というトピックでの議論である。私はアーティストの作品に人々が多額のお金を払う動機として、それを作った「人、作り手」に価値を見出しているからだと考え「生成AIが台頭してもアーティストは減少しない」という仮説を立てた。根拠としては、絵画に限らず芸術には全般的に「ブランド力」という概念があり、どのような作品でも「ピカソの」絵画、「TWICEの」新曲、といった具合にブランド力を持つラベルが貼られたものが実際に多くの人々を惹きつけ、注目を集めているように見えるからである。対して他のメンバーは「AIを使用し作ったイラスト素材が販売されており、実際に売り上げを出している」という根拠に基づいて「アーティストの仕事は減少する」という立場をとっていた。それに対して私は、人々がアーティストの作品を購入する際のニーズとして鑑賞に値する主観的な深みや趣などが挙げられるのに対して、人々がAI作のイラスト素材を購入する際のニーズは今欲しいイラストを自分で描くという手間を省くことができる楽さであるという解釈に基づき、アーティストの仕事の残存とAI作イラストの人気は影響し合わないと考え、最後まで立場が変わらなかつた。



関根 奈央 Nao SEKINE

所属：慶應義塾大学総合政策学部3年

興味：アートマネジメント、アートオークション

趣味：K-POP アイドルの推し活、美術館・カフェ巡り

▶ 自己紹介

私は古い・MBTI 信奉者なのですが、特にMBTIはENFJで、主人公と呼ばれます。その判定にあるように、私は自分の人生において主人公意識が強い人間だと思っています...！現在の大学、SFCを選んだのも、自分だけの専攻を作れる、自分主体で自分のステージを作っているところが魅力的だと感じたからです。

まだ未確定な部分もありますが、将来はアーティストサポートをする仕事をしたいと考えており、その目標に向けた活動を色々してきました。学芸員課程の授業を取ったり、文化庁で1か月半インターンしたり、アートをオンライン販売する会社でアルバイトをしたり、美術館でアートコミュニケーターのボランティアをしたり..。また、チームワークに対する苦手意識が強かったので、HLABというjascの卒業生が創業した高校生のサマースクール運営学生団体に修行も積んできました！

これからも主人公意識を持ちながら、やりたいことに純粋に取り組んでいきたいと思います！「面接か!？」と笑われるくらい、人に質問するのが大好きなので、皆さんのお話も聞かせてください！！

▶ 印象に残っている議論

RTの議論の中で、特に印象に残っているのは、春合宿で話し合った、生成AIとアーティストの共存についてです。私たちの分科会には、技術関連とアート・文化関連それぞれの知見をもつメンバーが集まっているため、全員が学びを活かせるように、両者を融合したテーマを設定することにしました。おもな論点として、生成AIの活用がアーティストの制作活動を脅かすか、促進するのか、について話し合いました。私個人の意見としては、制作活動に良い影響を与える、インスピレーションの源となり、より質の高い作品づくりにつながると考えました。一方で、アーティスト（や、その他クリエイター）の代替となってしまう、仕事を奪ってしまうのではないかと、という意見も出ました。しかし、アーティストは制作のモチベーションが自身の中にあるため、雇用に関わらずに制作活動は続けて行くだろうという意見もありました。さらに、技術的な視点からは、生成AIの学習のプロセスにおいて、アーティストの過去の作品を学習する可能性があるため、著作権や、作風の独自性の低減に繋がってしまうという意見も出てきました。このように、技術・アート&文化の両方の視点から議論ができた点がとても印象に残っています。



下小野田 崇仁 Takahito SHIMOONODA

所属：東京大学教養学部理科一類2年

興味：(主) 計算機科学、(副) 金融

趣味：大都市放浪、バスケ

▶ 自己紹介

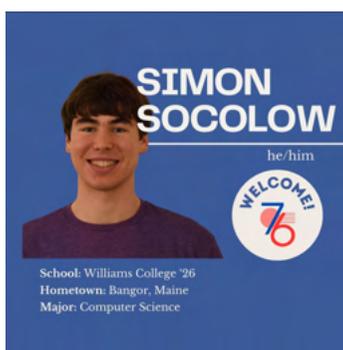
幼少期を鹿児島県で過ごし、小学校入学と同時に上京しそのまま筑波大学附属高校を卒業、東京大学でコンピューターサイエンスを学んでいます。私は、今回の日米学生会議を通じて、スタンスをとる、という態度を自分のものになりたいです。社会問題や真面目な話について今まで

も学校などで話したことがあったのですが、議論しないでも分かる結論や elephant in the room を指摘しない議論などつまらないものが多かったです。今回の日米学生会議の議論では、自分が起爆剤や悪役を買って、議論を面白く進めていきたいと考えています。

▶ 印象に残っている議論

アーティスト保護のために AI を規制するかどうかという議論が一番印象に残っています。現行の法制度では、大企業による AI の学習素材収集についての法規制はありませんが、アーティストの利益の為に法規制をするべきだという意見がありました。それに対し、人もパクったりオマージュしたりして作品を作るが、それは AI による学習と何が違うのかという意見が出ました。これは私にとってとても新鮮な意見であり、AI に対する法規制を整備する前に、人によるパクリやオマージュについてきちんとした基準を作らないといけないのではという考えについて今後考えていこうといった結論になりました。

アメリカ側メンバー紹介



分科会統括

個性的なメンバーがそれぞれの強みを活かし、弱みを補い合った素晴らしいチームであったと振り返る。芸術に素養のある者、コンピューターサイエンスに強みを持つ者、教育者を目指す者、チームワークに重きを置く者のそれぞれが役割を果たし、各々の成長を如何なく促進できたのではないだろうか。

技術と文化芸術というかけ離れた二つの軸に対してもこのチームだからこそ深いところまで探究できたと心から思う。ソフトパワーと技術を用いた表現という難しいトピックにおいてもアメリカ側参加者と英語の壁に怯む事なく議論を交わす様子を見てその頼もしさに感慨を覚えた。

慶應義塾大学環境情報学部 3年 小金山 智弘





社会起業家分科会

～起業による社会変革～

分科会概要

グローバル経済のもとで、企業活動は国境を越えて展開されるようになり、企業の国籍は無意味化した。こうした流れの中で、国民国家では解決できなかった人類に共通する課題の解決主体として、企業価値のために合理的な経営行動をとる企業への期待が高まっている。しかし、それらは利益追求型ビジネスの域を出ていない。そこで本分科会では、既存の枠組みにとらわれず社会に蔓延する理不尽の解消を目的として業を起こす社会起業家の姿を日米の社会起業家のケーススタディを通して検討する。企業として持続可能な利益を上げることと、人々や環境に対する支援をどのように両立するのか、なぜ起業による変革なのか、日米から世界へ目を向けつつ、ともに議論し、探究する者を歓迎する。

分科会コーディネーター紹介



福井 達於都 Taoto FUKUI

所属：慶應義塾大学法学部3年

興味：会社法

趣味：食、映画、音楽

▶ 自己紹介

慶應義塾大学法学部3年の福井 達於都です。

昔から答えのない問題を考えることが大好きで、大学では暗号資産やM&Aなど最新の技術で規制の態様が定まりきっていない領域にどのように対応していくかを検討してきました。

課外活動においては、時々に関心に基づき①模擬国連②教育系ベンチャー、広告代理店、シンクタンク、コンサルティングファーム、NPOの計5つの団体での長期インターン③日米学生会議を含む2つの国際交流団体の企画運営に力を入れて参りました。

第76回会議においては、営利、非営利双方の団体において長期インターンを行う中で直面した社会課題解決と企業価値の向上の両立をいかに両立するかを素敵な8人の仲間と検討してきました。

▶ 印象に残っている議論

最も印象的だったのは、HLABの高田さんをお招きして行った「社会起業家のエンドゲーム」に関する議論です。社会課題の解決を目指す社会起業家は、課題が解決された瞬間にその存在価値を失います。つまり、社会起業家にとってのエンドゲームは、自分自身が消失することに他なりません。これは一見当たり前のことのようにですが、社会起業を志す私たちにとっては、キャリアのどこかで直面せざるを得ない複雑な現実です。この議論を通じて、社会起業について深く考え、「社会起業が不要な社会」を築くことを目指す活動の真価を垣間見ることができました。

分科会の設置意図並びに活動内容

2022年6月、岸田内閣において『新しい資本主義のグランドデザイン及び実行計画～人・技術・スタートアップへの投資の実現～』（以下グランドデザイン）が閣議決定された。グランドデザインの社会課題解決領域においては、「社会的起業家への投資、官民ファンド等によるインパクト投資の推進」が掲げられた。またこのグランドデザインの前文に記載されている「新し

い資本主義を実現する上での考え方」では、『多くの社会的課題を国だけが主体となって解決していくことは、困難である。社会全体で課題解決を進めるためには、課題解決への貢献が報われるよう、市場のルールや法制度を見直すことにより、貢献の大きな企業に資金や人が集まる流れを誘引し、民間が主体的に課題解決に取り組める社会を目指す必要がある。』と謳われている。

すなわち政府は社会課題解決のため公共セクターを拡大させるのではなく、民間セクターの創意工夫、資金を活用するといういわば「市場志向型の社会課題解決」を目指していることがわかる。社会起業家は社会課題解決のための鍵を握る存在であり、端的に例えるなら、社会起業家の重視とは「社会課題解決の民営化」ということができる。

こうした背景から、その重要性が飛躍的に高まりつつある「社会起業家」を志す学生たちのキャリアにおける深い洞察を得られるような機会を提供し、将来の日本社会に対する長期的な還元を目的に本分科会を組織した。活動は、通常の議論に加え他分科会に比してケーススタディを重視する形で展開した。具体的には、週一回の定例ミーティングに隔週で多様な領域、地域における社会起業家や、社会起業家の支援を行う民間、行政の団体など幅広い方々を招き議論を交わした。ゲストスピーカーがいない回においては、文献調査を行なった。

主に扱ったトピック（一例）とその詳細

1. 社会起業家の役割と限界

社会起業家がどのように市場や政府の失敗を補完するかについて取り上げた。自由市場の限界により、収益性の低いと見られがちな社会問題には企業が参入せず、行政も財政的・人的資源の限界に直面している。その狭間で問題に立ち向かう存在として社会起業家が登場した。これにより、従来のボランティア活動では不可能であった、ビジネスモデルを活用した持続可能な解決が期待されている。しかし、社会起業家も全ての問題を解決できているわけではなく、社会性と事業性の両立の観点から棄却される問題とどう向き合うかが議論された。

2. 官民連携と社会起業家による地域活性化

社会起業家が、地域社会の問題を解決にあたって、官民連携を通じて地域活性化を図る役割を担っていることを取り上げた。特に地方における人口減少や高齢化といった問題は深刻であり、これらの課題に対して社会起業家が行政や企業と協力し、新しいビジネスモデルを導入することで、持続可能な解決策を提供している。たとえば、農業の後継者不足や買い物弱者支援といった課題に対して、社会起業家がイノベーションを持ち込み、官民連携を通じた課題解決が試みられている。しかし、首長に依存する地方自治体の体制や、予算の持続可能性の問題があり、これが社会起業家の活動を妨げる要因となっている。このため、持続可能な官民連携エコシステムの構築が必要だという議論がなされた。



本会議中の議論並びにフォーラムでの発表

本会議では、日米の社会起業家のケーススタディをもとに、社会起業家とはなんたるかを問い直すところから始まった。1回目のロサンゼルスサイトのフォーラムでは、日米の社会起業家のケーススタディから、導き出される一般的な社会起業家が抱えるジレンマを概観した。2度目のフォーラムでは、大きく二つのパートに分け、前半では社会起業をより身近に感じてもらう工夫としてピッチという形式を採用し、実際に参加者たちが本会議で目の当たりにしたホームレスというアメリカで深刻化する社会課題を社会企業という形でいかに解決していくかを例示した。後半では、1回目のフォーラム同様に一般的な社会起業家が抱えるジレンマについて参加者がどうそれを克服しようと考えているのかといった点について示唆に富んだ指摘がなされた。

【発表資料（一部）】

The presentation slides are organized as follows:

- Slide 1:** Satomo logo and title slide.
- Slide 2: Problems in Foster Care**
 - Diagram showing a Foster Home with issues: Lack of connection, Neglect, Abuse.
 - Adulthood leads to: 50% become homeless, Criminal Activity, Delinquency, 80% Face Mental Health Issues.
- Slide 3: Problems vs Solutions**
 - Problems: Consequence in Lack of connection, Difficulty in identifying abuse/neglect.
 - Solutions: Chat functionality with other foster children, Direct contact to caseworker.
- Slide 4: Business Model**
 - Target: Foster children and foster support system.
 - PPP Framework: Public-Private-Partnership with local government.
 - Revenue: Premium features and ads.
 - Goal: Changing young generations for the future.
- Slide 5: Local Government Business Model**
 - Local Government (翼友) supports Foster Child.
 - Business Model: PPP Model (Private-Public-Partnership).
 - Stakeholders: Biological Parents, Foster Institution/Foster Parents, Case Worker.
- Slide 6: Information Access Chart**

| | Foster Child | Biological Parents (depending on contact order) | Foster Parents / Institutional Workers | Caseworker |
|---------------------------------|--------------|---|--|------------|
| Chatting | ✓ | | | |
| Sending Gifts | X | ✓ | ✓ | X |
| Buying Stationery / Backgrounds | X | ✓ | ✓ | X |
| Location Sharing with Family | ✓ | X | X | X |
| Event Notification | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ |
- Slide 7: Revenue**
 - Advertisements: Allow targeted advertisements on the platform like WhatsApp.
 - Premium | Gift Features:
 - a. Premium features: stickers, stamps.
 - b. Monetary gifts: similar to LINE Pay, etc.
- Slide 8: Future Scalability**
 - Short: Improve online system chat/gifts, Provide in-person events.
 - Long: Foster children can go into society with stability and without any issues.
 - Transition to Adulthood
- Slide 9: Why Satomo?**
 - Problem: Homelessness.
 - Key Areas: Affordable Housing, Foster Care, Addiction, Unemployment.
 - Solutions: Revise Case Studies on Social Enterprises, Original Pitch Deck.
- Slide 10: Midterm Forum Case Studies**
 - Irodori:** What competitive strategies should social enterprise take? How can cooperation with local government and social enterprise improve?
 - Toms:** How do social businesses change from their original mission? How can we avoid a for-profit moving from its social mission?
- Slide 11: Challenges of Social Entrepreneurship**
 - Market: Quality depends on target.
 - Sector Constraints: Some sectors are less suited for for-profit enterprises.
 - Financial: For profits depend on promising returns on investment.
 - Mission Integrity: Balance with profitability and social impact.
- Slide 12: Our Principles of Social Entrepreneurship**
 - Feasibility
 - Sustainability
 - Innovation
 - Scalability
 - Social Impact
 - Sense of ownership

日本側メンバー紹介



藤木 果蓮 Karen FUJIKI

所属：慶応義塾大学法学部法律学科4年

興味：経済法

趣味：食、写真

▶ 自己紹介

慶応義塾大学法学部4年の藤木果蓮です。

大学では主にビジネスコンテストとに力を入れてきました。複数の大会に参加する中で、公共政策・M & A 戦略・ブランディングなど多様なトピックに触れ、専攻や言語の異なる人とチームアップすることができました。チームで試行錯誤しながらアウトプットを考えることが楽しく、ビジネスコンテストは大学卒業後の進路を決定する上での原体験となりました。

大学最終学年である今年度は「学生であること」の価値をもう一度考え直し、大切に過ごさなければならないと考えています。

▶ 印象に残っている議論

最も印象に残っているのは「社会起業家が抱えるジレンマ」についての議論である。社会起業家は、ビジネスを通じて社会課題を解決する事業体として定義されている。「社会性と事業性の両立」は社会起業家の特質であり、ボランティアや一般企業と事業目的が大きく異なる点である。しかしフィールドトリップや分科会 MTG を通じ、社会性と事業性は本当に両立可能なのかという議論が生まれた。

障害福祉事業を展開しソーシャル IPO を果たした株式会社 LITALICO の成澤さんからは、上場企業として株主からの要請に応えることと、社会起業家としての公益価値の最大化を両立することのハードルの高さについてお話いただいた。HLAB の代表を務める高田さんからは、事業拡大する中で本来の社会的使命から遠ざかってしまい、社会起業家としての精神性を維持することが難しいとの言及があった。

分科会で扱ったケーススタディの中にも、事業性を優先したために社会性の独立が脅かされる場合や、社会性に注力するあまり活動の持続可能性を失う場合が存在した。分科会では、社会性と事業性、二つの志向性の矛盾を整理しどのように克服できるのかについてさらに議論を進めていきたい。



北原 真悠 Mayu KITAHARA

所属：芸術文化観光専門職大学芸術文化・観光学部4年

興味：地方創生、演劇と観光、平和への歩み

趣味：韓国ドラマを見ることとペンでスケッチすること。

▶ 自己紹介

昨年の韓国留学以来、私は世界が直面する課題に対して興味を抱くようになりました。韓国の中央大学校演劇専攻に1年間交換留学していた時のことです。教授の「演劇は現代社会の鏡であり、人類の苦悩や欲望、不完全さを浮き彫りにする装置である」という言葉が胸に響いた経験から、国ごとの政治思想の歴史の変遷や移民の増加による人口動態の変化が社会に及ぼす影響を深く理解したいと考えるようになりました。

国内社会が多様な文化背景を持つ人々で構成されることは、分断なき社会に通じると考えら

れる一方で、多様性が高まるほど関係が悪化する印象があります。私たちは違いを認め合い、協調できるのでしょうか。私はそれは可能であると確信します。

その確信は、中学時代、武蔵野東中学校での混合教育と創作ダンス部での経験に基づいています。同校では健常児と自閉症児が共に学び、お互いの違いを理解し合う「友愛」の精神が根付いていました。自閉症児と過ごすうちに、私たちを隔てる障がいという境界線が薄れていきました。彼らの素直で前向きな努力に感化された経験は、今もなお志高く生きる上での動機づけになっています。また、創作ダンス部では、全国中学校創作ダンスコンクールで最優秀賞を受賞しました。巧拙を問わず、部員全員で作品を創ることに価値を見出し、それぞれが違う形で作品に貢献しました。

高校進学後は、国際バカロレアコースで授業が英語となり、自分の言いたいことを上手に表現できない難しさを経験しました。同級生と不得意な科目を補い合い、共に探求精神を持ち続け、切磋琢磨した日々は私たちをかけがえのない絆で結びつけました。

こうした経験から、違いを持つ人々が対等に扱われ、自らの役割を全うすることが、社会環境をより豊かにすると考えるようになりました。

1期生として大学進学後、私は初代学生会会長として2年間にわたり学生文化の形成に尽力しました。その経験を通じて、多様な意見を持つ学生同士が一緒に考えることの重要性に気付かされました。

▶ 印象に残っている議論

分科会の中で最も印象に残っている議論は、BOP 戦略は新興国に対して社会的価値を提供できているのかについての議論である。そもそも、BOP 戦略は「Bottom Of the Pyramid」、つまり社会の最も低所得層を対象とするビジネス戦略を指し、低所得者層が持つ市場規模とそのニーズの多様性にビジネス機会の可能性を見て計画されるものだ。BOP 戦略自体は、低所得者が必要とする製品やサービスを与えるため、利便性や衛生面における社会的価値を提供できるという意見が多数あった。一方、その国の企業ではない多国籍企業が自国内に入り、商売をすることが自国民が自発的に起業する機会を奪うものではないのかという批判も上がった。最も、この指摘は「社会的価値」とは何かという根本的な問いかけにもつながることだと考えた。なぜなら、どんな企業でも雇用を生み出し、人々が働くことを通じて経済的安定を得られること自体に社会的価値を見出すことも出来るため、個人の倫理観に影響を強く受けるものだと分かる。つまり、この議論の設問自体に誰の倫理観のもと評価するのか、という設定を行う必要があり、更にその提供を客観的に数値に表現するとともに功罪を見極めることが必要であることが明確になった。低所得者を対象とした BOP 戦略は社会的価値を持つとする意見には賛成する点もあるが、その社会的価値を企業の成果報告だけでなく、企業が域内に進出することで影響を受けた語られない人々の暮らしをも調査する必要があると考えた。



大矢 玲菜 Rena OHYA

所属：国際教養大学国際教養学部2年

興味：国際関係論、米中半導体貿易

趣味：香水と旅行とディズニー

▶ 自己紹介

誰かが日本は消滅すると言うと、なら海外へ行けばいいという。日本の衰退を日本人が諦めてどうするのか。そんなもやもやを抱えたのが中学生の頃でした。愛知県で生まれ育った私が初めて国外に出たのは、高校1年生。アメリカを知ろうと参加したインディアナ派遣です。そこでは大学中心の都市形成にわくわくした一方で日本文化の伝道経験を通じて日本の歴史文化の独自性を強く意識し、日本が大好きになりました。

そして私は日本経済を国際視点で学びたいと秋田県の国際教養大学に進みました。勉学に励む一方、地方課題に直面することになりました。ヒッチハイクか熊が出る夜道を歩くしかないという極限状態から、特に地方公共交通の衰退に強い課題意識を持ち、1年生の5月にライドシェア事業を発案、12月に県から400万の支援を頂き、現在運輸局と連携し20名でシステム開発及び事業を立ち上げ中です。

私は経験と対話から学びを得る人間です。事業運営に関しても人を巻き込むことで成長しました。他者の価値観を学び、忌憚なく表現し合うことで、自己内省を深めることが出来ます。自分の価値観が変わった時期には必ず尊敬する人がいて、苦しい時期があって、励まし会える仲間がいます。だからこそ多様なJASCerとの関わりは私の大きな転機であり一生の宝物になるのだろうと感じています。”

▶ 印象に残っている議論

私は課題解決手段として社会起業は正しいのかという議論が印象に残っている。社会起業は奨励すべきであり素晴らしい。という意見は、社会起業家が行政もボランティアも届かなかった課題を解決してくれる良い存在だという理解に裏付けされる。これは社会起業家自身が強い意志を持って行動する原動力になり、周囲が支持してくれるためにも大切だ。しかし、善良な存在として社会起業家を全肯定することは出来ない。というのも、社会起業家のビジネスチャンスは社会課題であり、そこにいる人々の苦しみだからである。「社会起業家が存在する」というのは、世の中に課題があるということであり、誰かがそこで苦しんでということだ。さらに、社会性を優先しているかのように見せかけて、本当は営利追及に重きを置く場合もある。もしかすると、社会起業家が居なくなった世の中が1番素晴らしいのかもしれない。この議論を通して、自分達のテーマが表裏一体なものであり、肯定から入らない大切さを学ぶことが出来た。



眞継 竜太郎 Ryutarō MATSUGI

所属：九州大学農学部生物資源環境学科2年

興味：食品衛生学・水産増殖学

趣味：釣りやキャンプなどのアウトドア・友人との食事

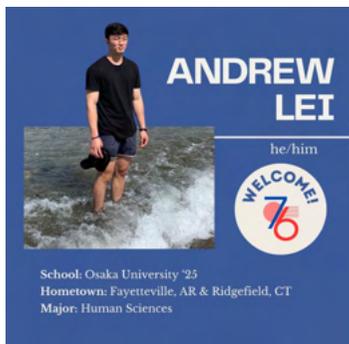
▶ 自己紹介

私は、「日本と世界の懸け橋」として世界を牽引するようリーダーになりたいと思っています。昨年、フィリピンに留学した際様々な国の友人が出来ました。彼らと就寝する前に夜な夜な、社会問題や宗教、文化などバックグラウンドの異なる友人と話し自分がそれまでに持っていた観念が根底から崩れました。この経験が大変楽しく、そのような議論をもっとしたいと思い今回JASCに応募しました。本会議期間中は、日本参加者だけでなく米国参加者とも寝食を共にします。議論の時間だけでなく、議論の時間外でも積極的に議論に参加し日米双方にとって有意義な学びを発信していけるよう取り組みたいです。

▶ 印象に残っている議論

私たちの分科会では毎週テーマを決めて議論を進めてきました。その中で最も印象に残っている議論は、BPOビジネスに関するテーマを集めた議論でした。BPOとは、途上国のBOP層にとって有益な製品・サービスを提供することで、当該国の生活水準の向上に貢献しつつ、企業の発展も達する持続的なビジネスです。BPOビジネスは「開発途上国の支援」につながるものなのか「起業家にとって都合が良い」から行われているのか、その議論を扱った時が非常に難しかつても愉しくもありました。結果的には、二者を選択する形ではなく複合的な結論を導きましたが、その過程の中で官や民など様々な視点から考えました。この議論では一つの視点ではなく複数の視点から考えることの大切さを学んだものでもありました。

アメリカ側メンバー紹介



分科会統括

「社会問題の解決と経済成長の両立」という、美しい理想のもとで語られる社会起業家の現実、決して光だけではない。その道は多くの困難と葛藤に満ちている。それでも、彼らは社会の期待に応えようと、全力でその使命に向き合い続けている。

約半年間、参加者たちは現役の社会起業家や関係機関の協力をもとに、「社会起業家」と真摯に向き合い続けた。その過程で得た学びは、ただの知識を超えて、彼、彼女らの胸に強く刻まれた事だろう。このことから、分科会の設置意図として掲げていた「社会起業家」を志向する優秀な学生に、キャリアにおける深い洞察を与えるという目的は大いに達成できたと考える。

そして何より、設置意図として明確に掲げていたものではないが、参加する皆が、互いを「生涯の仲間」と認識できるような良い関係性を構築して欲しいという私の願いがこれ以上ない形で叶ったことを何よりも嬉しく感じている。

それを象徴するのが、ニューオリンズのある日の夜の出来事だ。分科会のメンバーが偶然ダイニングに集まり、これまでの印象の変化や、お互いの好きなど、時には苦手だった部分まで率直に語り合った。その時、ある参加者が、「達於くんが目指していた仲の良い分科会をつくるという目標はもう叶っていると思うよ」と声をかけてくれた時の計りしれない感動は生涯忘れることはない。

会議の終わりに、参加者全員で肩を寄せ合い、涙を流しながら食べたピザの味、温かく優しい笑顔、その全てが一生色褪せることなく私を支えてくれる糧となった。

稀有な能力を持つ心優しい参加者の皆の人生が、この先も、ずっと、一点の曇りなく、暖かい光で溢れるものとなることを願う。本当にありがとう。

慶應義塾大学法学部3年 福井 達於都





福祉と倫理分科会

～現代社会における個と集団のウェルビーイング～

分科会概要

「健康で文化的な最低限度の生活」が意味するものは、環境によって大きく異なる。本分科会では、個人・集団のウェルビーイングと私達が下す選択、行動、政策を導く倫理観の関係を多面的に探究していく。具体的には、医療・経済・社会的正義・持続可能性・動物愛護など人間のみに限定されない様々な角度から「福祉」とその背景にある「倫理」的枠組みについて掘り下げ、議論を行うことが想定される。あらゆる角度からインプットしたのちに、最終的には現代社会が直面している問題に立ち向かい得る策をアウトプットできることを期待する。また、机上の空論で完結しない白熱した議論を作り上げられる参加者を歓迎する。

分科会コーディネーター紹介



佐野 百美 Momomi SANO

所属：早稲田大学国際教養学部 4年

興味：文学

趣味：散歩

▶ 自己紹介

早稲田大学国際教養学部4年の佐野百美です。

大学2年次の交換留学中にJASCについて知り、応募しました。私自身、海外で過ごした経験は長いものの、同年代の学生と様々な分野について白熱した議論を繰り広げられる環境が新鮮で楽しく、第76回会議の実行委員に手をあげました。

実行委員になってからは、紆余曲折はありながらも実行委員はもちろん、参加者とも仲を深めつつ充実した会議生活を送ることができたと感じています。

分科会の設置意図並びに活動内容

少子高齢化、移民、医療費など、現代の日本に存在する「福祉」にまつわった問題は多くある。日本とアメリカで根本的な福祉に対する考え方が大きく違う中で、一つ共通して使用できるツールとして倫理があると考え、当分科会を設置した。

参加者の興味関心をはじめとしたあらゆるテーマ(例：障害者支援、人道支援、保険制度、犯罪者の社会復帰など)を活動の中では扱った。また、タイムリーなニュースも扱うことが多くあった。

主に扱ったトピック(一例)とその詳細

1. 日米の行政における構造的な違い

本分科会では、日米を比較した上での議論をすることが多くあった。その中で、一つ学びとしてあったのが、人の生活にかかわる様々な支援や枠組みが州で大きく異なり、州がもつ権限についてである。人工妊娠中絶や保険システムなどについて議論する中で、このような違いに触れることで、日米で行政の機能やその基礎にある哲学について学ぶことが出来た。

本会議中の議論並びにフォーラムでの発表

本会議中、本分科会では以下をはじめとした幅広い内容について日米の学生で議論した。

1. 米国内でのホームレス問題に対する州ごとの対応
2. 薬物依存症の蔓延、それに対する官民両方の取り組み
3. 障害者や低所得者に対する支援
4. 医療保険と税制
5. 災害復興支援
6. 環境倫理と人権
7. 性的マイノリティの権利保護
8. 刑務所制度、中でも教育制度・医療について
9. 死刑制度

フォーラムにおいては、ミッドタームではLAで過ごした期間を通じて向き合った「ホームレス」について発表を行った。日本と比較しホームレス人口の多い中で、その背景にある住宅危機や薬物依存症などについても言及した。さらにはプログラムで訪れた Los Angeles LGBT Center の取り組みを通じて学んだ包括的な支援の必要性についても発表し、ホームレスに陥りがちである当事者に対する住宅支援や医療提供についても触れた。

ファイナルフォーラムでは mass incarceration 「大量投獄」とテーマとし、日本には存在しない民間刑務所の有害性や日米での「罰則」における倫理観の違いについて触れた。それらを踏まえた上で、人種・国籍・性別などにより刑罰が異なる現状があることに對し犯罪を犯した人/その容疑がある人の処遇を具体的にどう変えていくべきなのかを説明することができた。

【発表資料（一部）】

The presentation slides are organized as follows:

- Slide 1: Mass Incarceration (大量投獄)** - Welfare and Ethics Roundtable. Includes a diagram of a prison cell.
- Slide 2: Contents** - A circular diagram showing the relationship between Mass Incarceration, Punishment, Marginalized Groups, Laws and Policy, Prisoner Treatment, and Racism and Discrimination.
- Slide 3: Welfare and Ethics relation** - Discusses government's role in providing aid, health, and happiness, and the impact of mass incarceration on society.
- Slide 4: USA -punishment-** - Discusses discrimination and bullying in federal, state, and private prisons. Includes an image of a book titled 'AMERICAN PRISON'.
- Slide 5: Japan -rehabilitation-** - Discusses comprehensive and strict control of daily activities, general improvement guidance, and special remedial guidance.
- Slide 6: U.S. Laws: Story of Neal Scott** - Discusses Deterrence Theory, Politics of Prosecution, and Policing.
- Slide 7: Japan Laws: The creep of injustice?** - Discusses racial profiling and includes a bar chart showing the percentage of foreign people in various categories.
- Slide 8: Education in Prison** - Discusses the importance of education for prisoners and includes a quote from Article 36 of the Prison Law.
- Slide 9: Reforms U.S.** - Discusses laws such as 'Three Strikes' and 'Truth in Sentencing', and the need for reform.
- Slide 10: Reforms Japan** - Discusses police check policy, welfare policies, and community-based rehabilitation.
- Slide 11: How to Tackle Racial Disparities Within the law?** - Discusses implementing mandatory educational training and commissioning government workers to inspect the justice system.
- Slide 12: Welfare and Ethics relation (continued)** - A flowchart showing the relationship between Equality, Mass Incarceration, Humanity, and Support.

日本側メンバー紹介



トラウト 凜 Rin TROUT

所属：群馬大学医学部医学科3年
興味：医療制度や福祉法の国際比較
趣味：スポーツ、旅行、読書

▶ 自己紹介

日本で生まれ、2歳から9歳までアメリカのメリーランド、テキサス、ミシシッピで暮らしたのち帰国し、小学校4年生から現在までずっと日本で暮らしてきました。新潟の高校を卒業後国際基督教大学に進学し、2年後に群馬大学医学部医学科に編入し、現在は医学科3年生です。ICUでは国際関係学を中心に学び、医学部でも国際医療ボランティアサークルに所属していて国際社会における日本の役割を考える中でJASCへの参加を決めました。本会議で行くLAとニューオーリンズは初めてなのでその州独特の風土を体験することはとても楽しみです。そして小学校はバスケ、中学から現在までテニスを続けていてアクティブなことが大好きです！スポーツ観戦も好きでメリーランドに住んでいたころからアメフトのBaltimore Ravensを応援しています！12年ぶりにアメリカに行くので不安もありますがJASCを通して沢山の学びと体験を得て一生続く友情を築きたいです！

▶ 印象に残っている議論

最も印象に残った議論は日本とアメリカの医療保険制度の比較とどのモデルが良いかという議論である。日本は国民皆保険制度を導入し、すべての国民は医療保険に加入することが制度化されているのに対し、アメリカはMedicaidなど貧困層にむけたセーフティーネットはあるものの、国民の大半は自ら医療保険を契約し、納入する保険料に合わせて医療保障がバラバラという実状がある。一見日本の制度のほうが全国民の医療アクセスが保証されており制度として良いように見えるが、議論を通して、「高齢化が進むなかで国がすべて負担することは財政破綻を招きかねない」という意見が出た。さらに医療を進化させるためには一定の研究予算や製薬会社の収入が必要であり、アメリカは高額な医療費によってそれを賄っており、アメリカが新薬開発数世界1位であることなどを支えているという意見もあがり、それまで自分にはなかった視点であったためとても興味深かった。このトピックに関連したFTで日本医療政策機構理事でJASCのOBである乗竹亮治さんに講義をしていただいた際に、アメリカのindividualismや強い資本主義思想などといった文化的背景がこれに寄与していると学び興味深かった。最終的にどちらの国の医療保険制度が優位という考察を出すことはできなかったが、多様な視点からの意見がたくさん出され、自分の考え方が大きく変わった議論だった。



谷川 陽音 Harune TANIGAWA

所属：京都大学医学部人間健康科学科3年
興味：医学、生物
趣味：スポーツ観戦、ドライブ、ミュージカル鑑賞

▶ 自己紹介

大学では医学、生物について勉強しており、脳科学、特に本能の存在や逃避行動の起こるメカニズムにと地域医療における医療DXの導入に関心があり、日々勉強しています。

高校の時に模擬国連に参加したことがきっかけで、自分の意見を論理的に発言できるように

なりたいと思い、大学では分野を問わず様々な活動に参加しています。それらの活動の中で、社会の中でマイノリティが取り残されない社会構造をつくることを目標としたいと思いました。特に、障がいのある子どもも平等に教育を受けられる環境をつくる必要があると考えます。目に見えない障がいが増えていると言われていた中で、そのような人をサポートし、社会の架け橋になることが社会の中で求められています。自身の高校時代に聴覚過敏で授業を思うように受けられず苦しんだ経験を生かしながら、このような目標を実現したいと考えています。

そのために、日米学生会議では海外での福祉制度やそもそもの障がい者をはじめとする社会的弱者に対する考え方を学ぶとともに、多様な意見を受け入れながらチームとして合意形成を行う貴重な経験を得たいと考えています。

▶ 印象に残っている議論

日本版 DBS についての議論が印象に残っています。日本版 DBS が出され、新たな社会システムとして構築されつつある中で、そのシステムが妥当であるのかどうかを考え、引いては社会的弱者である子どもを守るためにはどのようにするのが適当であるかを考えることが目的でした。

DBS 法は、子どもを性犯罪から守ることと、犯罪の再犯抑止に対して効果が期待できます。しかしその一方で職業選択の自由がなくなる点などをはじめとする懸念もあります。

我々の議論では、3つの意見が出ました。①日本版 DBS に対して賛成の意見、②日本版 DBS を導入するべきではないという意見、③日本版 DBS では不十分であるという意見です。

特にその中でも、子どもへの性犯罪に対して他の罪に比べて重い罰を与えるのは妥当であるかどうか、という議論と DBS は再犯を抑止するためのものであるが、再犯以上に初犯を防ぐための政策を行うべきではないか、という議論が印象に残っています。この議論の中で、それぞれの経験や価値観の違いによって、こんなにも多種多様な意見が出ることに驚いたとともに、加害者の権利と社会的安全性をどう天秤にかけ、だれがそれを判断するのかという点に難しさを感じました。



野添 葉音 Hanon NOZOE

所属：上智大学総合人間科学部社会福祉学科1年

興味：社会福祉・ディーセントワーク・ダイバーシティ経営・医療福祉

趣味：食べること、音楽鑑賞、読書、グリーティングカードを集めること

▶ 自己紹介

高校一年生の頃に日米学生会議の存在について知り、その国際的な議論の場に対する憧れを抱き続けてきました。一方で海外経験がない自分にとって、このような場は程遠い存在でした。そんな中、福祉と倫理に焦点を当てた分科会が開催されることを知り、「第76回のチャンスを逃すわけにはいかない」という思いから、応募いたしました。私は、聴覚障がいがある母の存在をきっかけで社会福祉に関心を持っております。福祉に関するヒアリングをはじめ、就労支援フォーラム NIPPON 基調講演や学生団体にて啓発活動を行ってきました。最近では、アメリカでインクルーシブ教育や Google 等で実地調査に参加し、障がい福祉事業開発に携わっています。私は、今までの経験から政策と現場の間には大きな乖離があることを痛感しています。また、福祉は単に「保護」の対象ではなく、物理的や経済的な面に限らず、他者の支えを受けながらも自己決定を行うこと自体が自立であると考えております。そのため、分科会では、他者・自分の力という二者択一ではなく、自己実現のためにどのような社会関係が必要なのかを問い続けていきたいです。そして、障がい者の自立生活運動が始まった地、アメリカで多様なバックグラウンドを持つ学生が一堂に集う本会議でこそ、新たな視点から福祉の在り方を模索できると思っています。そして、人との出会いは自身の人生観を構成し豊かにするものである

からこそ、将来はJASCでいただいたご恩を様々な形で社会に還元していきたいです。

▶ 印象に残っている議論

最も印象に残っている議論は、日本版DBSについて話し合ったことだ。なぜなら、性犯罪者を排除するのではなく、治療と社会復帰支援を重視するアプローチが印象的だったからだ。日本では、刑務所内や保護観察所で矯正治療プログラムが整備されているが、性障害を対象とした治療や支援の専門機関はまだ少ない。ホルモン療法も保険適用外であり、これらの点は大きな課題だと感じた。さらに、性犯罪者の再犯防止には認知行動療法や薬物療法などの治療が重要だという見解について議論を重ねた。その中で、子どもに対する性的嗜好は変わりにくいため、物理的に子どもから離れる環境を作ることや、行動に移さないための治療が重要だという考え方に共感した。一方で、単に治療という選択肢を出すことへ違和感を覚えた私にとって、じっくり議論できた性犯罪者の権利と被害者保護のバランスについても興味深かった。私は、治療と復帰支援の重要性を認識しつつ、加害者が再犯を防ぐための対策が必要であり、その実現のためには数々のジレンマに向き合う必要があると学んだ。そして、性犯罪者の社会復帰支援に関わるのは、専門家に限らず、メゾ、マクロ、ミクロで社会と地域、人々をつなげていく包括的な支援が必要だと痛感した。例えば、イギリスではNPOの協力で、刑務所を出所した性犯罪者を地域のボランティアがサポートする活動が行われている。このことから、加害者への注意や監視だけでなく、ボランティアや地域社会の支援を通じて、包括的な支援の実現こそ大切だと考えた。そして、一度犯した罪を更生できないものと見なすべきかという議論では、多くの葛藤があった。一度過ちを犯した者の社会復帰支援を行うことは、一人のかけがえのない権利を保障するためには重要である。一方で、被害者の気持ちを100%理解することができない自分の無責任な発言にも葛藤を感じる場面があった。その議論の過程で重要だと気づいたことは、様々な立場に置かれる当事者の視点で考えることである。議論が進んでも、また根本に戻って潜在的な部分から話すという繰り返しで結論を見つけることが極めて難しい話題ではあったが、このプロセス自体に意味があったと実感している。なぜなら、一つの側面しか見ていなかったら見落としてしまうであろうジレンマにも気づき、各々が意見を述べた過程によって議論に深みを持たせることができたからだ。医学と法学を学ぶメンバーたちの独自の視点を生かした鋭い意見のおかげで、表面的な問題に留まらない議論を繰り返し続ける時間となった。



イビネディオ 嶺 Ray IGBINEDION

所属：明治大学法学部法律学科3年

興味：法学部、民主主義とその要因について

趣味：読書(好きな本は「資本主義、社会主義、民主主義」)

▶ 自己紹介

アイデンティティーの問題は私の行動の根幹となっています。

日本とアフリカの血を受け継ぐ自分にとって、片方で生きることはもう片方を抜きには語れません。生来日本で過ごしてきたことは自らを日本人として意識することに繋がるわけではなく、むしろアフリカについて強く意識させることとなりました。差異は様々な疑問を想起させ、その原因を強く知りたくなったのは大学一年の頃でした。

大学二年時にはアメリカ政治と民主主義の問題点を理解するため、UC Berkeleyへ留学しました。これにより制度は必ずしも普遍的なものではないと学び、また先進国と途上国間の非対称性に興味を持つきっかけとなりました。

現在はアフリカにおける権威主義、法の支配に内在する脆弱性が地域的紛争と貧困の要因であると考え、法学や政治経済学的な観点から理解と解決に向けて学びを続けています。

▶ 印象に残っている議論

アメリカにおける福祉政策 (保険制度改革が中心) の議論が印象的であった。

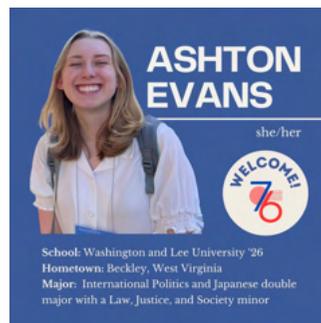
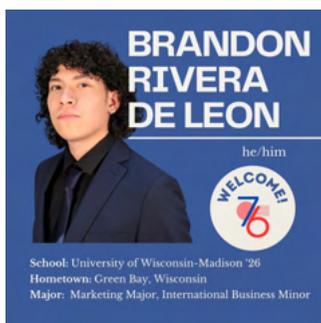
オバマケアを代表とするように、民主党およびリベラル層下では国民皆保険 (メディア、メディケイド拡大) というセーフティネットの創出が試みられてきた。対して、共和党は議会を通して法案を否決し、このような試みを阻止してきたという歴史がある。

福祉政策の拡大による行政国家化に否定的な意見は、「経済は国が介入せず、自由で開放されている方が効率的」「コストの増大を賄うために増税がなされ、経済成長を阻害する」という主張に依拠している。

たしかに、社会は経済と不可分ではあるが、しかし同一ではない。例えば、所得が不平等である社会において経済は効率的とはいえず、政治的な不安定性も増大する。アメリカのような多元的かつ深い歴史を持つ社会においては、セーフティネットによる貧困率の削減が人種間の差別を解消させることが期待できる。

分科会では、ある共同体に存在する倫理規範に従って福祉が実行されると定義した。しかし、保険制度改革には不平等を是正するべきという共通の倫理規範が存在するかと問われれば、必ずしもそうではないだろう。むしろ、各人が自己の将来を案じることで、福祉の実行が許容されていると考えられる。結論として福祉政策にコストを割くことは望ましいと再確認したが、この議論には各政策や倫理を見ていくなかで、度々立ち戻ることとなるだろう。

アメリカ側メンバー紹介



分科会統括

限られた活動の期間の中ではあったものの、当初の分科会設置意図であった「個人・集団のウェルビーイングと私達が下す選択、行動、政策を導く倫理観の関係を多面的に探究」することはできたと感じている。

議論の中では、個人の体験についても共有し、それを起点として議論をすることが多かった。そのため、幅広いトピックをカバーする中で、参加者にとって自分に身近なこととして感じながら議論を進めることができたように思う。

また、理想論を語るにとどまってしまうがちなトピックであったときも、現状をみつめ課題の洗い出しを丁寧なすることで現実に落とし込めし込められそうな解決策を編み出すことができたのではないかと感じる。

早稲田大学国際教養学部 4年 佐野 百美





社会運動と人間心理分科会

～個人と社会の交差と変容～

分科会概要

個人の思考、感情、行動は社会によってどう影響を受けているのだろうか。また、個人は社会にどう影響を与えられるのだろうか。本分科会ではこの問いを軸に人間の内発的变化と社会の変化による外発的影響の対比から、個人が社会でどのような役割を担っているのかを様々なケーススタディを通して検討する。想定されるトピックには政治的観点から日米の市民活動やプロテスト文化の違い、社会心理的観点から社会的容認と個人のニーズの衝突、歴史的観点から巢鴨プリズンやアメリカの日本人収容所などを取り上げ、文化的観点から言語の基盤の違いを考察する。これらの観点を学際的にインプットした上で、独創的かつ質の高い議論をアウトプットする。

分科会コーディネーター紹介



バック キャスリーン 光 Kathlene Hikaru BUCK

所属：国際基督教大学教養学部アーツ・サイエンス学科

興味：国際開発、経済学、社会心理学

趣味：友達とご飯、小旅行、アニメ、寝ること

▶ 自己紹介

国際基督教大学3年のバックキャスリーン光です。

幼少期の大半をアメリカで過ごし、高校入学を機に日本に移住しました。高校で参加していた準備方ディベートを通じて社会課題に関心を持ち、大学では国際開発学を専攻しています。日米学生会議の活動の他には、イギリスへの留学、フィリピンでのボランティア活動、駐日大使館でのインターンに参加してきました。これらの活動を通じて多くの同年代の大学生と交流してきましたが、中でも日米学生会議というコミュニティで出会えた人たちはとてもアクティブで、それぞれの専門分野の中で強い課題意識を持ちながらも、他分野の議論に対しても積極的に参加する向上心のある人が多いと思います。日米学生会議での出会いからは多くの教訓を学び、一連の活動を振り返ると、私にとって大きな転換点となったと感じています。

▶ 印象に残っている議論

私が特に印象深かった議論は、社会運動の条件についてのものでした。さまざまな種類の社会運動を図表化して分類するというテーマで話し合った際、それぞれが前提としている「社会運動」の定義に違いがあることが明らかになりました。この発見を契機に、ある活動が社会運動と見なされる条件についての議論が発展しました。もちろん、「社会運動の定義」はすでに社会学など多くの分野で議論されており、私たちも分科会の初期の段階で多くを参考にしましたが、各メンバーが自分なりの社会運動像を言語化する過程で、具体例を挙げつつ線引きを模索しました（例：国会議員の選挙演説、一人スタンディング、選挙での投票、企業の商品を買わないと他人に伝える行為、チャリティ、生存そのものなど）。知識の差が初期段階の分科会の課題の一つではありましたが、この議論を通じて社会運動に関する多様なイメージを共有することで、各メンバーの議論への貢献の方向性を探るきっかけとなり、後の議論の土台を築く重要な一歩となったと考えています。

分科会の設置意図並びに活動内容

社会の動きと人間の内的な動きや本能・習性の相互作用に焦点を当てる意図から、「社会運動と人間心理」と言うテーマに行きついた。各デリが議論したいトピックを持ち込み、それぞれの専門分野や体験談から議論に貢献することができる議論好きの集まりのような分科会を設定したいと考え、このようなテーマ設定に至った（実際 RT 時間外でも頻繁に議論の延長をグループ LINE で繰り返すほど議論好きが集まったと思う）。また、余談になるが、「social movements」は日本語で「社会運動」と訳されるが、英語ではより広義な「社会の動き」を指すこともあり、狭義の「社会運動」に議論テーマを限定しないようにした。こうすることで、特定のトピックへの議論疲れや飽きがある程度抑えることができたと考える。

基本的に週一回の RT 時間では、事前に資料（本、論文、ドキュメンタリー、映画など）に目を通したうえで、その資料の感想と論点を共有し、共通の議題や面白いと思った議題をもとに自由に議論を展開した。毎週の RT 時間では、その日の議論を軽く振り返り、次回のテーマや事前資料を計画することで、メンバーの議論したいトピックを網羅しつつ、議論の方向性を微調整する工夫を行った。

主に扱ったトピック（一例）とその詳細

1. 沖縄基地問題

かつて日米両政府の方針で沖縄の人々との調整に当たった「防衛施設庁」に関するドキュメンタリーと沖縄の辺野古沖地盤改良工事の国代執行についての記事を土台に議論は沖縄への基地負担の集中や沖縄の基地問題に対する沖縄と本土の温度差の議論に発展していった。特に論点として上がったのは、沖縄の現地住民の現状における米軍基地に関する本音はどのようなものなのか、基地負担を沖縄に集中させたままで良いのか、沖縄の観光地的な側面しか着目せずに基地問題を知ろうとしない本土にいる人の特権性などである。中でも印象的だったのは、「沖縄の安全保障上の重要性を理解した上で、重要だから基地を沖縄に置いておけばよいとって沖縄側の視点を無視するのは思考停止なのではないか」と言う観点である。春合宿ではこの議論の論点やメッセージを再度整理した上でプレゼンを行った。

2. 「エリート」とは、エリートが社会運動に参加する意義とは

「エリート」に関する談義は様々なテーマの中で繰り返し取り上げられた。最初に話題となったのは、総合型選抜入試は教育機会格差の是正に有効かと言うテーマで、「エリート」の条件についてだった。学歴、収入、品位や教養、影響力、社会的ステータス、家柄、など様々な条件やそれらの組み合わせが論じられた。また、エリートが社会運動に参加する意義に関しても議論が行われ、エリートによって導入される資源が運動の勢力拡大に寄与する利点や、運動の商業化が運動の目的達成に与えるネガティブな影響などについて話し合った。さらに、これら以外の議論の場でも、JASC の参加者であるという自分たちの社会階層上のポジショナリティについても言及される場面が多かった。



【春合宿の発表の様子】



本会議中の議論並びにフォーラムでの発表

本会議の最初では、日米の参加者がそれぞれの国における社会運動の実態と特徴を共有し合った。議論は、政治体制、歴史的観点、規模、アクター、アクティビズムの形態、社会からの反応など、さまざまな視点から日米の社会運動の違いを可視化することを目指した。その後、社会運動に関するイメージや参加への抵抗感について、実際に全デリ（日米両方）にインタビューとサーベイを実施した。調査では、社会運動に参加した経験があるか、なぜ参加に抵抗感を感じるのか、社会運動についてどのようなイメージを持ち、そのイメージはどこから来るのか、といった点をインタビューした。そのデータを基に、メディアの影響や社会運動の効力に関する考察を行い、議論を深めた。

【発表資料（一部）】

Analysis of Social Movements & Experience: Insights from Our Interviews

Yui Akahori, Rika Bando, Leya Eginor-Nardi, Sam Helman, Riko Kobayashi, Kei Midorikawa, Taylor Wild

How many delegates participate in social movements?

| Country | Yes (%) | No (%) |
|---------------------------|---------|--------|
| American delegates (n=16) | 62.5% | 37.5% |
| Japanese delegates (n=22) | 54.5% | 45.5% |

Differences in the Form of Social Movements They Joined

| Form | American (%) | Japanese (%) |
|----------------|--------------|--------------|
| Protests | ~65 | ~35 |
| Boycott | ~25 | ~15 |
| Lobbying | ~15 | ~10 |
| Sharing on SNS | ~35 | ~45 |
| Petition | ~15 | ~60 |

What Topics of Social Movements Do Delegates Think About?

| Topic | American (%) | Japanese (%) |
|-----------------------|--------------|--------------|
| LGBTQ | ~45 | ~55 |
| Palatine | ~45 | ~55 |
| Feminism | ~35 | ~45 |
| BLM | ~35 | ~45 |
| Climate issues | ~25 | ~35 |
| Economy | ~15 | ~25 |
| Civil Rights Movement | ~15 | ~25 |
| Disability | ~15 | ~25 |

What kind of images of social movement do delegates have?

| Image | American (%) | Japanese (%) |
|--------------|--------------|--------------|
| Marches | ~75 | ~85 |
| Protests | ~75 | ~85 |
| Social Media | ~45 | ~55 |
| Lobbying | ~25 | ~35 |
| Boycott | ~25 | ~35 |
| Petitions | ~25 | ~35 |

Reasons Why Amedeles and Japadeles Join Social Movements

- Amedeles (n=11)
 - Wanted to spread awareness 7
 - Personal reasons 3
 - Joined social movements for their friends 2
 - Social pressure 1
- Japadeles (n=10)
 - Due to the influence from parents/friends 2
 - Personally affected by certain issue 2
 - Certain issue affects people close to me 1
 - Argument was aligned with his/her idea 1
 - Believing it's within the changeable scope 1

How has SNS Influenced Social Movements?

- SNS allows social movements:
 - To collaborate globally
 - Amplifies the voices of those not heard
 - Accelerates the speed of movements

Are social movements ineffective or powerful?

Some Japadeles think social movement is ineffective

It's not entirely meaningless, but it is not very cost-effective.

「意味がわからないが、費用対効果が悪い」

I'm not sure how much value it actually has; I think other methods might be more effective. (どれだけ意味があるのかわからない、他の手段の方が効果的だと思う)

The return value of participation is low. (リターンが少ない)

Amedeles not involved in social movements did not state effectiveness as a reason

Are social movements ineffective or powerful?

Historical Political Structure Environment

"I have been growing up in Japan since my childhood and have only spent time with people who are just like me."

自分自身も海外から日本に来て育って、自分と同じような人ばかりで過ごしてきたので。

- Joint Movement (学生運動)
- Multi-party system Long term government by LDP (自由民主党)
- People have less opportunity to face diversity

日本側メンバー紹介



翠川 溪 Kei MIDORI

所属：東京大学大学院公共政策学教育部公共政策学専攻修士2年

興味：公共政策学、国際関係論

趣味：歌唱、旅行

▶ 自己紹介

東大の大学院修士2年、翠川溪です。僕は「居心地のいい場所（コンフォートゾーン）を意識的に抜け出す人間」でありたいと想着いて、現にそうあるつもりです。趣味の鉄道旅行もコンフォートゾーンからの脱出かもしれません。旅行自体、知らない場所を訪ねるというのですが、特に鈍行列車で行くことに意味があると個人的には思います。全く知らない街で通勤・通学する人たちと同じ電車で揺られているとき、自分の外の世界を強く感じるのです。これは新幹線や飛行機では味わえない感覚です。

留学したのも、日本という居心地のいい母国から抜け出す経験をしたというのが一つの理由でした。今のところその達成度は半分くらいです。正直、韓国は「半」コンフォートゾーンという感じがします。韓国人と容貌がほぼ同じゆえに疎外感は小さく、文化が似ていて心労も少ないからです。それに比べるとアメリカという180度違う国に行ける日米学生会議は、今度こそ完全なる未知の世界に踏み出す絶好のチャンスだと捉えています。全く文化の異なる米国社会の中で、そこで育った米国人と議論を戦わせることはストレスフルな体験でしょう。しかしそのストレスを恐れずに自分の意見を伝えることができれば、自分の殻を破れると信じています。それを期待して日米学生会議に参加しました。

▶ 印象に残っている議論

最も印象に残っている議論は犠牲者意識ナショナリズムに関するものである。これは米国での本会議および韓国研修を前に、米国と韓国、さらには現在の世界全体に通用する議論である犠牲者意識ナショナリズムを理解するために行った。

論点は4つ：①日米における犠牲者意識ナショナリズム、②犠牲者意識ナショナリズムによる外交上の弊害、③犠牲者意識ナショナリズムはどのように終わらせられるか、④「加害者」側から二項対立を批判する難しさ。

①では、何故日本において米国に対する犠牲者意識ナショナリズムが高揚しないのかを議論した。天皇制を維持した米国の占領政策や教育の影響ではないかという意見があった。また当時の日本人は自分たちの加害行為に罪悪感を抱えていたことを示すインタビューもあった。②では犠牲者意識ナショナリズムが加害者を被害者にしてしまうことや、被害者に潜在している加害者性を批判する余地を奪うことが、被害者性を強調する外交戦略に結びついているという意見が出た。③では犠牲者意識ナショナリズムが消滅した過去の事例を探したが、難しかった。④では上野千鶴子が韓国の慰安婦やその支援者たちから批判されたエピソードを参考に、「加害者」側から加害一被害の二項対立を批判することの難しさを確認した。総じて、日本の「加害者」性を意識しつつも、「加害者」と「被害者」双方の主張をそのまま受け入れずに冷静に問題を見る視座を得られた議論だった。



小林 りこ Rico KOBAYASHI

所属：慶應義塾大学総合政策学部総合政策学科 4年

興味：社会学、ジェンダー論

趣味：読書、アーチェリー

▶ 自己紹介

私は「誰も取り残さないで社会を変えるには」という問いを持ち、慶應義塾大学総合政策学部にて、ジェンダーを取り巻く不平等に対して声をあげてきた人々の歴史を研究しています。

これまで様々な角度から、誰も取り残さない社会のあり方を探求してきました。高校時代には模擬国連に打ち込み、国際問題に一国の大使として向き合うことでその複雑性を学びました。スポーツに参加する機会を障害者やジェンダーの壁を越えて広げるためのソーシャルビジネスの立ち上げに挑戦したこともあります。また4年前には高校生向け研究プログラムを立ち上げNPOとして法人化し、地方を含めた全国の高校生に研究に挑戦する機会を届けています。現在は主に研究というアプローチで、誰も取り残さない社会のあり方を学術的に探求しています。



坂東 璃加 Rika BANDO

所属：早稲田大学政治経済学部国際政治経済学科 4年

興味：国際関係論、日本と中東諸国の関係

趣味：好きな曲をのんびりピアノ演奏すること

▶ 自己紹介

千葉県生まれ千葉県育ちの21歳。中高は部活動のバレーボールに打ち込んでいたが、友人が参加していた模擬国連への興味から国際政治に関心を抱くようになり大学は国際政治を専攻することにした。大学では模擬国連サークルに加入すると同時に国際NGOの学生インターンに関心を持ち、1年間参加した。1年のインターンを終えた後、イスラムの実情を現地で学びたいという思いを抱くようになり初の海外トルコに10ヵ月留学した。女性の社会的地位に関心があった私は現地ですでたムスリムの友人達に女性のみがヒジャブを被ることに対する違和感の有無を質問していた。しかしこれらは彼女らの信条の否定になりうると指摘を受け、無自覚の一方的な持論の押し付けを反省した。来年度外務省入省が決まった身として、日米学生会議の本会議を通して、根本的な社会問題解決に必要な不可欠な柔軟な思考力を身につけるべく議論に全力で挑む所存だ。

▶ 印象に残っている議論

社会運動は誰によって起こされるものなのか、またエリートは社会運動に参加すべきなのかという議論が最も印象に残っている。労働運動を取り上げた回には、マルクスが規定しているような労働者と資本家という区分で議論したが現在の社会における区分の仕方はジェンダー・セクシャリティーや人種、宗教など多様なはずという意見が出てきた。またエリートの参加に関しては資源動員論の観点から社会運動を立ち上げ拡大させていくために必要不可欠であるという意見が出ていた。私はエリートの定義の仕方にもよると思うが、企業など社会的影響力が強い団体を巻き込むのであればその団体の方針や思想に社会労働自体が影響を受けて目的が曲がってしまう可能性があり、慎重になるべきだと考えている。一方で社会運動を継続的に行い社会変革に至るまで規模を大きくしていくには、社会的影響力を持つ団体や人を巻き込むことも必要なので、目的を曲げることなく活動し続けられるようこの二つの問題のバランスをとった社会運動を進めることが必要とされているのだと思う。



赤堀 結 Yui AKAHORI

所属：慶應義塾大学法学部政治学科 2 年

興味：政治学、教育、格差

趣味：サップ

▶ 自己紹介

大学では、教育格差の是正について政策という観点で探求したいと思い政治学科を選びましたが、文理問わず様々な分野に関心があります。これまでに、「エシカル消費をめぐる人々の意識」と UTokyoGSC というプログラムを通じて「オートファジーによる免疫異常」という関係のない 2 つの研究を遂行してきました。正解が一意に定まらない問いに対峙したり、日々の研究活動や学会発表で多くの方と対話を重ねたりすることで、論理的であるからといって正しいとは限らないこと、科学は絶対的に、正確で客観的なプロセスではないことを学びました。

大学に入ってからサークル活動として競技サップを始め、日々川での練習に励んでいます。また、教育格差の問題に対して学術的な側面からアプローチするだけでなく、実際の現場に触れる機会も大切だと思い、児童養護施設での学習支援活動に参加させていただいています。JASC での活動でこれらの経験が生かせるのかは未知ですが、活動中の振り返りでは意識しながらつながりを考えてみようと思います。

▶ 印象に残っている議論

日本における社会運動の忌避感、嫌悪感はどこから生じるのかという議論が興味深かった。デリ各々が社会運動をどのように捉えているのかを共有した後、議論を展開していった。自身の政治的スタンスを表明することに対する抵抗感があるのではないかということ、SNS で社会運動を抑圧するような言動が注目を浴びていること、社会運動に参加する責任の捉え方などが論点に上がり、様々な要素が社会運動に対する忌避感につながっていると考えられた。今後、アメリカ側との議論を通じて社会運動に対する認識はどのように形成されるのかを考察していきたいと思う。

アメリカ側メンバー紹介

LEYRA ESPINO-NARDI
she/her
WELCOME!
76
School: Johns Hopkins University '25
Hometown: Hollywood, Florida
Major: East Asian Studies and History double major.
Music minor

SAM HELMAN
he/him
WELCOME!
76
School: Wake Forest University '27
Hometown: Columbia, South Carolina
Major: Statistics Major.
Japanese Language & Culture Minor

TAYLOR VILD
she/they
WELCOME!
76
School: Washington and Lee University '27
Hometown: Garfield Heights, Ohio
Major: Anthropology and Biochemistry double major

分科会統括

事前活動の中で、日本側だけの有意義な議論の実績やノウハウがあり、それが本会議中の議論に良くも悪くも影響を与えた場面が見受けられた。また、分科会における方針の違いやコミュニケーションミスなど、いくつもの困難に直面したが、それでも最後まで気づいたことや感じたことを正直に面と向かって意見を交わし合える分科会だったと感じている。それは、事前活動での議論や共同生活を通じて築かれた信頼感、そして各メンバーの優しさや他者を尊重しようとする姿勢のおかげだと思う。多様な議論を通じて各メンバーのバックグラウンドや考え方を知り、毎週、第一線で興味深い議論に触れられたことは、この分科会の実行委員としての特権だったと感じる。

個人的な話をすると、私が実行委員業務の中で辛い瞬間は何度もあったが、それでも続けられた理由の一つは、この分科会やメンバーの存在であったことは間違いない。本当に社会運動と人間心理分科会のメンバー全員に心から感謝している。

社会運動は、歴史的にも将来的にも、日米両国を考える上で重要な要素だと考えている。もし、社会運動と人間心理分科会に所属することで、またはこのインタビューを受けることで、少しでも社会運動について自分ごととして捉え、何らかの形で向き合うきっかけになったのであれば、分科会設立者としてこれ以上の喜びはない。

国際基督教大学教養学部アーツ・サイエンス学科3年 バック キャスリーン 光





表現と規制分科会

～「 」～

分科会概要

表現において自己の中にある意図全てを他者に伝えることは出来ない。さらに言語の違い、法律、フレームワークといった様々な規制を得て表現は変容する。本分科会では、人間によるあらゆる表現及び、それに伴う規制の存在に注目し、議論を構築する。日常「会話」により生まれる疑問、表現の自由の存在、芸術や言語の違いから日米の表現方法の違い、人間による表現の潜在的動機。知識、経験、考え方、全てを議論において等価値の要素と認識し、特異な環境・経験の中で、多様な価値観をもとに幅広く「表現」を捉え、議題を見つけ、深く思考し、またそれを表現し、己の表現の変容・誕生を楽しむ者を歓迎する。

分科会コーディネーター紹介



志田 夏音 Natsune SHIDA

所属：岡山大学工学部工学科環境・社会基盤系 2年

興味：建築

趣味：散歩、華道

▶ 自己紹介

岡山大学工学部 2年の志田夏音です。

出身は徳島県ですが、大学進学を機に岡山に引っ越しました。現在は大学院進学を見据えながら大学での専門分野の勉強に励んでいます。現在はコンクリート設計や土質力学といった学問を学んでおり、来年からは興味分野である建築設計をより深く学ぶことが出来るため、今からとても楽しみです。特に木造建築に興味がありますが、日米学生会議を通じて様々な場所の建築物を見たことで、他の建築様式にも興味が広がっています。実際に見ること、感じることを出来るだけ多く経験したいので、現在は、大学の勉強を第一優先にしつつも、いくつか他分野に小さい挑戦をしている最中です。

分科会の設置意図並びに活動内容

人間の行動の根源ともいえる表現に着目することで、特定のトピックや時代に囚われることが出来ない環境で議論を行うことを設置の意図としてあげる。また、表現とともに規制を議論のテーマとしてあげることで分科会に立体感を持たせた。

活動内容としては、本会議前までは日本側として本分科会の世界観を作成しつつ、並行して以下 FT を開催した。7月中旬より、対立から生まれる議論の深まりを求め、ディベート方式を用いて議論を行った。ディベートのトピックについては、下記に記した通りである。

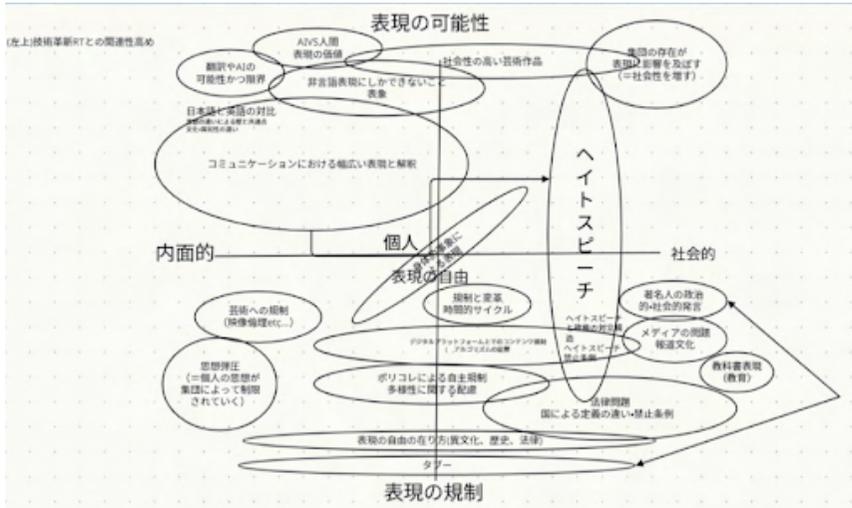
【議題(ディベート形式)】

- 表現とは大衆に開かれたものであるべきか？それとも排他的なコミュニティ内では過激な表現を許すべきなのか？
- ポリコレと表現の自由(多様性、過激性)のせめぎあい、時代と空間の影響をどのように受けているのか？
- TikTok 規制において、アメリカは表現の自由をとるべきか国家安全保障をとるべきか。

主に扱ったトピック（一例）とその詳細

1. 表現になりえない沈黙とは？

春合宿までに上図の横軸を境に上部と下部に分け、詳しく表現と規制の世界を作り上げていた。下部に関して詳しく議論を進める中で、トピックとして「沈黙」という表現に焦点をあてた。上部に関しても大変興味深い議論が為されたのだが、ここでは量上、表現になりえない沈黙のみを取り上げる。議論の末に表現になりえない沈黙として、沈黙の規制、沈黙の強制の2つをあげた。



2. TikTok 規制において、アメリカは表現の自由をとるべきか国家安全保障をとるべきか

最初にアメリカの TikTok 規制に関する資料集めを行った。TikTok をアメリカが規制したい理由、他企業が実際に他国に利用者情報を漏洩していた事例、この規制が及ぼす影響などを個々に調べて共有し、その上で米国側参加者にも意見を聞いた。翌週、①表現の自由を優先すべき (2名)、②国家安全保障を優先すべき (2名)、の2つに分かれてディベートを行った。ディベートでは、安全保障上のリスクがどの程度存在するのか、アメリカが利用者に果たすべき説明責任など、多くのテーマに関して議論を行った。その後、各自の本来の意見を共有し、議論をさらに深めた。



本会議中の議論並びにフォーラムでの発表

歴史は繰り返す。特に負の歴史に関してはなおさらである。

歴史の負の循環を克服し健全な未来を実現するには「表現」の役割が欠かせない。過去の記録から学び、過ちを繰り返さないための教訓を与えてくれるからだ。しかし、表現には常に劣化や歪曲の可能性が伴う。このような規制による悪弊を防ぎ歴史の正しい継承を促すのが、他者への共感である。他者への共感により、異なる時代や社会的背景を生きた人々の表現を自らの心で受けとめることができる。(負の循環を断ち切るべき日米の歴史のひとつは太平洋戦争である。しかし、戦争経験者との世代間ギャップやナショナリズムによる偏った表現など、課題は山積している。)

また、負の歴史の中で生まれた表現が未来を切り拓いた例として、人種差別からの開放という文脈で誕生し世界中に広まったジャズを挙げることができる。しかし、消えぬ人種差別や伝統の表面的な継承など、今も様々な規制が存在している。さらに、アイヌ文化の保存も課題を抱えている。アイヌの人々による「文化の内部保存」と日本による「外部保存」の健全なバランスをいかに保つかが最大の論点である。

歴史の健全な循環には、他者への共感をはぐくむ教育の役割が極めて重要である。JASC はまさにその一例であり、国籍や背景の違いを超えた議論や体験を通して共に学ぶことで、日米が歩んできた歴史や文化に対する理解と共感を深め今と向き合うための機会が提供されている。私たちは今、過去を振り返り、未来に進むことを求められている。

発表資料 (一部)

The Role of Expression in History
Expression & Limitation XLRT

History repeats.

Jazz Music

WW II (Pacific Theater)
In order not to repeat the tragedy in WW II, history cycle plays an important role.

| Limitation on Experience | Limitation on Expression | Limitation on Records |
|--------------------------|--------------------------|-----------------------|
| Modification | Generation Gap | Nationalism |

Ainu Culture アイヌ文化

| Limitation on Records | Limitation on Expression | Limitation on Experience |
|-----------------------|--------------------------|--------------------------|
| Verbal language | Cultural integration | Generation gap |

Preservation of Culture

Internal preservation ↔ External preservation
Power imbalance ↔ Collaboration
stereotype, misunderstanding etc...

Toward a Brighter Future

JASC & Education

1. JASC cultivates empathy.

2. The "Cyclic Vision" 循環視.

3. Vision: perspectives reflected from the past together understanding, contributing for the future.

Thank you.

日本側メンバー紹介



佐藤 知穂 Chiho SATO

所属：早稲田大学政治経済学部政治学科 4年

興味：国際政治経済学

趣味：旅行・ドラマ

▶ 自己紹介

私が JASC に参加した理由は、学生生活最後の年だからこそこれまでの学びを糧に挑戦したいと考えたからです。私は高校時代、フィリピンの児童養護施設を支援する NPO に参加し、国籍や年齢の壁を越えた出会いと協働に大きな刺激を受けました。活動に打ち込む中で NPO の可能性に魅了された一方でその脆弱性も実感したことがきっかけで、大学時代は NPO へのコンサル支援を行う学生団体で活動してきました。議論を重ねて自分達なりの論理構築と検証に基づいた提案をつくりあげる過程は楽しく、成功と挫折の全てが成長につながったと考えています。JASC においても、今このメンバーで思考を尽くすことでしか得られない成果を目指したいです。そのなかでも表現と規制を選んだのは、私にとって大きなモチベーションのひとつが「ことばが好き」という思いだったからです。人が心から伝えたいことを届け、受け手の心を動かすことばの可能性と、選択と工夫が凝縮された表現の魅力を追求したいという気持ちが常に私を動かしてきました。その思いで取り組んだのが、学園祭の広報部門の活動です。学園祭公式の名義で発信される全ての文書・広報文を校閲する立場で、より「よい」表現の在り方とその限界、そして規制をつくる意義と向き合ってきました。ことばの可能性と限界についてより高い視座でみるとどのような問題が見えてくるのか、JASC の活動を通して深めていきたいです。

▶ 印象に残っている議論

私が RT 内で一番印象に残った議論は、表現のボーダーをいかに設定するかという議論である。何が表現であり何が表現ではないのか、ということ掘り下げていくなかで私たちが直面したのは、1) 独りよがりの表現は表現でありうるのか (=表現者がそれを表現だと思っていればそれは表現なのか、受け取り手がそれを表現だと思っていれば表現なのか) 2) 表現者と受信者は生命、非生命、人間、どのような分類ができるのか 3) 意思をもって表現をしなければ表現とはなりえないとすれば、無意識の行動はどう解釈されるのか という3つの課題であった。これらの課題に向き合っていくにあたって私たちが取った手法は、表現のボーダーとなりうる具体的な仮定・事象をひたすら挙げていき、それらを通してボーダーに対する解像度を上げていくというアプローチであった。たとえば(1)については一人カラオケ、無観客のライブ、火星で一人で生活する映画「オデッセイ」、2)については人々の心に訴えかける神木、ペットと飼い主の対話、3)については無意識の鼻歌、散歩、眠りから起き上がった時の意識状態など、様々なグレーゾーンが挙がるたびに議論が複雑さを増した。しかし、抽象的な課題に対し具体的に落とし込んで検討を重ね、それを最終的には一般化したボーダーに昇華させるという一連の議論が、表現と規制という広範で抽象度の高い世界を今後縦断していくうえでの根本的な支えとなったと考える。



石上 諒 Ryo ISHIGAMI

所属：創価大学理工学部情報システム工学科4年

興味：経済理論の社会実装

趣味：旅行、映画をプロジェクターで観ること

▶ 自己紹介

友人からはありがたいことに、他者貢献のための強烈な向上心の持った人間だと言ってもらえています。自分としては、正解のないこの世界で自分の力で正解にしていくこと。その過程で迷ったら楽しい方を選ぶ。最終的に自分の中で絶対コレだ！という意見に至った瞬間、成長が止まってしまう。最後に死ぬことだけがかすり傷だ、とかをよく感じながら日々挑戦しています。

意見することが怖くなる理由は、フラットにみると意見は情報の集合でしかないように感じる時があるからです。個人の環境要因やそこから生まれる意思などが情報をフィルタリングし意見を作り、そこでオリジナリティが生まれているだけなんじゃないかな？と。でもこれは悪い事ではなく、表現による自己変革に到達するための大事な考えでもありそうです。議論は対話につながり、そこで相手の持つ情報の交換と構築を共に行えば、ガンジーが対話を通して達成した””改心””に繋がります。しかし正しく情報を組み合わせれば、人を動かせるほどの意見になるとは言い切れない。人には論理ではなく感情で動く部分があるからです。

そして、全ての分科会テーマは、主体が人間であるからこそ表現という枠組みに入れていいはず。技術革新で社会の交流が徐々にリアルから離れる時、地球規模課題の解決のためには人間が持つ豊かな表現(オリジナルな環境要因による情報の集まり)をどのように規制すべきなんだろうな、とか最近考えてました。

▶ 印象に残っている議論

表現と規制 RT で、個人的に最も印象深い議論は、「表現とは何か」という問いに答えるために春合宿でアレコレとケーススタディをしたことだ。メンバー全員で、これは表現かどうかと反例などを可能な限り挙げ、そこから共通する判断軸を抽出し、ある程度一般化することを試みた時間が非常に楽しかった。たとえば、ヒトカラは表現か、目の前を通り過ぎるおじさん達は表現として捉えられるか、無の空間に1人存在する人間はそれを表現と捉えるか、などについて議論したことを覚えている。この議論は、表現と規制 RT として、発展的な議論をしていく際に基となる定義を共通認識として持つておくために行われたものであった。ある程度判断基準が固まったのちに、全員で新しいケースを挙げ、表現かそうでないかの答えが一致した時は快感だった。判断軸として具体的には、対象を生命と非生命に分類し、それぞれ表現しようとする意思と自律性を有するかどうかを判断基準に場合分けを行った。当初は、表現の発信者と受信者の両者がある瞬間で切り取り、対象に対するラベルを完全に分けて考えていたが、現実では不可分であることが多い。したがって、一見取るに足らないテーマのように思えるかもしれないが、この議論で掲げられた共通定義によって、RT としてのテーマ「表現と規制の変革サイクル」にアプローチする一助になったことは確かだと思う。



舛尾 花菜 Kana MASUO

所属：信州大学医学部医学科2年

興味：医学

趣味：水泳、クラリネット

▶ 自己紹介

大学では医学を専攻しています。私自身が違和感をうやむやにするのが苦手なので、将来は患者さんが納得するまで対話できる医師になりたいと思っています。部活は中学から続けてきた水泳と小学校以来のオーケストラでクラリネットを吹いていて、どちらも課題は肺活量だと感じています…。好きな言葉は「人間万事塞翁が馬」。うまく行かないときや落ち込んだとき、思考の転換が大切だなと思っています。米国での本会議では、英語が伝わらなかったり優秀なJASCerに圧倒されたりといったチャレンジが待ち受けていると思いますが、困難は成長のチャンスだと思って頑張りたいです。

▶ 印象に残っている議論

春合宿で「沈黙は表現になりうるのか」の問いについて、「沈黙の自由を行使した沈黙は表現となりうるが、強制された沈黙は表現とはならない」と考えた。そこから、そもそも表現とは何かという大きな問いに対して、受信者と発信者を区別しながら何個も思考実験をしたのが印象深い。

例えば、1人で部屋で寝ていてそれを地球上の誰も知らない時、この行為は表現となりうるのかについて、寝ている間は無意識状態であり、今これを受信する人もいないから表現ではないと考えた。一方、一人カラオケは発信者が意思を持って歌っており、受信者を歌っている本人と捉えるならば、これは表現になりうると思った。人間を自律性(無意識)と意思の二層構造を持つ生命として捉え、発信者が意思がある場合、または受信者がそれを表現として受け取る場合に、表現として成立すると定義した。この定義のユニークだと思うところは、「受信者がそう思ったならそれは表現」とした点だ。例えば人が歩いていて、その人は目的地につくことだけを考えており、他者に何かを伝えるという意思がなくても、それを見た人が「美しい歩き方だ」と受け取れば、歩くという行為は表現になりうると思った。

抽象的な内容だったが、対面でメンバーの思考過程を目の前で追いながら議論が形になっていく感覚がありとても新鮮だった。「表現と規制」の世界観を固めるきっかけになった議論でもあり特に思い出深い。



小川 志穂 Shiho OGAWA

所属：東京外国語大学言語文化学部言語文化学科2年

興味：言語学(特に語用論・社会言語学)、アメリカ文化、ジェンダー論

趣味：ダンス、映画・絵画鑑賞

▶ 自己紹介

私は現在、英語と北米地域のことを中心に、言語学や国際関係論、ジェンダーなど、興味の赴くままに幅広く学んでいます。その中でも特に、語用論と社会言語学と呼ばれる言語学の分野に関心があります。言語は社会において、コミュニケーションツールとしての役割にとどまらず、極めて重要な役割を果たしています。例えば、これまで「ハラスメント」や「ヤングケアラー」という言葉が日本で普及し、その存在に焦点が当たりました。一方で、最近では「多様性」や「個性の尊重」といった言葉に対して、社会の実態が追いついていないことも指摘されています。このように、社会問題を提起する可能性と、それだけが先走る危険性を併せ持つ言語に魅力を感じ、日々ことばが果たす役割について考えています。

私は小学3年生の一年間を、米国テキサス州の中でも特に人種的に多様な地域で過ごし、その経験から異文化理解や多文化共生に関心を持つてきました。高校では、アジア太平洋青少年リーダーズサミットという12カ国の学生が集まる会議に参加したり、SDGsをテーマとした討論会を企画・運営したりするなどしてきました。また、米国滞在中に日本人としてのアイデンティティーについて考えさせられた経験から、自国や自分自身を理解するには、他国や他者を

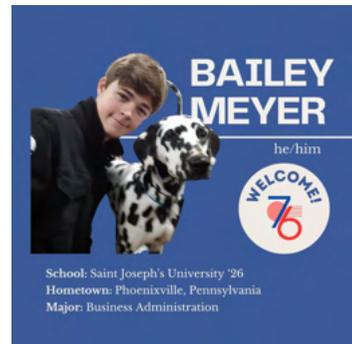
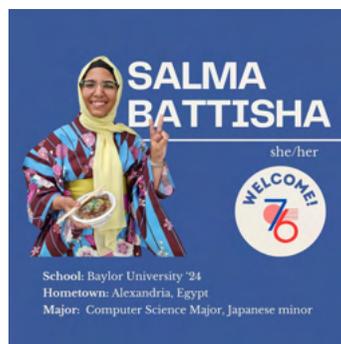
理解することが欠かせないと考えています。現在は東京都の観光ボランティアとしても活動しており、外国人観光客に日本の魅力を発信しつつ、東京の新たな一面を発見することを楽しみにしています。

▶ 印象に残っている議論

最も印象に残っている議論は、4月中旬から春合宿にかけて行った「沈黙は表現になり得るのか」という議論である。この議論は、分科会の主題である「表現」を定義付けるための足がかりとして行った。「沈黙」というキーワードから、多様な沈黙のあり方とその沈黙に至る背景について話し合ううちに、「沈黙の自由」、「消極的表現の自由」、「表現しない自由」といった「表現の自由」につながるテーマへと議論が発展していった。また、他の分科会やアメリカ側参加者との合同ミーティングも行い、文化によって異なる沈黙の意味や、スピーチや映画の中での沈黙、さらにはガンジーの非暴力・不服従の姿勢や、たばこ製品の健康警告表示など、実に幅広い事例を扱った。そして、「沈黙は表現になり得る」という結論に至った後は、沈黙が表現として成立するための条件について話し合い、AIによる沈黙は表現になるのか、他者がいない場での沈黙は表現になるのかなど、様々なケースを想定した。これらの議論から、「表現」の定義に関して、発信者の意思と受信者の意思、意識と無意識といった着眼点が得られ、その後の分科会の議論はこれらの視点を軸に進めていった。

私自身にとって特に意義深かった点は、沈黙を沈黙たらしめるものについて議論した際に、表現の双方向性について考えるきっかけを得られたことである。往々にして情報の信憑性が度外視され、誤情報が溢れる現代社会では、情報を見極める力が問われている。また、SNSの既読機能やウェブサイトの閲覧履歴など、情報の受け手側の匿名性が失われているとも言われている。こうした状況において、表現の自由や表現に対する規制について議論するには、情報の発信者に注目すると同時に、その受け手の行動や心理に対しても、特に注意を向ける必要があるだろう。「沈黙」に関する一連の議論は、その重要性を一段と鮮明にするものであり、表現と規制分科会の議論の原点であったと言える。

アメリカ側メンバー紹介



分科会統括

分科会設計時、他分科会と比較して幅広く抽象的なトピックを分科会名として設定したことで、参加者によって大きく議論の方針や雰囲気が変わることを予想していた。実際に、この4人が議論を行う意味が、本分科会のあらゆる議論に大きく反映されていたように思う。抽象的な議題も、実際の出来事や経験、知識と結びつけ、議論を経て、形を変えて表現と規制の世界の一部になっていく過程は、私自身にとっても学びの多いものであった。参加者全員が異なる専門分野を大学で学んでいることもあり、多様な視点が議論をさらに複雑で興味深いものにしたのだと思う。また、会議中は、言語の壁を越え、臆せず積極的に米国側の参加者との議論に取り組む姿は非常に頼もしかった。

最後に、表現と規制分科会の4人への思いを述べて、この分科会統括を締めたい。それぞれへの感謝の気持ちやとめどない思い出をこの場で語ると、いくら心優しい4人でも呆れてしまうほどの長文になりかねないため、少しだけ。

ほとんどの人が社会に出てから「表現と規制」について深く考え、他者と議論する機会を持つことは少ないと思う。この稀有な経験と第76回日米学生会議で過ごした時間が、本分科会の参加者の彩りになりますように。

岡山大学工学部工学科環境・社会基盤系2年 志田 夏音





第七章 第76回からの新規企画

定例会

例年、本会議前の分科会を跨いだ交流の機会が少ないことが問題視されていた。第76回では、分科会混合の交流を本会議前に増やすことによって、本会議の運営・交流に資することを期待した。

第75回にはなかった企画ゆえ、手探りの運営となった。主に2つのフェーズで実施した。

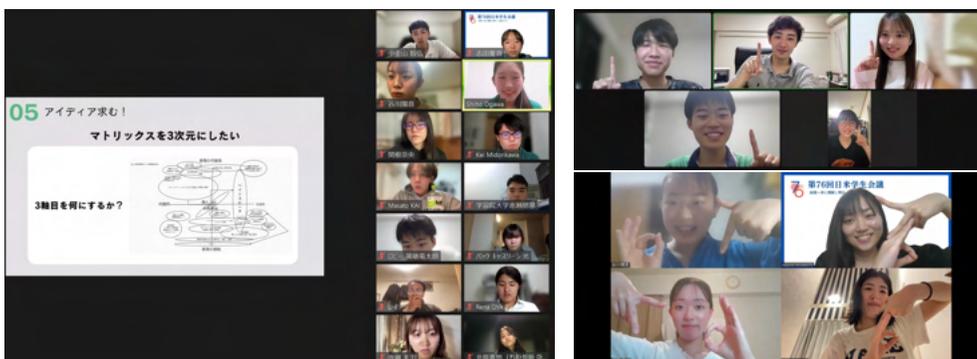
1. 第1フェーズ

デリ全員が任意参加として集合し、各分科会の議論状況をシェアしながら意見交換をしたり、特定のテーマについて語り合う懇親会。都合が合わず全員が集まらなかったり、人数が多いために話す人が限られたりといった課題があった。

2. 第2フェーズ

RT混合形式でデリを3~4人のグループに割り振り、デリ3~4名+EC1名の班を作って、各班ごとに交流会を実施した。日程の調整が容易となり、人数が少ないことでより込み入った話もしやすくなるなどの効果があった。

3週間に1度ほどグループを組み替え、各タームごとに1回以上交流会を実施する形式をとった。計3ターン実施した。



<実行委員感想>

定例会は、参加者全員が本会議前に所属分科会以外の人と仲良くなる機会、他の分科会の活動を知る機会作りをしたい、という実行委員の荒木の提案で始まった。実際に参加者より、上記機会の提供が役立ったという声を聞くことが出来たため、効果が出て安心している。個人的な感想としては、定例会は6月を境に実行方法を変更したのだが、臨機応変に成果を分析し、より効果の出やすい方法を模索するという経験が出来、嬉しかった。

本企画は76回より新規で行った企画ではあるが、今後も継続して行われることを期待している。

岡山大学工学部環境・社会基盤系2年 志田 夏音

JASC SOCIAL

ジャパデリとアメデリの分科会を超えた交流を本会議前に確保する目的で設けられたオンライン懇親会である。計2回開催され、タイムゾーンの難しい地域もあった中、日米多くのデリ参加した。

会においては、オンラインの描画クイズ等を実施し、アイスブレイクとしては上々な盛り上がりを見せた。



<実行委員感想>

本会議前にアメリカ側と交流を行うことができた。前半はグループに分かれての自己紹介であったが、後半は全体で一人が絵を描いて何の絵かを当て、最初に回答した人が勝ち、というゲームを行った。このゲームを日本側実行委員のMTGの後に紹介したところ、日本側実行委員でやってみようとなり、思いのほか盛り上がったことが思い出される。また、この交流会は、アメリカ側実行委員が主体となって行ってくれたのだが、交流会の進め方やオンラインでの仲の深め方など参考にしたい点も多く見つかった。日本側参加者も本会議前にアメリカ側参加者と交流することで、1カ月前に迫った本会議を実感することが出来たと思う。

岡山大学工学部環境・社会基盤系2年 志田 夏音

JASC COMEBACK

【概要】

実施日：6月8日（土）

場 所：法政大学

日米学生会議の最大の財産は、長い歴史に裏打ちされたブランドと、各分野でご活躍されるアラムナイのネットワークであるとの理念のもと、JASCのコミュニティを強化したいとの思いで企画された、OBOGと現役参加者の交流会である。同時に、JASCは議論の場であるものの、その議論が客観的な視点を失い、内向き、自己満足な議論になりがちであったため、アラムナイからアドバイスをもらいながら、客観性を意識した議論を目指した。

当日は、アラムナイと現役参加者のアイスブレイクの後、各分科会ごとに設定したテーマを基に議論を行うとともに、今までの分科会の議論のオペレーションや方針を客観的な立場から吟味し、アドバイスをいただいた。

なお、この場にて、当日ご参加いただいたアラムナイ各位、並びに会場をお貸しいただいた法政大学に御礼申し上げます。

【企画の詳細】

1. 東アジアにおける日米関係

- (a) 参加アラムナイ（敬称略、括弧内は参加回）
加藤 優一（67） 内野 剣（73） 山上 修吾（73・74） 菊池 宙（74・75）

(b) 詳細

JASC COMEBACK では、まず直近の分科会内でのテーマであった各国の選挙とその動向が安全保障に与える影響について議論した内容をアルムナイと共有した。特に序盤はアメリカの大統領選挙における「もしトラ」が現実味を帯びる中、日本はアメリカとどう付き合っていくべきかに議論は集中した。その中で、あるアルムナイから直近の動向ばかりに目を向けてしまうと議論が瑣末になりやすい傾向があり、歴史的文脈などより長いスパンの中で現状を分析すること、議論の前提を当然視せず常に前提を疑いながら議論することが重要だというアドバイスをいただいた。また、社会での経験に裏付けられたアルムナイの一つ一つの意見は、分科会メンバーのみでの議論では得られない新たな視点や現実社会に則したリアリティを提供するものであった。我々は学生であり、外交のプロではない。しかし、だからこそ良い意味で「無責任」に議論し、先入観にとらわれぬ議論ができる可能性を持っている。この点を意識しながら、残りの分科会での事前議論や本会議での議論に取り組みたい。

東京大学法学部第3類4年 渡邊 蒼生

2. 環境経済とエネルギー安全保障

- (a) 参加アラムナイ（敬称略、括弧内は参加回）
中澤 耕己（62・63） 大沼 雄貴（66） 尾崎 純矢（72） 東 綺伽（72・73） 山本 悠太（74）

(b) 詳細

当分科会では、コンサル業界等でご活躍されているアラムナイの方にお越しいただいた。アラムナイの方々との間で春合宿での議論を共有させていただいた後、議論に対するフィードバックをいただいた。BEV 市場に影響を与える要因を自由に考えるプロセスなど、アラムナイの方々より評価していただいた点も多くあった一方、議論にもう少し抽象性を持たせた方が良いのではないかとのご指摘もいただいた。当分科会が扱うテーマに抽象性を持たせるのは難しい側面もあるが、アラムナイの方々から頂いたご指摘の通り、抽象性を持たせることでより独自性のある議論になるのは間違いない。今後は、具体性と抽象性のバランスを図りながら、より良い議論を行っていきたいと思う。

京都大学法学部4年 川西 晴太郎

3. 技術革新に伴う文化・芸術の変容

- (a) 参加アラムナイ（敬称略、括弧内は参加回）
守屋 彰人（54） Adrian Wildandyawan（70・71）

(b) 詳細

CAT では、企業の戦略構想や商品開発における DEI について、2人のゲストに話を伺った。ダイソンの戦略構想を担う守屋さんによると、社内にアンコンシャスバイアスボードを設置し、日常的に議論する意識を持つという。また、ポケモンの DEI 推進を担う Adrian さんからは、国ごとの文化の違いによってストーリーの解

積が異なる可能性があるため、外国人社員に意見を聞きながら、作品作りを進めていると伺った。これらのお話を作品作りに活かしたい。

国際教養大学国際教養学部3年 甲斐 聖人

4. 社会起業家

- (a) 参加アラムナイ（敬称略、括弧内は参加回）
高田 修太（61・62） 阪上 結紀（69） 鈴木 龍一郎（71・72） 飛知和志帆（72）
- (b) 詳細

JASC COMEBACKでは、これまでの議論に対するフィードバック・課題の指摘、今後の議論についてアドバイスを頂くことができました。アラムナイの阪上様からは日米学生会議を通じて何を達成したいのか、社会起業家分科会での議論をどの様に役立てたいのかを考えるべきとの助言を頂いた。知識のインプットや目の前のトピックを話し合うことに終始してしまっていたが、分科会活動における上位目的を考えなければならないと思う機会となった。

慶應義塾大学法学部法律学科4年 藤木 果蓮

5. 福祉と倫理

※福祉と倫理分科会は、参加者の都合により開催せず。

6. 社会運動と人間心理

- (a) 参加アラムナイ（敬称略、括弧内は参加回）
山崎 綾香（71） 佐藤 颯子（72） 村上 太一（75）
- (b) 詳細

社会運動とは何か、社会運動にエリートが参画する意義、企業は参画できるのかについて議論した。その過程で、分科会の進め方についてアドバイスをいただいた。たとえば、答えを出す問いとそうでない問いを意図的に区別したり、社会運動を分類したり、現実的な制度設計に関する議論を行うことなどである。

慶應義塾大学法学部政治学科2年 赤堀 結

7. 表現と規制

- (a) 参加アラムナイ（敬称略、括弧内は参加回）
中川 奈津子（68・69） 植村 凧沙（71） チャ ユナ（75）
- (b) 詳細

表現と規制分科会は、アラムナイの方々に向けてこれまでの議論内容を発表し、フィードバックを頂いた。発表内容が総じて抽象的であったことから、自分たちのための議論にならないように、問題意識と議論の目的を明確にすべきだというアドバイスを頂いた。今後の議論に向けて、方向性を見直す有意義な機会となった。

東京外国語大学言語文化学部言語文化学科2年 小川 志穂

【参加者の声】

＜アラムナイ感想（抜粋）＞

- 私達の頃にはなかった面白い企画だと思います。ありがとうございました！
- 若手中心の回ということで新鮮でした。ぜひ今後も続けてください！
- 若手をどんどん繋ぐという点で大変意義のある企画かと思いますので、引き続き次年度以降も開催して頂けたらと思います！

- 久しぶりに会社とかに関係ない議論ができて楽しかったです！また、年代も近く話しやすかったです。
- 今まであまりない取り組みだったので、まずは開催して下さったことに感謝です！ありがとうございます。
- 時間的に長すぎず、参加しやすかったです！
- あえてオープンにご設定いただいたと思うのですが、必要に応じてOBOGに期待する役割があれば事前に教えていただくと有難いと思いました。論点整理/助言、事例の共有など色々あるかなと思いました。

<デリ感想(抜粋)>

- 長期的な視野で考えること、自分の意見なのか他人の意見を正しいと錯覚しているのかよく考え前者になるように努力すること、学生の無責任な立場を良い方向で活かすこと、具体例をとことん突き詰めること。以上の点を今後大事にしていきたい。
- 自分でも分科会の議論そのままでもいいのかな、もっと面白くできないかなと思っていたので、アラムナイの人に率直に意見を言ってもらい、それに基づいて今後どういうふうに議論していくべきかもっと考えないといけないと思った。中弛み、行き詰まりを感じるこの時期に、そのまま惰性で進まないようにしようと思えた点で非常に有意義だったと思う。
- 学生の議論を上から俯瞰していただいて、新たな視点をいただくことができ、とても充実していました！実務じゃないことも学生ならではのやるべきだというアドバイスただけてよかったです。
- 社会人ならではの実務経験に基づく具体事例であったりとか、実際にぶつかった壁を詳しく教えていただくことで、自分達が掴みきれない課題を言語化することが出来たように感じます。また、先延ばしにしていた分科会自体の最終ゴールの合意形成がいかに必要かを感じ、何を話したいのか忌憚なく話しあおうと思います。
- 今までぼんやりしていた、自分たちの議論の問題点が明確になったと同時に、現状を打開する解決策をご教示いただくことができた。常識だと思ってたことを疑ったり、普段とは異なる視点から話したりすることで、学生だからこそその議論が深まると思った。



第八章 後援・協賛・賛助・共催・協力

※紙面の都合上、敬称を省略する。ご理解、ご寛恕賜りたい。

主催及び後援団体協力者

○ 会議全般

■ 主催

一般財団法人国際教育振興会
代表理事 金野 洋
事務局 伊部 亜理子
国際教育振興会賛助金
名誉会長 高円宮妃 久子殿下
会長 藤崎 一郎
事務局長 伊部 亜理子
International Student Conferences, Inc.
会長 Kurt Tong
事務局長 Bahia Simons-Lane

■ 後援

外務省
外務大臣 上川 陽子
人物交流室 渡邊 慎二
文部科学省
国際統括官 渡辺 正実
米国大使館
駐日大使 Rahm Emanuel
広報文化交流部・教育人物交流室
教育・人物交流担当官 Sarah Belousov
一般社団法人 日米協会
会長 藤崎 一郎
専務理事 岡本 和夫

■ 賛助

Embassy of the US, Tokyo
一般社団法人 尚友倶楽部
公益財団法人 三菱 UFJ 国際財団
公益財団法人 双日国際交流財団
一般社団法人 霞会館
一般社団法人 日米協会
京都日米協会

市川 比呂也 (32回)
木越 純 (32回)
米田 隆 (32回)
片山 直毅 (62回)
合同会社ぴーすふるファーム
代表 齊藤 和平 (68・69回)
第 66 回実行委員会一同 (以下 8 名)
小松崎 遥平

木村 優吾
大西 由起
大沼 雄貴
兼子 莉李那
関口 響
古村 大和
鈴木 健司
ファインディ株式会社
代表取締役 山田 裕一郎 (57・58回)
日米学生会議同窓会
国際教育振興会賛助会

○ 国際教育振興会賛助会

■ 法人会員

株式会社アルコパートナーズ
伊藤忠商事株式会社
株式会社オリエンタルランド
キッコーマン株式会社
株式会社 KPMG Ignition Tokyo
ZAZA 株式会社 Metoree 事業部
サントリーホールディングス株式会社
株式会社サンブリッジコーポレーション
株式会社 CEAFOM
日本製鉄株式会社
株式会社セブン&アイ・ホールディングス
禪林寺
ダウ・ケミカル日本株式会社
タカラベルモント株式会社
デルタ航空会社
東京海上日動火災保険株式会社
東京ガス株式会社
一般財団法人凸版印刷三幸会
トヨタ自動車株式会社
株式会社ニコン
日本空港ビルデング株式会社
株式会社日本政策投資銀行
日本生命保険相互会社
日本テレビ放送網株式会社
日本電信電話株式会社
野村ホールディングス株式会社
株式会社パソナグループ
富士急行株式会社
富士フイルムビジネスイノベーション株式会社
丸紅株式会社
株式会社みずほフィナンシャルグループ
株式会社三井住友銀行
三井物産株式会社
三井不動産株式会社

三菱重工業株式会社
 三菱商事株式会社
 株式会社三菱 UFJ 銀行
 メリックス株式会社
 森ビル株式会社
 ユナイテッド・マネジャーズ・ジャパン

■ 個人会員

秋間 修
 今井 義典
 岡本 実
 小田垣 祥一郎
 北城 格太郎
 木村 浩一郎
 千本 倅生
 竹本 秀人
 橋 フクシマ 咲江
 西澤 淳
 富川 秀二
 橋本 徹
 アーネスト エム 比嘉
 平竹 雅人
 藤崎 一郎
 細野 恭平
 山田 勝
 茂木 健一郎
 和田 昭穂

○ 日米学生会議同窓会

会長 岡本 実
 副会長 竹本 秀人
 秋間 修
 和田 昭穂
 竹内 幸美
 岸田 守
 幹事長 富川 秀二
 常任幹事 井伊 雅子
 木ノ上 高章
 福谷 尚久
 武田 興欣
 大塚 雄三
 佐野 日出之
 平竹 雅人
 細野 恭平
 大和 亜基
 乗竹 亮治
 川口 耕一郎
 竹内 友里
 橋本 遙
 竹内 智洋

選考活動

■ 協力：日米学生会議同窓会員

岡本 実
 竹本 秀人
 福谷 尚久
 仲尾 聡
 市川 比呂也
 木戸秋 圭一
 Roy J. Lee
 齊藤 和平

■ 協力：JASC75 試験補助員

久野 賢登
 菊池 宙
 岡田 潤
 中坊 倫太朗
 玉真 優里
 吉住 保希
 上保 周平
 チャ ユナ
 村上 太一

■ 協力：会場

法政大学
 日米会話学院

■ 協力：選考合宿

いのちの里山 ぴーすふるファーム

■ 協力：実行委員立候補相談会

南 秀弥 (70・71)
 木村 勇人 (71・72)
 野村 紗里 (71・72)
 深津 佑野 (71・72)
 鈴木 悠太 (72・73)
 東 綺伽 (72・73)
 中坊 倫太朗 (74・75)

広報活動

■ 協力：団体

UT BASE (東大生向け情報メディア)
 塾生情報局 (慶應生向け情報メディア)

■ 協力：会場

法政大学

事前研修

○ 春合宿

■ 協力：会場

国立オリンピック記念青少年総合センター

■ 協力：ようこそ先輩

岡本 実
竹本 秀人
和田 昭穂
秋間 修
佐々木 淳一
金野 洋
市川 比呂也
富川 秀二
木戸秋 圭一
大塚 雄三
仲尾 聡
廣田 良平
清水 直樹
乗竹 亮治
川野 さりあ
森田 修弘
モンタニョミチエル ルイス
南 秀弥
手代木 秀太
五十嵐 淳
亀井 龍
鈴木 悠太
加藤 優一
石川 隼
小松崎 遥平
鈴木 良祐
村上 真優
木村 勇人
小溝 舞
野澤 玲奈
大東 千潤
村上 太一

■ 協力：写真撮影

山本 瑛

■ 協力：同窓会申請説明

富川 秀二

○ 安全保障研修

■ 協力

防衛省 統合幕僚学校 国際平和協力センター
センター長 1等陸佐 渡邊 邦嘉
1等陸佐 南條 衛
募集課長 1等陸佐 樋口 圭

2等陸佐 田中 孝明
募集係長 3等陸佐 水野 聡
防衛大学校

校長 久保 文明

防衛事務官 梅木 英則

防衛事務官 黒澤 孝一

総務部総務課秘書係 坂中 二郎

学生の皆様（代表：相原 里帆）

○ JASC COMEBACK

■ 協力

守屋 彰人 (54)
高田 修太 (61・62)
中澤 耕己 (62・63)、Hexcel Japan
大沼 雄貴 (66)
加藤 優一 (67)、Unite Partners 株式会社
中川 奈津子 (68・69)
阪上 結紀 (69)、株式会社 Publink
経営企画兼官民共創コンサルタント
Adrian Wildandyawan (70・71)
植村 風沙 (71)
山崎 綾香 (71)
鈴木 龍一郎 (71・72)
佐藤 颯子 (72)
尾崎 純矢 (72)
飛知和 志帆 (72)
東 綺伽 (72・73)
内野 剣 (73)
山上 修吾 (73・74)
山本 悠太 (74)
菊池 宙 (74・75)、東京大学法科大学院生
チャ ユナ (75)
村上 太一 (75)、司法修習生

○ 韓国自主研修

■ 協力：事前勉強会

日韓議員連盟幹事長・元総務大臣
衆議院議員 武田 良太
東京大学教授 木宮 正史
ソウル大学教授 Byung-Yeon Kim
在日韓国留学生連合会

■ 協力：会場

相鉄ホテル ザ・スプラシール ソウル明洞

■ 協力：正規日程/FT

Korea-America Student Conference
ソウル大学

Prof. Jung-Hwan Lee

Prof. Geun Lee

Prof. Eui-Young Kim

核物理研究室 (Yong-Su Na 研究室)



War Memorial of Korea
植民地歴史博物館 Young-Wan Kim
Beautiful Store
局長 Lee Beom Taek
KEPCO Electricity Museum

パートナー 藤本 祐太郎
パートナー 渡邊 啓久
Woven Capital 加藤 道子

○ 直前合宿

- 協力：会場
国立オリンピック記念青少年総合センター
- 協力：アラムナイ交流会
中坊 倫太郎
小溝 舞
鈴木 良祐
鈴木 悠太
東 綺伽
深津 佑野
木村 勇人
久野 賢登

- 協力：技術革新による文化・芸術の変容
Team Lab

- 協力：社会起業家
Parareas 成澤 朗人
HLAB 理事・COO 高田 修太
東京都 産業労働局 商工部 創業支援課
MTG Ventures 代表 藤田 豪
兵庫県豊岡市 コウノトリ共生部 農林水産課
福岡県福岡市 創業支援課

- 協力：福祉と倫理
日本医療政策機構 CEO 乗竹 亮治
日本財団

- 協力：社会運動と人間心理
朝日新聞 東京本社

- 協力：表現と規制
ATG エンターテインメント 坂田 奈津希

勉強会/FT（実施日時順）

- 協力
自由民主党税制調査会長・元経済産業大臣
参議院議員 宮沢 洋一
兵庫県芦屋市長 高島 峻輔
自由民主党本部
元国務大臣 参議院議員 山谷えり子
- 協力：東アジアにおける日米関係
財務省 多田 哲朗
外務省 川口 耕一朗
経済産業省 田村 英康
米国海軍 Commander Andrew Orchard
国会議事堂
自由民主党政務調査会副会長・元防衛副大臣
衆議院議員 長島 昭久
- 協力：環境経済とエネルギー安全保障
日本特許情報機構理事長 松井 英生
TEPCO 安全推進室 安全啓発・創造センター
所長 上川 直大
元経産副大臣・元大阪府知事
参議院議員 太田 房江
経済産業省 資源エネルギー庁
総務課 戦略企画室 室長補佐 疋田 正彦
総務課 戦略企画室 室長補佐 鈴木 大介
株式会社レノバ
フェロー 今岡 朋史
GX 本部 事業開発部 福田 智広
長島・大野・常松法律事務所

本会議

○ LA サイト

- 協力：会場
HI Hotel Santa Monica
University of Southern California
Japanese American National Museum
Huntington ガーデン
- 協力
Sain José State University
学長 Cynthia Teniente-Matson
裏千家淡交会ロサンゼルス協会
ダフィ 宗羽
ロビンソン 宗心、門弟
上杉 宗裕、門弟
Los Angeles LGBT Center
Onyinye Alheri
Ariel Bustamante
Brendan Noji
Emiko Kenderes
Joey Wasserman
Maria Do
Michelle Nguyen
Sarah Gabagat

○ NO サイト

■ 協力：会場

HI New Orleans Hostel
National WWII Museum
The Historic New Orleans Collection
Toulouse Theater
Hilton Garden Inn

■ 協力

Susie Allen
Tulane Institute on Water Resources Law and Policy
Prof. Mark S. Davis
The Warehouse Diane Powell
Harrison Crabtree

Prof. Megan Latshaw
元米国エネルギー省副長官 William F. Martin
Georgetown University
在学生 Helen Cecile Nowatka (74・75回)
CSIS アジアプログラム
シニアフェロー Erin Murphy

○ DC サイト

■ 協力：会場

Generator Washington D.C.
Smithsonian Museum
National Museum of Natural History
The National Museum of American History
National Gallery of Art
National Mall
ARTECHOUSE
D.C. Central Kitchen
Holocaust Memorial Museum
Cleveland Neighborhood Library
Martin Luther King Jr. Memorial Library

■ 協力

米国国務省
国務長官 Antony Blinken
副次官補 Robert Koepcke
日本国外務省
外務大臣 上川 陽子
在米日本国大使館
特命全権公使 相 航一
Glen S. Fukushima (22・23回)
IMF Headquarter
Senior Communications Officer at Stakeholder Engagement
division and Communications Advisor to the FDMD
Jennifer Beckman
Senior Board Operations Officer
Daniela Alcantara
Senior Institutional Affairs Officer
Joaquin Salas
Deputy Division Chief of the Asia and Pacific Department
Alasdair Scott
Korea Economic Institute of America
フェロー・学務部長 Clint Work
Johns Hopkins University
Prof. Takeru Igusa



第九章 実行委員あとがき

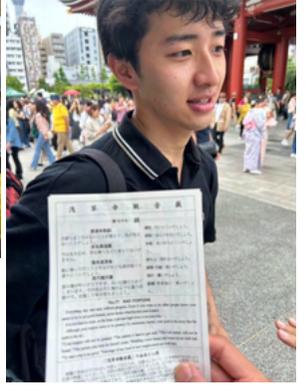
■ 小金山 智弘（第76回日米学生会議 日本側実行委員長）

前述の実行委員長挨拶でも伺えると思うが、非常にチャレンジングかつ満足度の高い一年であった。あつという間に過ぎ去っていった一年の中でたくさんの出会いと経験があり、怠惰な学生生活を送っていた私にとっては刺激を受ける良い機会であった。私は元来、一般的な日米学生会議参加者と異なり勤勉でもなければ、特異なスキルがあるわけでもない。この団体に参加したのも、就職活動で有利なエピソードを持っておきたいくらいの気持ちが始まりだった。そもそもの団体との出会いは、75回実行委員長の久野が大学のクラス同期だったことから始まる。英語のクラスで流暢な英語と圧倒的プレゼンスキルをもち、一年生なのに忙しくしている彼をみて一抹の焦りと憧れを覚えた事を今でも覚えている。聞くと日米学生会議という団体の実行委員長を務め、七十人規模のエリートを選抜して学びを深める集まりを束ねていると言う。学生としてそこまでの差を見せつけられると最早感嘆を超え、不思議と呆れのような感覚を抱いた。いずれにしても、エリートアラムナイとの接点やアメリカ学生との交流の可能性を聞いた時、応募するだけしてみても良いだろうと筆記試験を出す事にした。

先述の通り、これといった強みがない私ではあるが選考に励んだ結果なんとか参加者として招いて頂くことになり、団体の一員となる事ができたのだ。周囲は課題意識とプロ意識を持ったエリート学生であり、掘れば掘るほど各々の興味について詳しく説明してくれる。好奇心が旺盛な私にとっては暇な時間のない楽しい空間であったとともに、世の中の様々なキャリアについても理解が深まり、人生の選択肢が開かれた実感があつた。こうした経験を踏まえ、もう一年やってみるかと言う思いから実行委員選挙に応募し、かくして実行委員長としての一年が開始したのであつた。

実行代が始まるとすぐに各種意思決定が始まった。開催サイトにテーマ、目標、委員の人数などこれらは歴代稀に見る意志の強い実行委員一同では一筋縄ではなくとても気の滅入るような作業だったと懐古する。また、挨拶回りに財団申請に各種報告、進捗管理など実行委員長としての仕事は想像したよりも重く、大変な仕事であり、怠惰学生代表である私にはとてもチャレンジングな日々を過ごした。が、思い返すとこれらの経験は私を非常に強くしてくれた。大企業の役員に会の説明・売り込みをしたり、頑として譲らない人間との交渉を経た今、怖いものなど何一つない。就職活動のディスカッションや面接を屁とも思わなくなってからそれを強く実感した。

こんな私を成長させてくれたこの団体とメンバー、そして協力してくださった全ての方々に感謝を込めてこの後書きを締めくくりたい。



荒木 太一（第76回日米学生会議 日本側副実行委員長）

分科会の自己紹介でも分かる通り、自分は特筆事項のない平凡な人間である。今まで勉強やスポーツで一番をとったことはないし、日米学生会議にも補欠合格で参加した。コンプを抱いてるとまでは言わないが、日米学生会議の同期はみな優秀なので、彼らを見ているととても自信をなくしてしまう。こんなところまで細かく見ている人はきっと日米学生会議に参加したいけど自分は力不足だと感じている人、もしくは実行委員になって今後の会議をどう運営していくべきか真剣に考えている人の二択かなと思う（76回の参加者は除く）ので、僭越ながら自分だからこそできるアドバイスをしてみたい。そして平凡な私が日米学生会議でどう生き残ってきたのかをここに残し、同じような境遇の人の助けになればという願いを込めてあとがきとしたい。

まず前者に向けて言えば、日米学生会議に参加できるかは別として、この団体はあなたをとっても成長させてくれる（それは一重につらくて苦しい経験が多いからであるが）。日米学生会議を通して尊敬できる素敵な人たちに多く出会い、自分の本当にやりたいことや理想像を見つけ出すことができた。実際、そのような経験は経済産業省への内定という目に見える形で開花した。大きな期待とともに是非応募してほしい。

後者のこれから会議をつくっていく実行委員には、自分がどのような思いを持って会議をつくっていったかについて述べ、思考の道筋を示したいと思う。一度会議を経験して自分の強みや弱みが多く見えてきたと思うので、まずはそれをきちんと整理していただきたい。そのうえで、自分が本当に求めていることについて議論をし、日米学生会議、日本、日米関係、そして世界に何が還元できるのか、何を還元するべきかを丁寧に考えてほしい。理想の会議は自然とみえてくるだろう。

ちなみに、私は以下のような思いで実行委員になり、会議を作った。

戦前に世界平和を目指して設立された日米学生会議が今ではその理念を失い、学生がワイワイするだけのお遊び会議になっていないか。官僚不足が叫ばれる世の中で、日米の将来を担う人材として輩出された JASCer がなぜ官僚として日本の未来を背負っていかないのか。会議を通じて、そして高度経済成長期の日米学生会議と比較して、アメリカにおける日本のプレゼンスが低下していると実感しているにもかかわらず、何も行動を起こしていないのではないかなどなど、個人的な感想も含めて、75回の参加を経て日米学生会議だけでなく、日本の将来を案じた。こうした日本のプレゼンス低下に対して学生の自分ができることは何かを考えたときに、何の才能もない私には日米学生会議というコミュニティ、歴史が絶好のプラットフォームだった。今一度、創設の理念を思い起こし、アメリカ人に日本人のすごさをみせつけてやりたいと考え、現役、アラムナイかかわらず多くの JASCer と今後の日米学生会議について議論をした。その結果、特に主活動である議論において、多種多様な知識に基づいた洗練された意見を言えるか、英語が拙くとも議論の論理構成ができるか、など議論力を発揮できるかが重要であると考え、JASC COMEBACK や定例会など様々な企画を立案した。

さて、「コンプ」を抱いている私がここまでついてこれたのは、こうしたいという意志があったからだと思う。もちろん、実行委員をはじめ、多くの素晴らしい友人に囲まれたことは大きかったが、彼らが仲良くしてくれたのも、強い意志があったからである。日本のためにという意志があるからこそ、その根本原因を考え、自分にできることを精一杯やり遂げる。だから魅力のない私にも実行委員の友人は手伝ってくれ、結果的に実行委員に立候補した当初の思いを形にすることができた。私なりに見出した、能力に優れた者の生存戦略である。

今後の日米学生会議、そして日本を牽引する学生にはこうした強い意志も持ち合わせてほしいと、一 JASCer として、一国民として願うばかりである。



富澤 新太郎

平素より日米学生会議へのご賛助ならびにご厚情を賜り、心より感謝申し上げます。そして、90周年を記念する第76回日米学生会議においては、自主研修、本会議など、あらゆる場面においてプログラムの遂行にご支援、ご協力を賜った全ての皆様に改めて謝意を表します。

JASCを経て何が一番変わったかという、このような固い文章を造作もなく書けるようになったことだろう。メールを打つ時のフォーマリティレベルが一気に上がったので、初対面の人にも褒められることが多く、自己の成長を感じる次第である。

尤も、流星に2期活動してこれだけの成長ではやや心許ない。今一度振り返ってみると、JASCを通して本当に色々得られたと感じる。第一には、自分で言うのも赤面ものだが、手塩にかけた分科会が、終始雰囲気もよく（もちろんいくつか軋轢も生じたが、総じてみれば良い雰囲気であった）、クオリティも担保されて進み、多くの方々にお話を伺え、自身のエネルギー分野への知見を深められ、最終的には基本政策分科会での発言の機会もいただくとの幸運に恵まれたことが挙げられよう。組織マネジメントという意味でも、アポ取りという意味でも、自己の修練という意味でも、振り返って今までの人生で例のない充実したものとなった。昨年実行委員から受けた恩と感じていた不満を止揚しながら、デリに還元できたのであれば幸いである。

第二には、JASCを通して、再度自分の嫌なところ、悪いところを痛いほどに認識させられたことである。本会議という、半年前には他人であった人たちと寝食を共にする3週間はまさしく“魔物”で、今まで理性で隠しながら、うっすらと感じていた自分のダメなところが、疲労もあって滲み出てきてしまう期間であった。「あ、言っちゃった」「あれは確かによくなかった」そんなことの繰り返しで、人間関係を構築するのは本当に難しいのだなあと痛感した。よもやこの年になってここまで社交で悩むのかと驚嘆までした。

このコミュニティの良さは、各分野に多大な意欲を持ちながら、それでいて人間味のある魅力的な人たちが多くの時間をかけて関係値を構築していく部分に集約されるだろう。尊敬できる部分もありながら、こりゃダメだとなる部分もある、まさに“人”を感じることができる環境に、そして、欠点を内包しつつ、それも含めて当人の特質だと捉え受容する寛容な雰囲気、こういったものが最大の訴求力であると感じる。

この2期、そのようなJASCの魅力に感化されながら、ひとつ、またひとつとプログラムが終わり、刻一刻と終わりに近づく寂しさを甚く感じることはできたのは、そのような温かい環境を作り上げてきてくれた実行委員の同輩、そして不都合もあながら温かい目で乗っかってきてくれたデリたちのおかげである。改めて感謝したい。願わくは、私自身、この期間での成長を今後実感したく、そしてこの素晴らしい環境が今後も連続と続いていってほしい。



宮本 希

やや冗長で、私事ではあるが、この「あとがき」は、私個人の自省文とさせていただきます。

昨年、「参加者」として関わった第 75 回日米学生会議は、他の参加者の知識量や経験に圧倒されながら学術的に自分を高められる刺激的な環境であったが、「実行委員」としての第 76 回日米学生会議は、自己成長の環境であったと言える。協調性、言い換えると、組織内での自身の立ち回り方や、組織の求める基準に合わせて妥協したり、割り切ったりする力を身に付けられたものと自負している。今までチームとして活動した経験があまり無く、大学入学後も、基本的に一人で行動し、自分の価値観に基づき課題に取り組んできた。そのため、組織下で働く経験を得ることで、私が以前から課題認識している完璧主義との上手な向き合い方や、一年前に不足していた、協調性をはじめとする、人と関わっていく上で必要な能力を少しでも身に付けられたのではないかと考えている。

もちろん、そうした能力は私一人の力で得られたものではなく、私が間違っただけに、言葉を丁寧に選び、じっくり時間をかけて、何が間違いだったのか論してくれた友人、やや場を乱し、ストレスフルだったにもかかわらず、変わらず私を受け入れてくれた友人があつてこそその成長だと痛感している。この場をお借りして、改めて感謝の気持ちを表したい。

最後に、一「実行委員」として、JASC を各々の目標達成の場にしたい、各参加者が個人レベルで対等な対話ができる場にしたい、という個人的な思いもあり、どうしたら参加者全員が満足した状態で本会議最終日を迎えられるか、その妥協点を見出すことはこの一年を通して模索した課題であった。実際に、担当だった NO サイトでは、毎プログラム後にリフレクションタイムを設け、学びを自身に落とし込む機会を増やしたり、プログラムを詰めすぎず、各参加者が自分の学びたいものを学べる時間を設けられるよう工夫したりした。その結果、本会議終了後、一部参加者から、NO サイトでは思いがけない学びをたくさん得られたと言ってもらえ、本当に嬉しかった。

また、分科会運営も、上述の「分科会統括」でも触れたとおり、その妥協点を模索できた機会であったのと同時に、本当の対話について学べた機会でもあった。

私は、アメリカ側の分科会コーディネーターを兼任したが、アメリカ側実行委員の代わりに十分に務められるかどうか、ずっと気がかりだった。コミュニケーションにおいて、言葉の問題で困ることはなかったものの、私がアメリカに滞在したのは 3 年 9 カ月に過ぎず、完全なアメリカ人になりきれたわけもなく、広大なアメリカ全土（時にはアメリカ国外）に点在するメンバーの時差はバラバラ、集まる機会も少ない中、アメリカ側参加者とどう距離を縮めていくか、どうコミュニケーションを図っていくかに頭を悩ませていた。そのような中で迎えたファイナルフォーラム。参加者一人一人の色が出された発表に喜びを感じたのと同時に、サプライズで貰った花束とメッセージカードには思わず涙してしまった。そこには、彼ら彼女らに映った「実行委員」としての自身の姿が描かれており、この時初めて、ちゃんと両者の実行委員を務められていたのだと実感したのだ。

本会議前までアドバイザー実行委員を務めたアメリカ側実行委員の Will のサポートもあり、文化は違えど、参加者の言葉一つひとつに自分なりに丁寧に向き合ったことで、最終的には、心と心の対話を実現できたことに安堵している。

課題やアルバイト、就活が重なる中で、心身ともにストレスに苛まれ、何度もやめたいと思うことがあったが、参加者そして自己の成長のため、本会議を完遂し、全員無事に帰国できたことに充実感を覚えている。

最後にはなるが、ここまで、第 76 回日米学生会議の準備から運営まで献身的にご支援下さった皆様改めて感謝申し上げます。8 月末より新メンバーで始動した第 77 回日米学生会議実行委員会に対しても、変わらぬご支援を頂戴できれば幸いです。

バック キャスリーン 光

平素より日米学生会議に格別のご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。第76回日米学生会議開催にあたり、多方面からご支援、ご協力をいただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

第75回日米学生会議に応募した理由は、自分の大学以外の学生とのつながりを広げなかったことや、知らない分野の議論を聞くのが好きだったことなど、今振り返れば本当にその程度の軽い気持ちだったことを覚えています。実際に第75回JASCに参加し、今まで行かなかった場所や、出会ったことのない人々との新しい経験の連続で大変でしたが、とてもやりがいを感じました。

その後、「自分も会議を作る側になりたい」「アメリカに行きたい」「日米学生会議というコミュニティをもっと知りたい」という思いから実行委員になりました。まだ全てが試行錯誤だった秋、説明会ラッシュと選考合宿に追われてた冬、やっと対面でデリと会えてRT活動も始まった春、韓国研修と本会議の本会議――8人でがむしゃらに駆け抜けた結果、気づけば長いようでな短い、非常に充実した一年が過ぎていました。楽しい日も苦しい日も沢山ありましたが、何よりも自分や他者と向き合い続ける大切さを学びました。振り返ると、日米学生会議に参加し、実行委員になったことは私にとって予期せぬ価値観の大きな転換点となったと感じます。まだ76回が終わった実感は湧きませんが、この経験を将来活かし切れるような人間になりたいと心から思います。

このような貴重な機会や経験をくれた日米学生会議、実行委員や参加者、そして第76回日米学生会議に関わっていただいた全ての方々に、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。今後とも日米学生会議へのお力添えをよろしく願い申し上げます。



福井 達於都

まだこの時間が終わってほしくない、そう思いながら時計を見つめる瞬間が増えている。確かに何か閉じていく感覚があって、それが少し怖い。私たちがここで積み重ねた対話や、共有した沈黙さえも、次第に遠くなっていくのだろうか。そう考えると、もう少しだけ、この場に留まりたいと思ってしまう。

この会議は、ただ議論をするための場ではなかった。国や文化、価値観の違いが、互いを隔てるどころか、むしろ新しい問いを生むきっかけになった。私たちは異なる視点を持ちながらも、同じ問いに向き合っていた。それは、どんなに言葉を尽くしても、完全には答えが見つからないものだったかもしれない。けれど、その答えを探して過ごした時間は、決して無駄ではなかった。

ある時、ふと沈黙が訪れた。その沈黙には、不思議な重みがあった。誰もが一言発すれば破れるような、しかしそれができない、もしくははしたくない、そんな時間だった。言葉が足りなくて不安になったのではない。むしろ、その沈黙の中に、これまで交わされた言葉の余韻が漂っていた。それは、互いに言葉を超えた理解が成立した瞬間だったのかもしれない。

この場が終わりを迎えることに、どうしてもわずかな抵抗感を抱いている自分がいる。それでも、会議は終わらせなければならない。すべての時間には区切りがある。だが、この時間を過ごしたこと自体が、それぞれの中に何かを残しているのではないかと思いたい。ここで得た対話、感じたものは、私たちが今後どこかで新たに問い直すべき何かとして、静かに存在し続けるだろう。

「終わり」という言葉が持つ重さは、その時間が特別だったことを証明するものだろう。だからこそ、ここで終わることを怖がる必要はない。むしろ、この場で交わされた言葉や感情が、これからの私たちの中で生き続けるという確信がある。会議が終わった後も、その余韻は消えずに残り続けるはずだ。

最後に、この場に共にいた皆様に感謝申し上げる。この会議が終わったとしても、そこで培われたものがこれからの未来において新たな形で展開していくことを心から願っている。



志田 夏音

平素より日米学生会議に格別のご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。そして、記念すべき90周年を迎えた第76回日米学生会議のプログラム遂行にご支援、ご協力を賜った皆様に、心より感謝申し上げます。

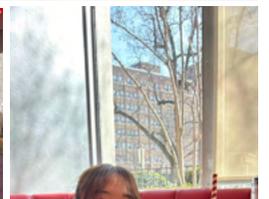
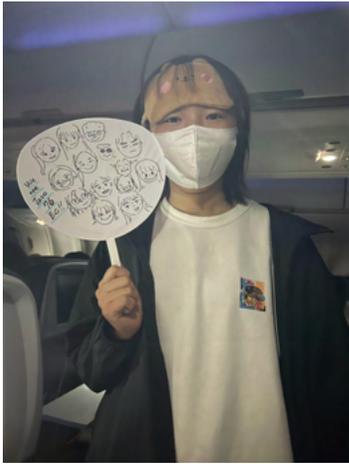
この1年間、私は毎月振り返りを書き残してきました。先日、本会議を終え、最後の振り返りをまとめた際、1年間を振り返ると納得できなかったことや悔しかったことがたくさん記されていました。その振り返りを読み終えたとき、実行委員としての仕事のほとんどもを終えた実感がようやく少し湧いたように思います。

昨年度、参加者の時に感じていた新しい世界を吸収する感覚は、実行委員になったことで、さらに明確で大きなものになりました。そして、地方で生まれ育った私にとって、多くの初めての経験を、既にそれらを経験している他参加者に助けられながら、安全に体験することができました。初めての海外、初めての長時間のフライト、初めての英語での注文、特に本会議中は毎日が新鮮でした。

また、この1年は、運営を通じて、様々な方々の助けがあつてこそ、自分の行動が実現できていることを実感する時間でもありました。分科会については、ともに分科会担当の実行委員であったWillをはじめ、素敵なメンバーが日米双方から表現と規制分科会に集まり、大変充実した分科会活動を行うことができたと自負しています。さらに、第75回参加時の友人や過去の実行委員の方々に相談をし、温かい言葉や具体的なアドバイスをいただいたことで、この1年間を乗り越えることができました。

実行委員を辞めたくなくなったこともありましたが、こうして1年間を終えることができたのは、何よりも楽しかったからだと思います。苦しみながら一晩中仕事をした日も、初めて参加者に会った日の喜びも、運営に悩んだ日も、持ち得たことのなかった感情の波を受け止めきれなかった日も、分科会の発表を聞いて感動した日も、この1年間の全てを完全に消化して言葉にすることはまだ出来ていませんが、時間をかけてでも漏らさず、消化したいと思います。

参加者としての時間を含めた1年半、この団体に所属する中で出会ったすべての方々へ、この場を借りて心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



佐野 百美

文章が冗長になりがちなので、ここでは簡単に1年間の思い出をふりかえろうと思います。

一年間活動する中で様々な high がありましたが、あえて1位を付けるとするなら、私にとっては春合宿が一番の high でした。(決してその後 high がなかったということではなくて。)

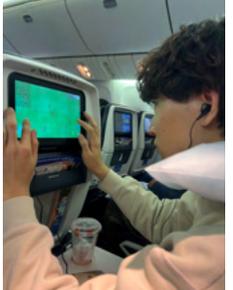
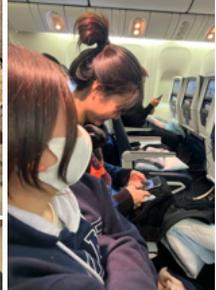
十二月の説明会以降、毎日のように開催した説明会や SNS 上の告知を実施していた広報期間が始まりました。そのころ、一日に四、五回はプレントリーのフォームの人数をみていたことをよく覚えています。そんな活動が終わったと思ったら、選考合宿がやってきました。たくさんのお菓子を片手に、会議の理想形を思い描きながらたくさんの人の熱意と向き合えたことは何事にも代えがたい経験だったと思います。それから二か月後、参加者・実行委員ともに初めて全員対面で集まったときに味わったワクワク感は言葉では言い表せません。

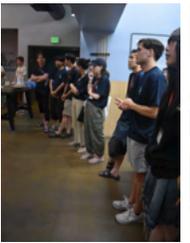
これからの活動に胸を膨らませる参加者の姿と今年の自分が重なり、時の流れを感じるとともに実行委員として活動する重みのようなものを感じたのを記憶しています。活動を始めたときはは8人でうまくやれるのか、そもそも会議を創れることに不安を感じていたのに、いつの間にか28人そろっていたようで、達成感を感じた瞬間でした。そして今、第76回日米学生会議の活動が終わり、これまでを振り返ると、日々の濃さを感じるばかりです。high も low もありながら、すべてが唯一無二の体験だったと思います。

high を楽しみ、low を乗り越えられたのは、ひとえに周囲の支えがあつてこそだったと思います。

実行委員・参加者の皆はもちろんのこと、会議を創る上で助けていただいたアラムナイ・事務局の方々やプログラムを開催するうえで協力して下さった方々など、第76回日米学生会議実行委員として出会ったすべての方に御礼申し上げます。















第十章 第 77 回日米学生会議のお知らせ

開催概要

【総合テーマ】

Upholding Dignity: Bilateral harmony through respectful dialogue.

尊厳を守る～敬意ある対話が紡ぐ日米の調和～

国際情勢が複雑化する現代において、敬意ある対話の重要性が一層高まっている。戦後 80 年という節目に日米の学生たちは、国際社会においていかに尊厳を守り、平和で持続可能な関係を築くことができるかを模索する。大阪・京都、熊本、東京の 4 地域で開催される本会議では、地理的・文化的な境界を超えた環境の中で、多角的な議論が行われる。より良い国際社会と日米関係の構築を目指し、異なる意見を恐れず、相互理解を深めるための対話を重ねる。大志を抱いて集まった 73 名の学生たちは、この会議で得た経験が人生における重要な指針となり、各々の尊厳が尊重される未来を築いていくことが期待される。

【開催期間】

- | | |
|-----------|---------------------------------|
| ① 春合宿 | 2025 年 5 月 4 日～6 日（東京） |
| ② 安全保障研修 | 2025 年 6 月上旬を予定 |
| ③ 自主研修 | 2025 年 6 月下旬～7 月上旬を予定（海外研修を検討中） |
| ④ 直前合宿 | 2025 年 7 月 30 日（京都または大阪で調整中） |
| ⑤ 本会議開催期間 | 2025 年 7 月 31 日～8 月 21 日 |

※①・④・⑤は参加必須。②・③は任意参加。

※テスト等により、④・⑤の開催期間すべてに参加できない可能性がある場合も応相談。

【参加者】

日本側：36 名（実行委員 8 名を含む）

米国側：37 名（実行委員 8 名・インターン 1 名を含む）

計 73 名

【開催地】

第一開催地 関西 8 月 1 日～8 月 7 日

大阪は「未来志向」を象徴する都市であり、2025 年に開催される万博では各国の最先端技術が集結し、未来の社会像の提示に期待が寄せられている。また、IR 計画の推進や SDGs の先進都市としての取り組みが活発な大阪は、経済発展と社会課題の解決を両立する都市となるであろう。さらに、「天下の台所」として江戸時代に物流・商業の中心地として発展してきた歴史を、滞在中に実感するとともに、大阪ならではの食文化やエンターテインメントの魅力にも引き込まれるだろう。一方、京都は歴史と文化が色濃く残る「伝統志向」の都市であり、豊かな文化遺産を背景に、時代を超えた美と風格を体現する。両都市を通じて、未来を見据えた革新と、長い歴史によって紡がれた日本の伝統文化を体験できることは、参加者にとって、過去・現在・未来にわたる日本の魅力を再発見する貴重な機会となるであろう。

第二開催地 熊本 8 月 7 日～8 月 14 日

熊本は、日本の未来と過去に向き合う学びの場として注目される。台湾 TSMC 関連の半導体工場見学を通じて、産業振興に触れるとともに、日本社会が抱える少子化や過疎化、災害復興などの課題についても議論を深める。この工場見学は、ただ技術を学ぶだけでなく、今後の日本の半導体工場の発展と雇用創出、地域経済の活性化、さらに移民政策について再考する貴重な機会となるだろう。また、8 月 9 日には原爆投下に関する歴史的

事実を振り返りつつ、平和への思いを共有するために、被爆者の体験談を傾聴する機会を設ける。さらに、阿蘇山や熊本城といった歴史と自然に恵まれた環境の中で、日本の魅力と未来への可能性を再発見できるだろう。地域の発展と持続可能な未来への意識を高めるための一助となることが期待される。

第三開催地 東京 8月14日～8月21日

戦後 80 年、焼け野原だった東京は現代における日本の政治・経済・文化の中枢を担う世界有数の大都市であり続けている。数多くの政府機関や各国の大使館、企業の存在を背景に、ヒト・モノ・情報が高度に集積しており、国際都市としての存在感も依然として大きい。参加者は京都・大阪そして熊本で学んだ日本の現状を踏まえ、国内および対外関係における取り組みの最前線を学ぶ。第 77 回会議の最終開催地として、これからの日本について再考する機会となることを期待する。また、約 3 週間にわたる本会議の集大成であるファイナルフォーラムでは、次世代の日本を担うリーダーとして分科会での議論の成果を広く社会に発信してほしい。

【分科会】

1. 戦略時代の経済・経営

Japan-US Business Strategies

担当：佐藤 未羽・Brandon Rivera De Leon



産業競争力は経済成長の源泉である。日本は失われた数十年を歩み、その間、企業はコストカット型の経済の中で生産性を低下させ、競争力が低下したとされる。そして、日本はいま、世界のインフレ型経済で主流である事業の高付加価値化に回帰し、産業競争力を高めようと企図している。事業の高付加価値化戦略は、各企業が様々に努力を重ねている。他社の追随を許さない高度の技術開発を行ったり、ブランディングを強化したり、ロビイングを通して自社に有利なルールを形成したりと、非常に多様化している。また、各国政府も、自国の産業競争力を高めるため、補助金、規制デザイン、人的資本投資などを強化している。競合他社のみならず、上流・下流に至るまで多種のプレイヤーが現れ、競争環境が複雑化した現在の国際市場において、これらの手法を駆使して競争力を高めるためには、「戦略」が何よりも重要となっている。本分科会では、日米を中心に、企業のミクロな視点、政府のマクロな視点の両面から、実際に採られている戦略を分析し、競争力を高めるための道筋を考察することを目的とする。

2. 食と文化・社会

Food, Culture, and Society

担当：野添 葉音・Andrew Lei



私たちの食の選択は、社会にどのような影響を与えているのか。食生活は生命を維持し、健康で幸福な生活を送るために欠かせない営みである。また、食は文化の中心であり、社会のダイナミクスを反映する重要な役割を果たす。その重要性は文化、経済、政治、技術など、多方面にわたって人々の生活の質に影響を与えてきた。一方、近年孤食や肥満、健康格差といった問題が食を通じて顕在化している。本分科会では、食の選択がアイデンティティや価値観をどのように形成し、社会に波及するかを探る。さらに、日米の食文化を通してグローバル化や食の安全保障といった視点から、持続可能な食のあり方についても議論する。どんな料理にも、思い出、人とのつながり、共通の歴史の遺産があるだろう。それらの実体験をもとに対話を行い、多角的に物事の本質を捉える参加者を歓迎する。

3. 環境イノベーションと事業創造

Environmental Innovation and Entrepreneurship

担当：多田野 真仁・Emile Shah



世界が気候変動や環境負荷といった課題に直面するなか、パリ協定によって2050年カーボンニュートラルは世界共通の目標となった。各国が環境負荷の軽減とエネルギー資源確保の両立に苦慮している一方、民間企業や個々の起業家たちは気候変動対策や脱炭素化の流れを事業機会と捉え、世界にポジティブな影響を与えようと取り組んでいる。他方、革新的なアイデアであっても収益性を維持し、持続可能な事業へと発展させることは、依然として困難である。事実、2000年代前半の気候テックへの投資ブームは需要や競争力といった問題から縮小していった。しかし現在、環境・エネルギーに対する多額の投資政策を受けて、環境関連事業への投資熱が高まっている。1度目の失敗を踏まえ、民間セクターには新たな手法が求められている。本分科会では、環境・エネルギーという幅広い領域における民間企業および起業家の役割や課題、展望について現実の動向を踏まえて分析・議論することを目指す。

4. 科学技術と倫理

Technology, Ethics, and Happiness

担当：石賀 悠・Mao Kobayashi



急速な科学技術の進展と、それに伴う倫理的・社会的課題の増大が深刻である。AI、バイオテクノロジーなどの新興技術は、社会に革新をもたらす一方で、不平等の拡大など新たなリスクも生じさせている。たとえば、昨今遺伝子操作技術が注目を集めているが、技術の利用はどの程度倫理的に許容できるのか。また境界線を超えない仕組みは技術者・民間企業で構築できるものなのか、または政府の関与を必要とするのか。このような問題意識を背景に、本分科会は各技術のもたらす倫理的課題について多角的な観点から議論し、その上で、技術の使用を前提としつつも公平な社会を築くために技術者・民間企業・政府がいかなる働きかけをすべきか、考える。技術の進化が人類に幸福をもたらす、有益かつ持続可能なものとなるよう、自身の学ぶ分野の知見を活かしながら、答えなき問に對峙し議論のできる者を歓迎する。

5. コミュニケーションのあり方

～過去・現在・未来におけるコミュニケーションの手段と意義～

Means and Meanings of Communication

担当：小川 志穂・Amy Wu



コミュニケーションはあらゆる場面で重視され、「伝え方」に関連する書籍も数多く出版されている。多様な形態をとるコミュニケーションは、過去から現在に至るまで大きな変遷を遂げてきた。近年では、機械翻訳を始めとする技術の飛躍的進歩により、言語・時間・空間の垣根を越えた会話が可能となった。一方で、感性の共有や相互理解を含む対話の質は向上しているといえるのだろうか。本分科会では、日常会話から災害時や観光における意思疎通、さらにマイノリティや社会的弱者を取り巻くコミュニケーション環境など、日米の多方面に渡る事象を切り口に、コミュニケーションの意義やこれからの姿について、領域横断的に議論する。

6. **デザインとメディアにおける美学**
Aesthetics in Design and Media
 担当：甲斐 聖人・Rachel Collins



SNS 上での情報拡散による真実の不透明化、宗教的価値観のみならず社会的・倫理的価値観に基づく正しさの再定義、商業主義やテクノロジーによる美の基準の変容。時代や文化により異なる強調がなされてきた「真・善・美」の追求の形は、物質的に満たされた消費社会の発展に伴い現代も変化している。日米におけるこの「美学の探求」のあり方に着目し、互いの文化的背景を理解することは、ステレオタイプを取り除き、より深い相互理解を促進するために不可欠である。本分科会では、異文化の認識形成に顕著に寄与する芸術、ファッション、映画、SNS といったデザイン及びメディアに反映された両国における美学の探求に焦点を当てる。そして、文化の共生と衝突を客観的に俯瞰しグローバルな文化交流を促進するツールとなる文化的感受性の涵養を目指す。

7. **インド太平洋地域における国際政治**
International Politics in Indo-Pacific
 担当：赤瀬 朋基・Hudson Pitchford



軍事力拡大を図る中国やミサイル発射を繰り返す北朝鮮など、日本を取り巻く安全保障環境は緊迫化している。一方、アメリカはウクライナやイスラエルへ支援を行っており、その影響もあって東アジア地域における力のバランスが変化しつつある。こうした状況下、食料やエネルギーの自給率が低く、他国との互惠関係を安定的に構築していく必要のある日本は、大きな岐路に立たされている。わが国が国益を確保し、同時に周辺地域の安定に寄与していくために、選択すべき道はどこにあるのか。本分科会では外交、情報、軍事、経済など様々な観点から、国益の確保や日米関係の更なる発展、インド太平洋地域の平和と安定について考察する。

【選考について】

詳細は後日公式 HP・公式 SNS などにおいて改めて公表されます。

応募締切 2025 年 1 月 19 日 23:59

選考料 (検討中・後日公式 HP 等で公表)

プレエントリー 公式サイトより 12 月上旬から受付開始

二次選考 (面接等) 2 月中旬～下旬を予定 (オンライン)

第77回日米学生会議実行委員会紹介

【日本側実行委員】

(氏名、所属、担当役職、分科会)



北原 真悠

芸術文化観光専門職大学 4年
実行委員長/財務/熊本/自主研修/直前合宿
関西業務/報告会



佐藤 未羽

東京大学経済学部経営学科 3年
副実行委員長/財務/東京/自主研修/JC/報告書
戦略時代の経済・経営



赤瀬 朋基

学習院大学法学部政治学科 4年
選考/関西/安保研修/自主研修
インド太平洋地域における国際政治



小川 志穂

東京外国語大学言語文化学部言語文化学科 3年
選考/熊本/春合宿/定例会/保健/報告書
コミュニケーションのあり方



野添 葉音

上智大学総合人間科学部社会福祉学科 2年
選考/関西/JC/定例会/報告書
食と文化・社会



多田野 真仁

北海道大学経済学部経営学科 4年
広報/東京/直前合宿/自主研修/JC/報告書
環境イノベーションと事業創造



甲斐 聖人

国際教養大学国際教養学部国際教養学科 4年
広報/熊本/春合宿/JC/保健/報告会
デザインとメディアにおける美学



石賀 悠

早稲田大学先進理工学部生命医科学科 3年
広報/関西/春合宿/安保研修/保健/報告会
科学技術と倫理



【アメリカ側実行委員】

(Name, Affiliation, Position in charge, RT)

| | | | |
|--|--|--|--|
|  | <p>Sam Helman Wake Forest University Chair</p> |  | <p>Mao Kobayashi Duke University Vice Chair Technology, Ethics, and Happiness</p> |
|  | <p>Andrew Lei Osaka University Treasurer Food, Culture, and Society</p> |  | <p>Hudson Pitchford Washington and Lee University Logistics International Politics in Indo-Pacific</p> |
|  | <p>Emile Shah UC Barkley Secretary Env. Innovation and Entrepreneurship</p> |  | <p>Amy Wu Smith College Logistics Means and Meanings of Communication</p> |
|  | <p>Rachel Collins Washington and Lee University Recruitment, Publicity and Technology Aesthetics in Design and Media</p> |  | <p>Brandon Rivera De Leon University of Wisconsin-Madison Recruitment, Publicity and Technology Japan-US Business Strategies</p> |



第 77 回日米学生会議 日本側実行委員長からのご挨拶



第 77 回日米学生会議日本側実行委員長

北原 真悠 Mayu KITAHARA

芸術文化観光専門職大学芸術文化・観光学部 4 年

1934 年の創立から 90 年、日米学生会議は、日米両国の学生たちの中で深い友情と絆を育み続けてきた。この長きにわたる友情は、多くの方々からのご支援とご協力によって成り立っている。参加者は、互いに学び合い、その知識と経験を未来へと還元するという責務を強く感じながら、一生に一度の貴重な出会いを大切にしている。第 76 回会議では、こうした出会いと学びが未来を切り拓く原動力となり、何よりも尊いものであることに改めて気付かされた。第 77 回会議では「尊厳を守る～敬意ある対話が紡ぐ日米の調和～」をテーマに掲げ、先人達が築いてきた伝統に深い敬意を払いながら、「人と人」の直接的な交流を重視したい。異なる人種、文化、生活環境、歴史的背景から生まれる価値観や意見の違いを尊重し、敬意を持った対話を通じて日米の調和を追求する。そしてその先にある「世界の平和」をも視野に入れ、日本人として、地球市民として、すべての人々の尊厳が守られる未来を目指して歩み続けたい。

さて、来夏の会議は日本での開催となる。米国での素晴らしい経験を踏まえ、日本特有の「おもてなし」の精神を存分に発揮し、学生会議が私たち参加者にもたらした恩に報いるべく、実行委員一同で全力を尽くす所存である。2025 年は、大阪万博の開催に加え、戦後 80 周年という歴史的な節目でもある。核廃絶や平和への願いは、米国側だけでなく、日本側の学生にとっても重要な再考の機会となるだろう。日本の長い歴史の中で培われた文化と精神に触れる京都、未来の技術や社会像が披露される万博開催地・大阪、地方創生と産業振興が進む熊本、そして政治・経済・文化の中心地である世界有数の大都市・東京。これら 4 つの都市での議論を通じて、日米の学生達は、自国への理解をさらに深め、互いの未来に向けた新たな視座を得るだろう。

多様な学問に打ち込む学生たちが、個々の強みを活かし、白熱した議論を交わす 3 週間の共同生活。そして、未来を担うリーダーの卵たちと本音で語り合うことは、人生観を 180 度変える経験となるだろう。第 77 回会議では、議論の深まりはもちろん、それを実行に移すための具体的な手段を見据え、さまざまな組織・企業様と連携し、プログラムの企画を進めていきたい。専門分野をさらに追求する仲間が欲しい・白熱した議論をしたい・私達と非日常を創り上げたいという学生に是非ご応募願いたい。



編集後記

光陰矢の如しとは言い得て妙である。2023年8月末に発足した第76回日米学生会議実行委員会は、日米学生会議の本来持つ価値を再考し、再興すべく、1年間の活動をデザインした。この1年間は字義通り「あつという間に」経過し、企画が終わる度に、終わりが近づいていることが感じられ、ひしひしと物悲しさが込み上げてきた。蕭々とした夜には涙ぐむほどである。本報告書が第76回日米学生会議実行委員会最後の公式の仕事であり、筆を置くことを以て第76回日米学生会議が幕を引くと思うと、感慨もひとしおである。改めて、第76回が無事に終了したことにつき、ご支援・ご協力いただいた関係者各位、参加いただいたデリゲートたち、そして何より1年間苦楽を共にした実行委員会の皆に厚く御礼申し上げる。

このJASCというコミュニティは、俊秀の学徒が集まるにも拘わらず、着飾ることもなく、ありのままの姿で振る舞い、時には各々が普段の生活・学問を通して思い描くことを共有し、時には各々が学殖を基に熟議を重ね、濃密な交流を通して昵懇の知己を得ることができる、大変居心地の良い環境である。2代に亘りこのコミュニティに参加出来たことは、極めて幸福なことだと感じる。願わくは、このプログラムが各デリゲート・実行委員のひと夏の思い出として残り続けると共に、価値あるJASCの歴史の一片を彩る、有意義な会として紡がれていて欲しい。

最後に、燃え尽きと格闘しながら、この報告書というまさしく連夜の仕事を片付けた我々報告書担当に送る、称賛と慰労の一升瓶を経費申請しつつ、本報告書の結びの挨拶としたいと思う。

報告書担当 富澤新太郎・佐野百美・荒木太一

第76回日米学生会議 日本側報告書

発行月 2024年10月
編集者 富澤新太郎、佐野百美、荒木太一
発行 日米学生会議実行委員会 報告書編集委員会
表紙 福井達於都、志田夏音、佐野百美

この書籍に関するお問い合わせ先
〒160-0004 東京都新宿区四谷 1-6-2 コモレ四谷 グローバルスタディスクエア 3階
一般財団法人国際教育振興会 日米学生会議事務局
TEL：090-1140-4857
日米学生会議サイト：<https://jasciec.jp/>

©Japan-America Student Conference Executive Committee 2024
本書の無断転載、複製、複写（コピー）、翻訳を禁じます。

**"Visions: perspectives reflected from the past
- together understanding, contributing for the future."**

回視 ～共に理解し、明日へと還元する～

JAS C76

The 76th Japan-America Student Conference